
届くものの夢

カナセ ヨウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届くものの夢

【Nコード】

N1700A

【作者名】

カナセ ヨウ

【あらすじ】

世界の七賢者の一人、ルイスの、彼が賢者と呼ばれるようになるまでの話。

彼の日課

「綺麗な夜空だね」

屋根の上で寝そべっている少年が呟いた。
肩にかかる程度のさらさらな黒髪と、黒い瞳を持つ少年。

「はい」

周りに少年以外は見当たらないのどこからともなく声が聞こえてくる。

「……夜風は体にひびきます」

「そうだね、もう寝るよ」

そう言うと少年は体を起こし、自分の部屋へと戻っていった。
机とイス、そしてベッドがあるだけの部屋。彼はベッドに横になり今日習った魔法と薬草の復習を頭の中でしながら眠りについた。
そして翌朝、食堂に行く前にまた復習をしてから部屋を出た。

ある日

「よ、ルイス。起きてっか？」

「ベルクス、おはよう」

ルイスと呼ばれた黒髪に黒い瞳の少年の隣に、ベルクスなる短髪の子金髪美少年が腰を下ろした。

どこのドームだ、と思うぐらい広い学生食堂は今、朝食ラッシュで人がごった返している。おいしいと言って食事に集中は出来ない状態だ。

「お前、この前の実技テストまたトップだったんだってな？」

サンドイッチを口にしながらベルクスがルイスに質問をするが、当の本人はあまり興味が無いのか、そうだったねえ、と軽く流された。

「ったくよお、ルイス様様がよってたんだ。女子がうるさくてしょうがねー」

王子様フェイスであるがそれに似合わずベルクスの言葉遣いは荒い。逆にルイスは外見通りの温和な性格で誰にでも優しいので女子からの人気が高い。もちろんベルクスもその容姿からして人気者で、二人揃って半年に一度、勝手に行われている学内人気ランキングトップテンの常連である。

「はいはい。……そういうベルクスだって女の子に人気だし、それよりもこの前の錬金術大会で優勝してたじゃん。あれはすごかったなあ」

ルイスはデザートのバナナを食べながら昨日のことのように思い出している。

ベルクスの専攻は錬金術。それもかなりレベルが高く、何も無いように見える空気中から金属を作り出すことができる。先の錬金術大会でベルクスは見事な戦車をもとの数秒でつくりだしたのだった。

「あつたり前だ！お前に勝てるのはこれぐらいだから日夜特訓してるんだからな！」

「〜であるから、〜となり・・・」

午前のハードな魔法演習を終え、午後はひたすら薬草や幾何学といった難しい講義を聞いている。ルイスが専攻しているのは魔術。そして、基礎課程を修了した者は選択教科が取れるため、ルイスは色々なものを学んでいる。

扇形の講堂の教壇に立っているのはオーヴァルガン屈指の医学者、アスクオス。彼は先進30ヶ国の中でもかなり名の知れた人である。医学の中でも薬草の知識がぬきんでいて植物博士とも言われている。

ふとルイスは窓の方を見る。ルイスの倍以上の高さの窓からは綺麗に整えられている中庭が見えた。楽しそうにおしゃべりしている生徒達、自由に飛び回っている鳥、そして緑豊かな木々と色鮮やかな花。まさに平和そのものだった。

そんな光景をみているとルイスは顔が緩むのであった。

「おいルイス、何ニタニタ笑ってんだよ。いい女でもいたのか？」

ルイスの左斜め後ろにいた少年がからかうように小声で言ってきた。

薄茶色の少し長めの髪を後ろで一つに縛っている、色白な少年だ。

「違うよ、なんか平和で良いなあと思ってたんだ」

同じく小声で答えるルイス。

「はあ？　たたく年寄りみたいなこと言ってるじゃねえよ」

呆れながら少し笑いつつも手はしっかりと大きな黒板に書かれている難しいことを書き留めていた。

「そう言えばテムイ、この前借りた医学書んだけど14章のところにどうしても分からないのがあるんだ。時間があるときにでも教えてくれない？」

相変わらずの小声でルイスは、テムイと呼んだ少年に申し訳なさそうに頼んだ。

「14章？　たしか反応のそこだったか。いいぜ、いつでも教えてやるよ」

「本当？　ありがとう！　じゃあ今夜は勉強会だね」

ルイスが嬉しそうに言った。ルイスの喜びの眼差しをはいはい、と軽く流しテムイは講義を真剣に聞き始めた。それに習ってルイスも再び前を向いた。

テムイは医学を専攻している。かなり優秀で、まだ学生であるにもかかわらず彼の出す論文は学会で皆をうならせている。

ルイス達が在籍しているのはオーヴァルガン国立アカデミー。緑豊

かなオーヴァルガンのトップ校である。

今世界には数百という国が存在している。その中で先進国と言われているのはわずか30ヶ国。オーヴァルガンはその内の一つで、自然を多く残し、また共存している、ということでも有名である。

夜、日中言っていた通りテムイはルイスに分からないところを教えていた。そこはアカデミーの図書館で、夜中の十二時までやっている。といっても一般の人は八時までで、それ以降はアカデミー生だけが使用できるようになっている。中央が丸く、三階まで吹き抜けになっっていてそこで学生達は真剣に勉強をしている。

「なるほど、テムイはすごいね」

「反応するのはパズルを組み合わせるようなもんだ、すぐ考えるのになれるって」

二人が勉強を終え、帰ろうとした時テムイの目に一人の少女が入った。

テムイはその子に近づいていき話しかけた。

「こんな遅くまで勉強かよ？夜更かしは肌に悪いんじゃないのか？」

テムイの言葉に顔を上げた少女。そして見た瞬間疲れた、という表情をした。

「おあいにく様、手入れならきちんとしていますからご心配なく」

少女はシッシツ、とテムイを追い払おうとした。

「ハイアじゃん、こんな遅くまで勉強してて大丈夫？」

突然歩く方向を変えたテムイの後を追ってルイスがやってきた。ハイアと呼んだウェーブがかった赤髪の少女に優しく話しかけた。ハイアはテムイと同じ医術を専攻している。成績は普通よりは良いほうで、気が強くて姉御肌な少女だ。

それにしてもこの大人数の中ハイアを見つけ出せるなんてすごいなあ、と心の中でルイスはテムイに贅辞を送った。

「あつ、ルイスじゃん！久しぶり〜元気？」

先ほどテムイに発したトーンとはだいぶ違う明るい声をルイスに向ける。

「まったく女はみんなルイスには良い顔するんだからなあ」

タメ息をつくテムイ。

「グチつてないであんたもルイスの優しさを見習いなさいよ。まったく最近の男はなつてないわ」

「はいはい、ではどうぞお体にはお気をつけて勉強なさいませ、ハイアさん」

「うっわ、鳥肌が立ってきたわ」

「失礼なやつだな。とにかくそういうことで俺達はお先に」

おやすみ、と互いに言って二人は寮へと帰っていった。

アカデミーにはオーヴァルガン中から人が集まってくるので学校の敷地内にいくつか寮がある。もちろん男子・女子と別れていて、学生食堂は東側と西側にそれぞれ一つづつあった。図書館は敷地内の中央に位置している。

アカデミーは後ろを山に、前には海といった感じで天然の要塞とな

っている。昔は戦争が頻繁に起こっていたためこのような地形のところに人々が集まった。

その名残で、海には大きな船が停泊できるようなものが残っている。山には複数の穴が掘られていたり、戦車らしきものがポロポロの状態で放置されていたりもする。しかしそれらは森の豊かな緑にうまく包まれている。

近くの町、それはオーヴァルガンの首都イーラゴスであり、そこに行くには徒歩で1時間ほど。夏休みや年末年始にはアカデミーの生徒達が、さほど広くもない塗装された道を埋め尽くす。

今は新学期が始まったばかりでやたらと生徒達のテンションは高く、夜になっても寮の部屋の明かりはなかなか消えない。ここでは勉強という名目を通るため深夜遅くまで明かりがついていても誰かが来て注意するということはない。

今夜もルイスは屋根に上って寝転がり、星空を見ていた。空一面に光の粒がびっしりとつまっていてとてもきれいな夜空である。心地よいぐらいのそよ風が吹き、木々が軽く踊るようにゆれている。

「夏には出て行くところかと思うんだ」

「さようですか」

「止めないの？」

「無駄でございましょう」

「……ありがとう」

クラス対抗魔術戦・A1

「きゃー！ルイス様かつこいい〜！！」

女の子のやたらルイスを賛辞する声がアカデミーの円状の闘技場に響く。

今は一年に一度のクラス対抗魔術戦で、ちょうどルイスのクラスである、エメランド、が決勝へのキップを手にしたのだった。

クラスの代表である男女合わせた計五名が他のクラスと魔術のみの対決をする。一対一ではなく五対五のチーム戦。

一〜六年生までである魔術専攻だがクラスは八クラスづつある。代表に選ばれるのに学年は関係なく、実力のあるものが名乗り出るかみんなの投票による。ルイスは早くも二年生からの参加で、今までの最年少記録をみごと打ち破ったのだった。

ルイスの初参加から二年がすぎ、すっかり対抗戦の常連となったルイスには何とも規則の厳しいファンクラブが存在している。もちろんルイスはそんなこと知る由もないのだが。

「やっぱり来たな」

ルイス達がコンクリートがむき出しになっていて、簡素なイスとテーブルがあるだけの選手控え室へ戻り一休みしていると、今度の対戦相手が現れた。そのうちの一人の背の高い短髪のお世辞にも愛想が良いとはいえない顔の男がルイスの前に立った。

「今度こそは俺達、ルービがトップに立つからな」

「はい。僕達は全力で3連覇を取りにいきます」

ふん、と一睨みしてルービの代表選手達は控え室を出て行った。

「……相変わらずの人相だな」

苦笑いを浮かべているエメランドのリーダー、ハルズ。今年六年生の長身茶髪青年。

魔術の中でも防御術に優れている。

「かなり練習を積んできたみたいですよ。三連覇は難しいかも」

真剣な表情であごに手を添えているめがねの青年は五年生のジョシユア。どちらかと言えば理屈っぽい感じの礼儀正しい青年である。

「何言ってるのよ、練習を積んでるのはこっちも同じ！とにかく明日に備えて今日はゆっくり休みなさいね」

そういつて控え室を出て行ったのは六年生のメリア。医術専攻のメリアの姉で、やはり姉御肌な女性。

「メリアの言うとおり。今日の疲れは今日だけってね。じゃあお先に」

右手をひらひらとふって出て行ったのは同じく六年生のガートン。スキンヘッドの似合う気の抜けた青年である。

それぞれ一言づつ言って控え室を出ていき、ルイスが一人静かに残った。

特に何をするでもなくただイスに座り、ボーっとしている。それとというのも、今日の試合は終わったので控え室には誰も入ってこない。ルイスはこの静かな時間をゆっくり過ごしたいのだ。

窓からはオレンジ色の光が入ってきて、殺伐とした控え室を温かい感じに変えていく。外からは闘技場を離れ、寮へ帰る生徒達の声が

虫の声程度に聞こえてくる。

ルイスが目を閉じて深く息を吐くと同時に、ドアをノックする音がした。

「……どうぞ」

ノックをするということは選手ではない。ファンの子の類だろうと思えばルイスは少し気だるくなったがまさか無視をする訳にもいかなないのでとりあえずそう言った。

すると勢いよくドアが開かれ、バン、と大きな音を出しルイスはとっさに身構えた。

「あっ、ご、ごめんなさい！その、つい興奮しちゃって。だって憧れのルイスさんに会えるもんだから！」

一気にそう言っつて、背の低い短髪の少年が目を輝かせている。

「そっか。でもね、ここは基本的に選手以外は入ってきちゃだめなんだよ？」

構えを緩めて優しく少年に話しかけるルイス。

青い制服を着ているのを見るとどうやら1年生のようだ。

学年を見分けるために制服の色だけを変えている。これはどの専攻も一緒に一年生は青、ルイス達四年生は赤である。制服と言えば最近売れているデザイナーが直々にデザインしたもので、生徒達からはかっこいいということでもかなり人気が高いが、足元まである長いローブを着ているため動きにくいのが難点だ。

ルイスは今選手用の、クラスの色を基調にした服を着ている。

試合といってもかなり実践に近いので耐魔術用の、動きやすい服である。

「はい、ごめんなさい。でも！俺どうしてもルイスさんに会いたくてー！」

「そうなんだ、ありがとう。でも、なんでそんなに必死なの？」

ファンの子とはちょっと違った感じがした。いつもなら、握手してください！とか、サイン下さい！と言われるのだがこの少年はそうではない。

「その、お礼を言いたくてー！」

「お礼？」

ルイスは首をかしげた。そして少年の顔をよく見て必死に思い出そうとしたがだめだった。

「ちょうど三年前、俺が森で迷ってて間違っって立ち入り禁止区域に入った時に……」

「あっ」

「思い出してくれましたか！？」

「あの時の子か」

立ち入り禁止区域、という言葉聞いて思い出したルイス。

「その時、モンスターから俺のこと守ってくれて。その時のルイスさんすつこくかっこよくて！それで俺も魔術がしたいって思ってここに入学したんです！そしたら見覚えのある人が試合にいて、あの人はっ！って、俺もっ感動しちゃって！」

相変わらず興奮が収まっていない様子で、早口で説明していく少年。

「あ！とりあえず自己紹介します！えっと、名前はアルド。ルイスさんと一緒のエメランドです！あとは、えっと、尊敬する人はルイスさんで目指してるのはルイスさんみたいに強い魔術師です！」

「そ、そっか」

あまりの迫力に少したじろぐルイスだったが、とりあえずはおとなしく聞いていた。

アルドに席に座るのを進めるとなんとも嬉しそうにルイスの正面に座り、お礼の言葉とルイスへの賛辞を熱く伝えた。

日が暮れてきたので二人は寮に戻ることにして、ルイスはアルドを一年生の寮まで送って別れたのだった。わざわざ送ってくれてありがとう、と最後の最後まで笑顔だったアルドを、ルイスはかわいいと思った。

「明るくて良い子だったね」

「……………」

いつものように屋根の上で姿の見えない何かに話しかけた。しかし答えが返ってこない。

「フエイ？」

「……………弟様とかさなりましたか？」

「なっ……………」

起き上がったルイス。そして眉間にしわを寄せる。

「何が言いたいんだ？」

「いいえ、何も」

会話は終わってしまった。

ルイスは部屋へ戻って少し荒くドアを閉め、すぐベッドに横になっ
た。

クラス対抗魔術戦・A2

「さあ！皆さんお待ちせいたしました！ついに魔術戦の決勝です！三連覇を狙うエメランド、対するルービはトップの座を狙っています！

お手洗いは今のうちに済ませておいてください！」

張りのあるアナウンスが闘技場中に響き渡る。雲一つない晴天。しばらくすると両クラスの代表選手が、木も岩もないだっ広いグラウンドに出てきて、観客の生徒達のざわめきが一気に最高潮に達した。

それぞれが一行に並び、礼をして各々の持ち場に着いた。勝敗はチームのリーダーが首に下げているクラス色のビー玉を先に奪い取ること。

両チーム同じひし形で陣を取っている。

エメランドはルイスを先頭にその後ろを右からガートン、ジョシユア、メイア、そしてその後ろにリーダーのハルズ。

ルービは昨日の背の高い男を先頭に後ろの三人の真ん中にリーダーを置いて、その後ろにもう一人。女はいない。

闘技場のざわめきは消えている。そして選手達は互いに睨み合って重い空気が広い会場を流れる。

「はじめー！」

その声と同時にジョシユアとハルズが術を唱えを始めた。対するルービは二列目の両端の少年と先頭の男が唱え始めた。一拍遅れて他の選手が全員術を唱え始めた。

魔術師というのは大抵魔力が備わっている杖を持っている。そうでなければうまく術を成功させることが出来ず、また体への負担が大

きくなってしまう。ただしレベルの高い魔術師はこの助けを借りなくとも自由自在に魔力を操ることが出来る。更に言えば、術を唱える、という補助力も必要となくなるが、そのレベルの魔術師は世界には片手で数えられるだけしかない。

「インクリース！」

最初に術を発動させたのはジョシユアであった。得意とするのは補助術。今のは魔力に加えて身体能力全般をあげる術である。逆はデイクリースという。

「フレイム！」

ルービ側はいきなり炎系の攻撃魔法を放ってきた。しかしすかさずハルズが防御術を発動させる。

「ヒュージ！」

炎は先頭のルイスのところまで届かなかった。その間にルービ側もインクリースで基礎力をアップさせた。

残りの選手の魔法がそれぞれぶつかりあって大きな爆音と煙を起した。

「ブロウ！」

ルービ側の風系の魔法で煙は綺麗になくなっていく。

「なあと早くも全選手がぶつかり合っています！！ハルズ選手の防御術の速さ、そしてそれに負けないルービのオリラン選手！」

「二人とも防御術に長けていますからね。これはスタミナ対決でも

あるかもしれませんね」

「ご紹介いたしました！本日は解説者に炎系魔法を教えているユニロー先生にお越しいただいています！」

「どうも、それよりやはり勝敗の鍵は先頭に立つルイスと、ウエイダでしょうね。でもこれはチーム戦ですからそこをよく考慮して…」

「さすがは先生！さあみなさん！瞬きすらもつたいないこの決勝戦、最後まで応援よろしくお願いします！」

会場はまた盛り上がり始めた。

観客とは反対に選手達は冷静に次の行動を考えている。ハルズとオリランは少し肩を揺らしていた。それもそのはず、攻撃魔法が来るたびにそれぞれ防御術を発動しなければならないのだ。

「結構強い魔法はなってくるからキツイな。早めにケリつけてくれないよ」

ハルズが苦笑いでそう言った。

「じゃあ俺たち全員補佐にまわるか。後はよろしく、ルイス」

「ガートンさん、単純な破壊力だけで言えばあなたの方が上です」

「破壊力だけの話よ。とにかくルイス、ガンガンいっちゃいなさい！」

「メイアさんまで……」

軽く肩を落とすルイスだがすぐに目の前のウエイダに眼をやった。

まだまだ余裕を見せている。

決勝戦なだけに個々の魔力が強いので早めにケリをつけるのがいいと考えたルイスは一度深呼吸をしてから、

「補佐をお願いします。相手のリーダーのみを狙います」

と言いつとすぐに術を唱え始めた。後ろの四人がうなずき、身構えた。

クラス対抗魔術戦・A3

先頭に立つ二人が同時に術を唱え始めている。強い魔法ほど唱える時間が長くなる。ルイスとウェイダは早くも次の攻撃で終わらせようとしているのが、その場にいる全員に見て取れる。

二人の周りに風が起こる。ルイスは艶のある黒髪をなびかせている。ハルズとオイランは魔力の大きさを見極め、それに合わせた防御術を唱え始めた。他の選手も補佐として、強くはない術を唱え始めた。

「全選手が術を唱え始めました！今度の激突は先ほどのものとは比べ物にならないのではないのでしょうか！？」

「そうですね。少し離れているここにまで緊張が伝わってきますからね」

「さあ緊張の一瞬です！皆さん目の渇きには気をつけてください！」

「ブレイズ」

先ほどのよりランクの高い魔法を二人は放った。巨大で勢いのある炎がぶつかり合う。みなその威力におもわず後ずさった。

「くそっ、ジョシユア！防御にまわれ！」

「はい！」

同じようにルービも二人がかりで防御にまわっている。それによって両チームなんとか爆風によるダメージをかわした。

「ちっ、相殺か……」

「そうですね。ですけどもう終わりです」

なにつ、とウェイダが爆風による砂塵のなか目を凝らしてルイスの方を見る。するとルイスがすでに次の術を唱えていた。

「そんなっつ」

「ブロウ！」

ウェイダは先ほどの魔力の消耗でとても術を唱えられる状態ではない。それはどの選手も一緒であった。

ルイスの放った風がルービのリーダーの方へ走る。そして首にかけてあった赤いビー玉の糸が切れ、エメランドの方へと投げ出され、それはルイスの足元へと転がってきたのだった。

会場は一瞬静けさに包まれた。そしてすぐに歓喜がそれを破ったのだった。

「なあんとエメランド三連覇です！素晴らしい！」

「見事。スタミナでルイスの方が勝ちましたね」

「唯一の四年生参加であるにもかかわらずルイス選手健闘です！」

周りの騒がしさとはまったく逆に、ウェイダは放心状態であった。

ウェイダは六年生。自尊心の強い男である。そんな彼が二つも下のウェイダに言わせてみればたかが子どもに負けたのである。その目はだんだんと怒気を含んでいった。

ルイス達はビー玉を手に取り輪になって喜んでいる。視線を感じ、ルイスが振り返るとそこには後姿のウェイダがいた。それに続いて他のルービの選手がグラウンドから去っていった。

ルイス達が選手控え室から制服姿で出ていくと、あっという間に応援していた生徒達に囲まれた。それぞれが賛辞の言葉を次から次へとルイス達に投げかける。

「なあんか英雄って感じ？」

ガートンが相変わらずの気の抜けた声で笑いながら感想を言った。

「それはあんたじゃなくてルイスでしょ！」

「違いますよ。みなさんの協力があつての勝利です」

やわらかく笑って答えたルイス。するとその笑顔に反応するように女生徒の高い声が響く。

「ふう」

ルイスは闘技場から程近い海の見える空き教室にいた。机に腰をかけ、窓から見える青く透き通った海をボーッと眺めている。

「こんな所にいたのかよ」

振り向くとベルクスが立っていた。

「食堂じゃ優勝祝いで真っ昼間からどんちゃん騒ぎだぜ、お前はいいかないのか？」

そう言いながらルイスの隣に腰をかけた。

「うん」

「女子の連中さぞかし肩落としてんだろうな」

ニシシ、と笑うベルクス。ルイスも適当に合わせるように笑い、また海の方を眺めだした。

「なんだよ、優勝したつてのに嬉しそうじゃねえな……？」

「……別に、そういうわけじゃないよ」

「まあお前にしてみればあんなの準備運動にもなつてないんだろ？」

「そうは言つてない」

「顔にでてんだよ。あーあ、性格悪いよな」

今度は意地悪く笑うベルクス。ルイスは軽くため息をついた。何かにつけてルイスの株を下げてがるベルクスはかなり子どもっぽい。それでも錬金術に関しては人並みはずれた才能をもっていた。色々なところから取材がくるがベルクスは全部「めんどくさい」と言つて追い払っている。

「来年の錬金術大会にはお前もでろよ。そしたら俺がお前の鼻へし折つてやる」

錬金術大会はオーヴァルガン中から人が集まつて競い合う。今回のクラス対抗魔術戦とは規模もレベルも違う。

「遠慮しとくよ。つていうか第一僕は魔術師だから」

「はあ？もう魔術師つて名乗つてるワケ？あーあー天狗がいるぜ、皆さ〜んここに珍獣天狗がいますよ〜」

ベルクスは片手を口に添えて海に向つて無駄に語りかけたのだつた。その様子をルイスは苦笑いで見ていた。たしかに、まだ学生の身でありながら堂々と“魔術師”というのは天狗なのかもしれないな、と。

「あつ、そうだ」

「あ？」

ルイスの声にベルクスが振り向く。そこには含みのある笑顔があった。

「錬金術大会には出ないけど、もっとおもしろいのに参加しようと思ってるんだ」

なんだよ、とベルクスが聞くと、その時になつたら、**手紙**で教えるよ、と謎めいたことを言うルイス。

深くはつつこまず、あつそう、とベルクスは軽く流した。

クラス対抗魔術戦・A3（後書き）

ご意見、ご感想頂けたら嬉しいです）・（ペコッ

前日

冷房のきいた部屋に二人。一人は初老の男で、イスに座り机に向かって一枚の紙に目を通してしている。もう一人は黒髪に黒い瞳を持つ少年。対峙して立っている。

沈黙が長い。外からはセミの鳴き声が聞こえてくる。初老の男はため息をつきながら紙を机に置いた。

「認められないな」

「なぜですか？」

初老の男はイスをぐるりと百八十度回転させ、窓の方を見る。

「……君は実に優秀だ、ルイス君」

「自負しています。」

「それは驕りだよ」

「……」

しばしの沈黙。

「ご両親はなんと？」

「僕の人生は両親のものではありません」

「君はまだ十六歳だろう。」

「……」

「……この事に関しては日を改めて話をしようか」

「わかりました」

ルイスは一礼すると静かに部屋を出て行った。入れ違いに一人の女性が入ってきた。

「失礼いたします。理事長、こちらの書類にサインをお願いいたします。」

「ああ。……夕方ごろ取りに来てくれ」

「わかりました」

ルイスは午後の講義をサボり図書館へと足を運んだ。町から徒歩1時間かかるにも関わらず、ちらほらと一般の人が利用している。ルイスは三階まで上っていき、高等魔術の本を手にとった。しばらくその場で立って読んでいたが飽きたらしく、医術の本があるところへ行った。

「あ、テムイ」

手に数冊の本を持って机のあるほうへ移動中のテムイと遭遇した。

「ルイス、お前講義は？」

「テムイこそ」

「今日のところはもう頭に入ってるから俺はでなくていいだよ」

こいよ、とテムイはルイスを勉強机の方へさそった。

「これ、何か分かるか？」

席に着くなり一冊のノートを渡された。パラパラと軽く目を通したルイスは少しばかり驚いた表情を作った。

「これってまだ研究中の薬品について？」

「そ。まああと一ヶ月ぐらいで研究中じゃなくなるけどな」

軽く笑うテムイ。ルイスにはその意味が分かった。ノートは半分以上埋まっただけで、最後の方を見る限りこの薬品の完成が間近であることがわかる。

「天才医師現る、だね」

「大げさだろ。だいたいそんな賞賛のためにやってるわけじゃねえし」

「じゃあ何のため？」

さあな、とはぐらかされてしまったがルイスは少し粘ってみた。しかし理由は聞きだせず、研究の邪魔をするなと席を立たされた。夕食になるまで適度に勉強をして時間をつぶし、星空が見える時間になったころいつものように屋根に上った。

「結局なんだったんだろ」

「何がですか？」

いつものようにどこからともなく声が聞こえてくる。高すぎず低すぎず、しかし柔らかい、女性であるう声。

「何のためにあんなにがんばってるんだろうと思ってさ。好奇心が旺盛、ってわけでもなさそうだし……」

「誰かのためにございましょう」

「何でそう思うの？」

「自分のために働く力など高が知れています」

ふうん。さして興味がなさそうである。そしてルイスは軽くため息をもらす。

「どうしました？」

「今の、嫌味にしか聞こえないよ」

「そう聞こえるということは一応自覚はあるのですね」

今度は盛大にため息をついた。

ルイスは今まで自分のために行動してきた。ここに入学したのも、魔術を専攻したのも、それを高めるのも。アルドを助けたのだった。たまたま見つけて、モンスターと戦うチャンスだと思ったからであつて、酷い話アルドのため、というのはその時頭にはなかつた。誰かのために動いたことなどルイスの記憶にはなかつた。

「どうせ僕はこの程度の人間だよ。幼少期に出来た人格は直らない」
「直らないのではなく、直そうとしないのでしよう。直るものも直りません」

「……それよりさ、明日でるから」

「さようですか」

「一応理事長に連絡したし、両親にも手紙で後から連絡する」

「直ぐに連絡なされた方が良いのでは？」

「必要ないよ、と言いながら身を起こし部屋へと戻っていった。

夜空には黒い雲がかかってきた。

前日（後書き）

ご意見・ご感想頂けたら嬉しいです）・（ペコッ

当日

朝から小雨が降っていた。ルイスは軽く寒さを感じ予定より早くに目を覚ました。共同洗面所へいき顔を洗い、部屋へ戻ってパジャマから動きやすい服装に着替え、机にあったお菓子を少しほおばった。ベッドにパジャマと制服をきちんとたたんで置き、ドアの近くに立つて部屋の最終点検をした。

「よし、忘れ物はないね」

足元にあった大きすぎない茶色いリュックを背負い、手には魔術用の杖を持った。傘は持たなかった。ローブにフードがついていたからだ。

小雨の中フードを深くかぶり、警備員達が待っている正門へはいかず裏門の方へ足を運んだ。そこにももちろん一人ではあるが警備員はいる。ルイスは裏門を少し左へそれて、噴水やベンチがあり大きい木が密集している生徒達の憩いの場へ行った。そして一本の大きな木の下で足を止めた。

「ブロウ！」

風系魔法を放ち、ルイスの体は浮かび上がった。そして塀の近くの枝に止まった。

「本当によろしいのですか？」

突然姿のない声がした。しかしルイスは動じず枝から塀へと移った。そして敷地の外の木へと移り、地面に降りた。

アカデミーは半分を山に囲まれているためルイスはしばらく雑草が

すき放題のびている上り坂を歩き、山のとっぺんに着いた。そこからは小雨のため靄がかかったアカデミーが静かにたたずんでいるのが見えた。

「……僕は賞賛が欲しいよ」

口元に笑みをつくり静かな声でルイスは言った。

「力が欲しい。知識も欲しい」

アカデミーに背を向け歩き出した。足元は少しばかり水の含んだ土で柔らかい。

「それらは手を伸ばせば届くものなんだ。僕は必ず手に入れる」

「……欲という底のない沼に身を沈めるだけです」

「それでもかまわないよ。僕が一番嫌なのは鎖に繋がれて引っ張られるまま進むことだから」

ルイスは小雨の降る深い森へと姿を消していった。

「まったたく、何という事だ」

深くため息をしたのはアカデミーの理事長であった。

朝の職員会議が終わりいつも通りの仕事をこなしていた。程なくして理事長室へ一人の男性教師が慌てて入ってきた。ルイスが学校のどこにも見当たらないということ伝えて。

一度も午前中に行われる魔法演習を休んだことがないルイスが来ていないので生徒に見てくるよう言ったその教師は、体調でも崩したか、と考えていた。しばらくすると見に行った生徒が小走りで戻っ

てきた。

「部屋にいませんでした」

え？と詳しく聞くと、部屋は綺麗に片付けられていたという。不審に思ったその教師はその場にいた生徒達に自主練しているよう言い、自らルイスの部屋へ行った。

生徒の言ったとおり部屋は綺麗にされていた。ベッドにはたたまれたパジャマに……制服があった。

その教師は召喚術も多少使える先生であった。彼は鼻の利く犬に似た召喚獣を一体呼び出し学校中を探させた。三十分も経たない内に召喚獣は彼の元へ戻ってきた。ルイスがどこにもいないという報告をしに。そして今に至る。

「どうしますか？」

「ううむ。こんなことは私がここへ来て以来初めてだ」

「はい」

「……実は昨日彼から退学届けを渡されてね」

えっ、と驚きを隠せない。それもそのはず、この学校に入るということ自体が生徒にとって、またその家族にとって名誉であり、誇りにもなる。さらに学費は国内で一番安く、寮の費用と合わせてもかなり家計に優しい。就職先だって文句ない。そのアカデミーを自ら辞めるなどということ聞いた事がないのだ。少なくともここ数十年は。

「……雨が強くなってきたな」

イスから立ち上がり窓の外を見る。理事長、と教師が今後の処置を伺う。

「この雨の中悪いのだが付近を搜索してくれ。それと、彼のご両親に連絡を」

はい、と短く答えその教師は部屋を出て行った。

この事はお昼をまわらないうちに全生徒に知れわたった。皆思うことは色々。その中でかなり悔しがっている生徒が一名。ウエイダである。彼はクラス対抗で負けたまま。ルイスに勝ち逃げされた気分があるのだろう。一方女生徒はというと……。

「なんでよ！なんでルイス様が出て行っちゃったわけ!？」

「もう戻ってこないのかしら……」

「私まだ告白してないのに！」

「私も学校やめようかな」

等等。皆思い思いに嘆いていた。

いたって冷静な生徒が二人。ベルクスとテムイである。二人はお昼にもかかわらず図書室で黙々と勉強、ならぬ研究をしていた。ふとベルクスが口を開く。

「初めてお前に会ったときは病人かと思った」

突然の言葉に、は？と顔を上げるテムイ。

「白すぎ」

むっ、と顔をしかめたがすぐに反論に出た。

「お前はどこぞの中途半端な不良かと思ったぞ」

「はあ？何で中途半端なんだよ！」

気にかかるのはそこだけか、と若干呆れてしまった。

「……ルイスは気の抜けた坊や、って感じだったな」

「そうか？俺はどこか自信もってて鼻に付く感じだったぜ」

「そう感じたのはお前ぐらいだろ。お前から同類だし」

テムイがからかうように言った。どういう意味だよ、とベルクスは不機嫌に尋ねる。

「才能をもてあましてるって意味だ」

「お前だってそうだろ？」

「まあたしかに。でも二人とは違う。二人とも別格だ」

「……」

「どうした？」

いつもなら、当たり前だ！などと自信満々に答えるのに返事が返ってこない。ベルクスは手元の分厚い本に目を落としている。

「別格はあいつだ」

短くそう言った。テムイはそれには答えなかった。

二人とも分かっていて。ルイスの並々ならぬ力を。普段は優等生を演じているがたまに三人で会うときになるとルイスの目は変わる。強い意志と自信を持っている目だ。

「なんで俺たちには本性みせたんだろな」

テムイがふと口にした。本性といっても何か恐ろしいことをやってみたり口走ったりしたわけではない。オーラが違うのだ。いつもの

スキだらけのルイスではなく、どっしりかまえた感じの、それでいて何かを追い求めている子どものような。

「類は友を呼ぶ、ってやつじゃねえ？まああんなのと一緒にいたかねえけど」

ニシシと笑って答えるベルクス。確かにそうかも、とテムイも笑った。

翌日

昨日とは打って変わって青空が見える。地面にはいくつか水溜りができていて空の白い雲が映し出されている。

教師達の必死の捜索にもかかわらずルイスを見つけることは出来なかった。

「いかがいたしますか？」

一人の教師が声を発した。

主要教師及び管理職の者が理事長を中心に楕円型に腰をおろしている。いうまでもなくルイスに関しての会議だ。

「しかたがないな。彼は自らの意思で学校を去った。自主退学という形になる」

理事長が言った。その場にいた者が皆肩を落とした。アカデミーから自主退学者が出たということが彼らのプライドを傷つけたのだ。生徒同様ここで働く者達も名誉と誇りを持っている。授業や学校行事も魅力あるものにしようとがんばってきたのだ。オーヴアルガントップ校の名に恥じぬように。にもかかわらず自らやめたいという者が出た。それは彼らにかなりの衝撃を与えた。

「君達に落ち度はない。これからも今までのようにがんばってくれ」「しかし！」

「何も気にすることはない。ただ彼には合わなかった、それだけのことだ」

そう言い残し理事長は部屋を出た。残された者達も各々の仕事をし

に部屋を出て行った。

「ううん、良い朝だね」

ベッドの上で伸びをしている黒髪に黒い瞳を持つ少年。彼は小さい宿屋で一晩過ごした。

身支度を整え、運ばれてきた朝食を味わって食べるとテーブルの上に地図を広げた。

それは世界地図ではない。というよりこの世界には世界地図はないのだ。理由は多々あるが一番の原因はその広さである。今だ人が足を踏み入っていない所が多く、また、確認されている国の数にしても半端ではない。

彼が持っているのはオーヴァルガンがのっているイージャリュ大陸の地図である。確認されている大陸の中ではそれほど大きくはなく、卵のような形をしている。オーヴァルガンは西南に位置している。

「さてと、どこに行こうかな」

まさに語尾に音符である。普段はおとなしくて優しい真摯な男の子であるが今は好奇心旺盛な子どもになっている。

「何も考えずに出てきたのですか？」

いつもの声が聞こえてきた。

「一応考えてはいたけどやっぱり色んな所に行ってみたいし、でもそれじゃあいくら寿命があっても足りなそう……ううん……」

「……まずはご両親に連絡を」

「はいはい。それよりまず東に行こうか？ここの港からいろんな所に行けるし。でもこの大陸の国全部回ってみたいしなあ……」

「……」

「あつ、でもその前に買わなきゃいけないのがあるんだつた」

よし、じゃあここに行こう、と地図をしまい宿を出た。

道は延々と塗装されていない水を含んだ土の道だった。それでも不満一つ言わず彼は歩き続けた。小1時間ほどたつと大きな町が見えた。町に近づくにつれて道は綺麗に整ったアスファルトになっていた。そこはオーヴァルガンの東の端の町だった。いわばオーヴァルガンの玄關的役目であり、旅人や商人がめまぐるしく動いている。木でできた門をくぐると人でごった返していた。露店が立ち並び店主が客寄せに精を出していたり、仕事場へと急いでいるのだらう人たちが慌しく動いている。

「さすが玄關だね」

呟くと周りを見渡した。親切そうなおじいさんを見つけて何やら道を尋ねている。話し終わると丁寧にお辞儀をして教えてもらった道を行く。人通りの激しい大通りを真っ直ぐ行き十字路を曲がると目の前にそれがあった。

彼が着いたのは治安維持隊の建物だった。かなり大きな真っ白な建物である。出入りしているのは体格の良い男や旅人、または隊員に連れてこられた人である。彼には少し場違いな雰囲気であるが、ためらいもせず中へ入っていった。

「あのお」

彼は仕事・依頼受付と書かれたカウンターへ足を運んだ。そこには

三十代ぐらいの女性が座っていた。ここで仕事をもらいお金を受け取るのだ。旅人や定職についてないものがよく利用する。なんでしょう？と優しく応対された。

「五十万フィル以上の依頼ってありますか？」

え？、女性は驚いた様子で彼に尋ねた。

「カードはお持ちですか？」

カード？彼は首をかしげた。

「ええと、お名前は？」

「ルイスです」

「年は？」

「十六です」

「……学生さんですか？」

「いいえ、退学しました」

そこまで聞くと女性は少し困った顔をした。

「もしかして年齢制限ありますか？」

「いえ、そういうわけではないのですが、仕事をしていただくにはあなたの実力を証明するためのカードを持っていないとだめなんです」

「えっ、そうなんですか？」

「はい、あなたの実力によってできる仕事が決められます。それと、そのカードを発行するには身分証明書が必要なんです」

つまり、学生でないルイスに身分を証明するものではなくカードが作

れない。となると仕事ができない。お金が入らない。結果欲しいものを変えない。

そこまで考えが行き着いたルイスはガツクリ肩を落とした。その様子を見た女性が良いことを教えてくれた。

「あまりお勧めはしないけど、賞金コーナーへ行ってみては？そこではカードも身分証明も要らないわよ？」

ルイスは目を輝かせて教えてもらった場所へいった。そこは同じ建物の三階にあつた。しかしルイスはまたも肩を落とした。

そこは猫探しや農作業手伝い、犬の散歩などどれも簡単でしかも安いものばかりだった。

「こんなんじゃないや五十万ファイルなんて全然たまらない」

壁に貼られたそれらの情報をみてため息をついた。

ドン！

ボーっとしていたルイスに誰かがぶつかってきた。

「てめえ邪魔だ、ガキがこんなところで突っ立ってんじゃないやねえ！」

「す、すいません」

ルイスはすばやく頭を下げた。ふん、と鼻を鳴らして体格の良い男がさっさといった。と同時に疑問がでた。

「こんなところにあんな腕の立ちそうな人が……？」

ルイスは三階をよく探索してみた。すると一つの古びたドアを発見した。遠からず近からずのところからそのドアを見張っていると、先ほどと同じような戦闘になれた感じの男が出入りしていた。ルイ

スは好奇心からそのドアを開けようとした。

「ルイス様、危険ではありませんか？」

「大丈夫だよ、僕強いし」

そういつてドアを開けて中に入った。そこは地下道のように暗く、パイプがむき出しになっていた。数人の男が壁に寄りかかっている。皆一斉にルイスの方へ目をやった。何とも痛い視線が浴びせられる。

「ここは子どもが来るところじゃない。早くお家へ帰りなさい」

正面の大量の紙に囲まれている机にひじを着いてイスに座っているシワだらけの中年のおじさんがルイスを見ないでそう言った。

ルイスはそれには答えず彼らのやり取りを観察していた。

老人は大量にある紙の中からいろいろ物色している。一人の男が名前を呼ばれ一枚の紙を渡され部屋を出て行く。そして老人はまた紙を物色し、名前を呼び紙を渡す。ルイスの後から入ってきたものが老人のところへ行きなにか短く話した後、他のものと同じように壁に寄りかかって名前が呼ばれるのを待っている。

しばらくすると部屋には老人とルイスだけが残っていた。ルイスは老人の方へ歩み寄る。

「まったく、こんなところに何の用だい？杖を持っているってことは一応魔術師なんだろうけどここには子どもが手におえる仕事はないんだよ」

「平気です。中級のモンスターなら余裕で倒せます」

老人は困った顔をした。子どもの言っていることを鵜呑みにして仕事を与えるわけにはいかない。しかし、長年ここで働いていて人を見る目というものをもってしまっていたのだ。その目は確かにこの

少年の実力がそれなりにあるのだと言っている。
ううむ、と少し唸ってから老人はまた少年を見た。

「……いいかい、仕事が終わったら地下に行くんだ。そこでお金がもらえる。それと紙に書いてある事はよく読むんだよ。お金をもらうときの条件などが書かれているから」

ルイスは受け取り金額を見た。そこには一万フィルと書かれていた。期限は今月末までで内容は強盗殺人の犯人を捕まえるものだった。ちゃんと写真が貼ってある。

「おじさん、僕できれば五十万フィル以上の仕事が……」
「この仕事が出来たら考えてやるよ」

建物をでてルイスは近くのベンチに腰をおろした。
渡された紙をもう一度よく読むと、どうやら生きてそのまま確保してそのまま地下へ連行するようだ。

「しかたないか、観光がてら犯人探そ」
「あまりのんびりしていますとお金が尽きてしまいますよ」
「うっ、そうだった」

ルイスはため息をついた。しかしすぐにやる気を起こした。

「今日中に犯人捕まえたらおじさんもつといい仕事くれるかも！」
話の分かりそうなおじさんだったのでルイスはそう考えた。
ルイスはあまり人のいない公園を探した。そこでなにやら唱え始めた。

「我が名においてその姿を現せ……」

黒髪が近くの草木と一緒に揺れている。

「シルフ！」

ボン！

煙とともに小さな子どもが現れた。

「……」

ルイスは目を点にしてその子どもを見ている。五歳かそこらの男の子。緑の癖のついた髪・くりくりとした目・服装は上が片方の肩を出して布を体に巻きつけた形で、下は緩めのズボンのようなもの。そしてなんと背中に小さな翼をつけていた。二人とも静かに見詰め合っている。

「やっぱり召喚術は難しい……」

思わずその場になだれてしまった。

パタパタパタツ。

子どもが羽を使ってルイスの前へとやってきた。そして満面の笑みをルイスに向けた。

ルイスも笑顔を作ってとり合えず頭をなでてやった。すると子どもはルイスに抱きついてきた。

「パパ！」

「違うよ！」

激しくツツコミをいれるルイス。その様子をたまたま通った人が面

白そうに見ていた。
ため息ばかり出てしまう。

「はぁ……どうしょ……」

「パパ！パパ！」

「だから違うって……」

「おなかすいた〜」

無邪気にそうせがむ子どもに肩を落とす。ルイスは近くにあったアイスクリーム屋さんで一番安いのを買ってとり合えず食べさせた。

「フエイ……」

噴水のところに腰掛けて姿のない者に話しかけた。隣では子どもがおいしそうにアイスをはおぼっている。

「なんででしょうか？」

「なんでこんな子どもなの？」

「召喚はその者の實力によって……」

「いや、もういいや。理由なんてわかってるし」

とほほ、とルイスはこの後の対策を考えなくてはならなかった。本来ならば風の精霊であるシルフ、といってももつとレベルの高いものを望んでいたわけだが、とにかくその精霊を呼び出し犯人を捜してもらおうかと考えていたのだが、いかんせんルイスは魔術は天才的でも召喚はまったくの素人であった。一応勉強はしたもののまったく進歩は見られない。

「パパ！」

アイスを食べ終わった子どもが元気よく話しかけてきた。

「なに？」

「お名前ちょうだい！ぼくのお名前！」

ああ、とルイスは思い出した。一度呼び出したら一生その者に従う、それが召喚の基本であった。そして術者のレベルが上がれば呼ばれたものも強くなる。その逆も然り。

「じゃあシルフでいい？」

「うん！」

ルイスは面倒なので風の精霊の総称を名前につけた。しかし名前をつけてもらった本人は大喜びである。その様子を見てルイスは複雑な感じだった。

「まあ、僕がレベルアップすれば良いことだし……」

「精霊は人間と一緒に感情を持っています。そのことをお忘れなく」

はいはい、と適当に流すルイスであった。

しばらく考えても犯人探しの良い案が浮かばないのでだめもとでシルフに聞いてみた。

「シルフ、この人探せる？」

「ん〜？」

シルフは紙に張られた写真を見た。しばらく見ていると、こっち！
といいルイスを引つ張った。

「ちょ、ちょっと待って！飛ぶのはやめよう。目立つし」

そう言つてシルフを抱きかかえて彼の示す方へ歩を進めた。内心ラッキー！と思いつつ。

「ここは……」

少し歩いた所でシルフはルイスを止めた。そこはたこ焼き屋さんの前だった。良い匂いが漂っている。

「たべる！パパこれたべたい！」

パパ？と店の人が不審人物でも見るかのような目でルイスを見る。

「あ、すみません。この子勘違いしてて」

何とかこの場を切り抜けようとしたがシルフがそれを許してはくれなかった。

「パパなの！ぼくのパパ！！」

なんとも盛大に泣き出してしまった。

ルイスは慌ててその場を走り去るしかなかった。

「はあ………」

ルイスはまた公園へと戻ってきてしまった。シルフは泣きつかれてルイスの腕の中で眠っている。ベンチに腰をおろして休むことにした。

よくよく考えてみれば召喚したものは好きなときに消せるのである。しかし……。

「どんなの唱えるんだっけ……」

完全に行き詰ってしまった。まさか子ども連れで犯人を捜すわけにもいかず、しかもこの子には羽があったりする。まあその辺はノリでやり過ぎずとしても、五十万ファイルを稼ぐにはかなりの時間を要すると考えられた。

「図書館へ行こう」

ルイスは何とか結論搾り出した。

基礎的な召喚の本ならば普通の図書館にもあるはず。とりあえずシルフにかまってはいられないのでいったん引っ込んでもらおうと。ルイスの足取りは重く、それでも図書館を探しに腕にシルフを抱きながら静かな公園を後にした。

接触

結局昨日は丸一日をシルフのために使ってしまった。お昼をだいぶ過ぎたあたりに図書館を見つけ、閉まるギリギリまで必死に召喚の本を読みあさり、宿にて勉強に勉強を重ね今日の明け方、つまり今、ルイスはようやく床につけたのであった。ベッドの周りには図書館から借りてきた本が散らばっている。

「ルイスねえ」

タバコを口にくわえたミスティアスなオーラを放つ二十代ほどの男が、シワだらけの中年の男と対峙して座っている。

「見た目はおとなしそうで本当に子どもなのだが、平気で中級モンスターは倒せると言ってきてね」

さして明るくもない部屋でコーヒを口にしながら中年の男はおもしろがって話している。

「興味本位でちょっとその子について調べてみたんだがおもしろい事がわかってね」

「どんな？」

「オーヴァルガン国立アカデミーの魔術専攻で、成績は常にトップ、いわゆる優等生だったのだが、今はアカデミーを自主退学という形になっている」

「へえ」

「どこかの誰かさんと似ていると思わないか？」

中年の男はニヤニヤしながらミステリアスな男をみている。

「俺は退学処分にされたんだよ」

「そういうことにしとくよ。とにかく、わしのおすすめはこの子どもだ」

二人は別れ、ミステリアスな男は町にでた。そして頭をボリボリかきながら先ほどの話を思い出している。

「ったく子どもを旅の仲間におすすめされてもなあ……」

ついボソツと呟いてしまった。

コンコン。

ルイスの部屋にドアをノックする音が響いた。

「はあい。どちら様ですか？」

寝起きの張りのない声でなんとか質問をした。

「お客様、部屋の掃除をしたいのですがよろしいですか？」

「あ、すみません。今出ます」

ルイスはまだ起きていない体をなんとか動かして宿を出た。

太陽は真上にきている。近くの安い店で昼食を食べようと思い、ルイスはうまい！安い！早い！と書いてある看板のある店へ入った。つた。

一番安いものを選んで食べていると目の前に見覚えのある男が座っ

た。気のせいだと思い食事を進めていたが途中気付いてしまった。ポケットからおじさんにもらった紙を取り出し男に気付かれないように紙に張られた写真と見比べてみる。

「……（僕ってついてるなあ、やっぱり日頃の行いがいいからかな？）」

つまりは一万フィルが目の前にあるわけで。

ルイスより先に男が食事を終えて店を出て行こうとしたので、慌てて食事を済ませて彼の後を追った。

「どうやって捕まえようか……」

男に気付かれない程度の距離を保ちながら呟いた。

「考えなしに近づくのは危険です」

「わかってるよ、接近戦は得意じゃないし。でも普通の人みたいだから幻惑系で一発だね」

「ほどほどになさってください。相手は普通の方ですから」

ショートミーティングの後、しばらく男をつけていくとある場所にたどり着いた。教会である。

今ちょうど募金活動が終わったのだろう、シスター達が大きくない箱を手に持ち路上にあったテーブルなどを片付けている。シスター達が片づけを終えて教会に入っていくと男も中へ入っていった。

「罰当たりだね」

「お祈りに来ただけかもしれません」

「強盗殺人犯がそんなことするわけないじゃん」

「人間誰しも過ちは犯します」

はいはい、と流してルイスも教会の中へ入っていった。中には数える程度の人があった。老夫婦や若い女性、幼い子どもと一緒にの母親に一見怪しげな男、それと強盗殺人犯。シスター達は箱を持って奥の部屋へ姿を消した。犯人に動きは見られない。

「やはり罪を悔い改めに来たのですね」
「まだわからないよ」

ルイスは犯人から少し離れた後ろの席に腰をかけた。小さなステンドグラスから綺麗な光が教会の中を照らしている。

犯人に何の動きも見られないのでルイスは教会を出て待ち伏せすることにした。いつでも魔法が使えるように杖をしっかりとつかみながら教会の鉄製の門のところにスタンバイしていた。

一方教会の中では奥の部屋からシスター達が出てきて聖書を朗読し始めた。しばらくすると犯人はさつきシスター達が箱を置いてきた奥の部屋へと足を向けた。それに気付いた一人のシスターが止めに入ろうとしたとき。

バン！
一発の銃声が鳴り響いた。

「きゃー！」

若い女性が悲鳴をあげた。撃たれたシスターは床に倒れてピクリとも動かない。

「なんてことを！」

シスター達が恐れを抱きながらも犯人を威嚇した。

一見怪しげな男以外皆体が振るえ、目には涙を浮かべている。

「金をもらっただけだ、大人しくしてな」

犯人が奥の部屋に入ると同時にルイスが教会の中へ駆け込んだ。

「どうしたんですか!？」

ルイスは震えているシスター達に歩み寄った。すると横に血にまみれている一人のシスターが倒れていた。

「いきなり男の方が銃で彼女を……」

涙を流しながら必死に説明をするシスター。すると奥の部屋から犯人が出てきた。ルイスは彼を睨んだ。

「なんだ〜ガキが。そこをどけ!」

「お断りします」

言い終わらぬ間にルイスはブロウを放った。男の体は壁に強く打ち付けられそのまま気を失ってしまった。

「電話はどこですか?」

先ほどの剣幕はまったくなくなり優しくシスターに話しかけた。

「しかし君のような子どもが殺人犯を捕まえるとは」

青い制服に身を包んだ男の人が連行されていく犯人を横目で見なが

らルイスに話しかけた。

ルイスは犯人が気絶した後すぐに治安維持隊に連絡をしたのだった。

「こう見えて魔術師ですのぞ」

「いやあ、立派なものだ。そうだ、地下の連中には俺から連絡を入れておくから後で金を取りに来ると良い。じゃあな」

犯人を連れて去っていく維持隊の人にルイスは一礼をして教会を去ろうとした。すると、

「坊や、ちょっといいかい？」

振り向くと一見怪しそうな男が立っていた。長身のなかなか美形な成年男子である。身なりからするとどうやら剣術師のようだがその腰に剣はない。

「なにか？」

少しばかり警戒しながら一応返答した。

「坊やがルイスだろ？俺はサレオス。まあ立ち話もなんだし茶でもどうだ？」

「……………」

「あ！もちろん年上である俺のおごりだ、そこは心配するな！」

「いえ、そこではなくあなた自身が心配の種です」

「なっ！失礼な坊やだな。……じゃあ治安維持隊の建物の三階にいたシワだらけのおじさんの知り合い、って言ったら平気か？」

あの人の、と心の中で呟いてみて何となく興味本位で男について行く事にした。

相性

「それで、何の御用ですか？」

最初に口を開いたのはルイスだった。手元にはオレンジジュースがある。

店は落ち着いた感じの喫茶店。男は紅茶を頼んだ。

「そうだなあ、直球と変化球はどっちがイイ？」

「……直球をお願いします。」

「そうかあ、俺はどっちかって言うと……」

「帰りますよ？」

「ま、待て待て！すまん。じゃあ直球で。つまりは仲間になってほしいわけだ」

「……はい？」

「だから、俺と一緒に旅へでよう、みたいなの？」

本気で言っているのかいまいち掴めないこのサレオスという男にルイスは否応なしに警戒してしまう。男はタバコを吸い始めた。

「詳しく言うとだな、俺はあるものを探している。で、旅にはやっぱり魔術師って必要だろ？シワのじいさんに良い奴いないかと聞いたところ坊やの名前が出てきたわけ」

「僕は坊やではなくルイスです」

若干不機嫌オーラを放ちつつとり合えず男の話を聞くことにした。見た目は怪しいがそうでもないらしい。あのおじさんの知り合いと言うことだけでなんとなく警戒心が薄れていく。

「悪かった。で、どうだ？」

「お断りします」

「なんで!？」

速攻過ぎるルイスの答えに男はタバコを落としそうになった。

「僕も旅をする身ですがあなたと目的は違うと思います。あなたは見たところ剣術師のようですから」

「そうだな。だけど俺は当てもなく探してるからどこに行くとかはお前が決めてくれてかまわないぞ？」

「……そんな適当な……じゃあどうでもいいものを探してるんですね」

ため息混じりにそういった。

「まあそうだな。でも俺にとっちゃ、っていうか剣術師にとっては結構なものなんだが一切手がかりがないもんだからどうしようもないんだよ。お前は何の旅なんだ？」

「そうですね……今は取り合えず魔術大国のイリュマに行くことです」

「おお！俺も行きたいと思ってたんだよ。じゃあ問題なしだな。とりあえず金もらってさっさといこうぜ！」

サレオスは席を立ってルイスの腕を引っ張って外へ出ようとした。

「ちょ、待ってください！僕はまだ良いとは言って……」

ルイスの抵抗もむなしく店をでてお金を受け取りに維持隊の建物へと向かった。道中は恥ずかしいので騒げなかったが地下でお金を受け取るや否や反論を始めた。

「僕の話聞いてください！仮にあなたが僕の行きたいところについてくるので良いとしても僕が困ります！」

地下にはあまり人がいない。しかしなかなか声は響き渡る。

「なんでだよ？何かやましい事でもあるのか？」

からかうように笑いながらサレオスは聞いてきた。

「違います。僕は強いですがあなたはどうなんですか？僕は弱い人と旅をする気はありません。足手まといになるだけです」

「おお〜優しそうな顔して結構酷いやツなんだな」

真顔でそういわれてルイスはついカツとなってしまうた。

「そうですね、僕は冷たくて酷い人間なんです。自分のことしか考えていません。平気であなを見殺しにしますよ、それでも良いって言っんですか？」

「ああ、いいぜ？」

「……は？」

「っていうか俺強いからそうそう死なないから」

「丸腰のクセによく言っな」

突然の声に二人とも振り向いた。そこにはシワだらけのおじさんが剣を片手にこちらへ歩いてきている。

「もしかしてその剣俺に？」

「他に誰がいるって言っんだ？まったく、手間のかかる子どもだな」

優しくサレオスに笑いかけながら剣を渡した。ありがと、と短く少し照れながらサレオスは剣を受け取った。

「ルイス君、もう強盗殺人犯を捕まえたそうじゃないか？すごいね」「いえ。あ！それより次の仕事もええですか？」

「ああ、用意しているよ。五十万フィリ以上のだろ？」

ルイスにも優しい笑顔で答える。ついておいで、と例の三階のパイプがむき出しになっている部屋へ案内された。サレオスも一緒である。

おじさんは紙が山積みになっている机から一枚選んでルイスに手渡した。ルイスはすぐさま受け取り金額を見るとそこには80万フィリと書いてあった。

「おじさん、金額がすごいことになってる……」

「それは最低二人でこなす仕事なんだ。がんばってくれよ？」

「おお！気が利くじゃん、これでルイスと仲良く旅仲間になろうって事だな！」

「え？」

ルイスは怪訝そうにサレオスを見た後心配そうにおじさんの顔を伺う。

「悪いやつじゃない、それにいくら強い君でも子ども一人旅はわしは心配だよ」

「そういわれても……」

しかもなぜ昨日あったばかりの人間に心配してもらっているのか、ルイスにはそこかわからなかった。

「ぐだぐだ言っていないでさっさと終わらせようぜ？じゃあまたな！」
そして再び強引にルイスの腕を引っ張っていくサレオスにルイスは頭がくらくらしてくるのであった。

「なるほど、豪商の護衛ね。観光にもなっていないんじゃない？」

「……はあ」

「そんなため息ついてないでいくぞ！出発は明日みたいだから今日のうちに俺たちのこと言っておかないと」

ルイスはうなだれながらサレオスの後をしかたなく追った。しばらくしてルイスは口を開いた。

「なんでおじさん僕が一人旅してるってわかったんですか？」

「興味本位でちょっと調べたんだとさ」

「へえ……」

なかなか気を抜いてはいけない人なんだと思っただがどうしても雰囲気が良い人なので勝手に調べられてもあまり引っかけかりはしなかった。

豪商に顔を出し、二人はルイスの泊まっている宿へと帰っていった。

「なんであなたも同じ宿に泊まるんですか？」

二階へあがっていく階段でサレオスの顔を見ないでルイスは尋ねた。

「別に宿なんてどこでもよかったし。それにお前と一緒になら朝起こしてもらえるだろ？」

「自分で起きてください」

「この仕事二人でなきゃ出来ないんだぜ？いいのかあせつかくの大金ゲットのチャンスを逃して〜」

「……出来る限り自力で起きてください」

それだけ言ってルイスは自分の部屋に入ってしまった。

「気難しい坊やだなあ」

頭をボリボリかきながらサレオスも自分の部屋へと足を向けた。

「疲れた……」

「ルイス様の苦手なタイプですね」

ベッドに体を投げ出し姿の見えないものと話し始めた。

「そうだね。一緒に旅だなんて考えただけで気がめいるよ」

「ですが悪い人ではないと思います」

「そうだけど……相性ってものがあるよ。あのおじさんはホント良い人だけど……」

人とは不思議なもので相手のことをまったく知らないにもかかわらず好きだの嫌いだと決めることがある。ルイスはおじさんのことを何一つ、名前すら知らないのに好感を抱いている。

「なんでだろうね……」

「何がですか？」

「……こういうのがなければ争いなんて起きないのかもね。みんながみんなと波長が合って衝突しない、そうしたらすごく平和なのかな……？」

窓から見える星空を見ながらルイスは遠い目をしている。

「……それは味気のないものではありませんか？」

「わからない。僕には何も分らないよ……」

「……」

「それがすごくもどかしい。息苦しいんだ。鎖で繋がれていると同じぐらい僕には耐えられない」

「耐えるべきものは耐えなければなりません」

「なんで？」

「ルイス様はそれらを無駄と考えるかもしれませんが、この世に無駄なことなど一切存在しません。広すぎる海や空を無駄と思いますか？」

「……そんなの考えたことなかった」

「ルイス様を締め付けていたご両親を不必要と思いますか？」

「……フェイ、君は時々すごく僕を不愉快にするよね。両親がいなかったら僕は生まれなかったんだよ、不必要なわけがないだろ？」

「ではご両親を今も必要と思っておいでですか？」

「……」

ルイスは言葉に詰まってしまった。

「私を感じるところ、サレオス様はルイス様が持っていないものを持っていきます。あの方との旅はルイス様にとつとてもいい経験になると思います。どうぞあの方の申し出を快く受け入れてください」

それには答えずルイスは眠りについた。重い気持ちを残したまま。

50万フィロ

案の定朝起きてこなかったサレオスをルイスは起こす羽目になった。しかも豪商の家へ行けば、息つく暇もなく出発となった。荷台は一台、二頭の馬が引つ張っていてその前に依頼主の馬車がある。依頼主の方は家来であろう者達が周りを囲んでいてルイス達は荷台の方の護衛にあたる。

「なあルイス、何でお前五十万フィロいるんだ？」

出発してまもなく、手綱をもっているサレオスが聞いてきた。

「足が欲しかったんです。陸地を徒歩で行くのはあまりに時間がかかりますから」

「……なるほど！八十万フィロもらえるなら二人分買えるな。どの種類にするんだ？」

「……」

「お前まさかまだ俺との旅を迷ってるのか？」

「……いいえ、それは昨日意を決しました。ご心配なく」

「……（俺との旅がそんなに嫌か）」

心中涙を流すサレオスをよそにルイスは周りに気を配る。今のところ誰かにつけられている気配はない。

「馬が良いですね」

「馬？そんなの五十万フィロもしないだろ」

「普通の馬じゃありません。トラとかけたものです」

「タイスカ！いいね！それなら殺傷能力もあるし見た目もカッコイイもんな」

その後特に話すこともなく事件も起きず夕方には目的地についた。

「いやぁお疲れさん。何事もなく一安心だ。これは証明書だ。二人ともありがとさん」

依頼主が立派な筒をサレオスに渡した。中を確認すると仕事の証明書と印鑑が押してあった。

「なんか全然仕事してない感じで少し気が引けますよ」

サレオスが本当に申し訳なさそうにそういった。

「そんな事は気にするな。こちらにしてみれば安心の時間をもらったようなものだ。ではこれで」

依頼主はさわやかに去っていった。サレオスとルイスは一礼し、宿を探しに町を歩いた。するとちょうどよくタイスやその他にも色々な動物が売られている店を見つけた。どちらともなく店へ入って行きタイスを探していると小太りな店主が話しかけてきた。

「いらっしやい。お二人ともどのタイプをお探しで？」

「タイスです。二頭合わせて八十万フィル以内のがありますか？」

「二頭合わせてですかぁ、質としては中級になりますがそれですしいですか？」

「なんだっていいって、とりあえず陸地をいければ。な？」

「そうですね。見ても良いですか？」

どうぞ、と店主に案内されたのは店の外であった。そして隣の建物へ入るとそこにはタイスばかりがおかれていた。一頭づつ檻に入れ

られている。

「すごい数ですね」

ルイスは少しばかり感心した。

「まあね、うちはピンからキリまで取り揃えてて誰にでも提供できるのが売りなんですよ。中級はこちらになります」

頭数が一番多いようでごここからここ、と示された幅が長い。

「いいねえ、選びたい放題」

サレオスは早速物色し始めた。ルイスは店主に質問する。

「他のお客さんはどうやって決めていきますか？」

「そうですねえ、見た目とかフィーリングだと思えますよ。かわいい感じがいい人もいれば闘志むき出しのを選ぶ人もいます」

「そうですね」

「じゃあ俺はこいつ」

ルイスと店主の短いやり取りの間にサレオスはもう決めてしまった。それは全身赤のタイスだった。周りのものより一回り大きくどっしり構えた感じがする。

「早いですね」

「大切なのはカンだ。ルイスもこれ！と思うのがいたらさっさと決めろよ」

そうですね、とサレオスは置いていてルイスも物色し始めた。

カンと言われてもルイスにはどのタイスも同じにしか見えなかった。外見こそ違えどカンのフィーリングだのはいまいち理解しがたい。そう考えていたのもつかの間、ルイスは一頭の白いタイスの前で足を止めた。

「ああ、お客さん売主の私が言うのもなんですがソイツはやめた方がいいですよ」

店主がそう言いながらルイスの方へやってきた。

「何か問題でも？」

「それがコイツおとなしそうに見えてかなり凶暴でね、前の持ち主からタダでもいいから引き取ってくれていわれたんですよ」

「そうなんですか……」

ルイスは白いタイスと目を合わせていた。

「おやっさん、俺のほう先に支払いしていいか？それに少し乗ってみたいんだけど」

「わかりました、じゃあ試乗はこの建物の裏が広い空き地になりますからそこに案内します」

「ごゆっくり、と店主はルイスに言ってサレオスと建物を出て行った。

「……………どう思うっ？」

「もし近距离で襲われでもしたらお命に危険が及びます」

突然の声に白いタイスはビクツと体を動かした。

「まあその時はその時だね」

「ルイス様らしくないお言葉ですね」

「フェイが言ったんだよ、サレオスを見習えって」

「……たしかにそういう意味で申しましたが」

ルイスは檻に近づきかがみ込む。

「じゃあこれからよろしくね、問題児のタイス」

ニコツと微笑むと直ぐ立ち上がり店主達のいるところへと向かった。

「……ッ！」

「大丈夫かあ？」

サレオスの心配しているのかいないのか微妙な声がルイスにかける。

例の空き地でルイスも試乗することにしたのだが、まだ一度も乗れずにいた。一方サレオスは相性がいいのかももう乗りこなしている。

「お客さん、やっぱりソイツは無理が……」

「いえ、絶対乗りこなします」

そう言っただけでまた白いタイスに近づいていき背中にヒョイと乗ったと同時にタイスが激しく動き回りまたしてもルイスの体は地面に叩きつけられた。これを繰り返してもう小1時間にもなる。まわりはすっかり暗くなってきた。

「今日はとりあえず諦めて宿に行こうぜ。おやっさん、また明日の朝くるからそれまでここにおいて良いか？」

「はい、構いません。では明日お待ちしております」

納得のいかない表情をしたままのルイスを引きずって適当に安い宿を探しゃつと夕食をとることが出来た。

「お前って結構強情だなあ。他のにすれば良いだろ？」

食事をしながらサレオスが呆れ気味に言ってきた。

「あなたの言ったとおりカンで決めたんです。それに僕は一度自分で決めたことを途中で諦めるのはすごくキライなんです」

「はあく、まあがんばれよ。俺はダイゴローと一緒にたわむれてるから」

「ダイゴロー？」

「そ！俺のタイスの名前！かつこいいだろ？お前もさつさと名前決めろよ、そしたら少しは懐くかもしれないし」

じゃな、とさつさと食事を終えサレオスは部屋へ戻った。ルイスも食事を済ませて部屋へと戻っていった。そしてベッドの中でどうやってあのタイスを手なづけるかを思索しながら眠りについた。

「お客さん……」

「なんですか？」

「その、あの、」

「用がないなら話しかけないで下さい」

「は、はあ……」

冷や汗を流している店主と血を流している黒髪の少年、ルイス。その光景をあくびをしながら眺めているサレオス。

「おやつさん、仕事してていいよ、コイツは俺が見てるから」
「そうですか、よろしくお願いします」

店主は心配しながら店の中へと戻っていった。

「なあルイス、名前決めた？」

「え？そんなの考えてません。タイスで十分です」

「お前マジ酷いぞ！なあダイゴロー？」

隣に静かに座っていた自分のタイスの名前を呼ぶとダイゴローは軽くのどを鳴らした。

そんな和やかな一人と一頭を一瞥してルイスは白いタイスを睨んだ。

「なんで言うことを聞かないんですか。だいたい僕にこんなに傷を負わせて……ただで済むとでも……？」

「ダイゴロー……ルイスは独り言を言い始めたぞ。ちょっと怖いな。でもコミュニケーションをとってるなら良い傾向だな」

「サレオスさん、少し黙っててください」

「はあ〜い」

それからお昼をまわりサレオスは店主と昼食をともにし、その間にもルイスと白いタイスの戦いは続いていた。いい加減サレオスも飽きてしまいルイスを一人残してダイゴローと散歩に出かけてしまった。

「はあ……はあ……」

朝から休みなしでいるルイスの息は上がっていた。まったくもつていう事をきかないこのタイスに一睨みし、少し休もうと腰をおろした。するとタイスが近づいてきたので、ルイスは慌てて身構えた。

「いい加減諦める」

「!?!」

ルイスは目を丸くした。なんとタイスが喋ったのだ。

「なっ、ど、ど、ど、ど、ど、ど………何者ですか？」

「わしが何者であろうとおぬしには関係のないこと。さっさと他のタイスを選びわしの前から立ち去れ」

「……」

「わしは主を選ぶ」

「……」

「おぬしのような青二才にわしはもつたいない」

「では力ずくで僕のものになってもらいます」

ルイスの黒い瞳があやしい輝きを持った。と同時に霧がタイスを取り巻いた。

「ほう、幻惑の魔術か。しかしこんな子供だましわしにはきかぬ」

タイスはしっぽを一振りした。するとあっという間に霧が消えてしまった。

「そんな、これは……」

「ルイス様、彼は古代獣のようです」

突然の声だったがタイスは昨日のようににはビクつかなかった。

「古代獣？」

「はい、本来このようなところにいるなどありえませんが、言語を

操り耐魔術の能力を持っているというのならそうとしか考えられませんが」

フェイの声を聞きながらルイスは古代獣というものと向き合う。するとその古代獣の口がルイスよりも先に開いた。

「そういうおぬしは人間に絶滅させられたはずの神族ではないか。一体何ゆえこんなものと共にいる？」

姿がみえないというのに古代獣はフェイの正体を言い当てた。ルイスは一瞬驚いたが、しかしそれよりもある事が気にかかった。

「人間に……絶滅させられた……？」

ルイスは動揺した。フェイが神族という部類のものであることは聞かされていたが、人間に絶滅させられた、などということは一切聞いていなかったのだ。

「……どういう事？なんで隠してたの？」

ルイスは不機嫌に聞いた。

「……お話する必要はないと思いました。それより今は目の前の古代獣です」

後でじっくりゆっくり聞いてやろうと考え、ルイスはとりあえず本題に戻った。

「で、どうして僕が主ではダメなんですか？」

「ではおぬしは利己主義者のもの言いなりになりたいと思うか？」

あつ、とルイスは唇を噛んだ。納得のいく理由だ。しかしここで引き下がるわけにはいかない。今目の前にいるこの古代獣はフェイやサレオス同様ルイスの欲しているものへの手がかりであり、道しるべ、つまり届くものへの足がかりであると感じたからだ。

「……幼い頃に形成された人格というものは修正しがたいものがあります」

「くだらん。都合よくいい訳を作っているにすぎぬ」

「その通りです。それをフェイに教えられ、今またあなたに教えられました」

「学習能力がないのか、それとも予想以上の自尊者か？」

「ですが、僕にはたった一つの救いがあります」

「ほづ、言ってみよ」

「……『省吾』」

古代獣は目を細めた。数えるほどしか生きていない子どもが何を生意気なことを、と。

「仏の顔も三度まで、といます。僕はまだこれで二回目です」

そして少し呆れてしまった。が、それと同時に少しばかり興味がわいた。

「極めて愚者に似ているものよ。わしに何を望む？」

「全てです。……この世の全てが欲しいんです」

「何？」

変に言葉をつないでも逆効果だと思い、ルイスは正直に話した。

「一つのように見えてそうではなく、多いように見えてそうではないもの。それは僕には届くものであり欲しているものです。けれどまだ掴めない。それを手にするにはまずあなたを手にしなければいけないと思いました」

そういえば遠い昔に似たことを聞いた覚えがある、と古代獣は霧のかかった記憶を引き出してみたが思い出せなかった。しかしそんなことはどうでも良かった。

「おもしろい。このわしをおぬしの欲のために利用しようというわけか」

「……」

「おぬしの欲しているものに興味などないがおぬしに興味がある」

「それは、つまり……?」
「人間を乗せるなど何年ぶりか。運が良いな、今のわしはすこぶる機嫌が良い」

ルイスは思わずガッツポーズをした。

「古代獣ねえ」

ダイゴローに乗っているサレオスがまじまじと白いタイスを見ながら言った。

つい先ほど店を出てきたばかりだった。店主はルイスが笑顔で空き地から店へ入ってきたときはそれは驚いていた。遅いお昼を店主にご馳走になって、どうやってあのタイスを、という質問に適当に答えているときに散歩を終えたサレオス達が帰ってきたのだ。

「まさかダイゴローもか!？」

「そのものは違う。だが十分可能性はある」

どうやら古代獣というのは元々は存在しないらしい。

「仙人のようなものですね」

「なるほどねえ。てかルイス、まさか古代獣と分かってても名前タイスのまま？」

ルイスはのん気にそういえば、と思い出した。

「じゃあ白い仙人だからハクセンっていうのは？」

「うっわ、相変わらずの愛情のないネーミング……」

「わしはかまわん。むしろなかなかではないか？」

「ですよ、サレオスさんのネーミングセンスの方が疑わしいですよ」

笑いながらルイスはハクセンを走らせた。

「な！ダイゴローのどこが悪いんだよ！？ちよ、待てよ！」

サレオスもダイゴローを走らせ、夜にはオーヴァルガンの玄関へと再び戻ったのであった。

船旅

「わかりません」

「わかるうとしないのだ」

広々とした部屋で黒髪の少年と、馬とトラを足して割ったような白い動物が押問答を繰り返していた。話の内容はあまりに少年には似つかわしくないもの。

「そもそもわしはおぬしにわしの価値観を押し付けようとは思っておらぬ。なのに何故こうも突っ掛ってくるのだ？」

「だってあなたは僕より長く生きてるじゃないですか。それに古代獣っていうのはそうそうなれるものではないでしょう？僕はあなたの真理に触れて自分の肥やしにしたいんです」

古代獣と呼ばれた白い動物は軽くため息をついた。

「やっぱ船旅はいいねえ」

ミステリアスなオーラを纏っている美形の成年男子が大きな船のデッキで体を伸ばしながらそういった。隣には赤いどっしりとした動物がその男に寄り添って歩いている。

「いいか、ダイゴロー。船旅の何が良かったってそりゃもう女の子との出会いが素晴らしく転がっているのだよ！」

そう言うなりさっそくナンパを始めた。彼が狙いをつけたのはプロ

ンドの自分と同じぐらいの年齢の女性だった。

「ごくんには！君一人？」

「えっ、あ、はい」

女性は突然のことに少しばかり動揺している。

男は満面の笑みで女性を口説き船の中の喫茶店でゆっくりと話をすることが出来た。

「そうなの？サレオスさんてすぐおもしろいのね」

女性の楽しそうな声がサレオスと呼ばれた男に笑顔を作らせている。

「ところで、サレオスさんはどちらへ？」

「ごくん……どこだっけ？俺連れがいてソイツの行きたいところにくることになってるから」

「まあ、それって女性の方？」

「違うよ、子ども子ども。それも気難しい坊やでさあ、ちよつと生意気な感じ？もうちよつと子どもらしくしてほしいんだよね。そしてたらかわいげがあるのに」

サレオスが面倒くさそうに説明をする。すると後ろから声をかけられた。

「そんなにイヤならついてこなくて結構ですが？」

サレオスは慌てて振り返る。そこにはさわやかな笑顔の黒髪の少年が立っていた。

「あら、もしかしてこの子が連れの方？かわいいのね」

「どうも初めまして。サレオスさんとはたった今から旅仲間ではな
くなりますが彼をよろしくお願いします」
「ちよつと待つてくれルイス！誤解だ！」

サレオスが必死な形相でルイスという少年に説明しようとしたが一
蹴されてしまった。

「ご、ごめん！また今度メシでもおごらせて？」

そついうなりサレオスは女性を残しルイスを追つて喫茶店を出て行
った。ダイゴローはゆっくりと腰を上げて何気なく女性に一礼をし
てから店を出た。

再びデッキに出たサレオスはルイスを探した。あたふたしていると
ダイゴローが仕方なさそうに彼の袖を引っ張つて人気のない方へ歩
き出した。

「あ！ルイス！」

ポーつと海を見ながら突つ立っているルイスを発見しダイゴローに
礼を言つてから話しかけた。

「あのさ、さつきはゴメン、いい過ぎたよ」

手を合わせて謝罪をしたがルイスからは何の反応もない。
自然とサレオスは冷や汗をかいた。魔術師としてはかなり才能があ
るようなので手放すのはもつたいたいと思うと同時にそれ以上にお
じさんとの約束を守らなければ、と思った。それは子どもの一人旅
は心配だから保護者代わりになるということ。

「ルイス君」

「……」

「好きなもの買ってあげるから！」

「……」

「なんでもいいぞ！例えば魔術師に必要な杖とか本とか、お前の好きなものプレゼントするから、機嫌直して？」

物で釣ろうとしたが特に反応がない、と思ったら返事が返ってきた。

「じゃあ伝説の魔術師が書き記したと言う禁断の書が欲しいです」

真顔でルイスはサレオスにそう答えた。禁断の書、といえは魔術大国イリユーマの国立図書館にそれはもう厳重に保管されているもの。魔術師でないサレオスだってそれぐらいは知っている。

「ル、ルイス君、そんな無茶苦茶な……」

ほろりと涙を流すサレオス。しかしルイスはお構いなしに痛いところを突いてくる。

「生意気な坊やと旅なんかしてたら疲れるでしょ？僕もあなたとはやはり合いませんしここは別れるほうがいいと思いますか？」

「いや、だけどおじさんとの約束もあるし……いざという時俺役に立つよ？どうせ捨てるなら死んでからでもいいんじゃない？」

は？、とルイスは訝しげにサレオスを見てやはり彼は理解しがたい、と思った。どんなものかは知らないが、どうして赤の他人との約束をそこまでして守る必要があるのか、しかも彼の台詞からは自分を利用して必要なくなったら捨てて良いなどという、ルイスにしてみればなんとも屈辱的なことをこの男は平気で口にしたのだ。

「あなたには、プライドと言うものがないんですか？」
「え？ああそりゃ男だしそれなりにはあるけど、それがどうかしたか？」

不思議そうな顔でサレオスはルイスを見た。

「……あなたとも色々話しをしなければなりませんね」
「はい？」

ハテナマークを浮かべるサレオスを無視してルイスは部屋へと戻っていった。サレオスは慌ててルイスの後を追った。

「なあルイス、考え直してくれよ」

サレオスの頼りない声がドアの方から聞こえたと思ったたらそれが開いて二人と一頭が入ってきた。

ハクセンは身を起こし二人の方に目をやった。何やらサレオスがハクセンの主人であるルイスのご機嫌をとっている。
部屋にはベッドが二つ。船の部屋だと言うのに広い。というのもサレオスの顔が利いていて、尚且つ信頼が厚いことからこんな良い部屋で船旅を過ごしている。さらにルイス達は船の護衛ということだけで乗せてもらっているのだ。

「あ！ハクセン、お前からもいってやってくれよ！」
「どうしたのだ？」

「サレオスさんは僕と旅がしたくないようなので……」
「違う！だから違うんだ！」

サレオスは涙ながらに必死にルイスにくらいついている。

それで、とルイスはベッドに腰をかけた。ルイスと向かい合うようにサレオスもベッドに腰掛けた。

「許してもらえますか？」

サレオスは恐る恐る聞いたが答えは返ってこなかった。その代わりにルイスの質問攻めにあってしまった。そして数時間経過し、

「まったくもって理解できません。もう疲れたので僕はシャワーを浴びて寝ます」

そう言ったルイスはシャワーを浴びに部屋を出て行った。

部屋に残されたのはげんがりしているサレオスと若干哀れみを含んだ眼差しをサレオスに送るハクセンであった。ダイゴローはどこかへ散歩にでかけている。

「はあ……もしかしてハクセンも午前中……？」

「ああ、何とも頑固であるのにこちらの考えを理解しようとな」

「ルイスって変わってる……」

サレオスはベッドにごろんと身を転がした。

「なあ、ハクセンは何でルイスと一緒にって思った？」

「成長というのは見ていておもしろいからな。特にルイスは今とまったく違った自分を探している。どう変わっていくのか見ものだ」
「なるほどねえ、俺も年取ったらそういう考え方になるのかな？」

「その前に死んでしまっただろう」

「でもさ！やっぱ仙人みたいなのはいるだろ？」

「まあな。今は世界に……七人いるか。皆百年はゆうに超えている」

ふうん、とサレオスは少し考えた。七人、というのは世界七賢者のことだろうか、と。質問しようと思ったがルイスの質問攻めでへとへとなっていたのでそのまま眠ってしまった。

「良いもの発見」

夜空に一人の少女の姿が浮かんでいる。なにやら翼のある大きな生き物に乗って高いところからルイス達の乗っている船を見下ろしていた。

「暇だから遊んじゃおう」

少女と大きな生き物は船めがけて下降していった。

船上

ダイゴローは体を横にして夜風を楽しんでいた。艶のある赤い毛がなびいている。そこに船員が近づいてきた。

「こらこら、こんな所で寝るなよ。ご主人様のところに戻んな」

優しく笑いながらそう言ってきたのでダイゴローも素直に従い、身を起こした。その時、大きな影が一人と一頭を包んだ。船員は訝しげに顔を上げると真っ青になった。

「モンスターだ！！全員起きろ！！！！」

大きな声で叫んだ。ざわめきと同時に次々と部屋の電気がついていく。

「失礼ー、この子はそんな下品な生き物じゃないよ！」

なに、と船員とダイゴローは翼の生えた、龍であろう生き物をよく見た。すると背中にエメラルド色の髪をした一人の少女が乗っていた。

「失礼なあなたは一番最初にこの子に食べられてね」

言うなり龍の鋭い牙が船員に向けられた。

「うわあああー！！」

食べられた、と思いきや船員はどこにも痛みがないのに気付く。目

を開けると少し離れた所に龍と少女がいる。相手が遠ざかったのか、と一瞬思ったが自分がさつきとは違う場所にいるのだと覚る。

「ふーん。ずいぶんお利口なタイス……」

少女が舌打ちしながらそう呟いた。何がどうなったか分からない船員の前に赤いタイス、ダイゴローが船員を守るように立った。どうやらこのタイスに助けられたようだ。

「おい！大丈夫か！？」

起きてきた他の船員達が寄ってきた。

「あ、ああ。それより確か護衛雇ってたよな！？そいつらを……」

「もう起きてますよ」

「船員さん大丈夫？」

凜とした顔のルイスと船員を心配しているサレオスがいつの間にか船員達の前に現れた。

「皆さん部屋へ戻ってください。危ないですから」

船員達はおろおろしながらも、頼んだ、と言いその場からいなくなった。そして皆窓から興味の目を光らせている。

広いデッキに龍と少女、ルイスにサレオス、ダイゴローが静かにらみ合っている。

「なあ、ハクセンは？」

サレオスの気の抜けた声が空気を破った。

「さあ。まだ寝てるんじゃないですか？まあハクセンがいなくても余裕です」

「そうか、じゃあ俺は見学してるから」

「そうですね、足手まといになられては困りますし」

冷たく流すルイス。サレオスはため息をつきながら適当な場所に腰をおろそうと周りを見渡すとなんと腰を抜かし、逃げ遅れていた船員を見つけた。サレオスは近づいていき一緒に座って見学することにした。もちろんダイゴローも一緒である。

「若いお肉の方がいいわね」

少女は笑顔でルイスを見た。

「生憎ですが僕はおいしくありませんよ。それに食べられる気もありません」

「おいしいかどうかはこの子が決めるのよ！」

少女が言い終わらぬうちに龍がルイスめがけて飛んできた。

「ヒュージ！」

すばやく防御魔法で龍を跳ね返した。バチバチツ、と火花のような音と小さな明るい光が発生し、龍はひるんだ。ルイスは休ませる暇もなしに大きな炎を食らわせた。

「ギヤアアア！！！！！」

龍の鳴き声が大きく鳴り響く。翼の部分に炎が集中している。

「くっ、テテ！海へ！」

少女が命令を下すと龍はすばやく実行に移した。

ザバアッ！！

海へ入って直ぐにまたルイスの前に姿を現したが、龍は苦しそうにしている。

「テテ！大丈夫！？」

少女の質問に対して龍は力なくうなつた。

「よくもテテを！」

少女は龍から降りてルイスを睨んだ。そしてなにやら唱え始めると龍の姿が消えていった。

「召喚術師ですか。ってというか自業自得ですよ」

「うるさいわね！あんたなんてこの子達にやられちゃえ！」

また唱え始めると少女の前に3体の鎧が現れた。皆右手に剣を、左手には大きなたてを持ってている。

「剣が魔術にかなうとも思ってるんですか」

呆れ気味にルイスは氷系魔法で動きを封じようとした。が、唱える前に何者かがルイスの持っていた杖を奪った。

「私って同時に違うの召喚できるんだよね」

少女の肩にルイスの杖を持った小猿が座った。さすがのルイスも杖なしでは魔術が使えない。と、その時満面の笑みのサレオスがルイスに近づいてきた。

「なんですか……」

ルイスは嫌そうな顔でサレオスを見た。

「それがピンチを救ってくれるものに対する態度かね？」

フフン、と鼻を鳴らし若干ルイスに対して上の立場から言ってみたサレオスはかなりご機嫌だ。

「……さっさと働いてください。タダで乗せてもらってるんですから」

「お前ねえ……」

せつかく立場が逆転したと思ったのに、とサレオスは肩を落とした。少々やる気なく剣を抜いたサレオスだが鎧達はルイスめがけて剣をのばした。

キーン！

剣が交わる音になった。

「ルイス、あの船員さんと一緒にいてね？」
「わかりました」

一度身を引いたサレオス。ルイスは小走りに船員とダイゴローのもとへ行こうとしたが鎧によって行くてを阻まれた。

「テテをあんなにしてタダですむと思わないでよ!」

少女の怒気を含んだ声が飛んできた。

ルイスが少女に気をとられている間に剣がルイスの頭上で光る。

「ルイス!」

「!?!」

間一髪でサレオスに助けられ一緒に転がっていき派手に木箱を破壊した。サレオスは直ぐに身を構え、向かってくる鎧達へつつこんだ。

「ハアア!」

1体の鎧がサレオスの一撃で吹っ飛ばされ動かなくなった。

「よし!あと2体。」

1体に狙いを定め、すばやく距離を縮めていく。

キイン!キイン!

なかなかの腕だ、とルイスは初めてサレオスを感じた。サレオスと鎧達の攻防を悠長に眺めていると目の前に大きな蛇が現れた。

「っ!」

逃げようとしたが遅かった。蛇のしっぽに足をとられてそのまま体

に巻きつかれた。

「うああ！」

「ルイス！？」

ルイスの叫び声にサレオスが一瞬の隙を作ってしまった。

ザヒュツ！

「つつツ！」

鎧の剣にサレオスの血がついている。左腕を負傷してしまった。

「うふふ」

少女の愉快そうな笑い声が聞こえた。そしてルイスの方へと近づいてきて蛇に命令を出した。

「ゆつくりね、テテをあんなにしたんだから簡単には殺さないよ」
「くっ」

蛇は言われたとおり徐々に力を入れていった。ルイスはだんだん呼吸が苦しくなってくる。

その時ダイゴローは迷っていた。主人であるサレオスを助けるべきか、今にも死にそうなルイスを助けるべきか。

「ダイゴロー！ルイスを！」

主人の叫びを聞くや否やダイゴローはすごい速さで蛇に襲い掛かった。

「シャアアア！！」

蛇も負けじとしっぽと頭を使って攻撃した。少女はいったん離れて様子を見ている。

サレオスは左腕をかばう形での戦いになりかなり手こずっている。が、白い物体が鎧に体当たりをしてすぐさまサレオスの負傷した左腕の方へ寄ってきた。

「ハクセン！」

「何とも面白いことになっているな」

チラツ、とハクセンはルイスの方に目をやった。

「お前のご主人様はルイスだろ？早く行ってやれよ」

「……良いお灸だ」

そう言うところルイスのいる方ではなく鎧へ攻撃を仕掛け、余裕で1体を倒した。

「はぁ……なんか後でいやあな予感が……」

サレオスの心配はおそらく的中するだろう。なにセルイスの視線が痛いからだから。

それは主人である自分を助けに来ないハクセンへの睨みである。たしかにサレオスは負傷しているけれど、と思いつつもこっちは死にそうなのだと言に出ない叫びを叫んでいた。

「ヤバイ、かな？」

少女は冷静に今の状況を考えていた。すでに4体も召喚しているの
でこれ以上の召喚は少女には厳しい。この船からの脱出を考えると
またテテクラスの召喚をしなければならぬ。何より少女にはこれ
以上自分の召喚獣達が傷つくのを見ていられなかった。眉間にしわ
を寄せながら少女は今いる召喚獣達を消して、その代わりに大きな
鳥を召喚した。

「今日はいったん退くけど今度会ったらタダじゃおかないから！」

そう捨て台詞を残し、少女は夜の闇へと消えていった。

少々散らかったデッキには気を失ったルイスと血を流しているサレ
オス、息が上がっているダイゴローに冷静なハクセン、そして未だ
に腰を抜かしている船員が残された。

半歩

「……君は実に優秀だ、ルイス君」

「自負しています」

「それは驕りだよ」

「……」

驕り？それは自分の力量を測り違えている人の事だ。僕は違う。自分のことはよく知っている。人格は別として、自分の魔術師としてのレベル位ちゃんと分かっている。だから驕ってなんかいない……驕ってなんか、いない。

重い瞼を開けると温かい日差しが広い部屋を包んでいた。上半身を起こすと少しだけ体が痛む。ふと、自分の右下に目をやると大きな白い物体があった。

「……ハクセン」

弱く放たれたその声に体を横にしていたハクセンは耳をピクツと反応させた。そしてゆっくりと頭をルイスの方へと向ける。しばらく互いに沈黙のまま見つめ合っていたがハクセンがそれを破った。

「大事無いか？」

優しい声だった。ルイスは全身から力が抜ける感じがした。いや、もともと力など入ってはいなかったのだが、なんとなく、安心感のようなものに触れたような気がしたのだ。

「はい……」
「そうか」

ハクセンは頭を戻そうとしたがルイスの言葉がそれを止めた。

「一つ、聞いてもいいですか？」

「なんだ」

「なぜ、僕を助けなかったんですか？ 仮にもあなたの主であるのに……」

ルイスは心無く聞いた。なぜなら答えなどすでに知っているから。

「良いお灸だと思ったからだ」

ルイスがそうですね、と小さく呟く声がハクセンの耳に届いた。彼の顔を伺えば、その目はどこか遠くを見ていた。ハクセンの視線に気付いたルイスはなんとなく思ったことを言ってみた。

「…… 驕っている、というのは僕のような人を言っんですね」

「自負とは違う」

「理事長にも言われました」

「そうか」

それだけ話し、ハクセンは部屋を出て行こうとしたがドアの所で一瞬とまり、

「サレオスを呼んでくる」

と言って、部屋を出て行った。

一人残されたルイスは静かな虚しさを感じていた。温かい日差しが

その虚しさに拍車を掛けているように思えてならない。

昨日の夜、龍に乗った少女が現れ一戦交えた。ルイスが余裕で勝つかと思いきや大事な杖をとられ一気に形勢が逆転。その時、自分が足手まといだといった男に助けられた。彼はルイスの代わりに戦った。まあそこまでは護衛としての義務であるからいいとして、問題はその後に起きた全ての事柄である。それがこの虚しさの原因であることはルイス自身なんとなく分かっている。

『うああー!!』

『ルイス!?!』

蛇に巻きつかれたルイスの目に左腕から血を流しているサレオスが写った。その時は何も感じなかった。せいぜい、なんてドジを、と……しかしその後、

『ダイゴロー! ルイスを!』

サレオスがダイゴローに自分を助けるように叫んだ。

なぜ……? ?

ルイスの頭をよぎったのはその言葉だった。

それからハクセンがサレオスの助けに入った。今思えば当たり前の行動だ。いくら自分が主だからといってルイスにはダイゴローがっいていたのだから。だが、その時はそうは考えられなかった。気付けばハクセンを睨んでいた。それからは記憶がない。

「……汚いなあ」

言葉と同時に涙が頬をつたい、直ぐに消えた。ルイスはようやく自

分の小ささに気付いた。

何かを倒し、生き残る力があるから強いとか、単純にそう思っていた。たしかにそれも強いのもかもしれない。けれど、本当に強い者というのは、そんな見え見えの力ではなく、むしろまったく逆の力を持つていて、それは、今まで自分がまったく不必要なものだと思っていたものなのではないだろうか。誰かを思いやるとか、心配するとか。

「よ！目え覚めたってな、大丈夫か？」

ドアが開くと同時に静けさを破る明るい声が部屋に響いた。

ああ、本当に強い人だ、とさっき気付いたことを思い出しながらルイスは声の主、サレオスを見た。

「どうした？ボーっとして」

そう言いながら左腕に包帯を巻いたサレオスが近づいてきて自分のベッドに腰をかけた。ルイスは包帯をジッと見ている。それに気付いたサレオスは慌てて、

「いやあ、俺もまだまだだね〜こんな傷作って。でも深くないからこれからも役にたつぞ？」

左腕を元気よく振って問題なしアピールをした。それを見たルイスが眉間にシワをよせるとサレオスは、まさか捨てられる！？と心配したがルイスからは意外な言葉が出てきた。

「無理しないで下さい。傷が開きますよ？」

え？と思つてルイスの顔を見るとそこには苦笑いがあつた。いつも

と違うルイスにサレオスは少したじろんだ。苦笑いを残しつつルイスはなにやら話し始めた。

「自慢じゃないですが僕は今まで戦って負けた事がありません。モンスターでも人間でも」

「ルイス君、それは世間一般では自慢と言う」

「だからといって上級モンスターに勝てるとか、自分が誰よりも強い魔術師であるとは思ったことがありますでした」

「ご立派」

「そう、僕もそう思っていました」

困ったように笑いながらもルイスは続けた。

「でもそれは物理的な強さ、もとい力であって、しかもそれが全てもと勘違いしてました」

「というと？」

「……あなたの方が強いのだと思い知らされました」

はあ？とサレオスは目を丸くした。あの、あのルイスからそんな言葉がでるなんて、と。しかもサレオスとしてはルイスが昨日言ったとおり剣が魔術にかなうと言うのは道理にかなっていないので、なぜ自分がルイスに強いと言ってもらえているのか皆目検討がつかなかった。

「その傷は僕のせいです」

「いやいや、これは俺の不注意で……」

「注意を逸らせたのは僕です。なのにあなたは僕を責めない。それどころかダイゴローに僕を助けるよう指示した」

「だってお前巻き巻きされてたし」

「（巻き巻きして）……危機的状況であったのはサレオスさんも同

じです。それなのに僕を心配する余裕を持っていて、尚且つあなたの助けに入ったハクセンをも僕の方へやるうとした……もし僕がサレオスさんの立場だったらまったく逆の行動をしていたと思います。そんな余裕、僕は持ち合わせていません」

そうそう、あの時のルイスの睨みは怖かったなあ、などとサレオスは思い出していた。そしてあの時の心配も思い出し、慌てて自己弁護を始めた。

「そう！俺はハクセンにルイス助けたら？っていったんだけどハクセン無視してさあ。あ！でもハクセンは俺のこと心配して助けてくれたわけだからあいつは悪くないぞ？だからその、なんだ、ほら、」

サレオスの慌てっぷりにルイスは思わずクスツと笑った。

「心配しないで下さい。別に怒ってませんから」

あ、そう？と、それを聞いたサレオスは一気に肩の力が抜けた。

「そっか、ならいいか」

「……そういうのも強さなんですね」

「ん？何か言ったか？」

いいえ、と首を振りルイスは体をベッドに横にしてもう一眠りしようとした。それを察してサレオスは、じゃ、とだけ言って部屋を出て行った。

さっきまでの虚しい気持ちはもうなくなって温かい日差しを温かいと感じることが出来た。

「フエイ」

「はい」

目を瞑ったまま呼ぶと柔らかい声が返ってきた。

「力、というか強さにも種類があるんだね」

「さようですか」

「魔術師としては僕は申し分ないんだよね」

当たり前のように言い放つルイスの耳にクスクス、と笑い声が聞こえた。

「でも欲しいのはそんなじゃない。もっと、もっと大きいんだ」

「はい」

「いや、もちろん魔術師としても世界一になるつもりだけどさ、そんなのもう手に入れてるようなものだよ。僕が欲しいのは……全てなんだ」

最後の方はほとんど聞き取れないほど小さな声だった。それというのモルイスはすでに眠ってしまっていた。

「……届きますよ。あなたの、全てに」

杖無

「もう最っつ低！あのすかした魔術師にへらへらした剣術師！」

エメラルド色の少し長い髪を持つ少女がいきなり大声を出した。

「シュワルガ聞いてる！？そいつらテテ達のこといじめたのよ！つていつかもう犯罪よ！」

「そうだね〜悪い奴らだね〜」

シュワルガと呼ばれた長身で細身の男が食器を洗いながら背中越しに少女の声を聞いていた。

ちよと夕食のあとで少女はお茶を手元に置いていた。窓の外は真っ暗でふくろうの鳴く声が聞こえている。時々木のざわめきもまじりつつ。

「今度会ったら絶っつ対タダじゃ置かないんだから！」

机をバン！と叩くと危うくお茶がこぼれるところだった。

食器を洗い終えたシュワルガが自分の分のお茶を手に持ち少女と向かい合わせにテーブルについた。

「しかしテテをやるなんてかなりの使い手だね。しかもその後三体もだしてるのにエルラン負けちゃったし」

面白そうに笑うシュワルガに対してエルランは頬をぷうつと膨らませて不機嫌ですと言わんばかりの顔をつくった。

「何その顔？俺を笑い死にするつもり？」

「失礼な！人が真剣に復讐を誓ってるっていうのに！」

笑い声と怒鳴り声が響きながらも、森に囲まれた小さな家はしばらくすると明かりを消したのであった。

魔術師というのは大抵魔力が備わっている杖を持っている。そうでなければうまく術を成功させることが出来ず、また体への負担が大きくなってしまふ。ただしレベルの高い魔術師はこの助けを借りなくとも自由自在に魔力を操ることが出来る。更に言えば、術を唱える、という助力も必要となくなるが、そのレベルの魔術師は世界には片手で数えられるだけしかない

「というわけです」

「なるほどねえ」

行きかう人の肩がぶつかり合うほど賑わっている港町にルイスとサレオスはいた。少し前に船を下りたばかり。その時、二人は先日あった賊の退治の時のお礼とばかりに船員達の温かい感謝の言葉を浴びながら船を後にしたのだった。

賊退治の時、ルイスは大切な杖を奪われてしまった。そこでサレオスはお金に余裕があるんだから、ということでも杖を買ってくるよう薦めたがルイスはいきなり前に述べたようなことを言い出した。一応分かったようなことを言ったが、もちろんサレオスにはルイスの意図が掴めないでいた。

「つまり、僕には杖は必要ないと思うんですよ」

「……」

「……」

ルイスの隣を歩いていたハクセンもルイスのこの言葉におもわず彼を凝視してしまった。

「ルイス君、たしかつい最近君は自分の弱さを学んだのでは……？」

サレオスには船旅でルイスが何を言わんとしていたのか分からなかったが、そんな感じの事を言っていたような感じはした。ハクセンもその通りだという顔をした。左にサレオス、右にハクセンと挟まれながらルイスは少し落胆の色を見せた。

「僕が言ったのはそういうことではありません。まったく、あなた達は僕のことを魔術師として弱いとも思っているんですか？」

呆れ気味に言うルイス、しかしそれに勝る呆れ顔のサレオスとハクセン。サレオスの隣にいたダイゴローだけが普通を保っていた。

「まあそうは言うもののやった試しがないですから少しばかり練習はしないといけません、さすがにこんな人の多いところでは出来ない。今日は僕は町の外で野宿をします。一晩もあればマスターできると思うので明日の朝西門に集合ということでもいいですか？」

そこまで一気にいうとルイスはサレオスの同意の言葉を待ち、それを確認してすぐハクセンと共に人ごみの中に消えていった。

「よし、ダイゴロー。まずは女性のいるところへ出かけるぞ」

サレオスは目を光らせて隣のダイゴローに語りかけすぐさま歩き出しました。

ナンパに付き合わされるであろうダイゴローはなんの抵抗もなく急ぎ足のサレオスの後を見失わない程度についていった。

サレオスとダイゴローが着いた先はなんと教会であった。ダイゴローが不思議そうにサレオスの顔を覗き見る。それに気付いたサレオスは、

「俺はシスターがタイプなのv」

満面の笑みでそう答えた。しかし中に入り適当な場所に腰をかける。とサレオスはちゃんと祈り始めた。それは瞬き程度の時間だったがダイゴローの目には今のサレオスがどうにも普段のものと結びつかなかった。しばらくするとサレオスは隣に座るダイゴローにだけ聞こえる声で話し始めた。

「ルイスと会ったの教会なんだ。たまたまなんだけどな」

「……」
「強盗殺人犯が入ってきていたらしいんだ、俺は気付かなかったけど。で、俺シスターの一人を見殺しにしちゃってさ」

「……」
「さすがにあの時は剣をちゃんと持ってれば、って思ったんだ」

「……」
「……でも、最近気付いたけど、あの時剣を持っていたとしても俺なんかじゃきつと助けられなかったんだろうなあって」

そう、あの時たとえ剣を持っていたとしても、けして強くない自分なんかには彼女は助けられなかった。そのことに気付いたのはつい最近。あのプライドの高いルイスが、何かは分からないが自分の弱さを認めたことがきっかけだった。サレオスは、結局自分も驕っている

ただと思いきらされた。そしてルイスのすごさも。彼が一体何を求めているのかサレオスには分からないが、彼が普通の、自分のよくなごくごく平凡な人間とは違うということを感じた。

ダイゴローはサレオスの話を静かに聞いていた。ダイゴローはハクセンのような古代獣とは違うがそうなるのは決して遠い未来ではないだろう。なぜならすでに人間の言語を理解しているのだ。しかし、ハクセンのように喋れたり、耐魔法の能力を持つことが出来るのはまだ少し先になりそうだ。古代獣とはそうそう簡単になれるものではないからである。

この日一日、結局サレオスはずっと教会にいた。別に祈るわけではないが、ぼーっと、ステンドガラスの鮮やかな光に包まれながらゆっくりとした時間を過ごした。

次の日、サレオスはルイスに遅いと起こられないよう早めに西門で待っていた。するとほどなくして泥まみれのルイスが姿を現し、それを見たサレオスはいふきだして笑ってしまった。結局ルイスにそれで怒られてしまったが、サレオスは可笑しくてたまらなかった。

「そんなに泥まみれの僕を見るのが楽しいですか……？」

軽く冷気を感じ取ったサレオスはすぐに笑いと閉じた。そしてなるべくルイスの方を見ないように喋りながら歩き出した。

「だってさあ、なんかすごい不似合いだからさ、お前のその格好。坊やは努力家なんだな」

うんうん、と一人で納得しているサレオスの背中に蹴りが入れられた。

「ぐっ！ル、ルイス君……？」

「知らないんですか？天才の99パーセントは発汗なんですよ」

さっさと歩き出したルイスに置いていかれない様にサレオスも歩き出した。

「でもさ、人間諦めが肝心な時もあるぜ？」

「僕は簡単に諦められるようなものなんて最初から望んでません」

「でもさ、いくらルイスでもあぁしてればよかったとか、っていうのはあるでしょ？」

「後悔する暇があったら前へ進みます……反省は必要ですけどね」

そう付け加えてハクセンに乗り一気にサレオスとの距離を伸ばしていった。やれやれ、とサレオスもダイゴローに乗ってルイスを見失わないよう追いかけた。

二人が今向かっているのは魔術大国イリユーマ。あと一ヶ月も陸路を進めば着くことができる道のりである。

魔術師にとって聖地とも言えるイリユーマには数多くの希少価値の高い魔術に関する代物がおいてある。代表的なものといえば

「禁断の書」

「超古代の杖」

そして「全の宝玉」

の三点である。これらはイリユーマが建国される前にすでに封印されており、未だに解かれることを知らない。そもそもイリユーマはこの三点があるからその場所に出来たようなものであった。

「よっし！準備万端！じゃあ行ってくるね、シュワルガ！」

エルランが傷の癒えたテテに乗ってシュワルガに大きく手を振った。

「は〜い、あんまり無茶はしないでね〜」

シュワルガは小ぶりに手を振り空高く飛び上がったテテの姿が見えなくなるまで見送った。そして小さな家に戻ると何やら身支度を整え始めた。家の中も綺麗に片付け、再び外に出ると左手に綺麗な細工のしてある手袋をはめて名前を呼んだ。

「オセ！」

眩しい光と共に豹の姿をした召喚獣が現れた。

「何か面白いことでもあったのか？」

いきなり豹は喋りだした。

「いや〜かなり不愉快なことだよ〜エルランをいじめたやつがいてさあ」

シュワルガの目は豹のそれよりも鋭い。そして先ほどまでエルランに向けていた笑顔とはまったく別物の怖い笑みを作っていた。

「船はこの大陸についてるはずだから片っ端から魔術師と剣術師のペアを殺していこっか」

笑みを崩さずシュワルガはそういった。オセと呼ばれた豹は愉快そうにのどを鳴らし、シュワルガをその背に乗せて疾風のごとく走り出した。

花の町

さほど大きくはないが、綺麗な花々がよく目に付く町にルイス達は到着した。宿は直ぐ見つかりルイスはハクセンを部屋に残し一人で町を見学することにした。サレオスはルイスより少し早めにダイゴローと宿を出ていた。

ちょうど良い間隔で家々は建っていて、たまにすれ違う人は気軽に挨拶をくれた。ルイスも自然と顔が緩む。しばらく歩いていると小さくてかわいい教会が見えた。そしてその少し先には小さな墓地があった。ルイスは教会ではなく墓地の方へと足を向けた。

お墓もちょうど良い間隔で並んでいた。墓地と言うには似つかわしくないほど色鮮やかな花々が咲いている。その中を歩いていくと、一番奥に一際目を引くお墓があった。実際に目を引くのはお墓を取り囲んでいる花達だ。種類も多く、綺麗に手入れがしてあるようだ。ルイスが足を止め、じっと見ていると後ろから声をかけられた。

「おやまあ。旅人さんかい？ 珍しくはないけど、ここに足を運ぶ旅人は珍しいねえ」

振り向くと優しい笑顔の、髪を綺麗におだんごにしているおばあさんが、手に銀色の如雨露シヨウロを持って立っていた。

ルイスは笑顔で軽く会釈をした。おばあさんはそれに答えてから、ルイスが先ほど見ていたお墓へ近づいていった。

「おばあさんの知り合いですか？」

「ああ、もちろん。この町のみんながこの子の知り合いだよ」

言いながらおばあさんは花に水をやり始めた。けして軽やかではない足取りで、それでも一生懸命なのが伝わってきた。

「どんな人だったんですか？」

「ん？この子かい？ふふ、この子はねえ、この町を蘇らせてくれた。私達にとつちや英雄みたいなものだよ」

「……ぜひ、聞かせてもらえますか？」

おばあさんは楽しそうに自宅へと招待してくれた。

墓地から近くはない所におばあさんの家があった。中へ入ると娘夫婦とその子どもがちょうど昼食をとっていた。

「あらあら、お客さん？今ご用意しますからこちらに座って待っていてください」

「わあ！お客さんだお客さんだ！」

「こら、お行儀よくしてなさい。じゃなきゃお母さんに怒られるぞ？」

「あ、そんな気にしないで下さい。こんな時間にお邪魔した僕が悪いんですし」

「何を言ってるんだい、食事は多い方がおいしいんだよ。さて、私は如雨露を片付けてくるかい」

この家の人は皆突然の訪問客であるルイスを快く受け入れた。子どもは旅人に会うのが初めてらしく、食事中ずっとソワソワしていた。ぎやかに談笑をして食事を終え、ルイスはせめて皿洗いの手伝いをしようと思っただが、そんな事させられないわ！と再びイスに座らされた。

「そんなに気を使わなくていいんだよ。それよりさっきの話の続きをしようか？」

「はい、お願いします」

「何の話だい？」

お父さんが台所からおぼんに乗ったデザートと飲み物を持ってきた。

「フランワードのことだよ」

「僕知ってるー！僕がお話してあげる！いいでしょ？ね？」

子どもが勢いよく挙手をして目を輝かせている。ルイスは思わず笑ってしまった。

「ちゃんとお話できるかい？」

「わかるよー！だってフランワードはこの町のえいゆうなんだから！」

「じゃあお願いしてもいいかな？」

うん！と満面の笑みで元気よく話し始めた。

昔々、この町には水がなく緑は枯れていて、とても生活できる場所ではありませんでした。それでも町の人達は長年住んできて愛着もあり、易々と退くことは出来ませんでした。しかし食べることが一層厳しくなり、一人、また一人と町を出て行きました。最後まで残っていた人達も、もうどこかへ引越さなければと思い始めました。生まれ育った町を捨てることはとても心が苦しいことでした。町長はそんな町の人達を見て町の小さな教会へ毎日通い、お祈りしました。

「どうかこの町をお救い下さい」

町長はもう年で、目が不自由でした。それでも毎日毎日教会へお祈りをしに行きました。するとある日、一人の青年が現れました。青年はこの町を見てとても驚きました。そして、毎日が苦しい生活の

町の人達にこう言いました。

「大丈夫です。皆さんの力があれば必ずこの町は蘇ります」

町の人達は青年に励まされ、町を蘇らせようと一生懸命働きました。青年は自然に関しての知識が豊富で、色々町の人達にアドバイスをし、自らもこの町のために働きました。

そして五年が経ち、町は生活のできる場所へと戻りました。町の人達は皆青年に感謝しました。そして町長が青年に、もう一つだけ、とある事をお願いしました。それはこの町をとて綺麗で色鮮やかな町にして欲しい、ということでした。

「わしはもう何も見えない。光すら感じる事が出来ない。もし町の人の誰かがわしと同じようになってしまったら、その時きつとわしのように色を忘れてしまうだろう。だから幼い時から様々な色に囲まれ、その時になっても忘れることがないようにしてあげたい」
青年は町長の言葉に心打たれ、それから三年間、一生懸命花に彩られた綺麗な町にしようとがんばりました。もちろん町の人達も一緒にがんばりました。その間に町長はなくなってしまいましたが、青年も町の人達も町長の言葉を忘れずに、一生懸命町を作り上げていきました。そして、もうこれ以上はないというぐらい色鮮やかな、今の町が出来ました。それと同時に青年は倒れてしまい、そのまま起きる事はありませんでした。

「よく覚えたな」

お父さんが子どもの頭を撫でてあげた。子どもは嬉しそうにしている。

「とても良いお話ですね」

「ああ、もうずっと前の話だけだね。代々語り継がれているんだよ」

おばあさんは楽しそうにそう答えた。
その後、少しばかりこの家族とまた談笑をしてルイスはお礼を言い家を出た。そして再びフランワードのお墓へ行った。

「受け売りだけど……」

「はい」

フエイの声だ。

「人は二度死ぬんだって。肉体が滅びた時と、みんなから忘れられた時」

「……」

自分はどうだろう、とルイスは考えた。忘れるも何も、きっと自分は誰にも知られていない。家族も、友も置いてきたのだから。そして自分はこれから、彼のように命を懸けて誰かに尽くすという事もしないだろう。今のルイスには彼の行動はとも理解できなかった。それでも、ルイスの心に虚しいものが張り付いて離れない。

自分は誰にも知られることなく一人で死んでしまうのだろうか？そう考えると足が震えてきた。今、目の前にいる決して二度死ぬことの無い人と向かい合っていると、否応なしに自分の存在の虚しさを感じさせられた。

そんな事を考えていると、ある事を思い出した。

「そう言えば、だいぶ前の話忘れてた」

ルイスは唐突に言い出した。

「フエイ達が僕ら人間に絶滅させられた、って」

「……………」

「どづいつ事？」

「前にも言いましたようにお話しする必要はないと思ひ……………」

「本当は僕の命を狙ってるとか？」

「そんなわけございません」

「でも憎いでしょ？」

「……………」

フエイはそれには答えなかった。ルイスはだんだんイライラしてきた。

「一体、何がしたいの？肉体がないから僕に乗り移って人間に復讐するとか？」

「いいえ」

「じゃあ何？」

怒気を含んだルイスの声。フエイからの返答はなく、草木の揺れる音だけがする。

ルイスは泣きたくなかった。寂しいとか、そんな生易しいものではなく……………こんなにも周りは色鮮やかなのに虚しくて、怖かった。

物心ついた時にはフエイが傍にいた。話しかけても反応がない事もあったが、フエイも出掛ける、ということをするらしい。幼い頃はおもしろいお化けと思っていたが、知恵をつけ始める年になってフエイの正体を聞かされた。それは肉体を持たない、数少ない神族という者であるということ。その時たしかに、数少ない、といったはず。しかしハクセンは、絶滅、という言葉を使った。

「どつちでもいいや」

「？」

「憎まれてたつていいからさ、僕のこと忘れないで」

「ルイス様……」

「知らなかった。一人って、こんなに苦しくて怖いものなんだね」
「……そうですね」

ルイスはその場で声の出ない涙を幾度も流した。忘れさられたくない、一人で死ぬのも怖い。けれど、ルイスにはどうすればそれが避けられるのか考え付かなかった。自分は自分のためにしか生きていないから。他人のために何をすれば良いかなんて、想像もつかないから。

美女

「ああもう！一体どこにいるのよあの魔術師は！！」

エルランはテテの背中であめいていた。もう一週間も大陸をテテに乗って探し回っているというのに全然見つからなかった。テテには少し疲労の色が見え始めている。

「テテ大丈夫？？ちよつと休もうか？」

テテは首を縦に振り、近くの湖へと降りていった。エルランを降ろすと首を少し伸ばし湖の水を飲み始めた。エルランは伸びている首を優しく撫でた。

「ごめんね、こんな無茶させちゃって。私をもっと強い召喚術師だったらテテだってこんな大変じゃないのに・・・」

それを聞くとテテは顔を上げエルランの頬に近づけ、甘えるようにのどを鳴らした。

「テテは優しいね。よし！落ち込んでなんていられない！テテが休んでる間私は修行するね！」

エルランは元気な笑顔をテテに送り、少し離れて召喚術の修行を始めた。テテはリラックスした体勢になって浅い眠りに落ちた。

「やばいって」

サレオスは真向かいに座る食事の中のルイスに話しかけた。花の町を
でて数日野宿をしてから今の宿につき、ようやくおいしい食事にあ
りつけているのでそれを邪魔するサレオスをルイスは無視した。

「いや、シカトは失礼だろ。」

もっていたフォークでツツコミを入れるもルイスは無視しつづけた。

「じゃあいーよ、俺の独り言ね。何か最近魔術師と剣術師のペア
の旅人が連続殺人されてるんだって。ここちよつと大きい街だから
情報が入りやすいんだ。」

ルイスは相変わらず興味を持たず食べ続けている。それでも負けじ
とサレオスは話を続ける。

「ソイツがどうも召喚術師みたいなんだよね。思っにあの女の子で
は？」

「ご馳走様でした。」

「っておい!!」

今度は立ち上がりツツコミを入れた。しかしルイスはサレオスを置
いてさっさと部屋へと戻っていき、行き場のないツツコミは周りの
人たちのクスクス笑いを生んでしまった。

ため息をつきながらうなだれるようにイスに座ったサレオスだが、
この事は本当に気になっていることであつた。それというのも魔術
師と剣術師のペアの旅人というのは一番多い組み合わせであつて、
もし本当にあの船で会つた女の子が犯人だとしたら自分達と会わな
い限り日を追うことに被害者は増えてしまう。

「俺達のせいで・・・」

サレオスの頭にあつたのはそれだった。

そんなこんなを考えているサレオスの前をきらびやかな光が横切った。何かと思ひ顔を上げると俗に言う美女という人が歩いていった。

腰まである柔らかいウエーブ髪にすらりと伸びた手足。その細く白い手には茶色のかばんを持っていた。サレオスだけではなくその場にいた男も女も皆一度は振り返って彼女を見た。

サレオスは口に含んだ食べ物を危うく落とすところだったが、すばやく食事を済ませ、彼女のあとを追った。もちろんナンパをしに。

「ありがとうございます！先生のおかげです！」

夕食どきの時間、ユフィールは患者の寝室にいた。ベッドに上半身を起こしているおじいちゃんと、その隣で頭をさげているおばあちゃん。

「いいえ。でもこれから二週間は薬を飲み続けてくださいね？」

優しく微笑み患者とその家族に薬を渡し、ユフィールはその家を去った。手には茶色のかばんを持っている。大きすぎず、小さすぎず。ユフィールはとっておいた宿へと星空の下を歩いていった。

一階の食堂はすでに満席。しかたなく部屋で食べようと思い、軋む階段を上ったところで男が声をかけてきた。

「ごくんばんは！お姉さん一人？」

ユフィールは強すぎないウエーブのかかった髪をなびかせる様に振り返った。そこには怪しくはないがどこかミステリアスな雰囲気を感じさせる男が笑顔で立っていた。

「ええ。そうだけど・・・？」

そう言うと男の笑顔に輝きが増した。

「俺サレオスつていいいます。お姉さんは？」

「ユフィールよ・・・。悪いけど私疲れてるから。」

ユフィールはサレオスに背を向けツカツカとその場を後にした。後ろから男の声がしたが一切無視した。どうせいつものナンパだろうと思ったからである。

部屋につくとかばんをベッドの傍にあつた小さなテーブルに置き、本人はすぐ横になった。夕食を食べねばと思いつつも、今日の仕事の疲れで体はベッドの上から動かない。ユフィールは着替えもしないでそのまま重い瞼を閉じたのであつた。

「何を読んでいるんだ？」

ハクセンがベッドで寝転がって本を読んでいるルイスに話しかけた。

「ん・・・よく分からないです。」

ハクセンがルイスの方へと近づいて見せてもらつと、そこにはイラストばかりが載っていた。

「ああ。たしかマンガとかいうものだな。ヒノモトという国が作り出した一種の娯楽本だ。」

「へえ〜そうなんですか。なかなか面白いですよ。明らかに猫ではないのに猫だと言い張る青い物体がでてくるんですが、何やらお腹

に意味深に存在するポケットから明らかに許容量を超えた代物を出してるんです。」

ルイスはマンガに目が釘付けになっている。その様子を見てハクセンは少し笑ってしまった。

「おぬしが娯楽ものに興味を持つとはな。なかなか見ものだ。」

「本屋に行ったら見慣れない物があつたので買ってみたんです。」
「そうか。」

ハクセンはその場に座って眠る体勢になった。が、ルイスに邪魔された。

「ハクセン、ヒノモトっていうのはどんな国なんですか？」

「うむ、たしか勤勉ということで諸外国に知られていたな。あと傲慢ということも。」

「へえ。どこにあるんです？」

ルイスはハクセンが眠いのをよそに質問を続ける。

「さあ、場所は覚えておらん。だが小さな島国だったな。」

「そんな隔離された国がこんな画期的な本を作り出したんですか？」

ルイスはベッドから身を乗り出し、下でおやすみモードのハクセンに詰め寄る。

「ん？そうだな・・・猫は画期的だな・・・」

ハクセンは適当に答えて眠ってしまった。一方意味不明な答えをされたルイスは、明日ハクセンにあれを聞こうこれも聞こうとルンル

ン気分でマンガを片手にいつの間にか眠ったのであった。

「おはようございます、ユフィールさんv」

ユフィールは自分の名前を呼んだ方を向くと、そこには見覚えのない男が立っていた。しかも笑顔で隣に腰掛けてきた。

「おはようございます。で、誰ですか？」

「ヒドツ！！昨日会ったじゃないですか！サレオスです！」

ユフィールは思い出すのも面倒だったのでとりあえず無視した。無視された本人はといえば、常日頃からルイスの冷たい態度のおかげでここで挫ける事はなかった。

「ユフィールさんも旅してるんですよ？一人じゃ危ないから護衛なんて雇ったらどうですか？今なら俺がタダでやってあげますよv」

「遠慮しておくわ。」

「だってそんな美人じゃ狙われちゃうでしょ？俺こう見えて結構強いんですよ」

「あなたという方が危険を感じるのだけど・・・？」

そんなことないです、と言おうと思った瞬間頭に衝撃が走った。

「ハクセン、マンガの新しい使い道を見つけました。」

「げっ！ルイスー！！」

振り向くと片手に朝食、片手に軽く血のついた本を持っているルイスが立っていた。隣にはハクセンとダイゴローも。

「つーか血!？」

「お姉さん、大丈夫ですか？変な事されませんでした？」

ルイスが眉をひそめ心配そうにユフィールに問いかけた。

「いいえ、ありがとう。坊やのおかげで免れたわ。」

にっこりとお礼をいうユフィール。ルイスは一安心してからサレオスを睨んだ。

「セクハラですよ？すぐ隣をどけて下さい。」

「あのな、これは大人の話なの。坊やが首をつっこむ事じゃ・・・ドガッ!!」

言い終わらぬうちにまた一発マンガ本攻撃を食らってしまったサレオス。

「あなたに坊やと呼ばれる筋合いはありません。」

「す、すいません・・・」

頭を両手で抱えながらサレオスは震える声で謝罪した。それを見ていたユフィールは口元に手をやり笑っていた。

「私もあなたの事坊や、って呼んじゃったけど、殴られる？」

「まさか。サレオスさんを血だるまにしてもお姉さんは純白のままですよ。」

ルイスお得意の優等生スマイルでそう答えるとどうやら気に入られたいらしく、一緒に朝食をとることになった。サレオスにしてみれば棚から牡丹餅である・・・が、

「ユフィールさんというんですか、かわいい名前ですね。」
「あら、かわいいって言われたのは初めてだね。でもおだてたって何も出ないわよ?」

二人のほほえましい会話に入れない（入れてもらえない）サレオスは涙味の朝食を味わっていた。

「ルイス君はもしかして魔術師かしら?」

「はい、そうです。」

「でも杖は?あ、お部屋?」

「いえ、僕は杖無の魔術師です。」

?マーク浮かべるユフィールに簡単に説明をすると、なにやら考えだした。

「どうしたんですか?」

「あ、えっと、今の話だとルイス君はすごく強い魔術師、ってことよね?」

「はい、見えないとは思いますがそれなりに。」

「・・・もしよかったら護衛を頼めないかしら?」

ルイスと、今まで蚊帳の外だったサレオスが思わずむせた。それぞれ違う意味で。

「もちろん!喜んで!な?ルイス?こんな美しい方の護衛だぞ?まさか断るなんて事しないよな?」

「サレオスさん・・・あなたって人は・・・。あの、ユフィールさん。恐縮なんですけどそれはちょっと・・・。」

それを聞いたサレオスが今まで見たこともない恐ろしい（ルイスにしてみれば面白い）顔で訴えてきた。

「理由を聞けるかしら？」

「えっと、僕は目的地が決まっています……」

「どこなの？」

「イ、イリユーマです。」

ルイスは嫌な予感がした。ユフィールの顔には笑顔がある。

「私もイリユーマへ行くわ」

「よっしっっ!!」

「ハア……」

ガッツポーズのサレオスに対し、ユフィールに気付かれないよう小さくため息をつくルイス。何やら畏にかかったようで自分が情けなくもなってきた。

「もちろん代金は支払うわよ？」

「いえ、どうせ通り道ですし……」

「そうそう！ユフィールさんは気にせず俺達に頼ってください！」

暗く重いルイスの声と明るく弾むサレオスの声。ユフィールはようやく安心できる護衛を見つけることができ満足げな顔だった。

衝突

二つの動かない人間の死体がゴツゴツした道の上に転がっていた。

「おい」

「何〜？」

鋭い牙を持つ口の周りに赤い血をつけている豹が、木にもたれている長身で細身の男に話しかけた。

「いい加減飽きた。こんな弱い魔術師と剣術師ばかりを殺しても逆にストレスが溜まる一方だ。」

「そういわずにさ〜」

「だいたい、こいつらがエルランに手を出したかどうか聞く前に殺したらあまり意味をなさないんじゃないか？」

「・・・ああ!？」

それまでユルイ笑顔だった男が周りによく響く声でようやく大事なことに気付いたのだった。

「ユフィールさん、どうぞ俺のタイスの方に乗ってくださいv」

「遠慮しておくわ。」

川沿いにルイス一行は徒歩で移動していた。後ろでの二人のやり取りを気を重くしてルイスは聞いていた。ユフィールは普段徒歩での移動をしているのでゆっくり行きたいと言いだしたのだ。ルイスにしてみればいい迷惑である。だがそれを一切顔に出さない。それどころか、話しかけられれば笑顔で答えるので何も知らないユフィール

ルの中でルイスの株は上がる一方だ。サレオスはしつこくユフィールに話しかけるので若干ウザがられている。

「ユフィールさんのその茶色のかばんって何が入ってるんですか？」

「医療セツトよ。」

「女医さん！？カツコイイイ！！」

そう言われたユフィールは浮かない顔をした。

「別に、かつこいい事なんてないわよ・・・。」

「何ですか？！病を治したり命を助けたり、すぐくえらいことだと思えますよ？」

「直せないものだってあるわ。救えなかった命だって数えたらきりが無い。」

そう言われるとサレオスは言葉に詰まってしまった。困りましたという顔で真剣に悩み始めてしまった。

「ふふ、あなたが気にすることじゃないわ。」

医師か、と、ルイスはアカデミーの頃を思い出した。色白で髪を後ろに一つでまとめていたテムイである。彼もまた医術の道を歩んでいた。今頃研究していた薬品を学会で発表して世間をあっと言わせているのだろうか。そう考えると今ここでのんびりほのぼのと歩いている自分が情けなく思えてきた。

「ユフィールさん、テムイ、っていう医師を目指してる僕と同年の子がいるんですけど知ってますか？」

後ろを振り返ってユフィールに聞いてみた。

「テムイ？うん、聞いたことあるわね。誰？」
「オーヴァルガン国立アカデミーの生徒なんですけど、学会とかで色々発表もしてるんです。」

ユフィールは少し悩みながら、ああ！と手を打った。

「たしかつい最近新薬の合成法を発表した色白のあの子ね！」
「有名人なんですか??」

サレオスが悩むのをやめて話に混ざってきた。

「ええ、それなりにね。新聞にも載ってたわ。」
「へえ〜。若いのに感心ですね。」

そうね、と笑いながら答えるユフィールにサレオスは鼻の下が伸びるのであった。

そんなサレオスを見てやれやれ、と思いルイスは前方に目をやると、何かがものすごい勢いで向かってくる。それは見る見るうちに大きくなり何かに人が乗っていることが分かる。

ザザザッ！！！！

それはちょうどルイスの目の前で止まった。近すぎてよくと分からなかったがどうやら豹のようだ。

「あ、どうもすいません。お怪我ないですか?」

気の抜けた声が豹のほうから発せられた。よく見ると人が乗っている。

「いえ、大丈夫です。」

「すっげー豹だ！カツコイイ！！」

サレオスは目を輝かせながら豹の顔をじっくりと観察している。

「やめて下さい。恥ずかしい。」

ルイスは手で顔を覆いたため息をついた。でもたしかに豹というのは珍しい、と思った。しかもよく見ればしっぽが三つある。

「俺の召喚獣なんですよ……。っていつかあなた達は魔術師と剣術師？」

「そうですね……」

ルイスは豹に張り付いているサレオスを離しながら答えた。

「へえ、でも女性連れですか。じゃあお氣をつけて。」

「はい、あなたもお氣をつけて。」

名残惜しそうにしているサレオスと笑顔で手を振り合っているルイスと豹の上に乗った人。豹の姿が見えなくなるころにユフィールははた、と氣付いた。

「そういえば魔術師と剣術師のペアの連続殺人があったわね。」

しばしの間。

「あああああ……！！！！！！」

いきなり大声を出すサレオス。ルイス達は耳に手を当てた。

「一体なんですか？」

「あいつ犯人だって！多分！！」

「そんな自信满满で多分と言われても。」

ルイスののん気な答えにサレオスはじれったそうにしている。

「まさか追いかけるつもりですか？」

ルイスは嫌そうな顔で聞くとサレオスは激しく首を縦に振った。

「ハア……。いいですか、もし犯人じゃなかったら無駄足です。仮に犯人だとしても僕達には関係ないじゃないですか。時間の無駄です。」

「ルイス！！」

サレオスがルイスの腕を掴むとすぐに振りほどかれた。双方にらみ合っていてユフィールはどうしたものかと固まってしまっている。

「犯人じゃなかったらそれでいい。けどもし犯人だったら？これ以上被害者は増えてほしくないだろ？」

「関係ないです。」

冷たい目と言葉でルイスは返した。サレオスは一瞬怒った顔をしたがすぐに悲しそうな顔をした。

「わかった。じゃあ俺一人で追いかけるよ。ユフィールさんをちゃんと護衛しろよ？」

そう言うなりサレオスはダイゴローに乗り走り去った。

「・・・で、どうするの?」

ユフィールはルイスに聞いた。正直、ユフィールは今のルイスが今朝から知っているあの優しいルイスには思えなかった。まさかあんなことを言うなんて、と。ルイスはユフィールの質問には答えずきびすを返した。

「だーかーらー俺は西に行きたいんだよ!」

「いやです。」

「なんでだよ!?!イリユーマにも寄っていけるからいいって言ったのお前だろ!?!」

言い合いをしている魔術師と剣術師。そこに一瞬にして豹とそれに乗った細身の男が現れた。

「なんだよお前!?!」

剣術師は若干警戒をした。男は不敵な笑みを浮かべている。

「君達はエルランって知ってる?」

「は?」

「エメラルド色の髪で目がくりくりしてて、すっごくかわいい召喚術師なんだけど、知ってる?」

男の質問に二人は顔を見合わせる。

「いいや、知らないけど。」

剣術師のほう answered。すると男はため息をついて豹から降りた。

「なんかどつちにしろ不愉快だから殺っちゃって〜」

「ったくめんどくせーな。」

それでも豹は舌をペロリと出しこれから始まる事であろう惨事を楽しそうに想像する。

二人もこれから起こるであろう事を知り、とつさに身構えた。

「ちよー！ー！ー！と待てええええ！！！！！！」

「ん〜？」

男が今来たほうを向くと、先程オセに輝きの目を向けていた男が赤いタイスに乗って猛スピードでこちらへ向かってくる。

「とおお！！！！」

ちょうどオセと剣術師達の間割ってはいる形になった。サレオスは一呼吸置いて、

「一応聞くが、お前らが魔術師と剣術師を殺し歩いてる犯人か？」

そう聞きながらダイゴローから降りた。

「ああ〜まあそうかな？ちよつと用があつてね〜」

「なんでそんな事してんだ？」

サレオスは直ぐ剣を抜けるような体勢をとった。笑顔の男は動かない。その代わり豹がサレオスに睨みをきかせている。

「エルランっていう召喚術師がいるんだけど、その子の事いじめたやつがいてね〜ムカついたからとりあえず手当たりしだい殺ってるんだ〜。」

なるほど。この男はあの船で会った少女の事を言っているのだろう。

「船の上での話だな？」

男はピクリ、と反応した。

「そうか、お前達だったか」

サレオスの背中に悪寒が走った。笑顔を崩さず、けれど男から発せられる殺気は尋常とは思えない。

「俺はシュワルガ。お前は？」

「・・・サレオスだ。」

「ふ〜ん。で、さっきの坊やが連れだよな？」

一歩、シュワルガと名乗った男はサレオスに近づいた。サレオスは一歩、後ろに下がる。

「・・・いいや。」

「？」

ここでルイスのことを言ったら彼に被害が及ぶ。そう考えサレオスは知らぬふりを決め込んだ。

「悪いけどあの女の子と戦ったのは俺一人。連れだった魔術師はた

だ見てただけで、しかも違う大陸に渡ったよ。」

「へえ〜。・・・どう思う、オセ？」

「お前よりは出来た人格だな。」

ククツ、とどの奥で笑う。しかしシュワルガは顔は笑っていても目が笑っていない。

サレオスは後ろにいる二人に逃げるよう言った。二人もシュワルガの異常さを感じ取っていて震える足取りでその場から立ち去った。

「で、俺が殺っているのか？」

オセはシュワルガに聞いた。

「うん、とり合えず片腕ぐらいは食べていいよ〜」
キーン！！

シュワルガがオーケーを出すなりオセはその鋭い牙でサレオスに飛び掛った。

「くっつ」

ドガツツ！！

サレオスはオセに蹴りを食らわせ距離をとった。しかしすぐさま鋭い爪が飛んできた。

ガツ！！

「このっつ！！」

「・・・」

その様子を見ていたシュワルガはだんだん腹立たしくなってきた。

なぜこんなヤツにこんな時間をとられているのか。こんな三下に。しかもこれが終わったらあの魔術師も殺らなければならぬのに。苛立ちの中、宙に赤い鮮血が飛んだ。

「ツツツ!!?」

「不味いな。」

オセは舌で口の周りについた血を舐めて言った。サレオスは左腕から大量の血を流しその場に倒れこんだ。

衝突（後書き）

ご意見、ご感想頂けたら嬉しいです）・（

結局

出血を止めようと左腕に右手を当てたが予想以上に傷口は深く止まる気配はない。オセがその左腕をもぎ取るうとサレオスに近づこうとした時、ドンッ！と何かがぶつかってきた。

「ダイゴロー……」

ダイゴローはすぐにサレオスの傍へ行きオセを睨んだ。

「いいなあ、俺もあんな従順なのが欲しかったよ。」

へらへら笑いながらシュワルガはオセに嫌味っぽく言った。オセはシュワルガを一瞥しただけで、すぐにダイゴローに襲い掛かった。サレオスが最後に見たのは傷だらけで、なおも自分の前に立ちはだかるダイゴローだった。

「……ん……う……」

「!?!サレオス?大丈夫?私よ、分かる?」

聞き覚えのある声。目を開けるとユフィールが眉を寄せ心配そうな顔をしてこちらを見ていた。

「ユ、フィールさん……?」

サレオスの声を聞くとほっとした様だ。

周りを見渡すとどうやらまたあの宿のようだ。窓からは橙色の光が入っている。どうやら助かったらしい、という事実だけがサレオス

には分かった。

「！ダイゴローは!?!」

勢いあまって上半身を起こしたが、左腕に激痛が走り顔をゆがめた。

「あの子なら大丈夫、今動物専門の医師のところへルイス君達と行っているから。」

「よかった・・・」

「安心してサレオスはベッドにまた横になった。するとユフィールはくすつ、と笑った。

「まったく、自分の心配もなしに。」

「俺は殺されても死なないような人間だから大丈夫ですよ!」

サレオスは元気よくそう答えた。

「誰が手当てしてあげたと思ってるの?しばらくは安静にしていなさいよ。」

「はあ〜いv」

その様子をみて少し離れても大丈夫だろう、と判断したユフィールはダイゴローの所へ行こうと腰を上げた。が、ちょうどルイスが部屋へと入ってきた。

「あ」

「・・・」

サレオスとルイスの間に重苦しい雰囲気が出る。ユフィールは場

を和ませようと、笑顔でサレオスが命に別状はない事を伝えるが、ルイスは冷たい笑顔でそうですか、と答えただけだった。

「ルイス、ユフィールさんがお前の笑顔におびえてるだろ」

「それが命の恩人に対する言葉ですか？」

はっ、と思いサレオスは苦笑いを作った。やはりルイスが助けくれたのか、と嬉しい反面悔しい気持ちだった。

「と言いたいところは山々なんですがね・・・」

「え？」

ルイスに続きを求めるが反応がないのでユフィールに目を移した。

「何て言ったらいいのかしら、まあ助けたのは女の子なの。多分。」
「？」

話はこうだ。

サレオスと別れたルイスは、どうしたものかとうろたえているユフィールを無視して先へと進もうとした。その時、あの少女が空から降ってきた。

「やあつと見つけた！！あの時の屈辱、今晴らしてくれるー！！」

少女が叫ぶと同時にルイスは防御術を発動させた。しかも電気を含ませるといっておまけつき。ビビビッ、と予想通りの展開にルイスは思わずぶっ、と笑ってしまった。

「ぬうう、おのれえ〜」

「・・・そう言えばあなたのお友達がこの先を行了きましたよ。」

と言い、ルイスは今来た道の方を指差した。
ルイスのこの行動にユフィールは考えがまわらない。

「誰よ？」

「豹にのった長身で細身の男性です。多分あなたのお友達だと思います。で、あなたの敵であるもう一人、剣術師の方と戦う可能性があります。しかも剣術師は弱いですから簡単にやられてしまうと思います。」

につこり笑いながらルイスは簡単に解りやすく説明をした。

「シュワルガ！？まさか私の手柄（？）を横取りする気?!?!」

少女はテテと呼んでいた龍に乗り一目散にルイスの指差した方へと飛んでいった。

ユフィールは目を点にしている。この状況を一体どう整理すればいいのか。ルイスを見るとハクセンに乗りユフィールに手を差し出した。

「彼から治療費をふんだくりに行きましょうか？」

「着いた時には全身傷だらけのダイゴローとあなたが横たわっていたのよ。」

「なるほど。でもなんで俺は見逃されたんだ・・・？」

答えを求めるようにルイスに目を移す。ルイスは面倒くさそうに、

「弱っているあなたを倒したところで彼女の性格では納得しないで

しょう。」

なるほど、と内心納得したがサレオスは重要なことに気がついた。つまり、もしその時少女がルイスと会わなかったら確実に自分はルイスに見殺しにされていた、と。想像するだけで全身から血の気がうせた。

「じゃあ僕は疲れたのでもう寝ます。」

まだ日が落ちていないのにルイスはそう言っただけで部屋を出て行った。引きつった顔のサレオスを見てユフィールは少し話を付け加えた。

「着いたら直ぐに回復術をあなたとダイゴローに使ったのよ。あれは普通の魔術とは違ってかなり体力も魔力も必要とするの。それにかんりの知識がないと無理ね。あの時の必死なルイス君、かっこよかったわ。」

その後のしつかりした治療は私が出たんだからね、とそれだけ話すとユフィールも部屋を出て行った。残されたサレオスは心中複雑な気持ちであった。しかし、助けてくれたことに変わりはなく、喜色を浮かべるサレオスだった。

「はあ・・・ホントサレオスって疲れる・・・」

ルイスはベッドに体を放り出した。

「ですが、助かって本当によかったですね。」

フェイの弾む声が聞こえてきた。ハクセンはダイゴローの所にいる

のでフェイも話しやすい。別にハクセンが嫌いという事ではないが、痛い質問をされても困るだけで、何となく話すのは億劫だった。

「……でも、あの時あの子が来なかったら僕は……」

見殺しにしていた。確実に。

「ルイス様……?」

「なんか、結局僕ってあんまり変わってないのかな……」

サレオスに会い、ハクセンに会い、自分としてはなかなか成長したと思っていた。しかし相手の力量がすぐ分かったルイスは見事サレオスを助けず、自身の保身を考えた。

「あんなに必死に誰かを助けようとしたルイス様を見たのは初めてです。お変わりになられていますよ。」

「ていうか、今まであんな経験なかったし……誰かが目の前で死にそうになってるなんて。」

「そうかもしれませんが、他者のために必死になったのは事実です。」

「うん、と唸りながらルイスはたしかに、と思った。あんなに焦って、しかも力を使ったのは今までのルイスの記憶にはない。自分のためならいくらでも思い出せるが。不思議な感覚に包まれながらルイスは疲れた体を休めたのだった。

「もう！絶つつつ対こんな勝手なことしないでよね!!!あの二人は私が殺すんだから!!!」

「はい、はい。ごめんねえ?」

「ちゃんと反省してるの!？」

テテの上で温度差のあるエルランとシュワルガは帰路を飛んでいた。間一髪のところサレオスがオセに殺されそうだったところをエルランが止めに入り、散々シュワルガを怒鳴りつけサレオス達を置いてきたところだった。シュワルガとしては不本意な結果になってしまったが、かわいいエルランの命令でしかたなく一時退散という形をとった。

「っ!ちよ、何するの!？」

シュワルガが突然後ろから包み込むように抱きしめてきた。エルランは少し頬を赤く染めた。

「別ににも〜。それより何で俺があそこにいるってわかったの?」「ああ、うんとね、シュワルガに会う前に魔術師の方に会って教えてくれたの!」

へえ、とシュワルガは乾いた声で答えた。どうやらエルランはうまく利用されたらしい。

「で、変なことされなかった?」

「?うん。あ!でも電気ビリビリされた!」

ピキッ、という音がしたのはシュワルガのほうからだった。エルランが後ろを振り向くといつもユルイ笑顔があった。

「どうかした?」

「ううん。それより急いで帰るよ!それで修行つけてね!」

はいはい、とシュワルガは流したが心の中はまだ名も知れぬ魔術師に対する殺意でいっぱいだった。しかし自分とエルランが繋がっているであろうことを見抜いたということはかなり切れる。それに、自分より弱いにしてもそんなじょそこの召喚術師よりは強いエルランが手も足も出ない、ということも頭に入れておかなければならない事だった。

馬車の中

召喚術師との衝突から丸々二週間がすぎ、ようやくルイス達はイリユーマへと出発した。それでもダイゴローの傷は深いので、隣町まで行く馬車に便乗させてもらっていた。

「シュワルガとエルランですか。」

「ああ。多分あの二人は・・・恋仲だな。」

人差し指を立ててズバリ言うサレオス。

「あら、そうなの？」

「ええ、俺はこういう事には詳しいので。あ！ちなみにユフィールさんのタイプはどんな男性ですか？？」

ユフィールに詰め寄るサレオスにルイスの痛い視線が突き刺さった。

「そんな睨まなくても・・・」

「別にそんなつもりはありませんが、ユフィールさんが嫌がっているのです。」

そう言われサレオスはおおずとユフィールから離れた。しかしその後何かとユフィールにちょっとしたかきを出す。なんて女好きなんだとルイスは思ったがユフィールの表情は初めにあった時よりは少し柔らかくなっているように見えた。

「・・・何ボーっとしてるんだよ？」

「え？？」

ルイスはいつの間にか、自然に仲良くお喋りしている二人を眺めていた。

「はっはあゝん、俺がユフィールさんとラブラブなのに嫉妬してるんだろ？」

どこか勝ち誇ったような笑みでルイスを見下すように聞いてきた。そんなサレオスの子どもっぽい行動にユフィールはくすくすと笑い、ルイスはため息をついた。

「どうぞご勝手に。ダイゴローも大変ですね、こんなのが主人だなんて。」

哀れみの目をサレオスの隣に横たわっていたダイゴローに向けると、ユフィールとハクセンが噴き出して笑った。言われた当人は軽くのを鳴らすだけだった。

「何言つてんだよ！俺みたいな人情あふれる好青年は他にいない！だいたい、こおんな冷血なご主人様をもってるハクセンのほうが可能だ！」

「そうだな。だがこれでも中々楽しんでる。」

笑いながらハクセンは答えてサレオスはルイスに自慢げな顔をされ、見事にカウンターをくらった。と、ここでユフィールが目を見開いてハクセンを見ているのにサレオスは気付いた。

「どうしました？」

「あ、えと、ハクセンは言葉が喋れるの？」

サレオスはああ、と簡単にハクセンについて説明をした。

「そういえば、あなた達の事も私にも知らないわ。」

「おお！ユフィールさん！！ついに俺に興味を持ってくれましたか！?!」

「サレオスさん、静かにしてください。」

サレオスの歓喜の声に、うるさいといった様な顔を作るルイス。しかしそんなルイスを無視してサレオスは自身について語り始めた。

「年は二十六、独身、ただいま目の前にいるユフィールさんに恋心を抱いています！」

「そ、そう。」

「綺麗な女性を見ればあなたはいつでも恋心を抱くでしょう。」

「黙れルイス。俺の必死の告白を邪魔するな。」

サレオスとルイスの間に軽く火花が散るがユフィールによってそれは解かれた。

「まあ、ルイス君私の事綺麗だと思ってくれてたの?!嬉しいわv」

そう言つて満面の笑みをユフィールはルイスに送った。

「当たり前じゃないですか。ユフィールさんは僕が今まで見てきた女性の中で一番綺麗ですよ?」

ルイスも満面の笑みで、それも本当に優しい作り物ではない穏やかな顔で答えた。二人の空間はまさに花が舞っていたがその隣にはどす黒いオーラを放つサレオスがいた。

「待て待て待てえい!!!ルイス、お前はなにか?俺の恋路を邪魔

するのか？え？」

「まさか。あなたがどこで何をしようが僕は興味ありません。」

「いや、それはあまりに寂しいよ。」

虚しくツツコむサレオス。なぜ自分はこうもルイスに冷たい仕打ちを食らうのか、そのことが最近のサレオスの憂いであった。そんな悲しみにくれているサレオスを気遣ってユフィールはサレオスに質問をした。

「サレオス、どうして剣術師をやっているの？」

サレオスはユフィールが自分に声をかけてくれたのが嬉しくなり直ぐに顔を上げ、先程の沈んだ気持ちもどこかへ行ってしまった。

「親父が剣術師で、俺の国の近衛師団だったんです！だから大きくなったら親父みたいに大事な人を守る剣術師になるのが小さい頃からのユメで！」

サレオスは子どもがはしゃいでいる様に話し始めた。ユフィールもそんなサレオスを見てなんとなく和む。しかし、ルイスだけは無反応でいた。話が盛り上がっている二人は気付かなかったが、ルイスの隣にいたハクセンは温度差のあることに気付いく。しかし、それだけで特に何も言わなかった。

「ルイス、そういやお前は何で魔術師になったんだ？」

突然話を振られ、ルイスは何のことかと思った。

「俺みたいに親に憧れて？」

「まさか、冗談でもやめて下さい。ただ単に僕が魔術師になりたか

「つたからです。」

「だ〜から！何でかって聞いてんだよ！」

「なんで？とルイスは考え込んだ。本当のことを言えばあまりの欲深さに二人は引くだろう。まあそんなことはどうでもいいが、これから先長くなくとも一緒にいるわけだからここは適当に当たり障りのない事を言っておこうとルイスは決めた。」

「ああ・・・あ！そうそう、魔術師に助けられたことがあってカツコイイなと思ったからです。」

「あからさまに取って付けた様な理由だがユフィールもサレオスも頷いた。」

「お前にしては真つ当な理由だな。」

「どつという意味ですか・・・？」

「サレオスは信じられませんかといった顔だ。まあそれもそのはず、そんな事実はないのだから。ルイスはこれ以上突っ込まれるのが面倒なのでユフィールにバトンを渡した。」

「ユフィールさんは何で医術師なんですか？」

「え？え〜と、私は・・・八つ当たりみたいなものかしら。」

「八つ当たり？」

「サレオスもルイスもキョトンとした顔をしてユフィールをみた。なぜなら八つ当たりなんて言葉はユフィールには到底似合わないからだ。」

「ええ。まあ、二十五年も生きてれば色々あるわよ。」

誤魔化す様に笑ったので二人もそれ以上は聞かなかった。そうこうしている内に日は暮れ、目の前には町が見えてきた。

イリユーマ着

「姫！！姫ええ！！！！」

広く、綺麗な装飾が施されている宮中に若くはない男の声が鳴り響く。彼は魔術大国イリユーマの第十五代国王デューマの娘、マナの教育係兼世話係のスタンである。いつものごとく勉強時間に姿を見せないマナ姫を急ぎ足でこの広い宮中を探し回っている。

「まったく、一体何を考えているのか・・・」

速かった足取りも次第に速度を落としていった。その頃、噂の人は宮中ではなく、城下町で子どもと戯れていた。

「マルン姉！！今度はみんなで鬼ごっこしよう！！」

「しようしよう！！」

「よーし！じゃあじゃんけんで鬼決めよー！」

明るい声が子どもの声に混ざって響いている。特に治安の悪くないイリユーマだが念のため名を偽ってちよくちよく城を抜け出しているマナ姫は十人以上の子どもと広い公園で泥まみれになって遊んでいた。

日も暮れ始め、マナ姫は一人ずつきちんと家に送ってやり城へと戻った。

「姫？！またこんな格好を・・・」

廊下でばったりスタンと会ってしまったマナ姫は、ばつの悪い顔をして逃げようとしたがそれはあっさり阻止された。

「お待ちなさい。そんな格好で中をうろつろつては掃除が大変です。今女中を呼んできます。」

しかたなくマナ姫はその場で待つことにした。すると城の護衛兵達があつてきた。

「マナ姫！？またですか？」

「スダンさんも大変ですね。」

少し楽しそうにマナ姫に声をかけてきた。

「うう。そんなこと言われたって、外はすごく楽しいのよ？」

あまり皆に心配させないでください、と言って兵達は仕事に戻った。それと入れ違いで女中が手にタオルを持って急いでやってきた。

風呂にも入りすっきりして自分の部屋でくつろいでいる時にコンコン、とドアがなった。

「どうぞ」

「失礼します。」

やはり、とドアから入ってきたスダンを見つめた。その表情は特に怒っているわけではない。

「今日はどちらに？」

「孤児院の子ども達と遊んでいたのよ。みんな元気が良くていい子達ばかりだったわ！」

かけっこをしていたら転んでしまった事や、みんなでかくれんぼを

したことなど終始笑顔で楽しそうにマナ姫は話した。一息ついたところで今度はスダンが話し始めた。

「姫、あなたがイリユーマ国王の娘であることを忘れて下さい。何かあつてからでは遅いのです。あなたは、あなただけのものではないのですから。」

酷な事を言っている、とスダンは思った。マナ姫はまだ十五歳。普通の女の子ならば年の近い子と遊んでいても何も言われないだろう。だがマナ姫がそうであつてはいけない。一国の姫という立場、決して自ら望んでそうなつた訳でもないのに様々なものに縛られ、監視されていなければならない。

「わかっています。スダン、あなたは心配しすぎよ。」

マナ姫はスダンの言わんとしている事を察して、優しく答えた。

「そういえば明後日はパーティーだったわね。お兄様も出席するのかしら?」

「はい、婚約者であるティーナ様も一緒にです。」

それを聞くとマナ姫の顔が喜びのものになった。

「まったく、お兄様ったら皆に見せ付けたいのじゃないか?」

嬉しそうに笑うマナ姫を見て、スダンの顔も綻んだ。

「本当……本当に本気ですか??」

イリユーマのとある街の一角でサレオスは涙を浮かべながら、ひしとユフィールの手を握り締めていた。

「ええ。最初からここまでの護衛ということだったし。」

ユフィールも少し名残惜しそうにしている。

「あなたがユフィールさんに付いて行っても僕はかまいませんが？
一人のほうが楽ですし。」

哀愁漂うサレオスにルイスの冷たい言葉がいつものように刺さる。

「そういうわけにはいかないんだよ。大人の事情つてもんだ……」

そのままサレオス達とユフィールは別れた。その後も暗く尾を引くサレオスにルイスはイライラする。

「だから、そんなにユフィールさんと一緒にいいなら付いて行けばいいじゃないですか？」

「だ〜から、大人の事情だよ。ていうかルイスはよくユフィールさんを一人で行かせられるよな〜。つたく男の風上にもおけないな。」

「余計なお世話です。だいたい何が大人の事情なんですか？」

ルイスは問いたただすがサレオスは何も答えなかった。ルイスは国立図書館へ行くと言いサレオスを置いてハクセンと去っていった。

「……お前が聞いたら、どんな顔するんだろうな。」

複雑な顔をしてサレオスはポツリと呟いた。そして隣にいたダイゴローと向かい合わせになるようにしゃがみ込み、

「っていうか俺ユフィールさんに本気だったんだけどなあ。いつもならナンパしに街歩くけどそんな元気でてこないし・・・俺はどうしたらいいんだ？ダイゴロー・・・」

また涙を浮かべてダイゴローに抱きついた。周りの痛い視線も気にしないで。と、泣き止んですっきりしたサレオスは何か思い立ったようにスツと立ち上がった。

「ユフィールさんに会いに行こう」

「（二、三・・・七、ぐらいかな・・・）」

ルイスは国立図書館に展示してある「禁断の書」をまじまじと見ていた。普通に展示してあるので見物客の人達がひっきりなしに出入りしている。

ルイスが数えたのは「禁断の書」に施されている封印術の数である。七つもあるのだから尋常ではない。ため息をつきルイスは取り合えず今日は図書館を軽く見てまわることにした。さすが魔術大国の図書館だけあって広さが半端ではない。図書館といっても本だけが置いてあるのではなく、二つに分かれている。一つは「禁断の書」それと「超古代の杖」のような歴史的に価値の高いものを貯蔵している施設、もう一つは本や文献、資料を貯蔵している施設である。「全の宝玉」は王宮に封印しており、王宮でもその場所は一般に公開している。

ルイスが図書館で楽しんでいる頃、サレオスはユフィールを探していた。

「たしかこの辺りの病院で手伝うとか・・・」

辺りを見渡すと小さな、少し古ぼけた建物を見つけた。一応看板には病院の文字がある。

サレオスはユフィールの仕事の邪魔になつてはいけないと思い、外で待つことにした。見ていると見た目の割には結構患者さんがいる事に気付く。

太陽が少し傾いた頃、サレオスが待っていた意中の人が出てきた。

一瞬舞い上がつてすぐ駆け寄ろうとしたが、その足は止まった。ユフィールは男と出てきたのだ。すばやく身を隠したサレオスだがかなり動揺していた。

「ダ、ダイゴロー。こういつ時つてどうすべきだと思う？」

答えが返ってくるはずはないが聞かずにはいられなかった。それもよく見ると男はかなり顔立ちが整っていてユフィールと歩いていると、まさに美男美女カップルのように見えた。ユフィールの顔はサレオスに見せたことがないくらいリラックスした、楽しそうな笑顔だった。これにはさすがのサレオスもへこみ、二人の姿が見えなくなつてもその場から動けなかった。

夕暮れ時、なんとか全てを見て回れたルイスは大満足で図書館をでようとし、入り口にサレオスとダイゴローを見つけた。もう宿はと

パーティー・M

「……というわけなんだ」

『そうか…また明日連絡をくれるか?』

「わかった。いつごろ?」

『そうだなあ…夕方には』

「了解。じゃあまた」

ガシャン

サレオスは宿のフロントにある電話の受話器を置いた。その顔はどこか寂しげだった。

つい先程、ルイスがイリユーマに落ち着くということを知られた。だがまあルイスは最初からここを目的に故郷を離れたのだからしょうがないが、あまりに突然言い渡されたのでサレオスとしては少し困惑を覚えた。またいつあの召喚術師に狙われるかもわからないのに、と。そのことを本人に言ったら、

「他人の心配より自分の心配をしてください」

と言われ、返す言葉がなかった。

とにかくサレオスとしては明日、電話の相手の答えを待つしかなく、トボトボと寝室へと戻っていった。

次の日、サレオスがどうしても言うのでルイスと一緒にイリユーマを観光した。やはり魔術大国、そこかしこに魔術に関する店が軒を連ねている。

「にしても今日は人が多いな」

「何かあるんでしょうか・・・?」

人ごみに揉まれながら進んでいくと大きな広場にでた。

「どうやら宴があるらしいな」

ハクセンが答えた。言われてみるとそんな感じだ。しかしこんな昼間から、と思っているところに酔っ払いのグループがぶつかってきた。

「す、すみません！」

ルイスはとりあえず無駄な争いを避けるためすばやく謝った。男達はひと睨みしたがすぐに笑顔になった。

「ダハハ！これくらい気にすんな！！！」

「そうだそうだが今日は城でパーティー！！ここも盛り上がるってもんだ！！！」

「は、はあ……………」

酔っ払いグループは笑いながら去っていった。

「なるほど、お城でパーティーしてるのかあ。」

周りのテンションにまだついていけない二人の前に見覚えのある女性が現れた。

「ルイス君！それにサレオスも！！」

「ユフィールさん！！」

いつもより綺麗な服を着こなしているユフィールだった。腰まであ

る髪を上に入れていて、どこか色香を漂わせている。

「ユフィールさんですか」

「ええ。私は王宮に招待されてるのよ、よかつたら二人もどう？」

それを聞き、ルイスの顔は気色に染まる。魔術大国であるイリユーマの王宮に足を踏み入れるなんてことは滅多にない。ルイスは二つ返事で承諾し、サレオスにも聞くと、

「え？ああ、うん」

と齒切れの悪い返事が返ってきた。ルイスとユフィールは訝しく思ったが、すぐにいつものサレオスに戻り、程なくして王宮へと足を運んだ。

王宮は朝から大忙しであった。昼は一般の来客をもてなし、夜は王族関係や貴族をもてなさなければと廊下をパタパタ走る音が途絶えない。そんな中、宮中に穏やかな時間が流れる一室がある。

「父上、今日はあまり飲みすぎないてくださいよ」

「何を言うか！わしはまだまだ若い奴らには負けん！」

「お父様ったら、そう言っつてこの前の食事の席で眠ってしまったのは誰でしたか？」

「うう・・・」

「ふふ。マナ、あまり国王陛下をいじめてはいけませんよ」

丸いテーブルに湯気の立つティーカップが四つ。イリユーマ十五代国王デューマとその家族がテーブルを囲んで談笑をしている。

「そう言えばガイラ、今日はお前の婚約者であるティーナもくるのか？」

「はい、父上達とじっくり会う機会がなかったので今晚ゆっくり、と思ひまして。」

「そんな事言つて、本当は皆に自慢したいんじゃないですか？」

マナ姫は少しからかうようにガイラ王子に聞いた。すると、

「ああそうだよ。お前も早くい相手が見つかるの良いな」

と、おもしろそうに答えた。マナ姫は言い返せないでむすっとしたが、ガイラ王子はそれこそからかうように笑っている。この二人のやり取りをみて、国王であるデューマも、その後であるセリアーナも目を細めて優しく微笑んでいた。

しばらくすると、会場へ案内する者がやってきて四人そろって来客の待つ大ホールへと向かった。

「おお、国王陛下だ！」

「まあお后様も！すごくお綺麗だわ！」

集った人達はぞくぞくと四人の周りに詰め寄った。あやうく混乱が起こりそうだったが警備の兵がさかさず規制をしたので大事には至らなかった。皆落ち着きを取り戻し、音楽に合わせて踊る人たちもちらほら。マナ姫は疲れを取るためあまり人のいないところへ行き、ベンチに腰をかけた。

「ふう。楽しいけれど疲れるわ」

片手には会場から持ってきたジュースがある。それを一口飲んで落

ち着いていた。

「隣、いいですか？」

突然の声にマナ姫はあやうくジューズをこぼしそうになった。振り返ると黒髪で黒い瞳の少年が立っていた。

「すみません。驚かせてしまいましたか？」
「……………」

時間が一瞬とまる。そんな感覚にマナ姫はとらわれた。そう感じるのは今自分の目の前にいる少年の放つ存在感のせいなのかもしれない。

「？あの、？」

「え！あ、はい。あ！いえいえ、どうぞお座りになってください。」

マナ姫は焦りながらも何とか対応した。ありがとっございませす、と丁寧に返事を返しながら少年はマナ姫の隣に座る。二人の間はそれほど近くないが、マナ姫は心臓の鼓動が早くなっていることに気付く。ちらっ、と少年の方を見ると目が合っしてしまい、慌てて顔を伏せた。

「どうか、しましたか？」

少年は優しく声をかけてくれた。

「いえ、なんでもありません。」

顔が熱い。マナ姫は、これが俗に言う一目ぼれなのかしら、とすで

にいつぱいいつぱいの頭で思った。イリユーマ国王の娘であるがゆえに、今まで様々な人からアプローチをされてきたが、こんな気持ちになったのは初めてであった。一体どこの誰なのか？今の時間帯に来ているということは一般の人。だけどそれ以上は分かりえない。色々な考えが浮かんできては消えていき、浮かんでは消えていき、と繰り返してる間に少年はマナ姫が体調が悪いのかと心配した。

「誰か呼びましょうか？」

「いえ！何ともありません、大丈夫です。」

「そうですか」

会話は終わってしまった。さして長くもない沈黙が、今のマナ姫には一時間以上にも感じられた。

「あの！」

「は、はい・・・？」

突然の少し大きめの声に少年は驚いたが、しっかりとマナ姫の方をみている。恥ずかしくて目を見ては話せないと思い、マナ姫はうつむきながら勇気を振り絞って質問をした。

「あの、お名前はなんというんですか？」

「え？ああ、すみません。紹介がおくれて、ルイスです。」

「ルイス、さん・・・」

少しだけ顔をあげたマナ姫だがやはり顔は見れない。

「あなたは？」

「あ、はい、マナと申します。」

「かわいい名前ですね」

その言葉にマナ姫は顔を上げルイスを見ると、優しい笑顔がそこにあった。

パーティー・S&U

本当に盛大なパーティーである。途切れることのない軽快な音楽。それに合わせて踊る人々。おいしそうな匂いを漂わせている豪華な食事。

だが、今サレオスはそのなきらびやかな周りを感じることはできないでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ルイスどこに行っただよ!?）」

正装とまではいかなくとも、ラフではない格好をしているサレオスはユフィールを隣に少しばかり居づらさを感じていた。といっても別にユフィールが何かをしたわけではない。ただ自分が勝手に気にしていること。ちらりとユフィールを覗き見ると、目の前の豪華な食事に夢中になっている。

「（かわいいなあ）・・・・・・・・」

今のユフィールは普段の綺麗というイメージよりは、子どもっぽさがでていいる。普段のサレオスならばすぐさまかわいい、なんて事は言えるのだがユフィールは違う。何が違っって・・・・・・・・それはあきらかにいつもより早い鼓動。

「（はあ、こんな気持ちになったのは10歳の時、剣術教えてくれた女の先生以来だなあ）・・・・・・・・」

などと内心甘酸っぱい思い出に浸るサレオスであった。

どうにもサレオスの様子がおかしい。いつもならしつこいぐらいアブローチしてくるといふのに今日は静かだ。なんとなく話しづらいので目の前に綺麗に並んでいる食事たちを頼張るユフィール。

「（ルイス君どこにいったのかしら）・・・」

なんとかこの空気を変えたいユフィール。だがいつもと違うサレオスに戸惑うだけだった。

と、そんな時一人の女性がサレオスに話しかけてきた。サレオスはそれまでの重そうな顔はどこへやら、笑顔で応対している。どうやら同郷の友達らしい。となれば話も弾んで・・・

「マジかよ!？」

「そうよ!相変わらずのアホな頭ねえ」

女性がそう言いながらサレオスの頭をグシャグシャと撫でた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ、なんかイラつときた。とユフィールは不機嫌オーラを発した。ほぼ無意識で。さすがにこれを感じとった二人はようやくユフィールに目を向けた。サレオスはあたふたしながら彼女を紹介し、紹介された彼女は笑顔で握手を求めた。とりあえず笑顔をつくるユフィールであったが、やはりどこか刺々しさをかもし出している。

「つる話もあるだろうし、私は席をはずすわね。」

「え?ユフィールさ・・・」

サレオスの言葉を最後まで聞かず、ユフィールはその場を後にした。

「ごめん、ちょっと行ってくる」

サレオスは申し訳なさそうに同郷の友に一言いってユフィールを追いかけた。

「（お、怒ってたよなあ。なんで？ううん・・・あ！もしかして紹介が遅れたから？でもユフィールさんがそんなことで怒るかなあ・・・）」

ユフィールの不機嫌の原因を色々考えたが、答えがでないまま追いついてしまった。サレオスに気付いたユフィールは止まってくれた。それだけでサレオスは心底嬉しいと思えた。

「あの・・・」

「なにか？」

「あ、えと、ですね・・・」

ユフィールの威圧にたじろぐサレオス。しかしここで押されては、と思い少し強い調子で質問した。

「どうしていきなり居なくなるんですか？」

「・・・」

じっとユフィールはサレオスを見ている。というか睨んでいる・・・？

「（どうして？それはあなたがあの人と一緒にいるほうが楽しそう

だからじゃない！気を利かせたっていうのに、なんで私が悪いですみたいな聞いてくるの？）」

ユフィールの心は穏やかではない。むしろ先程より悪化している。サレオスはサレオスで答えようとしないユフィールにどう対処したらいいか、今までの女好きの経験を活かして模索していたが、どうにもいい答えが見つからない。

沈黙が続く。

サレオスが先に音をあげた。

「もういいです。引き止めてすみませんでした。あなたには待つている人でもいるんですよ？」

昨日みたあの男。思いだすと寂しく感じるが、それ以上にイラ立ちを感じた。

「俺は俺で楽しみますから。それじゃあ」

ユフィールが初めて受けたサレオスからの冷たい言葉。自分のもとを去っていくその人が見えなくなると、それまでのイラ立ちは消え、寂しさがこみ上げてきた。

パーティー・L

「(なるほど、イリユーマのお姫様ね)・・・」

ぎこちなくではあるが、どこか一生懸命に話をするルイスの隣に座っているお人形のようにかわいい少女マナ。どうやらこのお姫様は自分に気があるようだ、とほぼ確信したあと、ルイスの顔は怪しい笑みをこぼした。

「?どうしましたか?」

「いえ、なんでもありませんよ」

すぐに普段の優等生の笑顔に切り替えた。

「ところで、マナ、って呼び捨てでもいいですか?」

「は、はい!あ、それと、敬語もできれば・・・」

「わかった。マナはいくつ?」

名前を呼ばれ、ほのかに頬を赤く染めるマナ。十五です、と小さく答える。

「じゃあ僕が一つ上だね」

「はい」

それからはルイスから質問をどんどんしていった。まるでルイスがマナ姫に気があるように。

小一時間ほど途切れることのない会話をし、話はマナ姫の勉強に移った。

「はい、私魔術が全然できなくて・・・」

今までの表情は消え入り、むしろ泣きそうな顔になった。

「・・・じゃあ僕が教えてあげようか？」

「え？」

マナ姫が顔をあげると、そこには優しいルイスの笑顔があった。

「こつ見えて僕魔術師なんだ。それに結構腕もたつ。もちろんマナがよかつたら、の話だけだ」

どうかな？と顔を覗き込まれたマナ姫の顔はすぐ赤くなる。ルイスはこのマナ姫の反応を少し楽しんでた。しかし今はそれを楽しんでいる場合ではない。なんとかこの話を承諾させなければ、とガラにもなく焦っていた。

「そ、それは・・・とても嬉しいのですけれど、私の一存では決めかねます」

何と言つても一国の姫である。しかしルイスはめげずに、さらにマナ姫に近づいた。

「ササラティ、という宿にいるから」

その言葉はマナ姫の耳元で呟かれた。それだけ言つとルイスはマナ姫を置いて去つていった。

一体何が起こつたのか理解できていないマナ姫。しばらくして自分の耳元に手を沿え、先程のことを思い出すと、ヘナヘナとベンチに崩れた。

「一体どういうおつもりですか？」

「関係ないよ」

フエイの声には耳を貸さず、ルイスはパーティー会場へと戻っていた。

「あ！ルイス、どこ行ってたんだよ?!」

「ちよつと休憩を。・・・」

見知らぬ女性がサレオスの隣に立っていた。答えを求めるようにルイスは二人を交互に見た。

どうやら出身が同じらしい。しかしふと疑問が浮かぶ。

「ユフィールさんはどうしたんですか？」

女好きとは言え、あのサレオスがユフィールを無視してまで他の女性を相手にしていることが解せないルイスは眉間にシワを寄せた。

「ああ、ユフィールさんなら他の・・・」

「なんだ、振られたんですか」

ホツとした。まさかユフィールさんを遠ざけたのでは、と一瞬でも思ってしまった。そんなことをした時には一発炎をかましてやろうかとさえ考えていたので、その必要もなくなったので二重に安心した。

「というかそもそもつりあいませんよ」

独り言のようにいつも通り冷たい言葉を放った。すぐいつも通りのサレオスの虚しいツッコみがあるかと思っただが、今日は静かにしている。不審に思い凝視するが、それに気付いたサレオスはあわてていつものサレオスに戻った。

残者*

「ママあ」

「どうしたの？」

「お兄ちゃんはいつ戻ってくるの？」

「・・・きつと来年には戻ってくるわよ。お兄ちゃんはオーバーオールガンのトップ校で勉強してるから忙しいの、わかってね？」

「・・・そっか、わかった」

タタタッ

ボタン

ドスッ

「・・・ママのうそつき、」

「お兄ちゃん・・・学校、やめたの知ってるもん」

グスン

「約束、忘れたのかなあ」

ヒック

「僕のこと、お兄ちゃん忘れちゃったのかなあ」

コンコン

ゴシゴシ

「誰？」

「パパだ、入るぞ？」

「うん」

キー

「・・・泣いていたのか？」

「違うよ」

「・・・」

「・・・」

「明日、船に乗せてやる」

「ホント？」

「ああ、だから今日はゆっくり休むんだぞ」

「うん！」

キー

ボタンッ

「・・・」

「海、好きだよ」

「……でも、僕本当は……」

「またそんなになって……」
「お兄ちゃん!!?」

『早く汚れを落とさなきゃまた母さんに怒られるよっ』
『うん！すぐ洗ってくる！！』

タタッ

ジャアアア

『ふう』

『ゼン、ほらタオル』

『ありがとう！』

ゴシゴシ

『まだちゃんと落ちてないじゃないか。手を出して』

『うん！』

ニコニコ

『何にやけてるの？』

『だってお兄ちゃん優しいんだもん！それに、最近お兄ちゃん勉強
忙しそうで全然話せなかったし・・・』

『・・・』

ジャアアア

『よし、服も着替えるんだよ？』

『うん！』

タタタッ

「言わないよ、約束だから・・・」

だから

お兄ちゃん、戻ってきてね・・・

電話

「ああ〜何で俺がこんなイライラしなきゃならないんだ？」

パーティーも終わり、一人宿へと戻ってきたサレオス。部屋にはダイゴローがごろりとその大きな体を横たえていたが、少しだけ顔をあげサレオスをみた。そのサレオスはさっさと服をいつもの動きやすいものに着替える。そして帰り道に買ったお酒をコップにそそがずそのまま飲みはじめた。

「ぶはっ！」

「……………」

「……………何見てんだよ」

「……………」

「お前は好きな子とかいないの？あ〜あ、お前もハクセンみたいに話せたらなあ〜」

もう一口飲もうとしたその時、ドアをノックする音が聞こえた。

「サレオス様、お電話です」

「はあ〜い、今行きまあす」

サレオスは名残惜しそうに手に持っていた酒をテーブルに置き、電話のあるフロントへと向かった。

「もしもし？」

「……………なんだ、飲んでるのか？」

「あ、おじさん？聞いてくれよあ〜ユフィールさんがさあ〜」

「ユフィール？一体何の話だ？」

「だからユフィールさんだつて!!!」

『ああ、わかった。その人の話はまた今度聞く。だからちよつと落ちつ……』

「聞いてくれるの!? さつすがおじさん! まあ話せば長くなるんだけどさ……」

宿のフロントで怒ったり泣いたり喜んだり電話ごしにサレオスは忙しかった。そして話をする回数十分……

「何をしてるんですか……?」

呆れ顔のルイスがパーティーから戻ってきた。

「ああルイスお帰りい〜」

『ルイス君?! ……また掛け直す。明日の昼だ、いいな?』

「ええ!!!? まだ話たりないのに!!!」

ガシャン!

電話の相手は急いで電話をきった。サレオスはしぶしぶ受話器を手放した。

「まったく、こんな公共の場でそういう恥ずかしいことはしないで下さい」

ため息をつきながらルイスは自分の部屋へと戻ろうとしたが、それはお酒の入ったサレオスに阻まれた。ルイスとしてはなかなか抵抗をしたが、日ごろから鍛えられているサレオスにはかなわず強引に彼の部屋へと連れて行かれた。

「お酒を飲んだんですね……」

部屋のテーブルに置いてある蓋のあいたアルコールの強そうなビンがルイスの目に入ってきた。ダイゴローは相変わらずゆったりと横たわっている。

「まあ座れ！そして話を聞け！」

「はいはい」

これだから酔っ払いは、を心中毒づくルイス。別に魔法で一発なのだが最近心が広くなったらしく、嫌な顔をしながらも話を聞くことにした。ルイスとしてはかなりの進歩である。

「なあどう思う?!」

「知りません。ただの知人じゃないですか？」

話は病院の入り口でみたユフィールと一緒にいた男の話。ルイスにとっては本当にどうでもいい話だった。

「・・・そうか！久しぶりに会ってちょっとお話でも、というパターンかもしれないのか!？」

「じゃあ今度ユフィールさんに会った時にでも聞けば良いですね。それで解決です」

そう言っただけ席を立とうとしたがガシツ、と腕を掴まれ着席させられた。

「でも・・・もし本当に付き合ってたら??？」

この人は、とルイスは頭に手をあてた。

「そんなに好きなら奪っちゃえばいいじゃないですか？ここでお酒飲んで愚痴ってるより全然良いと思いますよ」

「うばっ！？そ、そうか・・・いや！でもやっぱりそれはユフィールさんのためには・・・」

「じゃあ諦めれば良いじゃないですか」

「それも嫌！！」

サレオスは子どものように駄々をこね始めた。ダイゴローはというと欠伸をしておやすみモードに入っている。

「サレオスさん、いい加減にしないといくら成長した僕だといってもキレますよ？」

ルイスの冷気を感じ取り、サレオスの酔いはいつきにさめた。

ルイスは部屋へと戻り、ダイゴローも寝てしまい、部屋の明かりを消してベッドにもぐりこむサレオス。先程のルイスの言葉が頭の中を回っている。しばらく唸りながら悩んでいると、いつも間にか眠ってしまった。

次の日の朝、部屋で朝食を食べながら新聞に目を通しているルイスのもとへ清々しいサレオスが乱入してきた。

「ルイス！俺は決めたぞ！俺は何があってもユフィールさんを諦めない！！ユフィールさんのあの笑顔は誰にも譲らない！！」

「そうですか、ご立派ですね」

新聞から目を離さずにルイスは適当に答えた。サレオスはそんな事に気にせず、ユフィールさんに会ってくる！、と勢いよく部屋を出ていった。

「一体何事だ？」

「頭を治しにユフィールさんの所に行つたみたいです」

なるほど、とハクセンは背を伸ばし、ルイスと一緒に朝食をとった。

まだみんな朝食をとってゆったりしている時間、サレオスは例の病院のもとについた。道には人は見当たらず、鳥の鳴き声が時々聞こえる。

「よし、まずは仲直りからだな……」

病院の前で意気込むサレオス。すると扉が開き、一人の看護婦さんが出てきた。掃除をしているらしく、手にはほうきがある。

「掃除なんかは俺がやりますよ！」

「え？でも……っていうか誰ですか？」

「看護婦さんて色々忙しいんですよね？こんな仕事は俺がやっておきますから他の仕事しちゃってください」

「はあ……じゃあお願いします」

「はいはい」

いつもの調子を取り戻し、ルンルン気分ですべての病院の周りを綺麗にほつきで掃いていると一人の女性がサレオスのほうに歩いてきた。

「サレオス、さん？」

「あ！ユフィールさん！！おはようございます」

昨日とは全く様子の違うサレオスにユフィールは戸惑った。第一少しケンカっぽくなっていたのでは、と眉をひそめた。

「昨日はすいませんでした!!」

バツ、と勢いよく頭を下げるサレオス。

「その、俺ちよつと気になることがあって、それでちよつと取り乱しました。……まだ、怒ってます?」

ゆっくり顔を上げユフィールを覗き見ると、取り合えず怒ってはいないようだ。というより今の状況を把握できていないように見える。

「だから今日は、仲直りがしたくて……ですね……」
「は、はあ」

ようやくユフィールが反応してくれたのでサレオスの顔は喜色に変わった。

「許して、くれますか??」

上体を少し屈めてユフィールに近づく。が、彼女は一步後退した。その行動にかなりへこんだが、

「私も、昨日は失礼な態度をとってしまったってごめんなさい」

そして頭を下げた。きよとん、としたままのサレオス。そして互いに目が合うとどちらともなく笑顔になった。

「というわけなんだよ」

完璧にのろけているサレオスがルイスの部屋でくつろいでいる。そのあとその場で少し話をし、今度会う約束、つまりはデートができる、ということのをさっきから繰り返しルイスに語りかけている。もちろんそんな話をまじめに聞いているわけのないルイスは、ベッドに寝転びながら先程買ってきた新しいマンガを読んでいた。

「ハクセン、今回の本もなかなかだよ。なんと変な薬で子どもの姿になってしまった人の行く先々で事件が起こるんだ。僕としてはまずこの人が何より怪しいと思う。自分で事件を解決していくんだけど、そんな事してるんだつたらまずこの人は部屋でじっとしていることをすすめるよ」

「・・・そうか・・・おもしろいか？」

「ええ、結構人気らしく店に張ってあった売り上げランキングに載ってました。僕としてもかなりハマります」

「・・・そうか、よかったな」

右からはサレオスののろけ話、左からはルイスの長々と続くマンガの感想、ハクセンは今日も昼間から疲労を感じるのであった。

コンコン

ルイスの部屋にノックの音が響き、サレオスがドアを開けた。見るとダイゴローに連れられた宿の人が立っていた。

「こちらにいらしたんですね。サレオス様、お電話です」

「電話？・・・ああ！！！！ありがとう！！」

思い出したようにサレオスはルイスの部屋を出て行った。

「もしもし？おじさん？」

『今日は大丈夫そうだな』

「ゴメン！！昨日は酔ってて」

『わかってる、それよりいきなり本題に入るが良いか？』

「おう！で、何だって？」

『出来ればルイス君がどこに住むとか、お金の問題とかをクリアするまで傍にいてやってほしい、ということなんだが』

「ああ、全然問題ない。っていうか俺もしばらくここに居る事にしたし」

『そうなのか？どっちにしろそれは助かる。また何かあったら連絡を頼むぞ？』

「ああ、任せとけて！」

『それと、ユフィールという人のこともがんばれよ』

「おじさん昨日ちゃんと話し聞いてくれたの！？」

その後少しかだけ世間話のちげをしてじゃあまた、と互いに受話器を置いた。

その日の夜、今度はルイスを呼びに宿の人はドアをノックした。すぐに出てきたルイスは普段となんの変わりもなく電話で短い会話をし、受話器を置き、その顔は怪しい笑みをつくっていた。

簡単な試験

品のいい部屋にルイスは待たされていた。出された紅茶を三口ほど口にした時、ノックの後に一人の若いとは言えないが老いてもいない男が入ってきた。

「初めまして、スダンと申します。マナ姫の教育係兼世話係をしています」

「こちらこそ初めまして、ルイスと言います」

一度席を立ち一礼し、互いに席についた。スダンと名乗った男を少し観察する。知的なオーラを放っているが、学者肌ではないようであり、だいたいいい体格をしている。察するところマナの護衛も兼ねているのだろう。そうすると大分オールマイティーにこなす人物であり、父親であるイリユーマの国王からの信頼も厚いものであると考えられる、とそこまで考えているとスダンからいくつか質問が飛んできた。

「普段こういったことな無いのですけど、今回は姫の推薦ですのでかなり特例となります。ええっと、まず年齢は？」

「十六です」

「出身は？」

「オーヴァルガンです」

「……今の君の年齢なら学校へ行っているというのが普通だと思っんですか？」

「家が貧しかったので学校へはいけませんでした。けれどいつか育ててくれた両親に楽な生活をして欲しいと思い、仕事をしながら図書館で勉強をし、独学で魔術を覚えました」

もちろん全部データラメである。まあ独学で、というのは半分当たってはいるが、自分の興味のあるもの意外に関心を示さないルイスが仕事などというものを今までしたことなど皆無である。

「なるほど。イリユーマの姫に魔術を教えているということをご両親が聞いたらとても喜ぶでしょうね」

「はい、両親のためとはいえ、家を出てきてしまった僕をきつと不肖の息子と思っっているとします。ですからもしマナ姫様に魔術を教えることが出来ると聞いたなら僕はやつと一つ、親孝行ができます」

まさに孝行息子、けなげな少年を演じ、スダンに訴えた。そのスダンはしばらく考えてからルイスを外へと連れて行った。そこは広い整備されたグラウンドの縮小版のようなところだった。

「親を大切にしようとする者に悪いものはいません。しかし君の実力が及ばないものであったら、いくら信用できる者であっても登用はできません」

「はい」

「では、とりあえず簡単な魔法から」

実技の試験はすぐに終わった。理由はルイスが杖を持たずとも魔術が使える、さらにレベルの高いものを難なく放ったからだ。これにはスダンも驚きの表情を隠せない。

「姫はいい目をしていますね」

この日、ルイスがイリユーマの姫に魔術を教える者と決まった。

「えええ！！？マジで？！？」

サレオスの甲高い声が狭い部屋に響く。ちょうど本日ののろけ話が終わった時、ルイスは普段と変わらない様子でイリユーマの姫に魔術を教える、ということを保えたのだった。

「ルイス、本当なのか？」

この事にはハクセンも疑いの眼差し向ける。それもそうだろう、ただかだか十六の子どもが一国の、しかも大国の姫を相手にするのだから。普通ならありえない。

「本当です。パーティーでたまたま会ったんで、今回のような事になりました。何でも無料で部屋を貸してくれるらしいです。もちろんハクセンと住めるようなところを希望しておきました」

マンガを片手にルイスは淡々と話を進める。

「はあ、スゴイ坊やとは思ってたがまさかここまでとはね」

「誰が坊やですか……」

「しかしお主が一ヶ所に留まっているというのは性に合いそうに無いように思えるが……？」

ハクセンの疑問にサレオスも同意した。

「……まあその辺はもう考えてます。僕としても一生あんな狭いところにいるのはゴメンですから」

狭い、と言っているが王宮の広さといったら半端ではない。それなのにそう言ってしまうルイスの感覚に、二人ともため息がもれてし

まった。

「何はともあれそういう事なら親御さんも安心するだろうな」

ふと、サレオスは呟く程度に言ったがそれはルイスの耳にしっかりと届いた。

「……………なぜあなたがそんな事を？」

突然話に関が出てきたので訝しく思った。しかしサレオスは適当に笑い流して部屋を出て行った。

次の日、無事に部屋も決まり明日国王に謁見してその次の日から正式にマナ姫に魔術を教えることになった。

明日国王と会うというのにルイスはまったく緊張した様子を見せず、新しい住家できつろいでいた。夕方にはサレオス、ユフィール、ダイゴローが祝いをしにやってくる。

「……………フエイ？」

応答が無い。どうやら出掛けているようだ。

「ハクセン様……………」

街をぶらぶらした末、広い公園に着いたハクセンは木陰できつろいでいた。

「ルイスについている神族か……?」

「はい。名をフェイと申します」

ルイス以外で唯一言葉を交わし、その正体を知っているハクセン。ルイスをいつも心配しているフェイにとって、父親的存在に位置するであろう彼は心強い味方であった。

「今回の行動、あなた様はどう思われますか？」

フェイの問いかけにハクセンはすぐには答えなかった。長年生きている彼にとってもルイスの行動は不思議なのであろう。

「まだ子どもゆえ、目に見えるものから手に入れようと考えているにすぎぬ」

「それは……?」

「姫に近づいて婚姻でも結ぶのではないか？」

本当のところはわからぬが、と言いながらハクセンは眠りについた。

「そ！だからまあとりあえずは安心だね。召喚術師たちも手をだしにくいだろうし」

『わかった。それで、お前はとうするんだ?』

「俺はまずユフィールさん！今夜もまた会えるんだあゝ まあルイスのお祝いつてことだけど、それでも会えるもんに変わりはない！」

『そうか、恋がみのるといいな。じゃあ体には気をつけるんだぞ?』

「はいはあゝい、おじさんもねゝ」

ガシャン

「（ついに明後日、あの方とまたお会いできる）……………」

城下町のみえる大きな窓をのぞきながら、マナ姫は緊張していた。パーティーの日、たまたまベンチで休憩している時に出会った人。まだ何も知らない。けれどこれから彼を知っていける。そう考えるとマナ姫の胸は弾んだ。

ほのぼの

「ねえねえ！！見て！！！！！！」

午後の優雅なひと時をのほほんとしていたシュワルガの耳に、元気のいいエルランの声が聞こえた。イスから立ち上がり外に出ると綺麗なエメラルド色が目に入る。そしてその横にはエルランの召喚獣である龍のテテがどっしり構えている。

「どっしたの〜?」

いつものユルイ声で質問する。

「テテがね！テテがね！」

「うんうん」

「火を噴けるようになったのお！！！！！！」

「ゴオオオオオ！！！！」

エルランが叫ぶと同時にテテはその大きな口からこれまた大きな炎を吐きだした。周りにあった木が勢いよく燃えている。

「……………すごいね〜レベルアップしちゃったね。でも環境破壊はよくないよ〜?」

そう言いながらエルランのほうへ近づき、頭に手をポン、と置く。

「そうだね！…………でもテテは炎しかだせない……………」

エルランはくりくりした目でシュワルガを見上げた。まあ俗に言う

上目づかいというもので、シュワルガも例に漏れずクラツ、としたのだった。

「燃えちゃったのは仕方ないよね」

緩みに緩みまくった笑顔をエルランに送り、結局炎は消されることは無かった。

「そう、だからここは……ね？」

「はい／＼／＼」

女の子らしいかわいい部屋で、ルイスはマナ姫に魔術を教えていた。距離が近く、マナ姫の顔はずっと赤みがかっている。よくもまあそこまで緊張するものだ。と内心変な感心をしているルイスだが、教え方がうまいのかマナ姫の覚えが良いのか、さつきから勉強が順調に進んでいる。

「……もうそろそろ終わりの時間だね」

午前十一時半。ルイスがマナ姫に魔術を教える時間は十時からの一時間半だった。

「え！？もうそんな時間ですか？」

信じられないといった顔で壁にかかっている大きな時計に目をやるマナ姫。ルイスは片づけをし始めた。

「じゃあ明日までにこのページをやっておいてね？」

「あ、はい。わかりました……」

名残惜しそうな顔をするマナ姫。その顔を見てルイスは少しだけ自分の顔を近づけ、

「また明日、マナに会えるのを楽しみにしてる」

笑顔でそういい残し、部屋を出て行った。残されたマナ姫はまたしてもヘナヘナと崩れたのだった。

コンコン

ルイスがいなくなってからしばらくポーツとしていると誰かが尋ねて来た。

「はい、どうぞ」

「こんにちは」

入ってきたのは兄であるガイラの婚約者、ティーナであった。突然の訪問にマナ姫は喜色を浮かべた。

「一緒に食事でも、と思いましたが」

「はい！ぜひ」

ティーナは貿易商をしている父を持つ令嬢である。マナ姫にとっては優しいお姉様、という感じで、城を抜け出したときにはよく遊びに行く。

場所を中庭にかえ、二人はたわいもない事を話していた。しかし、途中で少し無理のある会話に変わった。

「東の二十二番地は今度海をでるそうぞ」

周りには聞こえない程度にティーナは話した。

「……………そうですか」

マナ姫はなるべく表情を変えず、自然に答えようとした。

「お疲れ様です」

もう日も暮れて街頭が灯っている時間、病院からでたユフィールを待っていたのは満面の笑みのサレオスだった。

「サレオスもお疲れ様。今日はどんな仕事をしたの？」

「今日はちびっ子達に剣術を教えました！」

一緒に夜道を仲良く歩いている姿は恋人同士に見える。が、二人はただの友達同士。途切れることの無い会話の途中、ユフィールが思い出したようにサレオスに質問をした。

「そういえば、パーティーの時私には待っている人がいる、って言うってけど一体なんのこと？」

うっ、とサレオスの顔は引きつった。出来ればあの時のことは思い出したいくないわけだが、聞かれたからには答えなければならぬ。いや、話をはぐらかすことも出来るが、それでは男が廢る、と勝手に思考をめぐらせ、あの男についても聞けるチャンスである、と前向きに考えることにした。

「その、ですね・・・前にユフィールさんが病院から大分かつこ
いい男性と出てきてたので、ですね・・・」

前向きに考えても不安なものでは不安であった。もしあの男がユフイ
ールさんと付き合っていたら、と。

「男の人と？・・・あ！もしかしてテッドのこと？」
「テッド・・・さんですか・・・」

あまりに自然と男の名を呼んだのでサレオスは一気に不安にかられ
た。しかし、

「彼は私のいところよ」
「・・・そうですか・・・いとこ・・・つていとこ!？」

サレオスの沈んでいた声が張りあがり、ユフィールは目を丸くした。
一体何をそんなに驚いているのか、と。

「じゃあ！じゃあ、つまりユフィールさんの恋人ではないんですね
!？」

目を輝かせてユフィールに詰め寄るサレオス。そのあまりにも子ども
っぽい動作にユフィールはぶっ、と笑ってしまった。

「な、何で笑うんですか・・・?」

「ごめんなさい、ちよつとかわいいと思っちゃって。サレオスのそ
の動作も、やきもちも」

「や!？そ、そんなんじゃない、いや、でもそうでもあるんですが」

ユフィールの言葉をどう返していいかあたふたしていると、また笑われた。

その笑顔がサレオスを掴んで離さないことを彼女は知っているのだろうか。子どもっぽく笑うのに、どこか色香を匂わしている、とサレオスはしみじみ自分がユフィールに惚れている事を実感するのであつた。

サレオスの気も知らず、ユフィールは本当に今の状況を楽しんでいた。

「（この人に想われている事が、こんなにも嬉しいと感じるなんて）

隣でまだあたふたしているサレオスを見て、ユフィールはそう思わずにはいられなかった。

くだらないもの・・・？

イリユーマの東に、巨大な軍事国家がある。ローリア、という名のその国はまさに犯罪大国であった。殺人などは日常茶飯事、人身売買、麻薬の取引は人目を気にせずに行われている。一般市民も罪を犯すが、ローリアという国自体が犯罪に手を染めている。

「ちつ。今年もイリユーマのおかげで利益が伸びなかったか」

タバコを片手に男は毒づく。

「將軍、近々イリユーマの王子であるガイラが結婚するそうです。相手はあの貿易商の娘、ティーナです」

狐のような男がその口元を吊り上げながら言った。

「ほう。それはめでたい。祝ってやるのが礼儀ってものだな」

「さようぞ」

將軍と呼ばれた男は手に持っていたタバコを消し、狐のような男は陰のある笑顔を作った。

マナ姫に魔術を教えた後のルイスは毎日図書館へと通っていた。それも図書館が閉まる23時ギリギリまでいる、というのが今の彼の日課であった。

「だめだ。全然わからない・・・」

4人で使うための机をルイスは占領し、もう置き場の無いほど本が積み重なっている。

肩をならし、もう必要のない本を元の場所へと返そうと席を立つと、一人の老人がルイスの前に現れた。

「あ、すみません。僕一人で机を使ってしまつて」

急いで片付けようとしたがそれは穏やかな声に制された。

「いいのだよ。それより、君はいつもこんなにたくさんの本を読みあさつて一体何をしているんだい？」

ローブに身を包んでいたのでこの人も魔術師なのだろう。綺麗な白髪が印象に残る。

「禁断の書に施されている封印術について、ちょっと……」

「ああ……知っているよ」

老人は優しく笑っていて、それだけ言うと静かに去っていった。ルイスは不思議に思ったが、不審とは思わなかった。気になったので名前を聞こうと後を追ったが老人の姿は広い図書館のどこにも見つけられなかった。

夜、図書館から程近い場所にある現在の住家で、ルイスは珍しくハクセンとフェイと話をした。

「一体何を知っているつて意味だつたんだらう？」

「不思議な方ですね。私もお会いしたかったです」

「そついえば最近よく出掛けるよね」

はたから見ればルイスが一人で喋っているように見えるが、フェイはちゃんと存在している。

「はい。ハクセン様とお話をしていました」

「へえ〜。いつの間にそんなに仲良くなったの?？」

「自然に、だろ。それよりいつまでここにいるんだ?」

ハクセンがルイスの方に目をやる。

「そうですねえ。彼女と婚約するまでですかね」

こともなげにルイスは言い放った。一瞬部屋の空気が止まる。

「ルイス様、それはどういう・・・」

「そのままだよ。1年ぐらいで多分実現するよ」

「彼女が聞いたのは、なぜ、ということだ」

ハクセンはさして興味なさそうにルイスに教える。彼にとっては予想していた通りなので、今更のことだ。

「なぜって、まあ理由は色々あるけど取り合えず地位は手に入るし」
「・・・」

「しかも、もしお兄さんであるガイラ王子に子どもが出来なかったら、自動的に僕にイリユーマの王座が転がってくる。こんな面白い話は無いよ」

うきつき気分のルイスを見てハクセンはため息をついた。

「くだらん。しかもおもしろくも無いな」

ハクセンは部屋を出て行った。ルイスは閉まったドアの方をしばらく見ていたが、向きを変えて窓から星空を見上げた。

「……………」

もうそろそろ冬。イリユーマは四季があるので、そのうち一面雪景色になる。しかし今はまだ冷たい風が吹くだけ。

「フエイ」

「はい」

「くだら、ないかな……………」

ハクセンに出会ってから、ルイスは彼の言葉にいつも耳を傾ける。ずっと一緒にいるフエイの言葉はあまり聞かないのに。しかしフエイにとってそれはどうでもよかった。

「私が願うのは、ルイス様の幸せです」

「幸せねえ……………何が幸せがよく分からないよ……………」

次の日、いつもの様にマナ姫に魔術を教えていて、ふと昨夜のことを思い出したルイスは何気なく目の前の緊張しながら勉強している一つ下の女の子に質問をした。

「ねえ、マナにとっての幸せって何？」

「え？」

普段魔術以外の無駄な話を一切しないルイスが突拍子もない事を聞いてきたのでマナ姫は首をかしげた。

「僕にとってはマナはすごく不自由そうに見えるんだけど、そんなマナの幸せって何？」

自分のように好きなところへ出掛けることも、何か好きなことでもきず、押し付けられるものは多く、一体その中でどうやって息をして生きていくのか、ルイスには疑問だった。

「そんな、何の不自由もありません！衣食住は安定していて、家族も健康で仲が良くて、それに周りの方達もとてもやさしくて」

「・・・そう」

ルイスは冷めた目でマナ姫を見た。それを感じ取り、マナ姫は不安な顔になったがルイスはいつもの笑顔をすぐに出した。

図書館からの帰り道、ルイスは寄り道をした。肌寒いにもかかわらず、近くの公園のベンチに座り、星空を眺めた。こうしている時間が、彼にとっては一番の安らぎだった。

「（・・・欲しいものがあって、でもハクセンにくだらないって言われて、こんなに気持ち揺らいでる・・・地位を手に入れることはくだらない？いや、そんなわけは無い。でもハクセンに言われると何か混乱する・・・っていうかマナは大分綺麗に飾った人だなあ。僕にとっては眩暈がするようなことを本気で思ってるし・・・」

色々な事を考えているうちに体が冷えてきたので、ルイスは早足で家へと戻った。

眩しくて、熱かった。

この世に存在した瞬間から、全てを知っていた。自分が何者であり、成すべき事はなにか、そしてその結末も。

彼はルイスという、黒髪の似合う男の子だった。彼に会ったのは偶然ではなく、必然。会うべくして会った。

彼は好奇心が旺盛で、私の事をおもしろいお化け程度に思っていたらしい。頭が良いので少したってから私のことについて短く話した。彼にとっては私の正体はあまり興味がわかなかつたらしく、軽く頷き、それ以降私について聞いてくることは無かった。

彼の成長は目ざましかった。しかし、やはりまだ子ども。覚えは早いが頑固なところがあり、両親とはよく衝突していた。

夜になると彼は決まって屋根へ上り、星空を眺めていた。

『すごく落ち着くんだ』

この時だけは、無防備な彼を見れた。

月日は流れ、彼は一人、旅に出た。私は不安だった。しかし、いずれこうなることは分かっていた。途中、様々な人に出会い、彼はまた成長した。

彼は今も成長を続けている。これから先、止まる事はない。分かっている。

分かっているのに、今私の中で何かが叫んでいる。

これだけが分からない。

一体何なのか。

ハクセン、という古代獣に相談をした。私がこの世に存在して、初めてのことだった。彼はこう答えた。

『自我だろっ』

よく、意味が分からなかった。私という存在はすでにあり、ゆえにそれを自我というはずなのに、今更自我がどのと言われても理解できなかった。

この鉛のようなものは未だに消えない。

私は今まで自分と同じ種族に出会ったことは無かった。理由は知っている。だから特に寂しいとか、会ってみたいとは思わなかった。

けれどある日、彼が図書館から帰って来た時、彼は不思議な老人に出会ったことを話した。

直ぐにわかった。その老人の正体も、その後ろにいる私と同種の存在も。

会いたいと、思った。もしかしたら、この先、会うことも出来るかもしれない。けれど分からない。これも分からない。

今まで幾度となく彼に肝を冷やされた。しかし、この時ばかりは本当に、彼を失ってしまうのでは、といてもたってもいられなかった。

それはイリユーマのガイラ王子の結婚式でのこと。東のローリアから將軍が祝いにやってきた。そして、彼はスピーチでとんでもないことを言い放った。

『娼婦がお好みとは、いやはやイリユーマの行く末が心配ですな』

会場はざわめいた。また嫌がらせか、と思う者もいれば、そうなのか？どうなんだ？、とティーナをちらちら見る者もいた。

その時ティーナはいたって冷静を装っていた。ガイラ王子も。

ざわめきを残しながら式は終わり、將軍は自国へ帰ろうとした。しかし、帰路の途中何者かに暗殺された。

戦争は目の前に転がった。

元々ローリアはイリユーマが好かなかった。自分達をしていることに、あれやこれやと文句を言ってくるうるさい国、というのが国民にまで浸透していた。

ルイスはその腕をかわれ、最前線に送られた。サレオス、という旅を共にした男性も彼についていった。そしてハクセン、ダイゴローも。

戦場

「まったく……次から次へとしつこいですね……」

文句を言いながらも、ルイスは目の前のどす黒い戦車の動きを魔法で止めた。

「まったく意味わかんねえ。なんで戦争にまでなるんだよ？イリユーマがローリアの將軍殺したって証拠もないのに」

サレオスは物陰に隠れていた兵を倒していった。

「ルイス、サレオス」

高い所からハクセンの呼ぶ声が聞こえ、二人でダイゴローに乗り駆け上った。

眼下には周りを高い塀で囲まれた建物がある。

「あれを潰せば食料を断つことが出来ますね」

「しっかし大分嚴重な警備だな。」

「しかも火薬の匂いがする。大量の銃を持っているな」

サレオスはため息をついた。銃と剣ではどちらが有利か、子どもでもわかる。

「俺ってかなあり役立たず？」

「いつものことです。それより、行きますよ」

サレオスの嘆きも聞かず、ルイスはハクセンに乗り物陰に隠れなが

ら斜面を下っていった。

「あいつ、何をそんなに急いでるんだ？」

渋々ダイゴローに乗り、ルイスの後を追いかけた。

「何！？もう突破されたのか？！」

今まさにルイス達に狙われている建物の中枢で、男は冷や汗をかいていた。

「くそっ、ここを潰されたらこっちは不利になる……」

部屋には4、5人の軍服を着た男達が頭を抱えていた。沈黙の続く中、一人の男が提案をした。

「とにかく分断しましょう。遠距離に優れた魔術師と小回りのきく剣術師の組み合わせさえ崩せばなんとか勝機があるはずです」

「そうだな。しかし奴らはタイスに乗っている。あの足をどうにかしないと……」

「もう頭を抱える必要はありませんよ」

「……?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

部屋にいた男達は一斉に声のしたほうを振り向く。するとそこには笑みをこぼしている黒髪の少年がいた。

「お前は!?!?!」

「ケイジ!?!」

少年が叫ぶと男達は薄い半透明なものに囲まれた。

「な、何だこれは!？」

「封印術です。しかも初級の」

男の一人が腰に下げた銃を取り、少年に銃口を向けた。

「それは意味をなしませんよ」

「黙れ!!」

バン!!

弾は半透明の壁にめり込んでいた。

「だから言ったのに……」

めんどくさそうに少年は呟き、部屋に設置してあった通信機器を全て破壊した。

「ルイス」

「あ、ハクセン。そっちは終わった？」

白いタイスが部屋に入ってきた。男達はなぜこのタイスが言葉を喋っているのか、そしてこのルイスと呼ばれた少年の強さに顔をこわばらせていた。

「サレオスが怪我を……」

「治しませんよ」

「……………」

「……………」

ハクセンと呼ばれたタイスはそのまま何も告げず、部屋を出て行った。

夜、一つの大きな部屋にローリアの軍人達は集められ、ルイスの術でおとなしく捕まっていた。

「なあなあ」

「なんですか」

「すっごい傷がいた・・・」

「自業自得です」

「・・・」

サレオスは今日も声無き涙を流していた。

「ローリアの援軍が来るより、こちらが先にここに着きますから今夜は安心して寝れますね。じゃあ見張りはよろしくお願いします」

「はい・・・」

サレオスは大人しく言うことを聞き、ルイスの後姿を見送った。残されたサレオスの隣にはダイゴローが寄り添っている。

「うう・・・俺のことを考えてくれるのはお前だけだよ・・・」

ダイゴローに寄りかかり、サレオスは剣を片手に見回りへと出掛けた。

一方ルイスはすでにベッドに横になっていた。

「ルイス様」

「なに？僕疲れたから重要なことじゃないなら明日にして」
「……わかりました」

本当に疲れた、とルイスはため息をついた。
そもそも、なぜこんなにも急いでいるのかと言えば、それはルイスらしからぬ動機であった。

開戦直前のイリユーマの王宮

「スタン！！」

「姫？」

両手に大量の資料らしきものを抱えたスタンは後ろを振り返る。

「どうしたんですか？そんなに息を切らせて……」
「本当のことを教えてください！」

マナ姫は乱れた息を整えてからスタンに聞いた。

「今回の戦争に、ルイスさんも加わると言っつのは……」

スタンは言葉に詰まってしまった。その様子を見て、マナ姫はまた走り出した。

「姫！？どこへ行かれるのですか??！」

「お父様のところですよ！」

追いかけるよりマナ姫の姿が消えたのが早かった。

マナ姫は国王のいる部屋の前で深呼吸をしてからノックした。

「入れ」

「失礼します」

マナ姫は静かにドアを開け、部屋へと入る。中には大臣や軍師が国王を中心に円卓を囲んでいた。

「失礼をしました。また後で伺います」

すばやく一礼をし、部屋を出ようとしたがそれは止められた。

「ルイスというお前に魔術を教えている子どものことだな？」

振り返ると、国王はマナ姫の方を見てはいなく、手元にあつた資料を見ていた。

「・・・はい。私と一つしか違わぬルイスさんに、戦争に行けと言うのはなぜですか？わが国は魔術大国とも言われるほどの力を持っています。なのになぜ、わずか16の子どもを・・・」

「姫」

マナ姫の言葉は魔術師団のトップであるダルキスに遮られた。

「先日、姫には内緒で私と各師団長で、彼の実力をテストしました。一国の姫の教育係にあんな子どもを、という国内外の声を聞いたからです。そして彼の実力が並外れたものであることを知り、今回の戦争でかならず役に立つと思ひ・・・」

「実力などの問題ではありません!!」

部屋にマナ姫の声が響いた。それはか弱い乙女などではなく、人の上に立つ者の、凜とした声だった。

「彼はまだ16です。例え賢く、強くあってもまだ子どもなのです。そんな子どもに、どうして戦争という殺戮の場所へ放り込むことが許されるのですか？」

ダルキスは返す言葉も無く、部屋は静まり返った。この沈黙を、父親であるデューマ国王が破った。

「マナ、お前の意見ももつともだ。我々は今回の戦争で戦えるだけの十分な力を持っている」

「ならばなぜ……」

「……彼の希望なのだよ」

いつものように、ルイスはマナ姫に魔術を教えに王宮へ行った。部屋へ入ると、いつもの笑顔の出迎えが無く不審に思いマナ姫の顔を覗き見ると、暗く沈んでいた。

「マナ、一体どうしたの？」

ルイスの問いかけにマナ姫は反応しない。もう一度声をかけると、マナ姫はルイスを見つめた。

「なぜ、ですか……」

「え？」

一体何のことなのか見当のつかないルイスは首をかしげた。

「あなたはこの国の住人でも、軍人でもありません。なのになぜ、自ら戦争に参加するなど……」

眉を寄せ、その目には涙が浮かんでいる。

自分を思って心を痛めているのか、なんて優しい子なんだ……などとルイスが思うはずは無く、

「（なんで泣きそうな顔をしてるんだ？ だいたいマナには全く関係ないのに……）」

目の前の涙を浮かべているマナ姫を見つめ、ルイスは不思議に感じていた。

「……なぜですか？」

「え？ ああ、なんていうか、自分の力を試したいってのもあるし……（あと、王宮の人達のなかで自分の株も上げときたいし）」

「戦争をご存じないのです。人を殺め、自らの命も危険にさらすのですよ？」

「まあ、そうだね……」

ルイスにはマナ姫が何を言いたいのか理解しがたかった。結論としては、彼女は感受性が強く、お人よして同情的な人間なのだろう、と分析をした。

「もしもの事があつたら、ご家族も悲しみます」

「……わかった。大丈夫だから。僕強いし。だからいつまでもそんな顔を……」

「わかっていません！……！」

初めて聞くマナ姫の大きな声にルイスは一瞬とまってしまった。彼女の目からは涙が溢れている。

「あなたは、ご自分の事しか考えていないのですか？残されているご家族が、どんな気持ちか、あなたのお友達だって……」

泣いてはいるものの、強い眼差しをマナ姫は持っていた。睨みとはちがく、強いけれども優しい目をしている。ルイスはとまどった。以前にも、こんな事があつたように思えた。たしかその時は何にも感じなかった。が、今は違う。何かが引つかかる。

「……そう、だね。ごめん。僕はいつも、自分のことしか考えてなくて……」

ルイスの声がいつもより弱くなる。マナ姫がルイスの近くへ歩み寄ってきて、両手を掴んだ。

「この手を、血で染めてはいけません。あなたはとても強大な力を持っています。それは他者を傷つけるためでは、決してありません。そして……」

「……」
「あなた自身を傷つける事だつて、許されません」

よく、わからなかった。ルイスには。

けれどなんとなく、自分が何をすればいいのか、分かった気がした。戦争に参加しなければいいのかもしれないけれど、そこまでやれるほど人間が出来てなくて、それでも今自分に出来ること。それは敵をなるべく無傷で捕獲し、一日も早く、彼女のもとへ帰るといふこ

と。

それだけを頭に入れて、今ようやく一つ目のポイントを落としたのだ。

「あと一つ落とせば、向こうは動きが取れなくなるから勝敗は決まったようなもんだね」

ベッドの中で、明日すべき事を考えながら、ルイスは眠りについた。

將軍と呼ばれていた男を失ったローリアのトップに立っていたのは女であった。名前はアンネリー。元は將軍のお気に入りの中の一人であつたが、將軍がアンネリーの資質を見抜き、度々政治やら軍事やらに関わらせていた。最初は周りから不平の声がしたが、アンネリーはその中で着実にその実力を皆に知らしめていった。

そして今、彼女はローリアの全権をその白く細い手に握っている。

「食料の流れを切られました。これはかなりの痛手です」

「しかも相手はたったの二人……兵の士気も下がるな」

広く豪華に裝飾された部屋での軍議は重い。

「他国に援軍を頼みましょう。少なくともゼンシュバーラとタツカライは我々に味方してくれるかと……」

「それは難しいな。今回の戦争はあくまで私心であるというのが近隣諸国の見方だ。正義という飾りが無ければさすがのその二国も参戦しにくい」

「しかも、ゼンシュバーラは今内政が不安定、タツカライは経済難こつちに手を回す余裕があるとも思えん」

ゼンシュバーラもタツカライもローリアと似たような国である。しかしゼンシュバーラはその圧制に耐えかねた市民が頻繁に反乱を起こしている。

「ついさつき調べただけど……」

突然の生気のないアンネリーの声に、頭を抱えていた男達が一斉に

彼女を見た。

「国民一人につき、拳銃に機関銃一丁・手榴弾5個・ナイフ3本、最低でもこれぐらいはみんな常に常備しているみたい」

アンネリーの顔にも生氣はなく、いかにも病弱そうな表情をしている。そしてその顔が一瞬だけ笑う。その瞬間が妙に色香をかもし出す。

「みんなで戦えば良いじゃない？殺人ごっこぐらい、みんなしたことがあるでしょう？」

その場の空気が変わった。その変わり方は、まさにローリアらしく、

「その通りだ。全国民を総動員すればいい！」

「ああ、何も戦うのは軍人だけということはない」

今までの重い空気はなくなり、活気がついた。そして各々のやるべきことをしに、早足で

皆勢いよく部屋を出ていった。

残されたアンネリーはゆっくり席を立ち、バルコニーにでてローリアを見下ろした。

「ふふ、楽しい……」

アンネリーは今こそその高い地位にいるが、最初からそういうわけではなかった。だが彼女は賢かった。だからここまで登りつめたのだ。そして、戦争という彼女にとっては娯楽の一つに過ぎない事を、今はただ子どものように楽しんでいた。

「アンネリー様」

周りに人の姿はないが、どこからか声が聞こえた。

「なあに？」

「全国民に戦わせるなど、あなた様は一体何を考えておいでですか・
・・・？」

アンネリーの口元に笑みがこぼれる。

「フェリエ、あなたは何でも生まれた時から知っているんでしょ？
そんなくだらない質問はしないで」

「・・・私が知っていることなど、とても小さなことです。あなた様の考えていることには、とても手が届きません」

「そうなの？神族もたいしたことはないのね」
「・・・」

「それより食事にするわ。お腹がすいていたらせつかくの戦争を楽しめないものね」

アンネリーはバルコニーを離れ、食事をしに部屋へと消えていった。

11月28日

太陽暦304年 11月28日

オーヴァルガン新聞 1面

イリユーマVSローリア

双方多大な被害を受け、イリユーマ（デューマ国王）とローリア（アンネリー閣下）は無期限の停戦をすることに合意

イリユーマのガイラ王子の結婚式で、その時のローリアの将軍が結婚相手である貿易商の娘・ティーナ令嬢に対し「娼婦」と投げかけた。将軍は帰路、何者かに暗殺され、ローリアはそれをイリユーマのしたこととして、今回の戦争にまで膨れ上がった。

実際のところ、一体誰が何の目的でローリアの将軍を暗殺したのかは、現在も不明のままである。

当初、魔法大国として知られているイリユーマの勝利が確実であると思われていたが、なんとローリアはほぼ全ての国民が途中から戦争に参加。イリユーマは「一般市民に戦わせるとは」と、嫌悪を隠さなかった。その頃からそれまで順調に勝ってきたイリユーマは思わぬ苦戦を強いられた。しかし、軍事力にばかり頼っていたローリアはイリユーマの戦略によって押されていき、この停戦を最初に求めたのはローリアであった。

この戦争はあくまでこの二国の間で起こった事であり、近隣諸国への影響は極めて少ない。一部の評論家は、「この影響の少なさはイリユーマの処置によるものではないか」と話している。

イリユーマ

死者 184名

負傷者 3055名

ローリア

死者 不明

負傷者 不明

世界七賢者の一人現る?!

先週、ウワダ共和国の一番貧しいとされる村に一人の老人が現れた。その村では疫病が流行っており、村人全滅の恐れもあると言われていたが、突如としてその老人が現れ、村人全員をわずか一日で回復させた。夜が明け、村人が起きだした頃にはすでに老人の姿は無く、村人は皆口々に「賢者様に救われた」と、言っている。

ウワダ共和国…人口100万人、ガツティライ大統領3年前にアガラシから独立。経済は不安定だが元々一つの部族だったので、これからの発展に先進諸国は期待している。

世界七賢者…その存在は全てにおいて不明。しかし、数百ある国のほとんどの神話、童話などに彼らは存在している。

負傷

目を開けると、見慣れた天上が見えた。体を起こそうとしたが、激痛が走り、ベッドに沈んだ。

「……フエイ？」

「はい」

いつも傍にいる存在の声を聞き、ルイスは安心した。

「どうなったんだっけ？」

「体力も魔力も残っていないのに、周りの言うことを聞かず敵軍のリーダー格を倒しに行ったのです」

「ああ、それでこんなに重傷になってるわけね……」

フエイのため息が聞こえる。

「どうかこんな無茶はしないで下さい。私にはあなた様を守る術が無いのです」

「わかってるって。でもこうやって生きて帰ってきたんだし、結果オーライでしょ？」

悪びれる様子も無く、ルイスは頭だけを動かし部屋を見渡す。どうやらハクセンもいないようだ。

「サレオス様はルイス様の援護を必死でやっておられ、やはり重傷を負われました。今はユフィール様のいる病院で治療を受けています」

「そう……っていつかサレオスの事なんか聞いてないよ」

「心配そうな顔をしてらしたので。それと、マナ姫様は包帯だらけのルイス様をみて青ざめていました。けれど峠を越えたことを知り、安堵して涙を流しておられました」

「……今日は随分よくしゃべるね」

「心配そうな顔をしてらしたので……」

「……別に」

それから会話は途切れた。

心中、ルイスは本当に安心していた。自分の勝手にサレオスに重傷を負わせてしまった事で、もしかしたら死んでしまうのではないかと、それに、あのお人よしで同情心の強いマナ姫が気絶、いや、心臓でも止まってしまうのではないかと。

そう、ルイスは本気で心配していたのだ。

「（何で僕が他人の心配なんかしてるんだ……？）」

今度ハクセンにでも聞いてみよう、と思っている矢先に、ルイスの部屋のドアが開かれた。見ると白いタイス、ハクセンがいた。

「目が覚めたか」

「はい。起きることはできないですけど」

苦笑いでルイスは答えた。ハクセンはベッドに上がり、ルイスの足元に腰をおろした。上がった瞬間ベッドが軽くゆれ、ルイスは少し傷が痛むのを覚えた。

「（こんな振動で体が痛むなんて……ほんと重傷なんだなあ）」

ボーっとしながらそんな事を他人事のように考えていると、ハクセンが喋り始めた。

「今よりまともになりたいのなら、目と耳、それに心をよくする」とだな

「??？」

突然の意味不明な言葉にルイスは天井を見ながら首をかしげた。

「お主の場合、まずは耳か」

「あの、それはどういう……」

「他者の声をよく聞くことだ。よく聞くことのできる耳を持っているれば、世に聞こえないものは無い」

「……」

「……どうした？」

いつもなら一言一言何かしら言い返すだろうルイスが沈黙している。

「あ、いえ。……わかりました」

「……やけに素直だな」

今度はハクセンが首をかしげた。それから何の反応もなかったのだが、しばらくするとルイスの寝息がハクセンの耳に届いた。

「まったく、どこまでも自分のペースだな」

「俺は今とても幸せです」

病院のベッドでサレオスは目を細めてそう言った。その言葉はもちろぬユフィールへのものである。

「私はあまり幸せじゃないわ。まったく、よくこれだけ傷ついて帰ってきたものね」

呆れながらユフィールはサレオスの怪我の具合を診ている。

個室になっていて、今は病室に二人きり。そしてユフィールはサレオスを心配して担当医になってくれたのである。サレオスを喜ばせるのにこれほどのあるだろうか。

「男の勲章つてやつですよ」

「あなたが弱いだけじゃないの？」

いじわるっぽく笑うユフィール。しかしその顔は少し悲しそうに見えた。

「まったく、どうして男ってこんなに無茶が好きなのかしら」

「ロマンですよ」

「はあ。あなたって人は……」

知っていた。彼が、ルイスのためにこんなになってしまったのを。思い返せば、サレオスはいつも自分以外の誰かのために剣を振るい、傷ついてきたのではないか。いつも他の誰かを優先させる。

「……どうかしましたか？」

俯いてしまったユフィールを心配するサレオス。余計な心配をかけたまいと、ユフィールは笑顔を作った。

「何でもないわ。それより、ちゃんと安静にしててよね？ じゃないと退院の日が遠のくわよ」

「それだけユフィールさんと一緒にいられる時間が持てると言つて」
とですから、俺は一向にかまわないですvv」
「まったく……」

眉を八の字にしながら、ユフィールは仕事をしに部屋を出て行った。

嬉しかった事

「（えっと……多分この辺に……）」

道に白いじゅうたんの様に雪が積もっている晴れた昼。左手にバスケット、右手に小さな紙切れを持った少女が辺りをキョロキョロ見ながら歩いている。

「（この建物かな……？）」

少女は自信なさげに、大きなホテルのような建物の中へと入っていた。

中に入るとこれまた広い待合室があり、その少し奥に男性のフロントスタッフが立っていた。

「あの、ルイスさんに会いに来たのですが……」

恐る恐るフロントの男性に聞くと、愛想のいい笑顔で対応してもらえた。

少女はエレベーターに乗り、5階まで上っていく。ドアが開き、508号室を探した。一つ一つのドアの間隔が広く、少女は焦る心を抑えようと、ゆっくりと歩を進めた。

ルイスが戦場から戻ってきて早数週間。傷はまだ完治しておらず、最近ようやく自力で生活ができるようになった。それまでは、ユフイールやホテルのスタッフに色々世話してもらっていたのだ。

「あゝヒマ。マンガも全部読んじゃったし…」

ソファで横になりながら、もう何回も読み返している魔術の本を放り出す。ハクセンもフェイも一緒に仲良くお出かけなので、本当の暇人である。

「今度ユフィールさんに図書館の本借りてきてもらおうかな…」
コンコンッ

「はあい。今あけます」

時刻はちょうどお昼時。ランチが運ばれてきたのだろう、と思いドアを開けるとそこには予想外の人物が立っていた。

「マ、マナ?!」

あまりに突然の訪問客にさすがのルイスも驚いた。というか、一国の姫がこんなところに護衛も付けずに来ていいものなのだろう?と、一気に色々な疑問が頭の中に浮かんでくる。

「突然ごめんなさい!でも、あの、私すごく心配で。あ!すぐに帰りますから!」

マナ姫をよく見ると、左手から何やらおいしい匂いが漂ってくる。

「…時間、ないの?」

ルイスは優しく問いかけた。

「え?あ、いえ、そういう訳ではないのですが、やはりお体に障る

と思いますし…」

それと聞き、ルイスの顔に柔らかな笑顔が広がった。

「ちょうどヒマしてたんだ。よかつたら上がっていったよ」

と、マナ姫の腕を引き、部屋へといざなう。マナ姫は突然腕を掴まれたので、いつものように顔を赤く染めている。

マナ姫をソファに座らせ、ルイスは飲み物を持ってこようとしたが、それはマナ姫に止められた。

「私がお持ちします！ルイスさんはゆっくり休んでいてください」
「え？でも…」

ルイスの声も聞かず、マナ姫はちょっとしたキッチンのある方へと歩いていった。しかたがないのでルイスはソファに腰をおろす。しばらくすると、紅茶を二つ持ってマナ姫が戻ってきた。

「ありがとう」

「いえ、私にできるのはこれぐらいですので…」

マナ姫の顔が少しだけ曇る。

「……そのバスケット、何が入ってるの？」

気を利かせたのか、ただの好奇心なのか、ルイスは話を移した。

「あ！そうです。あの、クッキーとドーナツ、それとパンを作ってきました」

そう言いながら、バスケットにかかっていた布を取り、テーブルの上に置いた。そしてお皿を取りにまたキッチンへと行った。ルイスは目の前に出されたそれを見つめながら、心が和んでいくのを感じた。

「お待たせしました」

お皿に綺麗に盛り付けていき、ルイスに差し出す。ルイスはまずクッキーを口に入れた。

「…うん、おいしい」

「本当ですか?!」

「本当本当」

ルイスにおいしいと言われ、目を輝かせているマナ姫をよそに、ルイスはドーナツとパンを食べていき、お皿に盛られた分をあっという間に平らげてしまった。

「うん、ホントにおいしかったよ。ありがとう」

笑顔をマナ姫に送る。マナ姫はまた、いつものように顔を赤くして俯き、小さな声で返事をした。

「……また今度、何か作ってもらってもいい??」

「!はい!今度はもっとあっさりしたものを作ってきます!」

マナ姫は本当に嬉しそうな顔をしている。そんなマナ姫を見て、ルイスは今までに無いほどかわいい、と思った。

ルイスはどちらかと言えばモテる方に分類されるが、学校にいた時も、さして女の子には興味が無かった。何かもらったとしても、今

のような感情は生まれなかった。
そんなことを考えていると、やはり自分は少し変わったんだな、と
ルイスはつくづく思ったのだった。

「あ！もうこんな時間…私、もう帰ります」
「え？もう？」

マナ姫が席を立ったので、ルイスも立った。

「また、お伺いしても良いですか？」
「…うん、今度はいつ来れるの？」
「えっと…一週間以内には来れるかと…」
「…わかった。下まで送っていくよ」

ルイスは止めるマナ姫の言葉を無視して無理やりホテルの玄関まで
見送りをした。

そして部屋に帰ってきてふと、先程自分の言った事を思い出す。

『え？もう？』

窓の外を見るとマナ姫の後ろ姿があった。

「……（僕、変じゃないかな）」

夕食の時間になって、ようやくハクセンが戻ってきた。

「おかえり」

「ああ…そのバスケットは？」

ハクセンはテーブルに置かれていたいい香りを発するバスケットをいち早く発見した。

「今日マナが来たんだ。で、クッキーとドーナツ、パンを作ってきたわけ」

「ほう、一つもらってもいいか？」

「え？…でもさ、ハクセンってこういうの食べても平気なの？」

「？ああ。サソリや毒蛇も食べれるからな」

「いや、でもさ、やっぱりこれ人間のための食べ物でしょ？だからあんまり口に合わないと思うよ？」

「……」

「……」

しばしの沈黙。しかも見つめ合って。ルイスは嫌な汗をかいた。

「なるほど。せっかくマナがお主のために作ってきてくれた物を、

他の者には食べさせたくないと……」

「ち、違う！…別にそういうわけじゃ！」

ルイスは何やら必死にハクセンの言い分を否定する。そしてお皿に適当に（しかも少しだけ）盛り付け、ハクセンに渡した。

「はい。じゃあ僕はもう寝るから」

ふてくされたかのように、ルイスはベッドに潜り込んだのであった。

突然の手紙

ようやく寒い冬を越した頃、オーヴァルガン国立アカデミーの五年生になる金髪のベルクスという少年のもとに、一通の手紙が届いた。それは忘れもしない、彼がいつでも対抗心を抱いていたルイスだった。

「…果たし状か？」

「お前な…」

ベルクスのあまりの真剣な表情にテムイは呆れた。二人はテムイの部屋でくつろいでいた。その手にはそれぞれかなりハイレベルな本を持っていたわけだが、そんな時、速達でルイスからの手紙が届いたのだ。

「とにかく開けてみる」

「ああ」

ベルクス、テムイへ

久しぶり。元気にしてる？僕は中々充実した日々を送ってる。まあ細かい話は会った時に話すとして、とりあえず5月の下旬までにイリユーマの王都に来てね。もう校長にはデューマ国王から話がいってると思うから、学校の心配はないよ。じゃあイリユーマで会える日を楽しみにしてるね。

ルイス

「…」
「…」

二人は今一度この突然すぎる手紙を読み返したが、いまいち主旨が掴めない。

「あのヤロウ…バカにしてんのか？」

ベルクスは静かに怒りを放ち始めた。

「しかし5月の下旬までって…何かあるのか？」

テムイは少し考え、そういえば！と思い出した。

「たしか大会がある！ええっと…なんだったか…とにかく世界中から集って戦うんだ！ルイス、それに出る気じゃないか？」

それを聞きベルクスは思わず、

「はあ？」

とマヌケな声を出した。それもそうだ。今ベルクス達は17。そんなお子様が世界大会らしきものに出られるわけが無い。もちろん実力は重々承知だが、世界のレベルというのはそんな生易しいものではないことぐらい、負けん気な彼でさえわきまえている。

「多分そうだ。ルイスならやりかねない」

「…た、たしかに。学校辞めていきやがったあのルイスなら…」

二人はそれぞれ深い深いため息をついたのだった。

「ねえマナ、5月の終わりからイリユーマで始まる大会知ってる？」

マナ姫はルイスの質問に顔をあげた。

「5月の終わりですか？……あ！イルハウ大会があります！」

「そうそう」

「その大会がどうかしましたか？」

「僕も出るんだ」

ルイスは笑顔でそう答えたが、それを聞いたマナ姫は顔を引きつらせた。それもそうだ。ルイスはようやくあの戦争の傷が癒えて、今こうしてマナ姫にまた魔術を教えに来ているのだから。

「あ、の……」

「後2ヶ月はあるからその間に全回復するよ」

「ですが……」

マナ姫の表情は曇る。もちろん彼女としては、そんな危険な大会には出て欲しくない。

イルハウ大会は3年に1度開かれていて、3人グループで戦っている団体戦。グループの絶対条件は一人必ず医術を心得ている者がいること。なぜなら大会中に負った全ての傷は、グループ内で手当てをしなければならぬからだ。それ故死傷者が多数でている。しかし、だからこそこの大会に勝ち残ったグループというのは名誉も賞賛も与えられる。

「……」

「大丈夫だよ。僕も、それに一緒に出るベルクスってのもかなり強いから。医術担当のテムイなんて医学会じゃかなり有名なんだ」

ルイスはなるべくマナ姫に優しく話した。それは彼女が今抱いている不安を少しでもなくしたいと思ったからだ。

「大会中、マナにお願いがあるんだ」

「…何でしょうか？」

イルハウ大会は戦争とは違う。ルイスが参加したいと思う気持ちも分からなくとも汲み取れるマナ姫としては、自分に出来ることがあるなら精一杯やろうと決めた。

「大会中、夕食だけでいいからさ、マナの作ったものが食べたい」

「え？」

「そしたら多分、もっと頑張れる…」

少しだけ、本当に少しだけ、マナ姫にはルイスが照れてる様に見える。そしてそれはマナ姫を喜ばせるのに十分すぎるものだった。

初イリユーマ

「すっげーな」

ベルクスは周りをキョロキョロと忙しく見渡している。オーヴァルガンとは違い、何となく都会、という雰囲気飲まれていた。隣を歩くテムイもベルクスほどでなくてもイリユーマの独特の雰囲気に興味深々だった。

「ベルクス、あんまり勝手に動くなよ。こんな人ごみではぐれたらシャレにならないからな」

「わーってるって。それよりよ、イリユーマの王都に来たのはいいとして、どうやってルイスを探すんだ？」

ベルクスの至極単純な質問に、テムイは顔を青ざめた。

「どした？末期の病人みたいだぞ？」

ベルクスはケラケラとテムイを指差しながら笑った。

「笑い事じゃないだろ！どうしてそんな大事な事に気付かなかったんだ…こんな広い初めての国でどうしろっていうんだ…」

テムイは頭を抱え始めた。ベルクスはそんなテムイを無視して珍しい店を見てまわり始めた。

「こらベルクス！どこ行くんだよ！？」

「悩んでたってしゃーねーだろ？それより見てみるよ！錬金の店もあるぜ！」

ベルクスは目を輝かせて店の中へと入っていった。テムイも仕方なくその店に入り、中でじっくり考えることにした。

「なあなあオヤジ、まさかこれこの前ライオンが発表した論文か？」

ベルクスは一冊の分厚い本を手に店主に聞いた。

「ああそうだよ。お前さんライオンを知ってるのか？」

「あつたりまえだろ…あ！ここにもライオンが書いたのがある」

「実はあの人のファンでね。あの人の論文はいつも完璧であれば芸術の域だと思ってる」

店主はパイプをふかしながらどこか遠いところを見ている。

「オヤジ！わかってんなあゝあれ知ってるか？13年前にライオンが発表した…」

「ポリアンタンの法則か？」

「そうそう！」

苦悩するテムイをよそに、ベルクスと錬金の店の店主は意気投合して小難しい話に花を咲かせている。

「ベルクス」

「マジで！？これもらっていいの؟؟」

「ベルクス！」

テムイの声にようやく気付いたベルクスは不機嫌そうな顔をした。

「んだよ？今オヤジと話してんだよ」

「お前な…それより、この辺回ってみてルイスの情報集めてくるから俺が戻るまでここにいろよ?」

「おう!遅めに帰ってこいな!」

ベルクスは邪魔者なしに店主と話すことが出来ると解釈し、満面の笑みでテムイを見送ったのだった。テムイはため息をつきながらもルイスの手がかりを探しに込み合っている街へと繰り出したのだった。

「ユフィールさ〜んv v」

「…サレオス、すっごく恥ずかしいからちよつと離れてくれる?」

大きな時計台の下で待ち合わせていた二人。サレオスはユフィールが現れていきなり抱きついたのだった。そしてユフィールの言葉に従い取り合えず離れたサレオスだが、手はちゃっかりしっかり握っている。こつ出来るのも、二人がはれて正式に恋人同士になったからである。

「今日はどこ行きましょうか?」

「この前言つてた公園へ行ってみましょう?」

二人は仲良く歩き始めた。道すがら二人を振り返ってみる人が少なくなかった。ユフィールの優しい美しさと、中身とは違ってミステリアスな雰囲気をもし出すサレオス。人目を引くには十分なものだった。と、その二人の道の先で小さな人だかりができていた。

「どうしたのかしら?」

ユフィールは人の合間を縫って進んだ。

「ユ、ユフィールさん、ちょっと待つ…」

サレオスの声を聞かずにユフィールは人だかりの中心へと到達した。そこには母親らしき女性が子どもを抱いて青ざめていた。

「すみません！誰かお医者様を呼んできてください！」

女性の必死の声に周りは困惑してざわめいている。ユフィールは慌てて女性に駆け寄った。

「落ち着いてください。どうしたんですか？」

「子どもが…私の子が…」

女性は片手を子どもに、もう片方の手でユフィールの服を掴んだ。

「どこか怪我を？」

「違います。元々病弱な子で…でも今日は体調がいいからと外に出たんです…そしたらいきなり倒れてしまって…」

「薬は持ってきてないんですか？」

「はい…今日は本当に元気そうだったので必要ないかと…」

ユフィールは困ってしまった。彼女の担当は外科である。もちろん他科についても知識があるが、どうやらこの子どもも特殊な病気持ちらしい。病名を聞き、彼女の記憶によればそれは1万人に1人、発症するかしないかのものだった。

「ユフィールさん！どうしたんですか？」

人ごみを掻き分けてようやくサレオスが現れた。

「サレオス！この先に病院があるから内科の先生を呼んできて！」

「え？わ、わかっ……」

「ちよつと失礼します」

サレオスが慌てて走り出そうとした時、1人の色白な少年がユフィールの方へと近づいていった。そして子どもの状態を見て、一発で病名をあてたのだった。

「…センガス症ですね？」

「は、はい……」

少年はふと、買い物袋を持ったおばさんに何を持っているのか聞いた。

「リンゴにジャガイモにティック、それとトマトジュースよ」

「…ティックとトマトジュースをいただけますか？」

おばさんは急いで袋からその二品を出して少年に渡した。

「あなた、何をする気？」

ユフィールは怪訝な顔つきで少年を見た。少年はそれには答えず持っていたカバンを開ける。その中には多種に渡る医療器具、それに薬品が入っていた。

「医師師なの？」

「まだ学生の身ですが、腕は確かです」

薬品と、先程おばさんから受け取ったものを混ぜながら少年は答え
た。

「よし。取り合えずこれを飲んで一時的に今の症状を抑えます。そ
れからこっちの注射を打ちます。その後にかかり付けの病院へゆっ
くり運びましょう」

「は、はい…」

渡された見た目はほとんどトマトジュースのような薬を母親は子ど
もに飲ませた。それから少年は注射を打った。

「すみません」

「ん？俺？」

サレオスは少年に呼ばれた。

「なるべく振動をなくして運んでくれますか？」

「お、おう」

サレオスは子どもを優しく抱き上げ、母親にユフィール、そして少
年と共に病院へと向かった。

「…適切な処理ですね」

子どもの担当医は息を吐いた。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

母親は少年の手を強く握って頭を下げた。少年は照れたように応対し、すぐに病院を去ろうとした。

「ねえ」

病院の入り口のところで、ユフィールは少年を呼び止めた。

「もう行っちゃうの？お礼がもらえるかもしれないわよ？」
「別に、そんなのが欲しくてやったわけじゃないので…」

少年はさっさと病院を出ようとしたが、またユフィールがとめた。

「あなた、名前は？」

少年の正面に回り、目線を合わせて聞いた。

「え、っと…テムイです」

「テムイ君？つてもしかしてあの！？」

ユフィールは驚きの声をあげた。そこにサレオスがやってきた。

「どうしたんですか？そんなに声あげて」

「テムイ君よ！去年新薬の合成法を発見した！」

「テムイ？どつかで聞いた事あるなあ」

サレオスは首をかしげた。そして記憶をさかのぼり、1人の少年を思い出した。

「あ！ルイスが言ってたあのテムイか？！」

「ルイス？」

テムイはその名前に反応した。

「あの、もしかして黒髪黒目のルイスの知り合いですか？」

「ええそうよ。私はユフィール、こっちはサレオス。よろしくね？」

「よろしくな！ってかあのルイスの友達ってことだろ？アイツにしちやまともなダチがいたもんだな」

真面目に感心しているサレオスを見て、テムイはたしかにそうだ、と思わず笑ってしまった。

「俺ルイスに呼ばれてもう1人の友達とここに来たんですけど、肝心のルイスの居場所知らなくて…」

「なんだそりゃ？まあアイツらしいって感じだな」

「今の時間なら国立図書館で何かの研究してるはずだから、そこに行ったら会えると思うわ」

ユフィールは親切にも地図をかってテムイに渡した。テムイは重々お礼を言い、二人と別れたのだった。

そして文句を言っているベルクスの腕を引いて、ルイスがいるであろう国立図書館へと向かった。

再会

いつも通り図書館の四人用の机を一人で使っていたルイスのもとに、懐かしい顔が現れた。

「見つけたぞ。久しぶりだな」

「テムイ！」

ルイスは思わず声をあげてしまい、静かな図書館によく響いた。

「うつせーんだよ。まったくガキじゃあるまいし」

「ベルクスも…よくここがわかったね」

ルイスは机を片付け、二人に席をすすめた。

「ユフィールさんっていう美人に教えてもらったんだ。それより何調べてんだ？」

テムイは重ねてあった本を手にとりパラパラとめくっていく。

「そっか。後でお礼言っておかなきゃ。今は封印術についてちょっと研究中なんだ」

「へえ〜。お前が研究するなんてよっぽどレベル高いんだろっな」
ベルクスは嫌味っぽくいう。二人とも変わらないでいることに、ルイスは微笑んだ。

「てめっ、何ニヤけてんだよ。気持ち悪い」

「別に。それよりちよっどいい時期に来たよ。そろそろ申込締切な

んだ」

ルイスは身支度をし始め、二人を連れて外へとでた。

「ルイス、やっぱりお前の目的ってイルハウ大会か？」

「そうだよ。よくわかったね、さすがテムイ」

ルイスにとって慣れた王宮への道を三人は歩いていく。

「お前さ、バカだろ？世界中から参加してる大会だぜ？」

「わかつててここまで来たベルクスもバカなんじゃない？」

「ああ！？てつめえ相変わらずの根性だなおい！」

「あんまり道端で騒ぐな。はずかしい……」

一年前までは日常的だった三人のやり取り。ルイスは妙に嬉しかった。ただ唯一変わったのはルイス自身。前ならこんなやり取りを楽しいなんて思ったことなど微塵も無かったのに、今は楽しく感じていた。

王宮の少し手前で受付はなされていた。大広場だというのに、申込をする者たちでそこはごった返していた。

「すげえな……今日中にあの受付までたどり着けるか？」

「大丈夫だよ。人がいっぱいいるけどスムーズに進んでるから」

「というかルイス。俺達は強制参加か？この大会死傷者続出なんだぞ？」

テムイの質問にルイスは笑顔で、

「当たり前じゃん？もうマナにも言ってるから今更引けないし」

と答えた。

「マナ？誰だよそれ？」

数秒おきに一步步進んでいく列だが、受付までの道のりは遠い。しかも列に並んでいるのは皆大人ばかりで、ルイス達は周りから少なからず注目されていた。

「イリユーマのお姫様だよ。今僕が魔術教えてる」

「は！？お前そんなことしてんのか？？」

「まあね」

ルイスの得意げなものの言い方にテムイは疑問を持った。何に対しても満足できないでいたあのルイスが、お姫様一人にこんな態度を示すと言うことは…

「へえ。ルイスそのお姫様といい感じなんだ？」

「え？いや、別にそういうわけじゃないよ。ただ向こうは僕のこと好きだけど」

「何でそんなのわかんだよ？」

「ベルクスには説明したってわかんないよ」

からかうように話すルイスにベルクスはまたケンカごしになったが、それはうまくテムイに制された。

「代表者のお名前をここに記入してください。それと残り二人の方のお名前はこちらに」

ようやく目的のところにとどり着き受付の人に紙を渡された。さらさらと書いてまたその紙を戻すと今度は銀製の番号札を受け取り、

受付は終わった。

「簡単だな…こんなんでいいのか？」

「深く考えたつてしようがないよ。それより、僕の家案内するよ。二人とも長旅で疲れたでしょ？」

ルイスのこの言葉に、二人は動きを止めた。

「？どうしたの？」

「お前…ほんとにルイスか？」

ベルクスはルイスを指差しながら尋ねた。

「そうだけど…何？」

「お前…変わったな…それとも熱でもあるのか？」

テムイはルイスの額に手を置き、もう片方の手はルイスの脈をはかっていた。

「…なんなら一発特大の灼熱玉をだすけど？」

ルイスは怖いほどの笑顔を二人に向けた。すると二人とも黙って静かにルイスの後についていったのだった。

あまり時間をおかず、三人はルイスの家に着いた。ベルクスとテムイはまずその外観に驚いた。たかだか十六の子どもが住むにはあまりに豪華だったのだ。

「何やってるの？早く入んなよ」

驚きを引きずりながら二人は五階のルイスの部屋までいった。部屋

も外観に見合うだけのかなり良い部屋だった。と、そこに一頭の白いタイスがいることにテムイが気付く。

「へえ。タイスなんて持ったのか」

「ん？ああハクセンね。持ってるっていう表現は合ってるよ。いってもらってる、っていうのが正しい」

「ほお、少しは成長したか」

「ええ。それなりに」

テムイはルイスとハクセンというタイスを交互に見た。何度見ても、普通に会話をしている。この異常にベルクスも嫌でも気付かされる。

「いや、タイスは喋らねえだろ」

ベルクスの虚しい一人ツツコミが入り、ルイスはようやく今の状況を把握する。

「あ、ハクセンって古代獣なんだって。耐魔術の能力も持ってる」

ルイスの説明にテムイは興味深そうに頷き、ベルクスはテンションをあげた。

「すっげーな！俺も欲しい！！」

ベルクスはハクセンに近づき目を輝かせた。

「古代獣ってそうそういないみたいだよ。ま、日ごろの行いがいいから僕は出会えたっていうか」

「キモイんだよ……てめえは黙ってる」

ベルクスとルイスの間に怪しい空気が流れ、テムイはため息をついた。一体どれだけこの一緒にいて疲れる二人に付き合えばいいのか、と。

三人が会って程なくして、イルハウ大会が開催された。参加数は軽く五千組を超えていた。大会に参加中は特設されたホテルに泊まらなければならず、三人はこれから約二ヶ月続くこの大会のため、適当な練習をして臨んだのだった。

大会中

スタダンが一仕事終えて歩いていると、こんな時間にするはずのない匂いに気付き、体の向きを変えた。そして行き着いた場所でマナ姫が専属のシェフを横に調理場で立っていた。

「何を作っているんですか？」

「わっつー!!」

スタダンの突然の声にマナ姫は驚きの声をあげ、シェフはその反応を笑った。

「もう、驚かさないで下さい」

「これは失礼を。ところで、それはもしかするとまたルイス君に？」
最近ではよくある事。しかもイルハウ大会が開催されてからはほぼ毎日、マナ姫は忙しいにも関わらず、こうして一生懸命料理をしているのだ。

「そ、そうです」

少し頬を赤くしてマナ姫は答え、また料理を再開した。

「本当に姫は覚えが良いですよ。スタン様も今度頂いてみてはいかがですか？」

シェフは楽しそうにスタダンにマナ姫の上達っぷりを話しながら姫に料理を教えた。

調理場をあとにし、中庭へと出てきたスダンはセリアーナ后とティーナ妃と一緒に楽しそうにお喋りをしているのに気付いた。

「あらスダン。あなたも一緒にティータイムはいかがですか？」

セリアーナ后が優しくスダンを手招きし、彼はお辞儀をしてイスに座った。

「最近ようやく落ち着いてきましたね。仕事の疲れが溜まっているではありませんか？」

ティーナ妃がカップに紅茶を入れながらスダンを気遣った。彼女が言っているのは先のローリアとの戦争の事である。戦争が終わったからといってすぐにもとの平穏に戻るわけではない。一家の大黒柱を失った家庭も少なくなく、戦後のケアにスダンは毎日頭をフル回転させていたのだ。

「お気遣いありがとうございます。運がいいのか悪いのか、今年イールハウ大会が開かれたので経済面でかなりの回復がみられます」
「けれど、あの大会は死傷者が多数です……」

ティーナ妃は心配そうな顔をしてスダンを見た。セリアーナ后もまた、スダンを見た。

「心配には及びません。今年からルールを新しくしたので死傷者の数は絶対的に減ります。現に、二週間たった今までで負傷者はいまますが死者はでていません」

戦争のあとでのこのような大会は国民に不快感を与えかねないという議会の決定により、急遽新ルールが発案されたのだ。もちろんセ

リアーナもティーナもそれを知っているが、やはり不安は消えない。

「なんのトラブルもなく大会が終わって欲しいですわ」

二人はか弱い笑顔でそういうと、暗い話題を避けて楽しく話し始めたのだった。

「シンドオ〜……」

「年じゃないんだからもっとシャキツとしてよ」

この二週間勝ち抜いてきたルイス達は新しいちよつと広い部屋で体を休めていた。

「んな事言っただってよ〜、こう毎日体動かしてたらやっぱ大分くるっしょ」

ベルクスのグチに、一体何がくるんだ、とツツコんでやるうかと思っただルイスだったが、それも面倒なので無視した。そんな態度を取られたベルクスは少しムツとしてルイスをからかって遊ぼうとあのネタを持ち出した。

「今日はマナちゃん何作ってくるのかなあ」

「ベルクスの食べる分はない」

「そう思ってるのはお前だけだろ？マナちゃんは俺やテムイのためにも料理作って……」

「シュッ！！」

「おわっ！……！」

ベルクスが話し終わる前にルイスが手に持っていた分厚い魔術書が恐ろしい速さで彼めがけて飛んできた。

「てめっつ 危ねえだろうがよ！」

「口は慎んだ方がいいよ」

「はいはい。今日もその辺にしといてよ」

手をパンパン、と叩いてテムイが二人を制した。

「まったく、よくこうも毎日飽きないでケンカするよな？」

「コイツがウゼんだよ！」

「ベルクスとうざいが同意語だと思っけど」

いつもの事とは言え、大会で体力を消耗しているにもかかわらずよくケンカするだけの余力が残っているな、とテムイな内心感心してしまった。

「それよりこれ。二人も飲んどくといい」

テムイはお猪口にある液体を入れて二人に差し出した。

「なんだこれ？」

「疲労回復のクスリ。今さっき作ったんだ」

へえ、とベルクスがお猪口を持ってクイツと飲むと、すごい苦味を感じて思わずむせてしまった。

「す、すげえ……なんか効きそうだな」

「苦っっ」

「そりゃ効くよ。俺が作ったんだから」

テムイがお猪口片手に手元にあったりモコンでテレビをつけ、大会専用のチャンネルに切り替えた。そこには明日の対戦組み合わせが流れていた。

「……次の対戦相手は……」

「召喚術師と剣術師だね。医師師は…回復術は心得てないみたいだから楽勝だね」

医師師には二つのタイプが存在する。医師と魔術医だ。ユフィールなど、魔術の医術ではなく、あくまで科学的に治すのが医師。魔術医は魔術の力をもってして傷を治す事ができるものを指す。召喚術師に襲われたサレオスを回復させたルイスの魔術のような働きの事だ。ルイスはテムイに教えてもらったりしていたので、本当に初歩的な回復魔術が出来るだけだが、テムイは相当な腕を持っている。しかし、魔術として回復をすると体力等の消耗が激しいのでテムイはよほどの事がない限り、普通に治療をするのだ。

「よく回復術の出来ないヤツと組んでこまできたなあ」

ベルクスが変に感心している。というのも、激しい戦闘ではやはりすぐに回復が望める魔術医がいいのだ。

「それだけ召喚術師と剣術師の腕がいいってことだろ？ま、俺はいつも通り傍観してるから関係ないけど」

ルイスとベルクスの強さは大会関係者だけでなく、巷にまで広がっている。戦闘中テムイはいつも二人に任せているので暇を持て余しているのだった。

「それもあるけどやっぱり魔術医は人数が少ないからね。テムイは本当に貴重だよ」

ルイスがそういうと、テムイは少しだけ照れた。

「何にせよこの俺がいるんだから優勝は間違いねえな！」

「はいはい。勝手に言っただけ？」

「あん？てめえまたケンカ売ってんのか！？」

そしてまたルイスとベルクスの低次元なケンカが始まったのだった。

大会中（後書き）

HPを持ちたいと思う今日この頃・・・

残者**

「ただいまあ」

ゼンはルイスと同じ黒髪を濡らしながら帰ってきた。この日突然の大雨に見舞われ、嵐となる可能性があるため早めに学校が終わったのだ。

「おかえりなさい。ああ、そんなに濡れちゃって。早くお風呂に入って体を温めなさい」

母親がタオルを片手にパタパタと玄関へと来て、雨で濡れたゼンを軽く拭いてやった。ゼンは母親の言つとおりにさつさと風呂場へいき湯船につかって冷えた体を温めた。風呂から上がると母親は台所でなにやら温かいものを作っている。ゼンは居間へいきテレビを付けた。

「……イルハウ大会？」

聞いた事のあるような無いような、ゼンはそのチャンネルを見入った。どうやら魔術大国のイリユーマで開催されているらしい。割と歴史のある大会で、優勝者には望みのものが与えられるようだ。まああくまで出来る範囲内ではあるが。ゼンはボーっとそのテレビを見てると、画面に見覚えのある人物が映し出され、思わずテレビに顔を近づけた。

「今人気が出てきているルイスチームです。彼はイリユーマの姫君であるマナ様に魔術を教えているという情報が入っています」

「いやあ、彼の強さには我々魔術学会も驚きと動揺を覚えます。な

ぜこのような逸材を我々が見つけれなかったのかと悔やむ声もありません」

「なるほど。そして錬金術師であるベルクス選手もまたかなりの使い手です。医術師であるテムイ選手は今まで一回も戦闘に参加をしていないのでその医術力がどれほどなのか知る事は出来ませんが、ルイスチームの一員ということはかなりの期待が持てそうです。続きましては……」

声を失う、目を丸くするとはまさにこの事だろう。ゼンは開いた口がふさがらない。

「ゼン、スープができたわよ。……ゼン？」

「あ、う、うん」

ゼンはテレビを消して食卓についた。出されたのは野菜たっぷりのスープだった。

「ねえ、ママ？」

「なあに？」

ゼンは聞こうかどうか迷ったが、意を決して口を開いた。

「お兄ちゃんてさ、今イリユーマにいるの？」

ゼンのその問いかけに母親は雑誌を読もうと伸ばした手を止めた。

「……ど、どうしたの急に。お兄ちゃんは」

「さっきテレビに出てたよ。イルハウ大会っていうのに参加してるみたい。知ってた？」

ゼンは真つ直ぐに母親を見た。その視線に耐えかねた母親はまた台所に立って洗い物をした。

「どうして黙ってるの？」

「ゼン、もうお兄ちゃんの話は……」

「大丈夫だよ。僕はお兄ちゃんみたいに出て行ったりしないから」

ゼンの言葉に母親は振り返った。その顔は疲れに似た表情をしていた。

「パパの後継いで、ちゃんと立派な船乗りになるから。だからそんなに心配しないで？」

優しく言つと、母親はゼンを強く抱きしめた。ゼンが母親の背中をさすってやると、少しだけ声を出して、少しだけ母親は泣いた。

部屋に戻るとそこには船の模型や海図といったものがいっぱい置いてあった。ゼンの家は代々船乗りの家系で、曾祖父の代で町の海を仕切る地位についた。そして祖父の代では海だけでなく、町を取り仕切る長になり、その息子であるゼンの父親は今、オーヴァルガンの漁業組合長をしている。町を仕切る祖父に国の海を仕切る父親。ゼンの兄であるルイスは至極当たり前のように無言の期待がかかっていた。

「またこんな本を借りてきたのか！？お前は政治家になるんだ！」

よく父親が兄から魔術の本を奪い取り怒鳴り散らしていた光景が目に見えかぶ。

「ゼン、絵が描きたいなら二人に気付かれないようにするんだよ？」

ゼンは絵を描くのが好きだった。小さい頃はよくクレヨンや絵の具で服を汚したりしていた。その姿を笑って見ていた両親は、ゼンが成長するにつれて少し怒るようになった。

『また絵なんか描いてるのか？そんな下らない事しないで勉強をしる』

そういわれた日、ゼンは布団に包まって泣いた。夜中、両親が寝静まった頃にルイスはゼンの部屋へ来た。

『これを目に当てて。そのままにしてたら目が腫れるよ？』

手渡された濡れタオルをゼンは目にかぶせた。

『お兄ちゃん……』

『何？』

『僕、絵描くの好きなんだ』

『うん、知ってる』

『真っ白な紙に、僕が色をつけるんだ。すごく綺麗に。まだまだ下手だけど、でもすごく楽しいんだ』

『うん』

兄はゼンのベッドに座って話を聞いていた。一言一言、ちゃんと聞いていた。

『でもね、パパがね……』

また涙がでてきた。今日言われた、あの言葉を思い出して。

『下らない、って……言っ、た、んだ』

ゼンの涙が枕に伝い、後を残す。ルイスはゼンの頭に手を載せて優しく撫でてやった。

『ゼン、僕のいうことをよく聞いて』

目に当てていたタオルを持ち上げ兄を見ると、とても優しい目をしていた。

『絶対に戻ってくるから。今よりずっと強くなって、お兄ちゃん戻ってくるから。だからそれまで、もう少しかこの家で辛抱してて』

兄には夢があった。ゼンが絵を描きたいと思うような、自分の夢が。何度父親に本を奪われ、怒鳴られ、時には叩かれても、兄はその夢を手放そうとはしなかった。

『……うん。わかった。僕待ってるよ』

兄はオーヴァルガンのトップ校に入学した。しかし魔術の道を選んだため、両親とはその後もよくもめた。兄に会ったのがどれくらい前か覚えていないが、その時にした約束だけは覚えている。どちらも幼くて、どちらも泣いていた。

次の日、案の定嵐がやってきたので母も父も家にいた。ゼンは二人の目を盗んでテレビを見た。そこにはイルハウ大会で勝ち進んでいく兄の姿が映し出されていた。

「お兄ちゃん……」

確実に兄は進んでいた。兄の夢と、ゼンのために。

残者** (後書き)

まあそんな知識もスキルもなく、何より気力がありません。

準決勝（前書き）

魔法と魔術の違い？

準決勝

「……おもしろいね」

ルイスは子どものように笑っている。

「はあ？　たくこの状況のどこが笑えるんだよ」

ベルクスはテムイの近くにぐったりと座っていた。

今ルイス達は準決勝を戦っている。相手は魔術師と召喚術師と医術師。医術師はテムイと違って暇そうにさつきから欠伸をしている。

「そろそろ終わらせてよ。僕もう暇だし眠いしどうでもいいし……」
「わかってるって。もうちょい待ってる」

医術師の不平を召喚術師が遮った。そして右手を前に出し、新しい召喚獣を呼び出そうとしたその時、ルイスはすかさず炎の玉を繰り出し、さらに雷系魔法であるラインを連続的に放った。

「杖無でここまで出来るとは、中々ですね」

相手の魔術師は無表情でそう感想を言ったが、一応感心はしているようだ。

「……」

ルイスは次の手を考えた。相手は杖を持っているが自分より術を唱えるのが早く、すぐにガードされてしまう。ということは、相手の魔力を上回ってヒュージを破ることが前提となってしまう。ヒュー

ジを破るだけでもかなりの魔力を消耗すると考えられるのに、その後術者を倒すだけの魔力を取っておかなくてはならない。それも一発で片付けなければ、後ろで欠伸をしている医師師に回復術を發動され、結局無駄骨になる可能性が出てきてしまう。

「ベルクス、少しは役に立ってよ」

「うるせえ！大体お前が俺を困みたいにしたのが悪いんだろうが！」

ルイスはため息をつき、ベルクスは舌打ちを、そしてテムイは無言でベルクスの治療をしていた。

「困だなんて人聞きの悪い……少し相手の的になってもらっただけなのに」

「それを困って言うんだよ！！」

「ベルクス！大声なんか出すな！」

テムイの指示にベルクスは首をすくめて大人しくした。相手選手の召喚術師は軽く笑った。

「やっぱり子どもだねえ。何か弱いものいじめしてるようで良心が痛むな」

「「は？」」

ルイスとベルクスの声が珍しくかぶった。しかも声のトーンまで。

「誰が子どもだよ……」

「誰が弱いんですか？」

ベルクスはゆっくり立ち上がり、少し前へ出た。その表情は小ばか

にされたのを黙ってはいられない感じで、ルイスもまた同じ顔を相手選手に向けていた。

「本当の事をいっただけだろ？」

召喚術師はまだ余裕の笑みを出しているが、仲間の魔術師はこの時若干の違和感を察知していた。しかし、それが何なのかを判断する事までは出来ず、この大会で初めての冷や汗をかいた。

「ベルクス、この前話してたあれやってみる？」

「どれだよ？」

「一番最近話してたので」

ルイスがそういつた瞬間、相手選手三人を紫色の線が楕円型に囲んだ。

「何だこれ？」

「ちっ！」

召喚術師と医術師はぽかん、としているが魔術師はこれが何なのかを知り、急いで対抗術を発動させようとした。

「ば〜か。おっせーんだよ」

「何?!」

紫の線から、金属的な壁が伸びてきて三選手を包み込んでしまった。これには会場からどよめきが出てきて、審判もどうしたものかと三、四人集って話をしだした。そこにルイスがぼつりと、

「あれ、一時間で酸素なくなります。それでなくてもあの中は五感

を遮ってしまうので精神的に一時間も持つかどうか」

「しかし、中の様子を伺う事ができないのに勝手に判決を出すのは……」

審判達がそう言うと、待つてましたとばかりにルイスとベルクスは術を唱え始めた。すると金属的な壁が透けていき、中の状況を現した。そこには、恐怖と疲れ、焦りの表情をした三選手がいた。

「ついに決勝ですね。がんばって下さい」

人はいるが静かで大きな廊下に二人はいた。不安な気持ちを抑えてマナはルイスにこの大会最後の手料理を渡した。

「……そんなに心配しなくても絶対勝つよ」

ルイスはマナの気持ちをすくい取って優しくいった。そのルイスの優しさに気付いたマナはそれまでの緊張を綺麗になくし、笑顔でルイスを見送ったのだった。

準決勝（後書き）

気分です。ごめんなさい。

決勝（前書き）

（何となく名言）

His peasant, who finds peace
in his home. Goethe speaking

決勝

「あんなお子様チームが決勝までくるなんて、この大会の質もかなり下がったって認識していいんだよね？」

「そうね。でもあの子達将来絶対良い男になるわよ。今のうちに知り合っておかなくちゃ」

「へえ、お前って年下が好みなんだ？アーキルが聞いたらあの無表情な顔がちょっとだけ動くかもな」

「それおもしろいかも！今度言ってみましょう」

遠くに対峙しているルイスチームを眺めながら、同じく決勝まで勝ち進んできたアーキルチームが世間話に花咲かせていた。

「何か向こうのチームかなり余裕ぶっこいてるけど」

「まあ実力はあるからしょうがないよ。今までの戦いを見ても、一度だって全力出してないみたいだし」

ベルクスとルイスは自分達が甘く見られている事を知り若干不機嫌な顔をしていた。

「それより向こうのリーダーのアーキルとかいうヤツ遅っせーな。

びびってんじゃねえの？」

「不戦勝だなんて何か勝った気がしない。どうあってもアーキルって人には出てきてもらいたいね」

「二人とも少し落ち着けよ。さすがにもうそろそろ来るだろうし」

いつもより発言の多い二人の気持ちをテムイは感じていた。ルイスとベルクスが早く相手チームと戦いたがっている事を。それと言うのも、相手チームのリーダーであるアーキルは名の知れた魔術師、

今向こう側でお喋りをしている男が錬金術師というまさに二人が戦うには自分の実力を見極めるいい対戦相手だからである。

「ええ、会場にお越しの皆様。ただいま連絡が入りました。アーキル選手ですが、どうやら昨晩食べた貝類にあたり、現在自室にて横になっっているようです」

突然のこのアナウンスに会場はどよめいた。ルイス達はどよめきよりも呆れの方が強く、そして同じチームである錬金術師のザイドと医師師のピュアは恥ずかしさで顔を伏せている。

「何でアイツだけあたってたんだよ……」

「知らないわ。しかも朝起きたときは普通にしてたのに、この数時間で彼の体内で一体何があったのかしら……とりあえず見て来るわ」
ピュアがどよめきの残る会場から去ろうとすると、ザイドも居たたまれなくなりその場を後にした。

「……決勝戦の相手がこんなだとさすがに気が抜けるな」
「うん」

数分後、またアナウンスがなった。今度は活気のある声だった。

「さあ皆様お待ちをいたしました！アーキル選手は見事体調を回復し、すぐこの決勝の場に姿をみせます！」

「おおー！早くしろー！」
「待つてたぞー！！」

場内は一気にボルテージがあがり、そしてようやく、相手チームが揃って出場してきた。

「まったく、待たせすぎだぜ」

ベルクスは文句を言いながら前にでた。それにルイスとテムイが続
き、アーキルチームも円状になっている戦いの場の中央に歩を進め
た。そしてお互いの声が聞き取れるぐらいの間隔になった時、両チ
ーム歩を止めた。会場は熱気だっているが、選手達のいる空間は静
かだった。

「遅れて申し訳ない。生まれてこのかた貝というものを食べた事が
なかったので、つい食べ過ぎてしまった」

開口一番にいったアーキルの言葉は謝辞だった。この行動に少しだ
け驚いたルイス達だったが、そこはすぐに切り替えた。

「いいえ。それより、体調のほうは本当に大丈夫ですか？」

「ああ。ピュアの医術師としての腕がいいせいか、いつもの調子を
戻せた」

この言葉にルイスの目は変わった。戦うものの目、そしてそれを楽
しみにしている目だ。

「それはよかったです。もし僕等が勝っても貝のおかげだったと周
りに思われるのは納得がいきませんからね」

笑顔で挑発とも取れるルイスの言葉に、アーキルは何の迷いもなく
答えた。

「ああ、それは問題ない。例えば俺が全身複雑骨折していても、君た
ちに勝機は微塵も存在しないから」

「なっ！」
「……」

ベルクスが言い返そうとしたが、ルイスの黙示にそれは出来なかった。

「戦いの場では結果が全てです。早く始めましょう」

「そうだな。戦いを始めるのには賛同するが、前者には賛同しかねる……やはりまだ子どもだな」

「両チーム準備はいいですか！！？！？それでは、いよいよイルハウ大会決勝戦、アーキルチーム対ルイスチームの試合を始めます！
！！！」

「わああああ！！！！！！」

激しいゴングの音と同時に両チーム全員が術を唱え始めた。アーキルとルイスは攻撃魔法、ザイドとベルクスもまたそれぞれ独自の攻撃系錬金術を発動させ、魔術医であるピュアとテムイは味方チームの様々な能力を上げるインクリースを放った。

「何という爆発力！！！！やはり決勝戦だけに今までとは格の違う戦いとなっております！！！！しかし観客の皆様ご安心下さい！！我がイリユーマの魔術師団が等間隔で配置していて皆様の安全を保証しています！！！」

砂煙が収まるのを待たずにアーキルチームは攻撃をしかけた。それは数十本という鉄槍が飛んでくるというものだったが、ベルクスが鉄の壁を作り防いだ。そしてその鉄の壁を更に鉄の玉に作り変え、お返しにアーキルチームへと放った。次いでルイスが今まで見せた事もないような巨大な電気と炎の塊で攻撃をした。

「お前、また腕上げやがったな……」

「ベルクスこそ。連続錬金が出来るなんてすごいよ」

一方、アーキルチームもルイス達の力に感心していた。

「中々やるね。ぜひ俺の弟子にしたいよ」

「あら、ザイドの弟子なんかになっちゃったらせつかくの美少年が台無しになっちゃうじゃない」

ピユアとザイドはまだまだ余裕で笑っているが、アーキルは相変わらずの無表情だった。

「で、どうよアーキル？あの僕ちゃんの実力は？」

ザイドは興味心身でアーキルに感想を求めた。それというのも、昨晩貝を食べながら珍しくアーキルが相手選手に興味を示したからである。

「ああ。やはりまだまだ子どもだな。だが……」

「だが？」

ピユアとザイドの声が重なった。そして視線はアーキルを向いている。

「……いずれ、そう遠くない未来には俺のところまでくる。こんなに楽しいのは、久しぶりだ」

このアーキルのセリフに二人は驚きを隠せない。しかしそんな二人を他所にアーキルはブロウを放って砂煙を一掃し、ルイスだけを見た。彼もまた、この戦いを楽しんでいるようにアーキルは感じた。

「……オリジナルを作る能力があることはいいが、術が幼稚すぎる。君ならもつと複雑で高度な術を編み出せるだろう?」

「あなたこそ、無駄が多いんじゃないですか?」

ルイスは彼の实力を感じていた。それはつまり、術を唱えるという助力が、彼にとっては特別意味をなさないという事である。

「君と俺との差が一体どれくらいあるのか、わかっているんだな」「ええ。最初の一発で……嫌でもわかりますよ」

同じ魔法を放ったにもかかわらず、アーキルの魔法はまるで質が違った。例えば自分の放ったものが水ならば、向こうはそれを凝縮させた氷塊なのである。

「それでもなお、戦いを続けるのか?」

「じゃああなたは、こんなにも良い修行の機会を自ら放棄するんですか?」

ルイスのこのセリフを聞き、アーキルは目を細めた。

「……そうだな。そんなもつたいたい事するわけがないな」

アーキルは言い終わると、右手を上に向けて何やら唱え始めた。ルイスは直ぐに、それが重力系魔法であることを覺り、ベルクスに合図を送って防御の体制をとった。

「いいかルイス君。これは俺の中で一番軽いグラディだ」

「つつ!」

アーキルが手を振り下ろすと一気にルイス達に重力がのしかかってきた。

少しばかりルイス達には強いであろう魔法を放ったアーキルに対して、ザイドは不満を漏らした。

「アーキル、あんまいじめんなよ。それに錬金術師のほうは俺の担当だって言っただろう?」

「すまない。まさかここまで魔術と錬金術を融合させる事が出来るとは思わなくてな」

ルイス達は何とか“一番軽い”というグラディを耐え、テムイに回復術を施してもらった。

「おいルイス、あれ何とかしろよ。大体俺は錬金術の戦いの方がしたい」

「って言われてもね。これチーム戦だし」

「お前な、もう勝つ確率ゼロってことぐらいわーってんだろ? だったらこの決勝戦でやる事は一つ」

ベルクスもまた、この戦いを楽しんでいた。決して勝つことの出来ない相手ではあるが、それは届かないものではない。今この一瞬一瞬が、机に向かって一人で黙々と勉強している何十時間というほどの価値があることを、ルイスもベルクスもわかっていた。そしてテムイもまた、相手の医術師をよくよく観察してその腕を盗もうと真剣だった。

決勝（後書き）

国王であれ、農民であれ、家庭に平和を見出せる者が、もっとも幸せである。 ゲーテ

矛盾（前書き）

絶対ってある？

矛盾

男はいつもこう。全身傷だらけになってそれでも立ち上がった、本当に死んだっていいと思っっているのかしら？残されている方の身にもなっってほしいわ。まったく、本当に男って身勝手よね。

ユフィールはルイスとベルクスの診察を終え、心中複雑な気持ちだった。それを察してか、二人は元気ですアピールをしたり、仲良くケンカをし始めたりした。

「っるせー！！大体テメエだっってボコボコにやられてんじゃねえか！！」

「ベルクスなんてあのザイドとかいう相手選手に傷一つつけられなかったよね？まったく、同じチームだっっていうのが恥ずかしいよ」

「はあ！！？！やんのかテメエ！！！！」

「別にやる気はないけど、そっちがその気ならこっちにだっって考えはあるよ」

あの決勝の場で2時間以上戦い続けたというのに、ルイスもベルクスもまったくその疲れを見せていないのでユフィールは呆れてしまった。

「二人とも、退院するまでは私があなた達の担当医なんだから言うとおりにしなさい。まず、むやみやたらとケンカしないこと。いい？」

「そっだそっだ！ユフィールさんを困らせるヤツは俺が許さん！」

どこから湧き出てきたのか、サレオスが普通にユフィールの隣に立ち腕を組んでいた。

「……おい、誰だよコイツ」

「さあ。ただのじゃぱり？」

「つてルイス！？お前それは酷いだろ！！」

優勝を手にしたアーキル達が望んだものは一般には公開されなかった。しかし、彼らの名前はイルハウ大会の歴史に確実に刻まれた。

「なあアーキル、俺あの美少年が欲しいんだけど、どう思う？」

ザイドの突然の発言にアーキルもピュアも食事の手を止めた。そしてピュアは汚いものを見る目をザイドに送った。

「待て！お前等何か勘違いしてるだろ！！？俺が言ってるのは」

「まさかそういう趣味があったなんて……アーキル、私この先彼とはやっていけないわ」

「同感だな」

「だからちよつと待て！俺が言ってるのはあのベルクスとかいう子どもを俺の弟子にしたいってことだ！！決してやましい意味などない！！」

ザイドの必死の訴えに優雅なレストラン中の視線が一点に集中した。アーキルとピュアはお金をテーブルにおいてそそくさとその場を後にし、まだ誤解を解こうと声をあげているザイドが二人の後を追った。

「なあ、本当に弟子にしたいと思うんだ。あの才能を伸ばせるのは俺だけだつて！」

人通りの激しい道でザイドは少し声のボリュームをあげて二人に話しかける。しかし二人は一向にザイドの声に耳を貸そうとはしなかった。が、アーキルが突然後ろを振り向きザイドの目を真っ直ぐに見てこう言い放った。

「弟子にするならこれから先俺達が共に歩む事はない。じゃあな」

それだけいうと、ザイドを残して二人は人ごみの中に消えていった。ザイドと別れてから二人は船に乗り、新たな大地を目指した。アーキルはベッドに横になっていたが、ピュアは甲板にでてイリユーマのある方角をじっと見ていた。すると、聞き覚えのある声が横から聞こえてきたので視線をイリユーマからはずした。

「あら、まさかこんな所で会っなんて」

「本当ね」

視線の先にはイリユーマの王子、ガイラの妻であるティーナが立っていた。どうやらナンパされていたようだ。ピュアが軽く睨みを利かせると男達は簡単にさっさといった。

「護衛もなしにこんな一般の船に乗るなんて、一体どういうこと？」

「ふふ、護衛はアーキルさんに頼んであるの。よろしくね」

ティーナは柔らかく笑うと、何かに気付いたように問いかけた。

「そういえば、ザイドさんが見当たらないけど……？」

それを聞きピュアは困った顔をしてティーナに事のいきさつを話し

た。二人の髪がよくなびく。いつの間にか周りから大陸はなくなり、水平線だけがあった。

「……イルハウの呪いね」

ピュアの弱い笑いが浮かび、すぐに消えた。イルハウ大会の優勝者には望みのものが与えられる。それは決して嘘ではなかった。事実、ザイドはずっと探していた理想の弟子を見つけ、アーキルはライバルと出会い、そしてピュアは新たな医術の道を切り開いたのだったが、望みが叶えられると同時に、必ず何かを犠牲にする。

「いいえ、世の常よ」

「？」

ティーナは遠くを見ていた。

「何かを手に入れたら、何かを失う。それがこの世の絶対の法則。どんな生き物も、この法則から逃れる事などないわ」

「そうかしら？」

「違うと思う？」

ピュアは苦い顔をした。

「……賢者は、彼らは全てを持つてるじゃない」

彼女が言っているのは世界七賢者の事。なぞの多いその存在は、しかし決して不確かなものではなかった。

「そうね。だけど、それと同時に、彼らは何一つ、その手にはしていないのかもしれないわ」

「どづい意味？」

ピュアにとって、七賢者は鬱陶しくもある存在だった。強大な力を持つているにもかかわらず、それを世のために使わずに静かにしている。それは到底理解しがたい事。

「わからないわ。ただ、そう思うの」

今度はティーナが弱い笑いを浮かべ、甲板から消えていった。

ピュアは水平線を眺めながらティーナの言っていた事を考えた。全てを手にしているのに、実は何も持っていない。なんという矛盾。しかし、思い起こせばこの世の中など矛盾だらけではないか。個人から国家という単位に至るまで、矛盾という生き物は存在している。一面青の世界を瞳に映しながら、ピュアは静かに甲板を後にした。

「ユフィールさん？」

サレオスは隣を歩く麗しの恋人の名を呼んだ。しかし返ってきたのはカラ返事。何かあったのかと問えば、彼女は笑ってごまかした。二人が着いた先はルイスの部屋だった。ルイスが入院している間、ハクセンの面倒を見てほしい、と言われここに寝泊りしている。そしてもちろんダイゴローも一緒である。そして今では日課となったダイゴローのお散歩にサレオスは出掛け、部屋にはハクセンとユフィールが残された。

「何かあったのか？」

はたから見れば普段と変わらないユフィールに対してハクセンは聞

いた。また笑って誤魔化そうとしたユフィールだったが、ハクセンと目を合わせたら自然と口が開いた。

「……ねえハクセン。どうして男の人って命を平気で危険にさらすの？」

弱い眼差しは、すぐに床に落ちた。ハクセンは何も答えず、次の言葉を待った。

「父も、兄も、弟も、皆戦争で亡くなったの。家を出るときは意気揚々としていて、こっちの気持ちなんか考えないで……」

「それで医師に？」

「そうよ。でもただの八つ当たり。良くなって、幸せになってほしいって、私本当は思っていないのよ。ただ、治れ、治れ、って目の前の現実を否定したいのよ。多分」

思い出すのは行き場のない悲しみ、怒り。どうにも出来ない、出来なかった事。しかも彼らは国のためにとその身を投じたのに、見返りは使いまわしの卑しい言葉。何かがおかしい。そうは思っているのに、現実を考える暇を与えずただ進むのみ。

「生きたかったのだろう」

「え？」

落ちていた眼差しがハクセンのほうへと向けられた。

「人は、特に男というのは、生きた証を欲する。だから、そのために死んだのだ」

考えた。ユフィールは必死にハクセンの言っている意味を考えた。

しかし分からない。だって、どう考えたって、矛盾しているのだから。

「今解らずとも、いつかわかればいい。人生は思っているよりも長いものだ」

そういうとハクセンはリビングを出て自分の寢床へとゆっくり歩いていった。

しばらくソファでボーっとしていると、いつの間にかサレオス達が帰ってくる時間になっていた。ベルが鳴り出向え、ダイゴローもまたゆつくりと自分の寢床へと歩いていった。ユフィールはサレオスに温かいコーヒーを作って出した。

「はあ。やっぱりユフィールさんの入れてくれるコーヒーは心が暖まる」

サレオスは幸せそうな笑顔をユフィールに送った。すると、珍しくユフィールの方からサレオスに近づき手をぎゅっと握った。女性からアプローチされるのに慣れているサレオスでも、やはりユフィールに、となると鼓動も早くなる。

「ど、どうしたんですか？」

少し慌てるサレオスだが、ユフィールはじっとサレオスを見ていた。

「あ、あの………？」

「サレオス？」

「はい！」

突然名を呼ばれ、思わず声が高くなった。それを聞きユフィールは

思わず笑い、それでその場の緊張がとれた。

「あのね、サレオス。一つ、お願いがあるの」

「何ですか？」

「なるべく、長生きしてね？」

「？はい。っていうか心配ないですよ！ユフィールさんがいる限り俺は死ぬつもりはありませんから！」

サレオスの言葉に嘘はない。きっと。しかし、それはまったくの嘘である。彼は自分のために命を投げ出すだろう。本当に矛盾している。だが、ユフィールは思った。今までにないほど。確信とも言える。彼と、サレオスと一緒にいたなら、その“いつか”が来るだろうと。

矛盾（後書き）

もちろん。

小さな子どもと通りすがりの賢者の会話

終* (前書き)

君が欲しい

終*

「思えば僕たちが出会ったのってパーティの時だよな」

イルハウ大会を終え、また普段のルイスの魔術レッスンが始まって数日。勉強中の突然の言葉にマナは顔をあげた。

「覚えてる？あの時のマナ、今以上にぎこちなかったよな」

軽く笑うルイス。マナにとってそんな彼の自然な姿が見られるのが何よりも嬉しかった。

「そんな、あの時はすごく緊張していたんです」

「へえ、何で？」

答えなど知っているルイスだが、あえて聞いてみた。そしたら、予想通りマナは顔を赤くし、話をうまくそらして勉強を再開しようとした。しかし今日のルイスはいつもとは違っていた。普段ならすぐに勉強に話を戻すのに、今回は話題をそらさせてはくれなかった。

「マナ、答えてくれないとこの先の勉強教えてあげないよ？」

「え！？」

マナの知っている、いや、むしろルイスを知っている全ての人かと思うだろう。今の彼の発言がいかに彼らしからぬ言葉か。

「……………」

「えっと、ですね……………」

さすがに突然いえるわけがない。一目ぼれしたんです、などということ。困っているマナを見て、逆にルイスが口を開いた。

「マナはさ、すごく、綺麗だよね」

「え？な、どうしたんですか？今日のルイスさんはいつもと違います」

マナの困った顔に少し笑顔が加わって空気が和む。ルイスはこの空間をとて心地よく感じた。そして、何かを決意した目を、彼女に送った。

「マナにさ、いっぱい話したいことがある」

本当の自分。最初の目的と今の気持ち。全てを、彼女に知ってもらいたいと思った。例えその先に断絶が待っていたとしても、今のルイスには何の恐怖とも感じなかった。

「でも、今はまだ……ただ、これだけは言いたいんだ」

「何でしょうか？」

「……」

「？」

「……僕以外の男を、その瞳に、映さないでね？」

言いながらルイスはマナのおでこに自分の唇を優しく落とした。時計の針はちょうど勉強が終わる時間をさして、ルイスはそのまま柔らかい笑顔を残して部屋を出て行った。もちろん残されたマナは笑顔を作る余裕などない。というか正確な呼吸もままならない感じなのか、今まで経験した事がないほど自分の心臓の鼓動がうるさく聞こえた。

「ねえハクセン」

家へと戻りルイスはハクセンと対峙して座った。欠伸で対応したハクセンだがルイスはそんなことは気にせず今のモヤモヤを率直に話し始めた。

「僕、マナが好きなんだけどさ」

「知っている」

何気に周りに結構バレバレな事である。ハクセンは何をそんなかしまって、という感じで聞いたが、話には続きがあった。

「なんていうか、かなり釣り合わないよね」

「……それは、どっちがどっちなんだ？」

「もちろん僕が、マナとは不釣り合い、に決まってるよ。綺麗すぎる。色々」

ルイスは床にごろんとため息と共に体を横たえた。悩むルイスだが、ハクセンはこの状況を嬉しく思った。あのルイスが、あの、謙虚という言葉を知らず、かなりの自信家であったあのルイスが、自分はマナという一人の少女に合わないと言っているのだ。たしかにマナは一国の姫であるから普通にみたら高嶺の花である。しかし今のルイスにとって彼女は決してそれほど遠い存在ではないはず。先の戦争や大会で名実ともに高位にあがったルイスなのだ。

「まあだからと言って他の誰かに譲る気なんかサラサラないんだけどね」

「そうか」

あまり変わっていないところもあるが、それはそれで彼らしいと、ハクセンは内心また嬉しく思った。

「……今度はどこへ行くのだ？」

「ううん……どこでもいいや。ハクセンがまだ行った事ない所は？」

「ない」

「やっぱり」

綺麗に手入れされた庭園に、マナは一人腰をおろしていた。背中を木にあずけ、手には文学小説を握っていた。しかし、あまり時間をおかずマナはその本を閉じ、長いため息を吐いた。

「……」

顔をあげると葉と葉の間からキラキラと眩しい光が降り注いできた。ルイスが王宮を去ってから早2年。別れの言葉もなく、この2年間手紙の一つも受け取らなかった。しかし、マナは一度として涙を流しはしなかった。流していたものといえば、自分の髪である。手入れはしているものの、2年も伸ばしているからかなりの長さになっている。マナはそれを見て、ルイスと会わない時を思った。と、そんな時、上空から何かが降りてくるのが見え、マナは思わず腰を上げた。それは鳥だった。おかしなことにマナの肩へと舞い降りてきた。それは真つ白な鳥で、とても小さかった。

「ふふ、かわいい」

マナは肩から自分の手に鳥を移し、優しく撫でてやった。すると、その白い鳥は小さな輝きを放ってマナの手から消えてしまった。かわりにマナの手にいたのは、緑の癖のついた髪をした子どもだった。

「……………ええ…ええ!？」

しかも背中には羽がついている。たしかに羽である。マナは目を点にしながらも子どもをちゃんと確認した。とりあえず、人の子ではない。

「ママ!」

「えええ!?!?!?!」

子どもはマナに抱きついた。そしてママ、ママ、と笑顔で呼び続ける。

「ちょ、ちよつと待って!」

「ママだあ!ママ〜!」

―しきり会話ではない会話をして子どもは少し落ち着いたらしく、羽をパタパタと使って宙に浮いた。

「ふう。ねえ、あなたはだあれ?私はマナっていうの」

「僕はシルフ!パパの子ども!」

「パパって、誰なの?それと、どうしてシルフはここに来たの?」

「パパの名前は……………ううん……………忘れた!」

相変わらずの笑顔のシルフ。シルフと言えば召喚術で呼び出す精霊

の総称。その総称が名前になっているなんて、この子を呼び出した術者はよっぽどの面倒くさがりなのだろう、とマナは思った。

「でもね、パパは黒い髪をしてるよ!」

「え?」

マナは心臓が一瞬高く脈打つを感じた。

「それでね、黒い瞳なの。それでね、とっっても強い魔術師なんだって!」

「それって……」

それは、まさか。マナの脳裏に浮かんだのは彼だった。この2年間、まったく音沙汰のなかった、あの彼。

「それでね、パパからのお使いなんだ!」

「お使い?」

「うん!あのね、今パパは砂漠にいるんだ。色々旅してるんだ。ハクセンっていう白いタイスと一緒に!だから寂しくないし、心配ないの。でもね、時々ママを思い出すんだって。そうすると、ぎゅって心臓が苦しくなるって、パパ言ってた」

マナの視界がぼやける。瞳には綺麗な水がたまっている。

「ママに会いたって。でもまだ会えないんだって。僕よくわかんない」

会いたい。彼がそう言ったの?マナは声にならない声を心の中で呟いた。そしてその場に崩れてしまった。

「ママ！？どうしたの？大丈夫？？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう」

涙が止まらなかった。そして震えも。恐怖ではない。マナはシルフを優しく抱き寄せた。

「ありがとう……ありがとう」

シルフは大人しく抱きしめられていた。

「ママ、あとね、パパがね？」

「ええ、何？」

「パパが言った事、ちゃんと守ってね、って言ってた。パパ、ママになんて言ったの？」

マナは思い出したように目を見開き、そして照れるように笑った。

終* (後書き)

だから僕はさよならをした

召喚術師* (前書き)

i
l
o
v
e
u

召喚術師*

君のためならなんだってするよ。盗みだって、人殺しだって、この命を投げる事だって。

だからお願いだ。どうか、どうか俺を一人にしないで。捨てないでくれ……。

いつもあなたは私に甘える。そして私をどうしようもなく甘やかす。でも知ってる？本当は私不安なの。

あなたがいないと、もう生きる意味がなくなっちゃうぐらい。

彼女にあったのはまだ俺がほんの子どものころ。向こうは俺よりも年下のはずなのに、俺にはどうにも頼れる存在に見えてしまった。多分それは、今はもう忘れてしまった、銃を俺達のほうに向けて殺そうとした男達を前にしても、一切恐怖というものを表に現さなかったからだと思う。ああ、強い子だな、とその子を見て俺は死の覚悟した。

男達が楽しげに一人ずつ俺達子どもを殺していく。もう泣いている子どもはいない。全ての感覚、感情をシャットアウトしているのだが、男達にとってはそれが気に入らないらしく、簡単に殺す事をやめて暴行を始めた。俺は髪を引っ張られ地面に叩きつけられ、太ももに一発銃弾を受けた。

早く殺してくれ

顔を殴られ、腹をけられながら俺は思考も停止させようとした。しかしその時、俺の目はまたあの子を映してしまった。

「なんだその目は!？」

一人の男がああ強い子を激しく蹴り上げ、彼女の小さな体は簡単に宙に浮き、地面に落ちた。そして二度三度と顔を殴られた。しかし、未だに意思を持つ眼差しだけは落としていない。

「このクソガキが!どうせお前等みたいな薄汚いガキなんてどこに行っても邪魔なだけなんだよ!！」

「そうそう。俺達は優しいからお前等の相手してやってるの。わかる?」

「わかるわけないだろ。こんなバカ達に」

男達はケラケラと笑っている。俺にはその声が悪魔の笑い声に聞こえた。人間のはずなのに。

「その辺にしときなよ。おじさん達」

若い人間の声はそう遠くはないが近くもないところから発せられた。しかし破壊されたこの町のどこを見てもそれらしき人物は見つからない。

男達は俺達子どもを一発ずつ蹴るか殴るかをして動けなくしてから周りを調べ始めた。

「一分時間あげる。一分たつてもここを去らないなら、おじさん達痛い目見るよ?」

「んだと!?!やれるもんならやってみろ!！」

男達は無駄に銃を乱射する。流れ弾とでも言うのか、一発が子どもの喉にあたり、その子は大分苦しみながら死んだ。俺の目の前で。しかしその視界は直ぐに誰かの手によつて遮られた。

「子どもがこんなところ見るもんじゃない」

手は暖かく、声は優しかった。

その人は突然、何の前触れもなく現れた。破壊された町でまるでおもちゃのように、いや、それ以下に扱われている私達子どもの前に、本当に一陣の風のように現れた。

「子どもがこんなところ見るもんじゃない」

その人は一人の男の子の目をその手で覆い、そして笑った。

「って言っても俺もまだ子どもだけだな」

そこにいたまだ意識のある子ども達は皆彼を見た。ボサボサの頭にボロボロの身なり。それでも私達にとつて彼は正義のヒーローに見えた。

彼の存在にようやく気付いた男達は銃を一斉に彼に向けた。でも彼がひるむ事はない。むしろ怒気を感じさせ、目をそらす事を許さなかった。

「ぶぶー」

「？」

「時間切れ。おじさん達痛い目みてね」

本当に、正義のヒーローだった。
私達はまだかろうじて屋根がある民家に身を休めた。生き残ったのは自分を含め6人。

「……ありがとう」

一人ずつ毛布を手渡ししてくれている彼に私はそう言った。彼は私の頭をなでて「どういたしまして」と笑顔でかえしてくれた。

「あの、騎士様。あれってもしかして魔法？」

小さな男の子が恐る恐る彼に質問をする。この子にとっての正義のヒーローは騎士のようだ。

「いや、あれは錬金術ってやつで魔法とはちょっと違うんだ。ちなみに俺は騎士でもないぞ」

彼はまた優しく笑った。その笑顔が温かいから、今まで感情や思考を捨てていた私達子どもは正常さを取り戻していった。

日も暮れ始めた頃、小さな女の子がお腹の音をかわいらしく「ぐう」と鳴らした。私達は何日ぶりかの安らげる笑いを表に出し、「お腹すいたね」ともらした。すると彼は勢い欲立ち上がり、

「3時間以内に戻るからじっとしてろよ！」

と言って私達子どもを置いて去っていった。その直後は不安でしよ
うがなかったが、彼なら、と皆はまた子どもらしい会話を始めた。

「へえ、アレんっていうんだ」

「僕はサム。君は？」

お決まりというか自然の流れというか、皆自己紹介を始めた。出身は様々で聞いた事もないようなところから来ている子どももいた。でもここへきた理由は皆一緒。親に売られたのだ。

「私はエルラン。よろしくね」

別にこれからここにいる皆で何をするでもないが、元々オープンな人間らしく、私は笑顔で皆との今のこの時間を楽しんでいた。

「俺はシュワルガ……」

6人の中で一番暗いと感じていた男の子はシュワルガという名前だった。しかも暗いだけでなく見た目もひよろつとしていて私はついおせっかいになってしまう。

「大丈夫だよ！錬金術師様がいるんだから、もうあんな怖い目には遭わないよ！」

でも、私や他の子ども達が何を言っても特に変わった感じは見せなかった。

俺達を救ってくれた錬金術師様がようやく帰ってきた。手にはいっぱい、とまではいかないが子どもだけが食べるには申し分ない量の食料を持っている。

「ねえ錬金術師様。シュワルガがどうしても元気でないの。どうし

たらいいかな？」

あの強い子、エルランがわざわざ俺の心配をしてくれている。まさかこんな自分が他人に心配される日が来るなんて。そう思うと自然と涙が流れてしまった。

「どうしたの！？」

俺が突然泣き始めたから、周りの皆も緊張の糸がきれたのか、一斉に泣きはじめた。唯一、エルランを残して。

「ああ、よしよし。泣かないで。大丈夫だよ？」

エルランは一人ずつ頭をなでてまわった。もちろん錬金術師様も。

「よーし！こうなったらとことん泣け！！枯れるまで泣け！腹減ったやつはこの物適当に口に入れる！」

錬金術師様はどこまでも優しくかった。エルランも。泣きつかれた俺達子どもはお腹を満たして眠りについた。しかし、俺は少しして目が覚めてしまった。体を起こすと錬金術師様が隣に座ってくれた。なんでわかったのだろう。今、誰かに傍にいて欲しいと思ったことが。錬金術師様は俺を安心させるために色々話をしてくれた。周りの子ども達が起きないように小さな声で喋っていたので、俺はなんだか自分だけ特別な気分になった。

「そつえば、錬金術師様はなんていう名前なの？」

「俺？サイドさ。呼び捨てで構わない。っていつかそのほうがしっくりくる」

「え？でも……じゃあサイドさんってのは？」

「ん〜まあ、それでいいか」

次に目を覚ました時、ザイドさんはいなかった。皆を起こし、壊れた町中を探したがやはりいなかった。

また捨てられた……

俺達子どもは皆同じことを思った。しかし、その闇はまたしてもすぐになくなった。

「まさか本当にこんなところに子どもがいるなんて」

馬にのった制服姿の男達が俺達に近づいてきた。

「もう大丈夫。君たちを安全なところへ連れて行ってあげるよ」

今まで俺達を迎えに来た種類の人間ではない。俺達子どもは素直に制服姿の男達に馬に乗せてもらい一日かけて大きくもなく小さくもない街につれていかされた。

正義のヒーローは私達を最後まで守ってくれた。私達は保安員という人たちに連れられてあの破壊された町から大きくもなく小さくもない街につれてこられ、孤児院に預けられた。そこは信じられないくらい幸せな場所。毎日殴られる事も、ののしられる事もなく、空腹を感じることもない。友達、兄妹、家族と呼べる人たちがそこにいた。本当に、信じられないくらい幸せな場所。

けれどその幸せは終わりを告げた。街の兵が全員戦争にかり出され、防備が薄くなったこの街はあつという間に敵の軍勢に踏み潰された

のだ。

「テ、テ……」

私は自分の始めての召喚獣の名を呼んだ。数ヶ月前、召喚術師がこの街を訪れて召喚の仕方を私とシュワルガだけに特別に教えてくれたのだ。簡単に言えば私達にはその才があったみたい。

シュワルガは私よりもすごかった。でも、子ども二人の召喚獣なんて高が知れていて、抵抗できたのはわずか2日間だけ。この街の唯一の救いは、特に資源がなかったこと。敵軍はこの街に留まるメリットがないので適当に破壊したらさっさと出て行った。生き残ったのはわずかだったがそれでもこの街の人たちは希望を捨てず街の再興に努めた。

「ハア、ハア……」

街が少しずつ建て直されてきた頃、私は召喚術の修行をひたすら一人でしていた。けど教えてもらったのは初歩的な知識と技術だけで、どうしてもそれ以上先にはいけなかった。

「もう！どうすれば強いのが出せるの！！？」

ゴロン、と体をゴツゴツした地に投げ出してブツブツと愚痴り始めた。

「エルラン……」

岩陰から聞きなれた声が出たけれど、私は体を起こすことはせず顔だけをそちらへ向けた。そこにはシュワルガがどうにも情けない顔をして立っていた。

「シュワルガ、どうしたの？」

錬金術師様に助けてもらった私達6人は、今じゃ私と彼しかいない。残りの4人は死んでしまった。

「俺さ、もう疲れた……」

嫌な予感がした。私はこう言った子どもを何人も見てきたから、だから彼が今何を望んでいるのか手に取るようにわかった。

「俺はエルランみたいに強くない……もう疲れたよ」

召喚術師* (後書き)

i
k
n
o
w

ヤイゴ（前書き）

無駄に過ぎしちゃった。

ヤイゴ

「……僕もだいぶ成長したと思わない？」

黒い瞳に黒髪の青年は目の前に横たわっている上級モンスターに回復術をかけながら一人呟いた。

彼、ルイスは最近この上級モンスターの生息地である“ヤイゴの森”に来るのが日課となっていた。ここにはルイス以外にも賞金稼ぎやら修行やらの名目で多くの人たちが足を運ぶ。

ルイスに回復術をかけられていたモンスターが目を開けて体を起した。

「……一体なんのつもりだ？」

上級モンスターは人語を話せる。ルイスの連れというか保護者のような立場に居るタイスのハクセンも人語を話す。モンスターとはまったく別物である。

「最初から言っただじやないですか。ただ僕は修行がしたいのだと。なのにあなたは目の色変えて僕を殺そうとして。さすがに手加減が出来なかつたのでこんな大怪我をさせてしまいました。すいません」

ルイスは軽く会釈するとさっさとこの場を立ち去った。残されたモンスターはしばらくルイスの方を見ていたが、姿が見えなくなると両手を翼に変えてルイスとは逆方向に飛んでいった。

ヤイゴの森に一番近い街の一つにルーパという街がある。ルーパは連日連夜にぎやかな街だ。そしてケンカも絶えない。だから至極当然の流れでこの街の保安隊は一国の軍隊にも匹敵する力を持っているといううわさがまことしやかに流れている。実際問題、ヤイゴの

森目的でこの街に来る者達の騒ぎを収めなければならないのだから
相当な力はもっていないなければならない。

「よおルイス。今日の収穫は？」

行きつけのバーでルイスは赤髪の男に声をかけられた。名前はガー
バ。召喚術師で年はルイスと同じ21。

「別に。いつもと変わらないよ」

ルイスはこの店で一番軽いお酒と今ハマっているオムライスを注文
してカウンターに座った。ガーバも自然とルイスの隣に座る。

「……」

「何だよ？」

ルイスのいかにもウザイですという視線に耐えかねてガーバは肩を
すくめて聞いた。

「何か用？」

「用がなきゃ俺はお前と一緒に居ちゃいけないのか？」

「……すつごくキモイんだけど」

ガーバはため息をついて手に持っていた酒を一気に飲んだ。彼はル
イスがこの街に来る前からここにいた。ルイスが来たのは3、4ヶ
月前で、この店に姿を現してからガーバはルイスと組む事を考えて
いた。その理由は一つ。ヤイゴの森の北のほうにいますという伝説の
召喚獣を手に入れるためだ。もちろんその事はルイスに言っている
が彼の答えはいつも「興味ない」の一言だった。そして今日もまた
ガーバはルイスに振られたのだった。

「お前もよくめげずに毎日くどくよねえ」

ルイスの頼んだオムライスと酒を持ってカウンター越しにアルバイトのウィルがからかいに来た。

「うるせえ。お前は仕事してろ」

「いやあ。仕事したいのは山々なんだけどこう客が入らないと仕事がないってもんでさ」

あるうことかアルバイトのウィルは自分用の酒を作って一緒に飲み始めた。だがまあこれはいつもの流れなので誰もツツコミはしなかった。

しかし本当に暇な店である。今店内に居る客はルイスとガーバ、そしてすでにつぶれてしまっているオヤジが一人。よくこれで店が潰れないものだと逆に感心させられる。

「それよりその伝説の召喚獣ってのは一体何なんだ？つーか伝説をお前のせいで伝説でなくしてしまっただけいいのか？」

「……お前ってホント色々癪に障るよな」

「ハハツ、よく言われる」

満面の笑みで答えるウィルと何ともいえぬイライラ感をあらわにするガーバ。

「召喚獣は、噂じゃ何にでも変化出来るらしいな。でも逆に本当は実体が無いとも言われてる。よくわかんないけど」

「何そのあやふや？それでいいわけ？まるでお前の人生みたいだね」

ウィルのさわやかな笑顔はガーバの逆鱗に触れた。ちなみによくあ

ることである。

殴り合いを始めた二人と数センチしか離れていないルイスは涼しい顔をしてオムライスを黙々と食べていた。やはりオムライスはここ“笑う門”のものが一番だと今日もおいしい食事を十分堪能したのだった。

店を出るとそこはもうお祭り状態であった。なぜこつも毎日飽きずに騒いでいられるのかルイスには理解しがたかったが、なんとも人の出入りが激しい街である。この現象も仕方が無いのだろうとすでにルイスは静かな夜を諦めていた。宿に戻るとすでにハクセンは寝ていた。

「フエイ」

「はい」

ルイスは姿無き神族と話し始めた。体はすでにベッドに落としている。

「……僕は絶対に全てを手に入れる。確証がある」

「さようぞ」

「その一つはフエイだよ。君は、神族っていうのは賢者になる素質のあるものにつく。そうでしょ？」

「……」

「無駄に21年も生きてないよ。ヤイゴの森に来たのだから、修行つてのもあるけど神族について調べるため。どうせフエイは教えてくれないだろうし」

フエイからの反応がないがルイスは一人で喋り続けた。

「ヤイゴの森つてずっと昔は神族が住んでたんでしょ？……………絶対に見つけてみせるから」

「一体何を？」

「神族の、全てを」

ヤイロ(後書き)

本当かい？

小さな子ども、ロードと結局通り過ぎなかった賢者の会話

森

新緑の美しい森。豊かな土壌。光の川。

何という懐かしさ……。

何という、危うさ……。

ここが私の居場所。ヤイゴの森。まさかこんなにも早く、行き着くことが出来るとは……。

彼、ルイスがこの森に来て早5ヶ月。ほぼ毎日通っている。それはつまり、私は毎日日本来居るべき場所、古巣に來ているという事。

知っていた。彼がここまでたどり着ける事など。しかし私はそんな事、さして意味のないものと考えていた。私が知っているのはただの“記憶”であって、それが全て。色あせる事を知らない、色あせた全て。

彼は見つけるだろう。私達の“記憶”を。あと数ヶ月。きっとあの方にも会う。あの方にも……。

彼はどうするだろう。何千年も昔の“記憶”と出会い、あの方と時を交わしたのなら、一体彼はどうするのだろう。

私は彼と一生を共にする。彼が死ねば私も消える。消えたのなら、私はここに帰ってこれるのだろうか。否。そんなことは解りきった事。

ああ。また、また思考が宙を迷っている。なぜ……。早く、ハクセンの様のもとへ。

ハクセンはヤイゴの森にある静かな水辺でゆったりとくつろいでいた。ここに来たのは何年ぶりだろう、などと少し懐かしい思い出を引っ張り出しながら大きな欠伸をした。するとそこにルイスについている神族のフェイがやってきた。

「ハクセン様」

「どうした？」

相変わらずの柔らかい声だな、と思ったがいつもと違うのは少しばかり張りがあったせいだろう。

「……」

呼んだにもかかわらず続きが出てこないフェイを不思議に思ったが、だいたいの理由はハクセンにはわかっていた。

「……やはり、懐かしく思うのか？」

「え？」

フェイの声に戸惑いの色が少し。

「ここはおぬしにとっての故郷。おぬしらは“記憶”というものを持っているそうだが……？」

ハクセンは目を瞑り体を完全に横にしてリラックス状態にした。

「はい。誕生したその時から、私達はそれを持っています。しかし

全てではなく、必要なものが全てです」

「ふむ」

ハクセンの知っている神族の知識としては、数千年前にここ、ヤイゴの森を中心に人間や獣族、精霊などといった様々なこの世界の住人とうまく調和を保って生きていた。しかし、その種族たちは互いに争うようになり完全なる弱肉強食の時代へと流れ、最終的には人間が勝利を手に入れた。

「ところでハクセン様。あなた様は私達神族が人間によって滅ぼされたとおっしゃりましたが、それは違います」

迷いの無い声にハクセンは耳を傾ける。

「私達は自らこのような存在になったのです。誰からの強制でもなければ、決して何かに屈したわけでもありません」

「……では、一体なぜ人間に従属するようなことをしているのだ？」

「これは従属ではなく、一人の人間との契りであり、また私達のなすべき事なのです」

なすべき事。ハクセンは考えた。一時は全生命のトップにいた神族いや、それは今も変わらないとハクセンは考えている。その最高位にいる神族のなすべき事がなぜ、人間に一生くつつき、その者ともにもいなくなる事なのか。

「……解せぬ」

ガサガサッ。

「あ、こんな所にいたんだ」

草陰から出てきたのはハクセンの一応の主人、ルイスであった。背も伸び、髪も少し伸びた彼はハクセンの予想以上の成長を遂げた。初めてあった時などはなんて幼稚で、更生の余地はあるのか、とも思ったぐらいである。しかし彼の言葉には意思があった。彼と言葉が繋がり、その言葉はハクセンの元へと伸びてきたのである。不思議としか言いようが無い。

「ルイス」

そう彼の名を呼び、近くに座るよう促す。呼ばれた当人は珍しいな、という表情である。

「わしはな、お主以外にも神族と共に生きて人間と会った事がある」
「え？」

ルイスは思わず身を乗り出した。まさか、ハクセンの口から神族の情報もらえるとは。いや、それよりも彼から話題を振られる事自体ルイスにとって予想外の事だった。

「いつもは僕の問いかけに答えるだけだったのに、急にどうしたの？」

そうは言ったものの、ハクセンの答えはいつも答えではないように思えるのも事実ではあった。ハクセンの答えはいつだって、新しい謎が同居しているのだから。

「なに、場所が場所だ。それにお主の耳は大分聞こえるようになってきたようだから」

よく聞くことのできる耳を持っていれば、世に聞こえないものは無い……

そう言えば、いつか大怪我を負ったときにハクセンがそんなことを言っていたっけ、とルイスは思い出した。

「世に聞こえないものは無い、か……いまいち理解しがたいよ。だって、この広い世界をどうやってこんな小さな耳が聞いてくれるのか。まあそれは置いといて、一体何を教えてくれるの？」

ハクセンは短い話をしてくれた。

もう何十年と昔の話。ハクセンがただのタイスから古代獣へと移り変わった頃、彼は一人の青年と会った。青年はハクセンが古代獣と知り、自宅へと招待をした。青年の名前はロード。彼はゆうに100の年月をすでに過ごしていると言った。それでもハクセンから見れば若いうちに入るのだが、彼の容姿はそれ以上に若かった。彼の家で一夜を過ごし、ハクセンはまた当ても無く歩き始めた。と、ハクセンの話はこれだけだった。

「さて、わしは先に帰っている」

ルイスを残しハクセンはゆっくりと去っていった。

一体何を言いたかったのか。ルイスがしばらくその場に座り込んで考えていると何という不運、いや、偶然なのかガーバとばったり出会ってしまった。

「あつれルイスじゃん！なんて偶然、いや運命！？もう俺達離れられな……」

ガーバが全て言い終わる前に彼はルイスの痛すぎる視線に屈してしまった。

「すみません。ホントごめんなさい俺しつこいですごめんなさい」
「まあわかってるならいいんだけどね」

ルイスは自分を装うということをしなくなった。学生の頃はいい生徒のお面をつけていたが、サレオスやマナに会ってから、いつの間にか自然の自分でいられるようになっていた。しかしハクセンには、もう少し気遣いがあっても、と時々小言を言われる。

「ルイス……もっとやさしく言ってくれても」

「じゃ、僕はもう帰るから」

ルイスはそそくさと彼から離れようとしたが、案の定それは不可能であった。

「なあなあ。この辺りに伝説の召喚獣がいるらんだよ。一緒に探そうぜー」

彼はルイスが今まで出会った中でもかなりのしつこさをもつ人間だ。毎日毎日あの笑う門に来てるし、ひどい時には宿まで押しかけてきた事もあった。後ろでいつまでもうるさいガーバにまた一言言おうとルイスが振り向くと、

「おっ！ルイス協力する気に……」
「っちー!!」

獣人型の凶暴なモンスターがガーバの後ろで舌をだらしなく出しな

がら獲物を狙っていた。

ルイスはすばやく防衛術を唱え、それと同時にモンスターが食いかかってきた。が、ルイスの方が一瞬早く、間一髪のところまでガーバの首は守られた。モンスターは静かに後ずさりしながら森の中へと消えていった。

「あつぶねえ……ありがとな！危うくあれに食われるところだった」

「……ふうん。よく言うよ」

ルイスはモンスターが消えた後に気付いた。彼がすでに召喚獣を潜ませていた事を。

ガーバ

ルイスは隠すことなく率直に聞いた。

「ガーバ、君僕より先にあのモンスターに気付いて召喚獣潜ませてたでしょ？なのに僕を試すような事して、一体何のつもり？」

ルイスが詰め寄るとガーバは後ずさった。表情を少し引きつかせながら。

「ちよ、待て！何か誤解してる！確かに俺は召喚獣出してるけどな、あれは別にそういう意味じゃない」

「じゃどういう意味？」

ガーバは諦めたように肩を落とし、彼の召喚獣であろう名前を呼ぶ。

「イニ、出て来い」

彼の声に反応して、高い木の上から一匹の白い動物が降りてきた。

「これが君の召喚獣？」

ぱっと見はイタチのようだ。しっぽの先だけが黒くなっていて他は真っ白である。さして大きすぎず、とても攻撃型、もしくは防御型の召喚獣とは思えない。

「そ、オコジョってイタチ科の動物なわけなんだけど、まあその辺は俺の召喚術師としての腕で見事に立派に役立つ召喚獣になってるわけだ」

ガーバは無駄に胸を張って自慢げにイニと呼んだ召喚獣をルイスに見せ付ける。

「……本当に役に立つの？」

ルイスは半信半疑であった。そもそも魔術以外全くといっていいほど才能も興味もないルイスには、本でさらっと読んだだけの召喚術の知識しかないのだから。

「いいかルイス君。召喚獣というのは三種類ある」

ガーバはこれまた無駄にえらそうに説明を始めた。

「まずは精霊などすでにこちらからの視点で召喚獣としているもの。これらは召喚術師のレベルにあわせてこっちにでてくる。次に個々として存在しているかなりハイレベルな召喚獣。実はこういったやつ等は召喚獣、とではなくリヤオと呼んでいる」
「リヤオ？」

こんな単語は聞いた事がない、とルイスは食いついた。一応興味は持ったようだ。

「そ。まあこの単語に行き着く召喚術師は全体の4割ぐらいかな。ほかの6割は俺らに言わせりゃ一般市民とあんま変わらん」
「へえ」

似たような事は魔術の道にもある。例えば直魔である。これは直接術者の体に魔術をかけるというもので、呪いなどとはまったくの別物である。

「リヤオの天辺にいるのがこのヤイゴの森にいるっていう伝説の召喚獣。ま、その話は置いて、最後の一つがこのイニみたいなのだ」

ルイスは今までのガーバの言葉をもう一度頭の中で処理していった。

「つまり、普通の動物を召喚獣として使うってこと？」

「わお、ルイス君大正解！」

ガーバは正解したルイスに無駄に贅辞を送った。まったくもって今さらなのだが、ルイスはこのガーバという自分と同年の召喚術師はなんにしても無駄が多いのだと知った。

「で、そういうことを出来る召喚術師って全体の何割？」

「1・5割」

ガーバは不適に笑った。獲物を捕らえた、という感じの顔だ。捕らえられたのはもちろん、ルイス。

「なるほど、すごい口説き文句だね」

ルイスもまた、笑った。このガーバという青年は自分の予想以上に腕がたつ。一緒にいてプラスになるかどうかは置いて、決してマイナスにはならない。それに、別に召喚術をつかいたいとは思っていないがやはり知っておいて損にはならないだろう、とルイスは考えている。

「どう？おもしろそうだろ？俺って意外とすごいだろ？」

ガーバは子どものように目を輝かせていた。その様子を見てルイスははっとした。

「そうか、この人は……」。

この日は結局伝説の召喚獣探しはせず、二人なかよくヤイゴの森を去った。そして行く先はもちろんあの笑う門である。

ウィルは磨いていたグラスを危うく落とすところだった。なぜなら、あのルイスがああガーバと一緒に仲良く(?) 店に入ってきたからだ。

「ウィル、いつものお願い」

「俺にもなあ！」

ガーバはご機嫌だった。ウィルは注文を受け厨房へと入って取りあえず調理をしながらよくよく考えてみた。

(考えられる可能性としては…… 1、ルイスが弱みを握られた。いやあこれはないなあ。 2、ルイスが改心した。これもないな。じゃあ3? ルイスが何かに釣られた。ううん、確立低いなあ)

そうこうしている内にルイスのオムライスと、ガーバのペペロンチーノが完成した。

「はい、お待たせえ」

「センキュー！」

「ありがとう」

二人は出された料理を直ぐに食べ始めた。

「で、これはどういう事？」

考えたって他人の事なんて分かるわけがない。そう結論付けたウィルはそのままストレートに聞いた。

ルシヤント(前書き)

どうして戦争は起るの？

ルシヤント

店の掃除をしていたウィルは入り口の方に久しい顔を見つけた。それは羽根突き帽子をかぶり、ちりちりした長い髪を一つに結び、服装はまるでバランスもセンスもないものを纏っていた。一言で言うなれば、変人というのが一番しっくりくるだろう。

「あ、店長」

変人はここ“笑う門”の店長でした。ウィルは箒を持って動いていた手を止めた。

「ずいぶんと今回は長い旅でしたね。大丈夫でした？死んでませんか？」

ウィルの笑顔つきの言葉に店長は親指を立てて白い歯を光らせた。

「この俺様に肉体の終わりが来ても魂は永久不滅さ！」

「せめて肉体の終わりが早く来て欲しいですねえ」

二人とも広くない店内で笑いあっていた。

ウィルはとりあえずこの変人店長にご飯を作って出してあげた。店長は魚介類が好きなので、今回は秋刀魚の塩焼きとアサリ汁だ。

「うまい！うまいぞマイサン！」

「店長の息子になった覚えは微塵も無いですけどねえ」

ウィルはまた掃除を始めた。

「時に少年、君はいつまでここでバイトをしてくれるのだ？」
「はい？」

また突拍子のない事をこの人は、と思ったウイルなので掃除を止める事はなかった。

「近々戦争が勃発するのさ！紳士ウイル、君はそれでもここ“笑う門”にいてくれるのかい？」

「戦争？一体どこがやるんですか。ボケるなら旅行中だけにしてください」

床は掃き終わったのでウイルは雑巾を手にしてテーブルを拭き始めた。

「ヤイゴの森に接してる三方国に決まってるじゃあないか！お隣のハンディーラはあのイルハウ大会の優勝者、アーキルが味方についてるって話」

「へえ。あの決勝戦当日にお腹壊して遅刻してきたアーキルですか
ようやくウイルは手を止めて店長の話をちゃんと聞き始めた。店長はせつせと秋刀魚の骨をとっているところだった。

「そうそう。で、ビビハは老魔術師のラリアがついてるみたいだな
「じゃあ「」は？」

ルーパーのあるこの国はルシャント。ハンディーラとビビハの間にあつて、三方国の中で一番小さい国である。

「ルシャントはあ、なんて言うかあ」

「気持ち悪い話し方は止めてください」

「はいはい。ルシヤントは孤立無援です。最近じゃあ戦争の匂いがかぎつめた旅行者は皆ルシヤントを離れてる」

「ああ、だから最近静かなんですね」

ケンカの絶えないルーパだが、それでも最近人が少なくなってきた。いるな、とウイルは思っていた。

「でも戦争の理由は？まさか、どこの国にヤイゴの所有権があるとか下らない事ですか？」

「まさか！どこの国に伝説の召喚獣を手に入れる権利があるか、だよ」

「……」

「……」

二人は見つめ合って同時に深い深いため息をついた。そして同時に、

「くっくだらない」

と言い放った。

ルシヤント（後書き）

大半が人間の欲からきている。たまに不可抗力の場合があるのだよ。

小さな子ども、ロードと一緒に住み始めた賢者の会話

アーキル(前書き)

人の欲なんて無くなればいいのに……。

アーキル

ハンディーラの首都、トルアルにその人はいた。

「アーキル様」

呼ばれた男は振り返る。綺麗な赤髪がすっと流れ、それに負けないくらいの真紅の瞳が見るものを射抜く。

「何か」

「首相がお呼びです。どうぞ3階の広間へ」

アーキルは表情を変えずこの国の長の秘書について行った。

横に長い階段を登りながら、アーキルは自分の中に渦巻いている激しい感情を落ち着かせようとしていた。

数週間前

「ここがお前の故郷か」

アーキルはハンディーラの町並みをゆっくりと歩きながら楽しんでいった。石造りの家が多く、町全体がまるで一つの芸術作品のようだ。

「そー中々いいところでしょ?」

アーキルの前をショートカットの医術師、ピユアが歩いている。二人は錬金術師のザイドと別れてからも変わらず世界を旅していた。そして今回たまたまピユアの故郷であるハンディーラに来たのだ。

「……ご両親は健在だったか？」

「そうよ！勝手に殺さないでよね！」

笑いながらそう答えるピユアの足取りは軽い。何年ぶりに家族に会うのだから何も不思議な事はない。アーキルはピユアにせかさながら彼女の实家へと向かった。そこは一段とりっぱな家だった。しかも驚く事に、玄関先には俗に言うメイドが出迎えたのだ。

「お嬢様だったのか」

「まあそうも言うつわね。でもいたって普通に育てられたわよ」

興味なさそうに答えるピユアの前に一人の男が現れた。俗に言う執事である。

「ピユアお嬢様、真にお久しぶりでございます。お元気そうで何よりです」

男は深々と頭を下げ、笑顔をピユアに送った。

「シヨーンもね。誰かいる？」

「いえ。しかしあと一時間もすれば奥様が戻られます」

「本当に！？じゃあ少し庭にでて待ってようかしら。ね、アーキル？」

「ああ。何でも構わない」

二人はバラが咲いている庭へと向かった。間をおかず執事のションが紅茶とケーキを持ってやってきた。

「ありがとうございます」

アーキルは軽く頭を下げた。そしてションはすぐにその場を去った。

「……ご両親は何をしているんだ？」

「ん？えーっと、父は政治家で母は何もしてないわ。ただ母の父は医師だったみたいよ」

そうか、とアーキルは紅茶に口をつける。まさか自分の旅仲間がお嬢様だったなんて、アーキルはため息をついた。

「どうしたの？」

「きつと君の父親に睨まれるな。……刺されなければいいか」

アーキルの頭にあるのは娘を持つ一般的な父親の言動だった。

『大事な娘が、どこの馬の骨ともわからぬ男と一緒に旅だと！？許さんぞ！！』

父の鉄拳はアーキルにヒットするだろう。それを想像しただけでアーキルは眩暈がした。

そんなアーキルの憂いなど他所に、ピュアはこれから母親に会えることにルンルンだった。

「失礼します」

秘書とともにアーキルは長の部屋へと入った。長はイスの背もたれに寄りかかり、口元にはいやな笑みがこぼれていた。秘書は一礼してアーキルを残し部屋をでる。しばしの沈黙が部屋を覆う。

「仕事だ」

先に口を開いたのは長のほうだった。

「ついさつき手に入れた情報のだが、ビビハが老魔術師のラリアを連れてヤイゴの森に向かったらしい。しかも、召喚術師にはあの“片目の無音”がいるらしい」

「片目の……無音……」

アーキルは以前ザイドが話していたのを思い出した。

『召喚術師で名の通った奴と言えば、“霧の外れ”“狂気の実”“雪の人”、それと“片目の無音”だな』

『なんだそれは？全部通り名じゃないか』

『俺ら一般人とは格が違うんだよ』

『……よく言うな。そう言えば“錬金の父”は最近本を出さないよ。うだが、女でも出来たのか？』

『さあな。女に相手にされなくてへこんでるんじゃないか？』

“片目の無音”。ビビハは伝説の召喚獣を手に入れるために正面戦争などせず少数精鋭でフライングをしたわけだ。

「……で、俺に何をしろと？」

いつになく感情のない声でアーキルはハンディーラの長に問いかけた。長の口元には相変わらず笑みが残っている。

「こちらはまだ召喚術師を確保していない。今我々に出来ることは奴らの足止めだ。いいな？」

それだけ聞くとアーキルは部屋をでた。

『城の者を使っても外で見つけてもいい。とにかく奴らを1ヶ月食い止められるよう、お前が部隊を作ってやってくれ』

長の言葉がアーキルの頭を何度も行き来する。

アーキルは城を出た。あの老魔術師に“片目の無音”。相当な戦力が要る。アーキルが見たところ肝心な城にはあまり優秀なものはない。こういう時は酒場と相場が決まっているので、彼は重い足取りで仲間を探しに街に出たのだった。

アーキル（後書き）

そうしたらわしらは人では無くなってしまつよ。

ロードと賢者の会話

ヒーローさん

「そう！黒い髪の魔術師！知らない??」

エメラルド色の髪をした少女がカウンター越しに聞いているのは、数年前に自分をコケにした魔術師の事だった。彼女の隣には恋人と
いうか保護者というか、同じ召喚術師のシュワルガがのほほんとお
酒を飲んでいた。

「黒い髪ってだけじゃなあ。他に何か特徴はないのかい？」

「ええっと……」

「エールラン、そろそろ行こう?」

シュワルガは席を立ちかわいいエメラルド色の髪をなでた。

「ちょっと待って！まだ何にも……」

「そろそろ公園に動物サーカス団が来るよ?」

シュワルガのその言葉を聞きエルランは目を輝かせてすぐさま店を
出た。

「早くシュワルガ！一番前でみんなを見たいんだから！」

「わかったわかった。そんなに引張らなくても大丈夫だって」

背が高いシュワルガは腰を屈める姿勢で人ごみの中をエルランに引
っ張られていた。

二人が着いた時にはもう子ども達がサーカス団を囲っている状態だ
った。

「あー！……見れるかなあ。昨日より増えてるよ」

エルランの困った顔はもちろんシュワルガの頬を緩めるには十分なものであった。

「大丈夫、前の子達はしゃがまなきゃいけないからこの位置はちょうどいいよ」

それを聞きエルランは安心してサーカス団のほうに目を向けた。シュワルガの言うとおり前にいる子ども達はしゃがむように言われてちょうどエルラン達は立って見れるようになった。人垣の中心には動物達が綺麗な衣装に身を包み、まるで人間のようにたって歩いたり頭を傾げたりとなんともかわいらしいしぐさをしている。

「かつわいいなあ。やっぱり私も欲しいなあ」

エルランが言っているのは召喚術の力の一つでペランタ。普通の動物を召喚獣として扱う事である。しかし今の彼女にペランタが出来るだけの力は備わっていない。一方のシュワルガはペランタを習得しているがオセという召喚獣で十分とふんでいるのでそんな面倒なことはしていないのだ。

「ペランタは相当勉強して修行つまないといけないからねえ」

「シュワルガに出来て私に出来ないなんてイヤ！教えて！！」

二人が話をしている間にサーカスショーは終わって観客はバラバラと去っていった。もう日が傾き始めていたので二人は宿へと戻ろうとしたがその帰り道、二人にとって驚きの人物がその目に入った。それは彼らにとって唯一の人物。二人が幼い頃に出会った、希望の人。

「……ザ、イドさん……??」

口にしたのはシュワルガのほうだった。

ザイドと呼ばれた青年は振り返り二人を見た。

「……あ、え〜つと……?」

「テメエ知り合い忘れるかあ?」

そう言ったのはザイドの隣を歩いていた金髪の青年だった。ザイドよりも背が高く、何より美青年、という言葉が似合う青年だ。

「って何だその口の利き方は!いつつも言ってるだ……」

「あくはいはい。どうもすみませんでしたあ〜」

「ベルクス!お前はなんだっていつつもいつつも!」

「だあ!それよりこの人たち、あんたに用があるっばいけど?」

ベルクスと呼ばれた美青年はシュワルガとエルランを指さして面倒くさそうにザイドを促した。

はっ、としてザイドは再び二人を見た。

「ザイドさん!ですよね!??」

エルランが思わず身を乗り出し目を輝かせて質問した。ザイドは困ったように肯定すると、エルランはいきなり抱きついたのだ。

「え!?!な、え、ええ!?!?」

「よかったなあ、師匠にも春が来て」

金髪美青年ベルクスはからかうように師匠と呼んだザイドを笑うと、

ザイドは顔を真っ赤にして手をバタバタさせた。

「ザイドさん……」

すっかり棒立ちになっていたシュワルガも一歩、ザイドに近づく。

「あ、あの。すぐ言いづらんだけど俺、君たちの事……」

「エルラン！」

え？、とザイドは自分にまだ抱きついていてる少女を見下ろした。どこかで聞いた事のある名前。ザイドはエルランをじっと見た。

「見つめすぎだろ。キモイぞ年齢詐欺師」

「ベルクス……お前いいかげんに……」

「つもる話もあるだろうから俺は向こうの店にいるぜ？」

ザイドの了承を得る前にベルクスはさっさと錬金術の店へと行ってしまった。

「ザイドさん、私はエルラン。こっちはシュワルガ」

エルランはシュワルガを指さした。

やはり、どこかで聞いた事がある。ザイドは二人を交互に見た。

「……何年か前に、大人からリンチを受けてた子どもを救いませんでしたか？」

シュワルガがまた一歩、ザイドに近づいた。

「そうか、あの時の……」

先程会った所からさほど離れていない喫茶店に三人はいた。どうやらザイドは二人の話を聞いて思い出したようだ。

「なんて、お礼を言ったらいいか……」

「そんな！ たまたま俺があそこを通っただけの事だ」

ザイドは思い出していた。あの悲惨としか言いようのない光景を。無力な子どもをまるでおもちゃか何かの様にいたぶってとても楽しそうにしていた醜い大人達。ザイドは吐き気を覚えた。

「まさかまた会えるなんて思ってなかった！ 本当にありがとう。ザイドさん」

エルランは少し涙目になっている。シュワルガも、俯いたままで見ている。

「……よし！ お前ら腹減ってないか？？ 特別におごってやる！」

ザイドの明るい声に二人は顔をあげ、笑顔を広げた。

「本当にこの宿か？」

「ああそうだよ。俺だって召喚術師の端くれ。“狂気のみ”の事ぐらい少しは知ってる」

それを聞きアーキルは男と別れた。

彼はハンディーラの国中を探していた。腕のたつ召喚術師を。そしてたら運よくなんとあの“狂気の笑み”がこの国にいらしい情報を掴んだのだ。最初はガセかと思ったがどうやら本当のようだ。現にその男が泊まっているであろう宿までたどり着いた。

「……………うまく運びすぎだな」

一人呟きながらアーキルはその宿のある町へと早足で向った。

狂気の笑み（前書き）

その必要はない。

狂気のみ

いつか救った幼い命が今日の前で幸せそうに生きている。そう思うのはうぬぼれなのか……。それでも俺は、心の底から喜びを感じている。

「はあ？ アンタそんないい事するようなヤツだっけ？」

「お前は……」

ベルクスの容赦ない言葉に時々、いや、どちらかというとき頻りに心を折られる。ベルクスの言葉に対してエルランとシュワルガは懸命に訴えている。

俺達はこの町に着たばかりなのでまだ宿が決まっていなかった。なので今夜はせつかくだからシュワルガ達と同じ宿に泊まってゆっくり話でもしよう、という事になり今に至る。

同じ頃、四人のいる宿の受付に赤髪の魔術師が訪れていた。彼は教えられた部屋へと階段を上がり、そのドアをノックする。

「ん？ こんな時間に訪問客？」

ベルクスは師であるサイドを見て訪問客を通すか目で訊いてみた。サイドの首は小さく縦に振られた。

「……はいよ〜どうぞ入れよ」

どんな丁寧語だ、とザイドは肩を落とした。

彼には錬金の才がある。それはあのイルハウ大会で十分に分かった事だがどうにも彼は言葉遣いや性格が荒い。まあ根はいい子なので別に問題があるわけではないが、せっかくの才と、その荒さからは対照的な綺麗な顔立ちを下げているように思えてならない。際立つて外見に褒める点のないザイドからしてみればもったいない、としか言えない。

「失礼する」

ドアが開かれザイドが見やるとそこには見慣れた人物がいた。

「あ、」

「ん？」

アーキルである。イルハウ大会まで一緒に旅を共にした少し間の抜けた感じの魔術師。

「なんだ？今日は師匠の再会日和かあ？」

ベルクスは面倒くさそうにため息をついた。

「師匠？……そうか、弟子にしたいといっていたな。というかなぜこんなところにいるんだ？」

「いや、それはこっちのセリフだろ！だいたいなんだこの再会！？なんか俺達微妙な雰囲気であれじゃん！！？」

ザイドは思わず立ちあがりつつこんだが、アーキルは頭にハテナマークを浮かべている。

「何が微妙なんだ？まったく、お前は本当に意味がわからないな」
「ええ？！久々の再会なのに何その乾燥的な態度！！いや、アーキルがそういうヤツだってことは重々承知だけど……」
「それより俺はたぶんその男に用があるんだ」

ザイドの言葉を遮ってアーキルはシュワルガを指さした。

「え？俺？」

「まあ立ち話もなんだ、取りあえずイスと茶を用意してくれ」

「アゝなんか思い出した。お前イルハウ大会で力キにあたったアーキルか。つつーかなんでテメエなんか茶あ出さなきゃいけないんだ？ああ？」

ベルクスはあの時バカにされたのを思い出し機嫌を急速に下降させた。

「こらベルクス、その態度はないだろ」

「はい！アーキルさん！」

ザイドがベルクスに小言を言っているうちにイスもお茶もエルランが用意してくれた。アーキルはきちんとお礼を言ってシュワルガに話しかけた。

「早速で申し訳ないが俺とヤイゴの森へ来てくれないか？報酬は国から出るから悪い話ではない」

その場にいた四人は皆一同に首をかしげた。

「……アーキル、まずは普通の流れとして自己紹介をしよう。うん」

ザイドの提案に皆首を縦に振った。

「エルランです！ザイドさんに昔救ってもらいました」

「シュワルガです、同じく救ってもらいました」

エルランは明るく、シュワルガはゆるい笑顔と声で挨拶をし、

「アーキルだ。ザイドとは少し前に共に旅した仲だ」

もちろんベルクスは無視で、というかもう部屋に姿はなかった。

「で、話すと長いから省くが俺といっ……………」

「そこ省くな」

「……………」

「……………」

「じゃあ、人質救出のため……………か？」

「俺に聞くな！！」

ザイドは再び立ち上がる。シュワルガとエルランは楽しそうに笑っていた。しかし言った当人は至極真面目であった。

つまりはこういう事だ。

ヤイゴの森には伝説の召喚獣がいる。とてつもなく強大な力を持ちリヤオのトップに君臨している召喚獣。その伝説の召喚獣を我が物にしようと、浅ましいとしか言いようのない欲に駆られたのがヤイゴの森に接している三カ国。ビビハにルシャントにハンディーラだ。しかし当初噂されていたのと違ったのは、ルシャントだけが今回の件に関してまったく関係がないということ。要はビビハとハンディーラの競争のようなもの。そしてビビハは少数精鋭で先にヤイゴの森に入った。それに焦ったハンディーラの長はアーキルに一ヶ月ビ

ビハの動きを封じるよう頼んだというわけだ。

「でも、どこが人質救出なの？」

エルランは目をくりくりさせてアーキルに聞いた。

「俺とザイド、それと実はもう一人医術師の仲間がいてな……」

「まさかっ」

ピユア、か。ザイドはアーキルの目を見た。彼は小さく頷く。だがなぜ、ピユアにそんな事が降りかかったのか。

「父親が政治家だった。どちらかと言えば誠実な政治家に入る人だ。だからあの人もうまく利用されたのだと思う……。どこから嗅ぎ付けたのか俺の事を知った高官共がピユアを人質にハンディーラに協力するよう求めてきた」

「そう、だったのか……」

一瞬部屋は沈んだ。エルランとシュワルガにとっては知らない人だが、命の恩人であるザイドの仲間だった人なのだ、というだけで気持ちは一緒になった。

「伝説の召喚獣だから、俺を探したんですね」

「そうだ。そして何より、ビビハには“片目の無音”と老魔術師のラリアがついている。どうしても“片目”に匹敵する召喚術師がないと例え俺でも奴らを足止めすることは無理だろう」

二人の会話を聞いたザイドはふと考えた。姿形こそ知らないが、あの“片目の無音”に匹敵する召喚術師といたら、“霧の外れ”“雪の人”、それと……

「……………“狂気の、笑み”……………」

シュワルガを見た。彼はまだ、ゆるい笑顔を見せていた。

狂気の笑み（後書き）

笑みの理由を知るなど、

変人からの贈り物

ビビハとハンディーラがしのぎを削っている中、間にあるルシャントはただ静かだった。

そして今日も“笑う門”にはいつものメンバー……プラス変人がいたのでした。

「店長、いい加減旅にでてくださいよ。一週間もいられるなんて、正直キツイです」

「いやいやいや、お前バイトじゃん？何でそんな上からなんだ？」

ガーバは思いつきり理解不能な顔をしている。

「そつか、今日初めて会うんだっけ。あの人はそれはもう類稀なる変人でね。まあ見てれば分かるよ」

ガーバと、それにルイスも昼食を終えて少し店内の彼を見ることにした。

取りあえず目を引くのはあの奇抜な衣装だろう。やたら長く黒い帽子に腰まであるさらさらの青い髪。耳や首、腕にはジャラジャラとアクセサリーをつけ上半身は……気持ち悪いまでに綺麗な筋肉を見せるタンクトップ。そして下は赤やら黄色やらの原色がうるさいスカート。

「……ねえウィル。あれは、人？」

ルイスは思わず聞いてしまった。足元に座っている白いタイスのハクセンはすやすやと眠っていた。

「そうだね。人の定義がもし、考える輩ならきつと彼もギリギリ……」
「一緒だと思うと無性に切なさがかみ上げてくるな」

「ガーバも店長を見捨てました。」

店長は何やら手に本を持っています。しかし眠っているので関係ありません。しかしガーバは好奇心で彼が何を読んでいるのか確かめに近寄ったのですが、

「スダー……ジツッ！！！！」

「うおっっ！！！！」

突然店長は目を覚まし立ち上がりました。さすがのガーバも腰を抜かし床に倒れてしまいました。

「ははっ、ガーバはジジイみたいだね」

ウィルお得意の嫌味つき笑顔が満開です。ちなみに、店長が奇声を発したり、意味の分からない行動をするのは彼の日常です。変人です。

「おや？少年、そんな所に座り込んで一体どうしたというのだ？そ
うだ！！そんな腰抜けの君にこの素晴らしき本を贈呈しよう！！」
「は？」

それだけ言うと店長は手に持っていた本をガーバに渡し、スキップで店を出て行きました。

「……スダージ？どっかで聞いた事あるような……」

ルイスは店長の叫んだ言葉をなぜか受け取りました。基本的に彼は真面目なのです。

ガーバは渡された本を持って二人の方に戻り、ペラペラとめくりました。

「何の本……?」

「あぁつと……ん?」

ガーバはまたペラペラとめくり、一度本を閉じてまた初めから本を見ました。

「……何語だ??」

「「え?」」

ルイスとウィルはガーバの持っている本を見ようと身を乗り出しました。

「……あ、変人語?」

「んなわけあるか」

「これ、キリエラ語だ」

唯一その本を理解できたのはルイスだけでした。彼がまだ魔術大国、イリユーマにいた頃によく見た文字です。

「古代文字の部類でこの系統は第3種の魔属語だよ……。すこい、この本全部がキリエラ語だ……」

ルイスは目を輝かせました。まるで新しいおもちゃを与えられた子どものようなので、ウィルとガーバは優しい眼差しで彼を見守る事

にしました。

「キリエラ語はその発音、文字、文法、どれをとってもどの魔属語よりも綺麗でそれ自体が宝石のようだ、って言われてるんだ。僕もイリユーマである封印術を解読してた時に少しこれに触れたけど、やっぱり他の魔属語とは違った。何がどう違うかって言われてもうまく答えられないけど、とにかくこのキリエラ語っていうのは僕等魔術師からみたら一つの宝石の……」

「わ、わかった、そうだな！すごいよな！その、キリエラ語とかいう……」

「すごいってものじゃないよ！キリエラ語はその洗練された美しさゆえに長年色んな人間に翻弄されてもう失われた言語の一つと言っても過言じゃないんだ。その点では第1種に入ってもいいんだけど、でもそうなる前にすでにある魔術師、あ！モビウスっていうんだけどこの魔術師もすごくて……」

「ルイス！話ずれてない？」

「あ、ごめん。そう、だから第1種に入ってもいいわけだけど、そのモビウスに全て解読されてその資料が確かイリユーマに続く魔術大国シャバリに保管してあるんだ。だからキリエラ語は第3種になってるんだけど……」

「ルイス！！」

ウィルとガーバの声が重なりようやくルイスの雪崩のようなキリエラ語講座はとまりました。まさかここまでルイスが熱をもって話すなんて想像もしていなかった、というか想像も出来なかった二人は優しい眼差しなんぞと言っている余裕など直ぐになくなり、驚きと同時にどつと疲れがでたのでした。

「どうしたの？二人とも」

「こっちのセリフだ」

「右に同じく」

結局その本はルイスが持ち帰りました。もちろん所持者の店長の許可などはいらないのです。

「意外。ルイスってあんなに熱くなれるヤツなんだ」

“笑う門”に残ったガーバはお酒を片手にウィルと飲んでました。ケンカするほどなるとかというヤツです。

「ほんと。人って意外性に満ちてるね」

変人からの贈り物（後書き）

続けて読まれてくださっている方、初めて読まれる方、ありがとうございます。
ございます。

ホント最近（むしろ今？）ちゃんと丁寧に小説がこつよ自分、と思
っております。これからも「届くものの夢」を読んでいただけよ
う、精進しようと思っております。なんとなく（オイ）
ので、これからもよろしくお願いいたします m（――） m

片目の無音

あなた方が助かるというのなら

あなた方が幸せだというのなら

俺は簡単に手放せる。

どうせ肉体なんて この世での入れ物にすぎないと

俺は知っているから。

「ほれ、さっさと登ってこんかいもやしっ子!」

その容姿からはまったたくをもって考えられないほど元気な老婆がク

ラヴィスの前を歩いている。クラヴィスは老婆に気付かれぬよう小さくため息をついたが、それは容易に知られた。

「こんのガキンちよが！！年配者に向つてため息をはくたあどういふ事じゃ！！」

「……………」

クラヴィスは老婆の小言など無視をして、そのまましくもやしっ子の名にふさわしい体をゆつくりと動かしていく。老婆はまったく自分の声に耳を貸さないクラヴィスの耳をひっぱってやるごと、自分より少し下にいる彼の元へ戻ろうと少し急な斜面を降ろうとした。が、足を踏み外し老婆の体が宙に浮かんだ。

「うあっ！！！」

思い切り目を瞑った老婆だったが、次に訪れるはずの体の痛みがないので恐る恐る目をあける。

「……………年なんだから、無理するな」

どうやらクラヴィスがそのもやしの体をもって老婆を助けたようだ。

「お前が話を聞かないのが悪かるう！！」

「……………」

クラヴィスはその老婆の声にも特に答えを返さず、彼女の体をきちんと地面におろして先に進んだ。

「こらクラヴィス！まったくお前は、もう少し言葉を勉強せんかい！！」

「……ラリアは数字を勉強したほうがいいかもな」
「何じゃと？それは何か、わしの年の事を言っておるのか？そんなのかクラヴィス！？」

後ろでギヤーギヤー元気のいいラリアを無視してクラヴィスはまた進んだ。

クラヴィスにとってラリアは大切な人だ。ちょうど3年ほど前に行き倒れになっていたところを拾ってもらい、看病までしてもらった。クラヴィスにとってラリアは母親のような人だ。といっても、彼は母親というものがどんなものか知らないから「ような人」でしかない。しかし彼にとって大切な人に変わりはない。

ラリアは魔術師だ。そっち方面ではそれなりに名は知られているらしい。しかしそんな事は彼にとってはどうでもいい事だ。ラリアが彼にとって、母親のような人に変わりはないのだから。

ラリアは数年前に男の子を拾った。痩せていてもう死んでいるのかと思って近づいてみれば、その子は虫の息をしていた。

ラリアはそこからさかのぼる事数年、夫を亡くしていた。更に言えば、夫を亡くす数年前に、生まれて一年も生きられなかった自分の息子がいた。

クラヴィスという名の虫の息だった男の子は召喚術師だった。片目を失っているその男の子をラリアはとても、愛おしく思った。

夜になり、ヤイゴの森は不気味なほど静かだった。

二人がこの森に来て早1週間、「伝説の召喚獣確保」というクラヴィスなど召喚術師にとってはバカげ過ぎている下らぬ事に参加してしまったのは、目の前でスヤスヤと眠っているラリアのためだった。しかしクラヴィスには腑に落ちない点があった。

いつもならクラヴィスの言葉に耳を傾けるラリアが、なぜか今回に限って貸さず、ほとんど無理やりの強制参加なのか。いや、ラリアは気が強いからそんな事は毎度の事だが、今回はかりは二人の命と深く関わってくる。普段ならこんな厄介事には絶対必ずと断っていいほど避けるラリアがなぜ。

そんな事を考えていると、偵察にいかせていたビフロンスの使い魔が戻ってきた。

「ハンディーラの赤髪の魔術師アーキルは、“狂気のみ”と共にこの森に入りました。他にも“錬金の父”、女の召喚術師、男の錬金術師も一緒です」

クラヴィスは手を軽く振り、ビフロンスの使い魔はまた仕事へと戻った。

「……………（ずいぶんと大勢できたな。しかも“狂気のみ”だけでなく“錬金の父”まで）」

クラヴィスはラリアを見た。顔にはしわがあり、手もヨボヨボ。背が少しばかり丸まっている自分の大切な人。

「……………ビフロンス」

左手にはめてあった召喚術師なら誰でも持つ手袋から光が放たれ、クラヴィスの前に一体の召喚獣が現れた。その姿は魔物、というのがしっくりくる黒くとても大きなものだが、とても人間に近い感じ

もした。肌が白い分、赤い目と唇が際立っている。

「今度はなんだ……」

すでに自分の使い魔を数匹貸しているビフロンスは面倒くさそうに口を開いた。その声は死人のようなかすれたものだった。

「探してほしい人間がいる。補足としてはその人物が仲間になるよう誘導もしてほしい」

普段無口なクラヴィスから多くの言葉が出てきた事にビフロンスは少しばかり驚いた風にみせた。

「くつくつ。何を焦っている？この私を配下においているお前に、恐れるものがあるというのか？」

「……記憶によると“狂気の笑み”はあの“オセ”を持ってるみたいだな」

なに、とビフロンスの眉がややあがった。オセといえば自分と同じリヤオと呼ばれる者で、3つの悪魔軍団を従えているかなりのものだ。

「ふん、面白い。アイツは前々から気に入らなかった。この際消してしまおうか」

「……で、探してほしいのはルイスって魔術師だ。3日以内に。ついでに付属品もある。それも一緒に構わない」

「くつくつ。よく喋るな。そんなにこのババアが大事か？」

ビフロンスはそのゾツとするような姿をクラヴィスに近づけてかすかに笑った。

「なあ、「片目の無音」さん……？」

お前の右目をよこせと言われた。

そうしたら、家族を助けてやると。

俺がためらう理由など

万に一つもありません。

片目の無音（後書き）

お読み頂きありがとうございます！

そして前回の無礼千万を謝罪したく、あとがきで言い訳を！！！！

「なんとなく、なんてホント失礼だよ君」

「ホンマすいません。でも怖かったです。公言するのが……」

こんなとこまで読んでいただいたのに結果こんなちやちいものでしょめんなさい。

次は明るい話題を発信します！！

森の住人

ヤイゴの森に入り数日。“狂気のみ”を確保した事を国に報告し、それならば伝説の召喚獣も頼む！、などと身勝手に無責任極まりない事を言われたアーキルはただひたすら怒りを抑えていた。それが表面に出る事はないのだが、唯一以前旅を共にしたザイドだけがそれに気付いていた。

「……………（くっそマジ怖えよ）……………」

何やら楽しそうに前を歩くエルラン、シュワルガ、ベルクスと、何やら冷気すら感じさせてその後ろを歩くアーキル、ザイドの間には激しい温度差という名の壁があった。もちろんその壁を感じているのはザイドだけなので特に問題があるわけではないが、あまりに心臓に悪いのでザイドはあえて、あえて勇気を振り絞ってアーキルとたわいのない話をしようと弱っている心臓にムチをうった。

「きよ、今日もいい天気だな。ヤイゴって年間を通してこんな感じみたいだし、やっぱりなんか違うよな？」

アーキルの無表情な顔を恐る恐る見る。

「……………違うのは当たり前だ。ここは尋常じゃない力が働いてる。それぐらい分かるだろう。ヤイゴに隣接する三国には曇りや雨といった気候が見られるが、ここはずっと晴れ」

「そう、だな。でもその力ってなんなんだろうな」

「……………やはり有力なのは、神族だろう」

知っている者しか知らないここでのその存在。

アーキルの怒りが少し薄れただろう事を察知したザイドはここぞとばかりに話を広げた。その声があまりに必死なので前を歩く3人が振り返り会話に入ってきた。

「何々??何の話??」

エルランが興味津々といった顔をザイドに向けた。

「神族の話だよ。エルランは知ってる?」

「神族?ううん……」

「なんだそれ?」

失礼ながらエルランが知らないのはいいとして、意外にもベルクスも知らないようだ。

「幽霊みたいなのでしたっけ?ずっと昔にあった全面戦争でこの世界での姿を失ったとかいう……」

「たいした知識だな。さすがだ」

シユワルガの説明を聞いてアーキルは感心した。

仮に神族の存在を知っていて全面戦争の事も知っていたとしても、

“この世界での姿を失った”、というところまで把握しているものは本当に数少ないはずである。

魔術師であろうと召喚術師であろうと何にせよ、その道に通じている者には世界が見える。そんな事が書かれていた本をいつか読んだな、とアーキルは妙に納得した。

「へえ。で、その神族が何だったんだ?」

「ここヤイゴの森はその神族の加護があると聞いた事がある。どこまで真実かは知らないがな」

ふうん、とベルクスはあまり興味を持たず、アーキルの説明を適当に聞いてまた先へと歩き出した。

「あ！ベルクス一人で歩き回ったら大変だよー！」

エルランが後を追い、シュワルガもゆっくりと二人に続いた。

「……………」
「……………」

しばらく一定の間隔で森を進んでいた5人だが、アーキルとザイドの視界から前の3人がいつの間にか消えていた。

「……………マジ？」

「どちらにせよ、さつさとこの術から抜け出さなければ」

「どちらにせよって？」

「ビビハかこの森の住人か、そのどちらかって意味だ」

アーキルは右手で大きく弧を書いた。すると周りの草木が風を受けたようにざわめき、それは次第に大きな波になっていった。

「ちょ、待てっつて！なんかすっごい飛ばされそうだから！！」

「鉄の重りでも作ってそれにしがみ付いている」

アーキルの赤い髪が激しく揺れている。ザイドは言われたとおり錬金術で鉄の重りを作り出してそれにつかまった。風はさらに強さを

まして二人の近くにあつた木は横にしまつていた。

「なあ！！お前何してんだ！？」

鉄の重りを壁に作りかえて強風をしのいでいるザイドがアーキルに向つて声をあげた。しかし聞こえていないらしく、ザイドは再度質問をした。

「おーい！！なあ！何やつてんだよ！？」

「術者を炙り出しているんだ。少し黙つてろ」

「炙り出すつて、これじゃ吹つ飛んでいくんじゃないか……？」

そんなザイドの疑問は強風に吞まれていった。

「……ふん、小ざかしい」

重い言葉と共に風はやんだ。そして二人の前に一匹のモンスターが現れた。

「こんな所までくるなんて、よほどのバカかただのバカだな」

所謂上級モンスターが大きな目を見開いて二人を凝視した。しかし、それに押されるアーキルではない。

「……3人はどうした？」

「お前等の前を歩いてたやつらか？あれなら俺に捕まる前に他のやつ領域に入ったみたいだな。今どうしてるかなど知らん」

モンスターは鉤爪の鋭い4本ある両手を大きく開いた。どうやら殺す気満々らしい。

「ア、アーキル。すっげー怖ええよ。こいつ俺らの倍以上の」

「援護しろ」

「へ？」

ザイドの間の抜けた声はアーキルのだした激しい爆音でかき消された。ザイドはとっさに後ろへと飛んだ。隣にはちゃんとアーキルがいて一度安堵した。

「毒に気をつける。あと空間錯覚を起こされるな」

「そ、それはどう気をつければいいんだ？」

ザイドは弱い声で聞いたが、もちろん答えなど返ってなどこなかつた。その代わりにモンスターの方から毒であるう黒紫の液体が飛んできた。

「くっ、おいアーキル！俺が動き封じるからな！」

液体をなんとか交わし別方向に飛んだ二人は同時に少しだけ口を動かした。

「人間が……来るところではない！」

モンスターはそれぞれの手を大きく振り上げ二人をねらったが、その手はザイドの術によって封じられた。

「何！？」

地面から幾本もの鉄が伸び、それが動きを封じたのだ。いくら動いてもピクリともしないほどの強度のある鉄だ。さらにモンスター目

がけて高濃縮度の雷が飛んできた。もし生身の人間が受けたら一瞬にして骨まで灰にしてしまうほどの威力のあるものだ。

「があああ！！！！！」

「ザイド！困え！！」

「もうやってる！！！！」

先程までモンスターの動きを封じていた鉄は柔らかく薄く伸び、モンスターをあつという間に包んでいった。

「……………」

「……………」

一瞬だけ、静けさが通った。

ボゴツ！！ゲギツギギ！！！！

「ちっ」

「破壊されるまで13秒だ、アーキル！」

「わかった」

アーキルは今度は声を出して術を発動させようとした。唱え終わるとほぼ同時に、モンスターが鉄の殻をやぶってアーキル目がけ襲ってきた。

「ぎゃああああああ！！！！！！！！！！」

……どわっ。

「
……」

倒れたのは、モンスターの方だった。

「
……」
「……つかあーマジ疲れた！」

ザイドはその場に崩れた。アーキルも同様、地面に腰をおろした。二人とも息があがっていた。

モンスターはその体にザイドが繰り出した銀をいくつも突き刺され、熱伝導を通じてアーキルの術を体内にもろに受けたのだ。

「……なあ、コイツホントに死んだか？」

暫く休んだザイドは重い腰を上げてモンスターに近づき、指先でちよん、とつついてみた。

「うわっー!!」

するとモンスターは突き刺された格好をボロボロと土の上に落とし、ていったのだった。

「はあ、マジ焦った」

「まったくだ。ケタ違いの強さだな」

上級モンスターの生息地とは聞いていたが、最初からいきなりレベルの高いモンスターに出会ってしまった二人は早急に3人の事が心配になった。

「どうやって探す？」

「俺がわかるわけないだろう」

二人は一瞬気落ちしたが、そんな気持ちと疲れた体など無視を決め込みとにかくまたヤイゴの森を歩きだしたのだった。

森の住人・パート2

「っざけんなチクショー!!」

「落ちて着こうね〜、ベルクス」

シュワルガの表情は一般的には笑顔というものだが、目は笑っていなかった。決して。

「エルラン、ちょっと耳ふさいでてねえ〜」

シュワルガは愛しのエルランにそう言うと、まだ怒りの冷めぬベルクスの方を向いた。

「なあ、そういうのはエルランがびっくりするから止めてくれるかなあ？でなきゃいくらザイドさんの弟子といっても俺の召喚獣でー思いに、って事もありえるからさ。ザイドさん達には上級モンスターにやられた、とでも言えば普通に通るだろうし。ね？命は大切にしようねえ〜」

「……………わ、悪かった……………」

シュワルガの殺気溢れるセリフにさすがのベルクスもたじろいだのだった。

「よーし、いい子だね〜。エルラン、もういいよ〜」

シュワルガにいつものユルイ笑顔と声に戻りベルクスは胸をなで下ろした。これだから笑顔振りまいてるヤツは、などとルイスを連想しながらなで下ろした胸の中で舌打ちをした。

だが、ベルクスの気が立っているのも一応理由というものがある。

彼ら三人はさつきから似たような場所をグルグルと回っているのだ。元気だったエルランもこの状況に疲れを見せている。

「ねえねえ、絶対私達変な畏にかかったんだってーどうしよう……」
肩を落とし沈むエルラン。変な畏はもちろんの事、ザイド達と別れてしまった事もその沈みに拍車をかけていた。そして三人ともその場に座り込んでしまった。

「ザイドさん達大丈夫かなあ……」

「アイツ等なら平気だろ。むしろ今の俺達の状況を心配すべきだ」

ベルクスのもつともな意見にまたしてもエルランは肩を落とす。そんな彼女の隣にシュワルガが寄り添って優しく頭をなでてあげた。

「だ〜いじょうぶ。俺がいるし。一応ベルクスもいるし」

「オイ、一応って何だよ一応って」

眉をピクリと動かし反抗を試みるベルクス。

「だってベルクスの強さがどれぐらいかわかんないし。まあザイドさんの名前に傷をつけるような事だけはしないでね〜」

「……うるっせーよこのロリコン野郎……」

「え？今何か不躰な事言ったあ？」

いや何も、と体を小さくしてベルクスはシュワルガから目をそらした。そして、この地獄耳野郎、とまた胸の中で悪態をついたのだ。いつも強気に態度も言葉も悪いベルクスだが、このシュワルガという男は彼の人生の中で初めて出会った“ちょっと怖い人”と位置づけられた。

「……（コイツ、全然目が笑ってねーよ）」

もちろん普通の人間らしい笑顔の時もある。だが時々、ひどく人間的でなくなるのを感じていた。

「……ハア。にしてもマジどうっすか？このままじゃどうにもなんねーよ」

「確かにね〜。どうしようね〜」

考え込む二人だが、エルランだけは疲れてしまっただけかシュワルガの腕の中でウトウトしていた。

「テメエこんな時に寝ようとしてんじゃねーよ、というセリフはベルクスの喉元で消化された。後が怖いからであるのは言うまでもない。」

「あ、じゃあこんな時は年の功。オセに聞いてみようか？」

「オセ？」

ベルクスが首をかしげる。

「俺の召喚獣。出て来いオセ〜」

「んなやる気のない呼び方で召喚獣って出て……」

「今度はなんだ。また面倒な事か？」

「……出たしっ！……！」

あまりにあっけなく簡単に出てきた一見豹のようなシュワルガの召喚獣。ツッコミどころ満載だが、まずは状況打開を優先しなければならぬのでベルクスはそのツッコミも喉元辺りで消化した。

「なんか変な感じなんだよね〜どうすればいい？」

「……知性をまったく感じられない質問だな。まあだいたいの察しはつくが、こんなくだらない事のために呼び出したのか？」

オセは周りを軽く見渡しながらそう言った。

「くだらなくないって。俺達ヤイゴの森に伝説の召喚獣とりに来てるんだし」

「……バカだとは思っていたが、まさかここまでとはな。まあ死なない程度に頑張れ」

シュワルガが自分の召喚獣に見捨てられている光景をみて思わずベルクスは嘔出してしまった。

「こら、笑うとこじやないよ」

「だ、だってよ、オマ、自分の召喚獣にっ」

笑いを堪えながら話すベルクスだがシュワルガは特に気にはしなかった。そしてこんな状況にも関わらずエルランはいつの間にかスヤと寝入っていた。

「で、どうすればいいのこの状況？」

「魔術師がいないのならムリだろう。諦めろ」

「そーいう事言う？エルランがいるんだよ？何とかしてよ？」

問答無用の命令にオセは深く長いため息をついた。

「まったく、エルランが絡むといつもこうだな。……自分で異常だと思わないのか？」

「何が？」

「……まあいい。少し行って来る」

オセは三人から離れ森の中へと消えていった。

オセが三人と別れた頃、三人をこのおかしな空間に閉じ込めた上級モンスターはため息をついていた。

「あーもうどうしよう……面倒だなあ。だいたい何？伝説の召喚獣とりに来たとか。ほんつと人間ってバカ……はあ……」

それほど大きくもない湖にまたため息を落とすこのモンスターは、どちらかと言えば外見は人間的だ。モンスターが人間の姿であるところを見るとよほどの実力の持ち主である事は伺えるが、ただ彼から放たれるマイナスのオーラがあまりに強すぎてただの“怨霊”のようにも見える。

「はあ……ボク嫌なんだよね、静寂を破られるのが……普通のやつ等ならこのまま餓死とかで静かに死んでくれるのに、何だつてあの召喚術師はあんなもの呼び出して……嫌だ嫌だ。アノ召喚獣絶対すぐボクのところにくるよお……」

こんなことをブツブツと言っている内に、彼は何故だか泣き出していた。と、そこに噂の彼がやってきた。

「おい」

「つえ？」

モンスターが顔をあげると豹が一匹。あまりに早すぎる彼の出現にモンスターは思わず、

「う、おええええ」

「吐くか!？」

先程三人を映していた湖に朝食べた草花を戻してしまった。オセはあまりの予想外の事に若干焦った。そしてあまりの上級モンスターの虚弱っぷりに彼の中で思いやりの気持ちが生まれた。

「だ、大丈夫か？」

「あ、ご心配なく。一日一回はしちゃうんで」

青黒いモンスターの顔に弱すぎる笑顔があるのを見てオセは心が痛んだ。別にオセは弱いものイジメが大好きなわけではない。だが、一応の主人であるシユワルガの命令は遂行しなければならなかった。

「弱っているところ悪いが、あの三人をこの空間から出してもらえるか？」

極力の腰の低い物言いでもオセはたずねた。しかしモンスターは首を縦には振らなかった。

「それは、出来ない。でもさ、ボクとしてもあんまりこう、騒がしいのとか嫌だから、ここは話し合いを提案するよ」

「?」

彼が言うにはこういう事だ。

上級モンスターの中でも特に力の強いものは今彼がしているように無限ループの空間を作ることが出来る。誰しもが持てるわけではなく、選ばれたもののみ力で、この力は人間達を森の奥に入れないためのものだという事だそう。だから、もし森を去るといふのなら三

人を出すが、そうでないのならこのまま永遠にさ迷ってもらおう、という事だ。

「お互いのためだよ。だから、あの人間達を説得し……」

「それはムリな話だ。交渉決裂だな」

そう言うとオセはモンスターの喉元目がけて地を蹴った。普通の人間が見たのならオセが一瞬にしてどこかへ消えてしまった風にしか見れないだろう。

「ちよつ、と待って！」

モンスターは何とかその身を宙に飛ばしオセの牙から逃れた。そしてもう一度話してみようと口を開こうとしたその時、

ガグツツゴリリッ！！！！

モンスターは一瞬何が起こったのかわからなかった。足元にある湖を見れば、自分が悪魔達に覆われ食われているのだと薄れていく意識の中なんとか理解したのだった。

森の住人・パート2（後書き）

どうもこんにちは、anaです。

桜とそよ風の素敵な季節になってきました。桜はもうチリギみだけど。まあそこは気にせず！

かなり久々の投稿です。申し訳ないです、あまりの不定期更新。

そして、続けて読んで下さっている方、初めての方、本当にありがとうございます。まだまだもう少しこの“届くものの夢”、続く予定なのでどうぞお時間、お暇ございましたら読んでやってください。

組む

「どうも初めまして。わざわざ僕を捕まえるためにあんなりっぱな使者まで遣わしていただき、ありがとうございます」

「……」

ルイスはいつになく感情のこもっていない、むしろこの場を凍てつかせるのではと思うほど冷たい声で挨拶をした。

「……」

「クラヴィス、この坊や達は一体なんだい？」

ラリアが首をかしげてクラヴィスと、たった今自分達の前に現れた二人の男を見た。

「僕たちはすでに成人してますので坊やではありません、おばあさん」

「ほほっ、そうかそうか。それは失礼をしたのお。あたしゃラリアだよ。ところで、お二人さんはこの子に何か用なのかい？」

「ばあさん、俺達はそのクラなんとかの召喚獣に誘導されてここに来たんだよ」

ルイスの隣にいたガーバがクラヴィスを指差す。指先が心なしか震えているのは恐れではなく、武者震いだろう。召喚術師の中でも名の通っているあの“片目の無音”と対峙しているのだ、ガーバの気持ちはかなり高ぶっている。

「おや、そうなのかい？珍しいねえ、この子に友達がいたなんて」「違うからばあさん！」

微笑んでいるラリアの心は嬉しさでいっぱいだった。クラヴィスは本当に必要最低限の事しか話さず、人との付き合いというものはかまわたく求めていない。いつでも一人なのだ。友達の一人でもつくれ、と自分が口に出したならこの子は、

「……ラリアだけでいい」

と、答えるのだ。自分がこの一人ぼっちの子に求められているのはたしかに嬉しいが、だがやはり、心配になる。

「で、クラヴィスさん。一体僕に何のようですか？」

「……」

「これクラヴィス！人の質問にはきちんと答えんかい！」

ラリアが言うくとクラヴィスは軽く指を動かした。すると一匹の小さな悪魔が現れた。

「初めまして、魔術師に召喚術師。主は伝説の召喚獣を確保するためにこの森へ来た。だがこれを邪魔する者共がいる。そいつ等は五人で組んでいてこちらの分が悪い。お前等にはこちらの仲間になってもらう。聞くところによるとガーバとかいうヤツもその目的。お互いマイナスになる事はない」

自分の口からではなく召喚獣を使って説明したことにルイスは眉を動かした。

「……自分で言えないんですか？まったくもって礼儀を知らない人ですね。第一ガーバがその目的でも僕は違います。彼とは微塵の関係もありません」

「ひどつつ！一緒にメシ食ってる仲だろ！？微塵も関係ないとか涙出るじゃねーかよ！！」

ルイスにしがみつく様に訴えるガーバ。だがそれは、今非常に不機嫌な彼には何の効果もなかった。あえて言えば彼の機嫌の悪さに拍車をかける程度だった。

「……アーキルという男がいる……」

「うおっ！？喋った！」

「？」

初めて口を開いたと思えば出た言葉はそれだけだった。その後をまた悪魔が続ける。

「過去に赤髪の魔術師に敗れた事があるのだから？杖無の魔術師ルイス。お前の場合伝説の召喚獣抜きにしてあの男とまた戦うという名目でこちらに参加すればいい」

「へえ、ルイスも負ける事ってあるんだな。そりゃそうだろうけど何か以外だ」

「ガーバ、少し黙っててくれる？」

ルイスはガーバに一言そう言ってまたクラヴィスを見た。

右目は包帯を巻いている。無表情で何を考えているのか掬い取れない。その隣のラリアという魔術師をみる。きっと彼女があのか“老魔術師”と呼ばれているラリアなのだろう。

例えば、この男、クラヴィスの良いように使われたとしても、確かに自分にマイナスになる事はない。むしろラリアから色々な知識なり技術を盗める可能性だってある。そして力試しのアーキルとの戦い。ルイスにとっては申し分のない状況だ。

だが唯一気にかかる点があるとすれば、それは彼クラヴィス本人だ。

気にかかる、というよりはルイスが一方向的にただ「気に入らない」だけの話だ。

「……そうですね。まあこの話飲んでも構いませんが一つ、注文があります」

「なんだ？」

悪魔がクラヴィスの代わりに聞いた。

「はい、どうにもこうにもあなたが気に入らないので、取り合えず「あなたの力が必要です。仲間になってください」、と頭を地面にまで下げてきちんとお願いしてください」

ニツコリと笑うルイス。固まるクラヴィスとガーバ。ラリアは何やら納得したように一人頷いている。

「……」

「どうしたんですか？ やらないんですか？」

「……」

「他人の力を頼るとはそういう事ですよ？ というか人として最低のマナーぐらい出来ないんですか？ あなた僕より年上ですよ？ ちゃんと人ですよ？ それでも生きてるんですか？ 人として」

ルイスは至極爽やかな笑みと優しい声でクラヴィスに話しかける。ラリアには、どこをどう間違えてかそんな彼が礼儀正しい良い子と認識され、クラヴィスとガーバには笑顔を被った「鬼」と認識された。

「……」

「クラヴィス！ 人にもものを頼む時はきちんとせんかい！」

ラリアがクラヴィスの背中を押してやった。彼にとってはいらぬ激励だ。だがここはやらなければ事が進む様子はない。彼、ルイスのオーラが半端ではないのだ。

「……た、頼む」

振り絞って声を出した。彼の精一杯を出し切ったのだ、この一言で。だがルイスの方を見るとやはり物足りないといった顔をしていた。

「えらい！よく言ったぞクラヴィス！！わしゃ嬉しいぞ〜！」

凍てつくこの場を彼女だけは感じていないらしい。ラリアが嬉しさのあまりクラヴィスに抱きついた。そしてルイスの方を見て、

「すまんのお。この子は激しすぎるぐらい人見知りで……だが今はこの子なりの精一杯だったと思う。これで良しとしてはくれんか？」

結局年老いたラリアの言葉に折れたルイスはあの一言で彼らと組むことを承諾した。そんなルイスはただの鬼ではないだろう。きっと根の優しい鬼だ。

同じ

「なんだか面白いような、面白くないような事が起こってる」

「あら、面白い事この上ないじゃないですか」

「うん。でも面倒でもある」

「見ているだけですもの、面倒な事など起きませんわ」

綺麗に笑うその女性はそのままどこかへ行ってしまった。残された男は、“ヤイゴの森”を忙しく映している大きな湖を見て胡坐をかいていた。

「見てるだけなら、ねえ。でも“賢卵”がいるんだよねえ……」

その湖は黒髪の魔術師、ルイスを映していた。

「しかしその年で杖がいらぬとは、将来が楽しみじゃのう」
「そんな、僕なんてまだまだです」

謙虚にそう答えるルイスをリアはますます気に入っていた。そんな仲良くお喋りしている二人を、クラヴィスは後ろから相変わらずの無表情で見ている。

「あの、クラヴィスさん」

ふと、自分の斜め後を歩いていたガーバが声をかけてきた。

「伝説の召喚獣ってどんなの知ってますか？あ、それと俺達を呼んでくるように命じたあのビフロンス、あれものすっごいリヤオですよ？一体どうやって従えたんですか？やっぱペランタ出来るぐらいのレベルじゃダメですか？」

結構な勢いで質問が飛んできた。それもまだ止まる様子がない。

「クラヴィスさんはどんな修行してたんですか？どうしたらクラヴィスさんみたいにリヤオを従える事が出来るんですか？いや、一応方法は知ってますけど、でもそんなにリヤオって手に入らないし……でも俺もいつかりヤオを従えて、クラヴィスさんみたいカッコイイ通り名をつけてもらえるようになります！……そう言えば、その右目どうしたんですか？」

いつの間にか隣に来ていたガーバに顔をヒョイ、と覗き込まれた。

クラヴィスは面倒なので無視したが、どれだけ避けようとも彼は粘り強く話しかけてきた。

そんな一方通行な二人に気付いたリアが、また無駄に元気よく注意をした。

「クラヴィス、お前はなぜ人の質問に答えん？！何も自分から話し掛けるなどと難しい事は言っとらん。ルイスを見習わんか！敬語も使えて物腰柔らかく、それでいて楽しく話をしてくれとる。何よりも礼儀という」

「……うるさい」

ようやく彼から言葉が出たかと思えば、それはリアを怒らせるのに十分な要素を持ったものだった。

「こんのガキんちよが！誰に向かってそんな言葉をはいとる！？まったく、育て方を間違えたわい！」

そんな彼女に少しため息をつき、例外無しにクラヴィスは無視して歩いた。が、そんな事はあのルイスに見逃してもらえるはずはなかった。

「クラヴィスさん、あなたは今までそうやって失礼極まりなく生きてきたんですか？それでいいと思ってるんですか？」

「……」

「僕たちは先程会ったばかりだから大目に見るとしても、ずっと一緒にいるラリアさんに対するその態度は許されることじゃありません」「うるさい」

一言だけ言うと、また歩き始めた。ラリアが慌ててルイスに頭を下げようとしたが、彼はそれを止めた。クラヴィスは黙々と先を歩く。ルイス達も仕方なく彼についていくが、やはり少しばかり彼との距離は出来ていた。

「すまんろう。昔から口数の少ないやつで……優しいところもあるんだがのう」

ラリアはとても寂しそうに、そして悲しそうに話す。

「実をいうと、わしもあの子のことはよくと知らなくてな。たまたま行倒れになっていたところを拾ったんじゃ。わしは自分の子どもを亡くしていたから、あの子がとてもかわいくて。あの子もわしの事を気に入ってくれたみたいで、今こうやって一緒にいるんじやが……中々自分のことを話してくれんのよ」

最後に弱く笑った。ガーバがすかさずフォローを入れ、この場をあまり盛り下げないように、という気遣いをしたおかげで話題はすぐに明るいものに取って代わった。

老魔術師と呼ばれる人でも、やっぱり人間らしい悩みがあるんだ。

前にいるクラヴィスを除く三人で、たわいのない会話をしながら、ルイスは思った。

ある程度の力を持っている人間というのは、周りから畏怖の念を抱かれる。特に、人知を超えた力を持ってしまった者などは、同じ人間とは思われないものだ。事実、キリエラ語の解読に成功した“言霊のモビウス”や、魔術大国イリユーマの、建国の父の右腕であった“大魔術師アスキディア”など、あげていったらキリがない。ラリアの力は、魔術師の中では上の中ぐらいだろう。例えばモビウスやアスキディア程でないにしても、やはりどこか“普通”とは線を引かれる。何よりルイス自身、心のどこかでそんな感じがしていた、のだが……。

「どうしたルイス？急に黙りこくりおって」

ラリアとガーバが振り返る。

「いえ、何でもありません」

そうか、と優しく笑う老婆を見れば、ルイスの疑問など取るに足らないことなのだ、彼は気付いた。

あの人はあだから、この人はこうだから。そんなものは関係ない。同じ人の子として生まれたのだから。

そこまで考えがまとまりスッキリしたところで、ルイスはふと、あの存在を思い出した。

じゃあ、賢者と呼ばれる人達は一体何なんだろう……？

人の寿命や条理、この世界にすら縛られていないように思える、彼らとは。そして、そんな彼らの“卵”と呼ばれる、神族と共にある者、すなわち自分自身とは。

「そもそも“伝説の召喚獣”なんていないのになあ」

湖から離れ、リンゴを片手で遊びながら独り言を言って、森を歩いている彼は、どうしたものかと悩んでいた。

「ううん……まあいつか！大したことでもないし」

リンゴを一かじりし、今度は満足そうな顔をして、彼は背中から白く綺麗な翼を広げ、空へと飛んでいった。

モンスターの悲劇

「す、すいませんホントにごめんなさい、どうぞお許し下さいっ…
…！」

手を何本も持つ傷だらけのモンスターが、必死に命乞いをしていた。それはもう額を地面に擦りつけながら。そのモンスターの先にいるのは、やはり彼だった。

「なあルイス、そろそろ許してやっても……」

「そうじゃルイス。何も半殺しのままにしておくのは可哀相だろう」
「ラリアさんそこですか！！」

怒りでモンスターをボコボコにしたルイスを、ガーバとラリアはなだめていた。そしてクラヴィスはモンスターにトドメの一撃をくらわそうとしたが、それはルイスに邪魔された。

「クラヴィスさん、まだ殺るのは早いです。もう少し痛めつけ苦しめてから、僕自らトドメを刺します」

ニッコリ微笑むルイスに、クラヴィスは背筋が凍るのを感じた。彼が敵でなくてよかった、と内心安堵したが、だからと言って完ぺきに仲間でもないのやはり恐怖は消えてはくれなかった。

「さて、モンスターさん。次は何がいいですか？凍てつく氷に包ま
れたいですか？それとも逆にあぶり焼き？何なら……」

「本当にごめんなさい！これ以上ないって程心の底から申し訳ありません！！どうか！命だけはっっ」

「あはは、面白い事を言いますね。まさかあなた、僕の大事な、そ

れこそこれ以上ないって程心の底から大事にしていた水晶をぶつ壊しておいて、ただで済むとでも？あー可笑しいですね」

まったく許す気配を見せないルイスは、今までに無いほど至極頭にきていた。ガーバ達はただその様子を見守る、というよりかいつそ見ぬフリをしようと思うほどだった。

「か、必ず！必ず弁償いたします！！この先に洞窟がありまして、たしかその中に水晶がっ」

「あれはただの水晶じゃないんですよ、低脳モンスターさん。僕の魔力を感じなかつたんですか？あれは僕が一年かけて作った物なんです。それはもう僕の知力と魔力を、全身全霊で注ぎ込んだものなんです、よ？」

いつの間にかルイスはモンスターの胸倉を掴んでゆすつていた。ポコポコにされていたモンスターは何の抵抗も出来ず、ただルイスに甚振られているがままだった。

なぜこんな状況になっているか順に話すと、ルイス達はモンスターの作った無限ループにはまり、この空間の主であるモンスターを見つけ出し、叩かなければならなくなった。老魔術師と呼ばれるラリアの知識と経験によってその辺は滞りなく解決。そしていざモンスターの戦いの時、そのモンスターはルイスの胸に下げられていた綺麗な水晶を破壊してしまった。もちろんモンスターを含めたルイス以外の仲間も、それは戦況に大した影響などないものと捉えた。しかし、水晶を破壊されたルイス当人は怒り心頭。他の三人を黙らせ、一人でモンスターを叩きのめしたのである。

「なあルイス、あの水晶そんなに大事なのか？」

恐る恐るガーバが質問する。それに対してルイスは、モンスターへ

のささやかな攻撃を止めずに答えた。

「うん。本当に、僕も自分で驚くほど大事にしていたものなんだ。しかもあれは一朝一夕で出来るものじゃない」

心なしか、ルイスの顔は悲しそうだ。

するとそこに、空から一人の、綺麗な白い羽を持つ女性が降りてきた。

「あらあら、随分な事になってるわね」

「イーラ様!!」

イーラと呼ばれた女性が背中から生えていた羽をしまうと、ルイス達は瞬時に身構えた。

「いやだわ、大丈夫よ。別にあなた達に危害を加えようって気はまったくないんだから」

女性は和やかに笑いながら、ルイスにボコられたモンスターに近づき、傷を治した。モンスターは嬉涙を浮かべながら、隠れるようにその女性の後にまわった。

「クラヴィスさん、もしかして彼女が“伝説の”……」

ガーバは一瞬嫌な汗をかいた。

「私はあなた達の探している“伝説の召喚獣”じゃないわよ」

クラヴィスが判断を下す前に、女性が答えた。

「というか、そもそもそんな者存在しないわ。まああなた達の“伝説の召喚獣”の定義がよくわからないから、ハッキリとは言えないけど。もし仮に、この森で一番強い者のことを指すのなら知ってるわ……彼の所まで案内しましょうか？」

相変わらず彼女の表情は、穏やかだった。

アルティラさん(前書き)

召喚術師は知っている。

アルティラさん

「よし、今日こそは幻のビッグフィッシュを釣り上げるぞ！」

男は意気揚々と、大きな湖へと釣竿を振った。湖の端々にはヤイゴの森の映像がうかんでいるが、彼はまったく気にしていないようだ。

「さあ来いビッグフィッシュ！カモンビッグフィッシュ！！」

あまり頭の良くなさそうなセリフを元気よく飛ばす。そこにいつものようにモンスターや精霊達が寄ってきた。

「またやってるの？」

「無理無理！アルティラって全っ然釣りの才能ないし！」

「そんな幻よりも、イーラちゃんを釣り上げてみなよー」

外野がいつもの如く彼、アルティラをからかってきた。みな本当に楽しげだ。

「才能なんてなくなっただって根性でどうにかなる！！」

「えー、イーラ様口説く度胸もないのに？」

彼の周りに集まってきた者達が明るく笑いあい、中心の彼は顔を少し赤くして「うるさい！」とささやかに抵抗しているそんな時、噂の彼女、イーラがやってきた。

「あ！ちょうどいいところに！！」

「イーラ様お疲れ」

「わっ！もう戻ってきたの？……っっていうか何その付属品！？」

アルティラが指差した先、イーラの後ろには、クラヴィスを筆頭にルイス、ラリア、ガーバにモンスターである balan が立っていた。彼らの登場に湖の周りはざわめく。

「付属品だなんて、もう少しお言葉を選んでください、アルティラ様」

イーラは眉を上げて怒ってみせたが、その表情も綺麗だ。そして後ろからルイスが尋ねる。

「あの人が、あなたの言っていたこの森で一番強い方ですか？」

その声に反応するかのようには、アルティラの周りにいた者達が一瞬緊張した。

彼が……。

いくつもの目が彼を捉える。しかし、その視線を浴びている本人は、そんな事微塵も気づかぬようで、ただアルティラを見た。

イーラもそうだが、彼もまた、綺麗だった。彼の友人であるベルクスよりも光を放つ金色の髪に目、整った顔立ち。ただそこに居るだけで何かを感じさせる存在感。

「こりやまた、随分と綺麗な男じゃのう」

ラリアが思わず思ったことを口にする、後ろでガーバが無意識に頷いた。ただクラヴィスだけは、いつものようにまったく動じていない。きつと頭の中は、彼をどう従えさせるか、その事でいっぱいだろう。

「……面倒だなあ……」

はあ、とアルティラはわざとらしく、盛大にため息をついてみせた。

「説明すれば、彼らも引き上げていただけたらと思っただけなのですが……」

「ううん……」

こんな所でドンパチ始める気のないアルティラは腕を組んで少し悩んだが、何か名案でも思いついたのか、手を叩いて満面の笑みを見せた。

「そうだ！じゃあまず君達に一つ、頼みごとをしよう。それをクリア出来たら、取りあえず俺達の事について話してあげる……“伝説の召喚獣”の手がかりが見つかるかもね」

今度は意味あり気な笑みを浮かべ、「どうする？」と楽しそうにルイス達を見た。

それに対し、ルイスが答えるよりも早く、クラヴィスが左手を上げた。

「ビフロンス」

その名を呼べば、一瞬の眩しい光とともに一体の黒い召喚獣が姿を現した。

「……」

「クラヴィス！？」

ラリアが声を上げたが、呼ばれた本人の目は金髪の男しか捕らえて

いなかった。

どうやら彼らはアルティラの申し出を拒否したようだ。もちろん、この答えも考慮に入れていたアルティラは静かに、

「……みんな、逃げて」

と、突然のことにすっかり固まってしまっている周りの者達に声をかけた。彼の声を聞いて皆一斉に森の中へと逃げていった。

「イーラも……」

「いえ、私はこちらで見学を」

「わかった……って、ん？見学!？」

そう言うと彼女は少しだけその場から離れ、心配するでもなく、むしろワクワクしているのではないかという顔でアルティラ達を見届けるようだ。

彼女の意外な行動に少し脱力したアルティラだが、気を取り直して召喚獣、ビフロンスを見やった。が、またしてもアルティラは以外なものを目にした。

「あなたバカですか？キチンと脳ありますか？機能してます??？」

そこには、賢卵であるルイスに説得、というよりも脅されている可哀相な召喚術師がいた。

「ルイス、もつと言ってやれ!!このガキんちょはワシの言うこと一切きかん!!」

「ええわかっていますともリアアさん。日頃からのあなたに対する態度も頂けません、今この状況での彼の思慮に欠け過ぎている判断。まったくもって許されるべきことではありません。バカとしか

「いいようがありません」

いつの間にかクラヴィスはルイスの術で体の自由を奪われていた。そんな無抵抗な彼に対し、ラリアは手に持っていた杖で彼女の力の限り殴り始めた。

ちなみに彼の召喚獣であるビフロンスもいつの間にか消されていた。ルイスとラリアの恐ろしいまでの連係プレーだ。

「ラリア……痛い……」

普通に、ごくごく一般的に考えてこれは“リンチ”というものに分類されるのではなからうか。ラリアからの物理的暴力。そしてそれに勝るであろうルイスからの言葉の暴力。

そして彼らの後ろで身を小さくして震えているこれまた可哀相な召喚術師のガーバ。

アルティラもまた、少しばかり体が恐怖し、事が自然に収まるのをただ見守るしかなかったのだった。

「出来ない息子で申し訳ない!!」

「バカは死んでも直らないといえます。どうか寛大なご処置を」

「あ、う、うん。まあほら、若いからこう、焦りって言うか、猪突

「猛進的なものがあるからね。今のことはサラッと水に流しちゃおうね」

心身共にボロボロにされたクラヴィスの頭を地面につけ、ラリアもまた頭を下げていた。ルイスも一応、軽くではあるが頭を下げる。そしてガーバも。

ようやく内輪もめが収まり、アルティラはほっと胸をなでおろした。まさかこんな展開になるとは、さすがの彼も予想出来なかった。だがまあ事は穏便に進んでくれそうだからこの際良しとしよう。

「それで、アルティラ様の頼み事を引き受けるという事でいいのよね？」

一部始終を見物していたイーラが近づいてきて、ルイス達に一応聞いた。彼らはもちろんです、という顔をして頭を縦に振った。

「一体ワシらは何をすればいいんじゃない？」

クラヴィスの頭の上に置いていた手をようやく離し、ラリアが質問をした。

「そんなに難しい事じゃないよ。俺達の仲間割りりと年の若い、ちよどルイス君ぐらいなんだけど、その子が大人になるための試練がちよつとあってね。その付き添いをしてもらいたいんだ」

「「試練？」」

ラリアとガーバの声が重なった。

「そー洞窟に入って石版に名前を彫るんだ。洞窟の中はここにいるモンスターとはまったく違う生き物がうじゃうじゃいて、とてもそ

の子一人じゃ無理だから、護衛って感じで！」

「なるほど……ですが“試練”なのに他力が加わっていいんですか？」

ルイスが頷きながらも浮かんだ疑問を投げかけた。

「え、別にいいんじゃない？用はその石版に名前彫ればいいんだし？ってというか洞窟入った後の事まで責任負えないから、その辺はどうでもいいかも」

アハハ、などと何とも適当な答えが返ってきた。これがルイスの見知った人物ならば、「何適当な事言ってるんですか？ここ大事なところですよ？焼かれないんですか？」と、火の玉の1発や2発くらわせているところだ。だが彼は大事なキーマン。ルイスは小さな怒りをグツと堪えたのだった。

「では、私はファージルを呼んでまいります」

「うん、じゃあ俺達は先に洞窟いつてるね」

イーラと別れ、アルティラを案内人に一行はその洞窟へと向かった。その道すがら、ルイスはここぞとばかりに彼に質問攻めを繰り返した。

「すみません、アルティラさん」

「ん？何？」

「ズバリお聞きしますが、あなた方、つまりあなたとイーラさん、それにこれから会うファージルさんは、し……」

「神族じゃないよ」

アルティラはルイスに全てを言わせなかった。そして質問を阻まれ

ても欲しかった答えが聞けたことに、ルイスは内心驚いた。彼は振り向きもせず、前を歩きながら話し始めた。

「だからと言って無関係じゃないよ。それと、ルイス君の本当に欲しい答えは今向かっていている洞窟の中にある。洞窟の中は“こつちの世界”とは“別物”だから、“こつちの神族”は入れない」

こつちの神族？

ルイスは彼の言葉の意味をすぐに理解することは出来なかった。そしてすぐ後ろを歩いてきた三人の変化に気づくのも少しばかり遅れた。

「おぬし、今何と？」

ラリアの声にアルティラが足を止め振り返る。

「……何って？」

「あの、まさかあんた、俺達を異界に送るつもりなのか？！」

ガーバが顔を青くしている。異界、という言葉がルイスは頭の中で探ってみた。

たしか、世界というのがいくつかある。一番解りやすい例が獣界だ。召喚獣の住む世界をそう呼ぶ。今自分達の世界、つまり中界からは渡る事が出来ないとされている。このように、実際はリンクしているのだろうが、お互いに極めて干渉出来ない時空をそれぞれの“世界”と定義し、自分達とは違う時空を“異界”とする。

そして今ガーバが言った「異界に送る」というのは、簡単に言えば、今いる世界から違う世界へと移動するようなものだろう。

それが一体どんなに大変な事なのか、ルイスはイマイチ掴めなかった。取りあえず黙っていた。

「まあそうなるね。でも案外大した事ないよ？別に入った途端体に異常が出るとか死んでしまつとか、そういうんじゃないから。そうだなあ、この森の住人がもうちょっと凶暴で強さを持った、ってぐらゐの感覚かな？」

「十分大した事あるだろ！？」

日頃からこの森に出入りしているガーバとしては、これ以上強いモンスターなど、しかもそれがうじゃうじゃいるなど、そんな場所は許容範囲を超えている。

「俺死ぬ！絶対死ぬ！！この中で一番弱い俺じゃん！？」

一同頷く。

「……じゃあ帰れば？」

状況が整理できたルイスは事も成しに言い放つ。そしてそれに対しても一同頷く。ガーバは心を簡単に折られた。

「ひつど！！え、マジで言ってる？ここまで一緒に旅した仲だろ！？」

「いや、別に旅なんてしてないから」

「そうかよ！！」

ガーバも半ばヤケクソになりながら、そして涙を目に溜めながら叫んだ。そこにラリアが優しく諭す。

「のうガーバよ。ワシがいうのもなんじゃが、ここから先は本当に危険じゃ。ハッキリ言っておぬしの手にはおえん。ワシらも自分の

事で手一杯になるじゃろう」

ガーバの目にはやはり涙が溜められている。

「おぬしはまだ若い。才能もある。ルイスと一緒にいるぐらいのじゃから」

ラリアはそつと笑い、ガーバの緊張を解いてやる。

「だ、けど……」

さきにある不安か、それとも悔しさなのか、拳を握り締めるガーバ。彼の目から、涙が落ちた。

アルティラさん(後書き)

世界と世界、全てをひっくりくるめた世界すら。

いざ行かん

「そうか。それは難儀だったな」

「それよかあんたここじゃ大分上のやつだろ？なんとかその三人探してくれないか？」

「まあ出来ないこともないが、俺にも立場がある。本来人間は立ち入り禁止なんだ」

「そこをなんとか!!」

背の高い男に必死に何やら頼み込んでいる錬金術師のザイド。隣にはもちろん赤髪の魔術師、アーキルもいる。

「第一、お前らのいう“伝説の召喚獣”って何なんだ？」

男の質問に言葉を詰まらせるザイド。無理も無い。召喚術師でもなければ、半ば強制的にここへ送られただけの事なのだ。

「ファージル」

ザイドが答えを考えている時、一人の女の声がした。

「イーラ、ちょうどいいところに……」

三人の男の目は、綺麗な白い翼を持つイーラへと移った。

「あら、一体どうしたの？」

人間と一緒にいるファージルに聞けば、何やら昼ねをしていたらちようど、無限ループを抜けられたこの人間二人に見つかり、話のわ

かるファージルに他の仲間とあわせて欲しい、と頼まれたのだそうだ。もちろん、“伝説の召喚獣”のこともしつかり頼まれている。この状況をイーラは一瞬、面倒だと思ったが、これから起こるだろう事を想像してみても興味がそそられたのか、彼らの要望を受け入れたのだった。

「私以外の仲間を洞窟まで案内するわ。またね」

「ありがとうございます！」

「礼を言う」

「イーラ……さすがにこの人数はちょっと……」

アルティラの前には計八人の人間がたっていた。それも所々見知っているようで、軽く世間話という名の花が咲いている。

「なーんでこんなとこまで来てテメエの顔見なきゃならないんだ？」
「こっちのセリフだし。っていうかよく死ななかつたね」

久々の再会をはたしているベルクスとルイス。彼らにとって普通の挨拶がかわされる。

「ザイドさーん！」

「よかった。無事だったんですね」

「おお！エルランにシュワルガ！お前らも無事でよかったあ」

洞窟の中へ押しやった。彼の整理整頓術はなかなか豪快だ。そしてみんなの声、ならぬ悲鳴は見事に洞窟の中へと吸い込まれたのであった。

「ふう、よっし！」

「どの辺がよろしいのか疑問が残りますが……」

まあ楽しそうなので、と微笑む彼女はやはり綺麗だった。

『こちらの神族は入れない』

ルイスはその言葉で目を覚ました。体に痛みはなく、上体だけ起こして周りを見渡す。

「……なるほど、これが異界」

廃墟の世界、というのが一番あっているかもしれない。広がる地平線にあるのは、草でもなければ森でもない。破壊された建物が色あせるほど、何百年と放置された感じの茶色い世界だった。風一つ吹かないのはさすがに気味が悪い。だが、

「……………困まれている」

姿は見えないが、確実に殺気を感じた。それも二つ三つの話ではない。

ルイスは静かに術を唱えた。強い術を使う場合はそれなりに時間がかかる。モンスターが先に食いかかってくるか、自分が唱え終えるのが先か、緊張から汗をにじませた。

先に出たのは……………モンスターの方だった。姿はただの大きな狼。だが、そこから発せられるものは尋常ではなく、八方から一気に飛びかかられた。

「……………ツツヴィ・イレクティー!!」

モンスターがあと一步、いや半歩で獲物を捕らえようとした時、激しい稲妻が彼らをうった。

野太く苦しげな鳴き声が聞こえたように思えたが、それすら稲妻は消し去った。轟音のあとに残ったのはルイスのみ。

「強っ……………」

ほぼ灰と化したモンスターの事を言ったのか、はたまた自分の事なのかは分からないが、ともかく第一波は忍んだ。

そして、当てにもしてなさそうに名前を呼ぶ。

「……………フエイ」

何の反応も返ってこない。静か過ぎて耳鳴りがするぐらいだ。

そこでようやく腰をあげ、ぐるりとその場で回転した。特に変わったものがないことを確認。行き先を迷うことこの上なかった。

「……ベルクスといるとロクな事がない」

不機嫌そうにそう呟くが、もちろん彼に責任など一切ない。

兎にも角にも、ルイスは適当に歩き出した。じつとしていても始まらない。

しかし、行けども行けども同じ風景が広がるばかりだった。まさかまた無限ループの類か？と考え始めた頃、ルイスはあの事を思い出してしまった。

「水晶……」

自分の胸元を見るが、今までであったはずのものはなかった。長時間歩いた疲れもあつたせいか、彼はその場に力なく座り込んだ。

どこでも手に入る水晶を失い、なぜ彼がこれほど落ち込んでいるかと言えば、答えは意外なものかもしれない。

「……………マナ……………」

今ではとても遠くにある国の姫の名前を呟く。実はあの水晶は、ルイスがその知力・魔力、そして技術を駆使して作った一品ものの通信機だったのだ。

ちゃんとした別れを告げずに彼女のもとをさつた彼は、そのあと二年間連絡をとらなかつた。とれなかつた、という方が正しいかもしれない。心理的に、時には物理的に。だがやはり想い人の声を、その姿を見たいと望み始めた彼は、一年という歳月をかけ、彼女との専用の通信システムを作り上げたのだ。

「そう言えばあのモンスター、まだ息の根止めてなかつた……………」

低い声と若干の笑いを含めてルイスはまた呟く。邪悪なオーラを放っていること間違いなしだ。そして思考はまた水晶へと戻る。

「一年……いや、今の僕なら半年で作れるかな……っていうか半年も連絡とれないとかあり得ないアリエない」

一人ぼつちで、しかも諦めた笑みを浮かべながら首を横に振り、ブツブツと呟いている彼はちよつと怖い。するとそこに、

「あれ？ルイス君??」

顔をあげれば錬金術師のザイドが見たこともない乗り物にのっていた。

「ザイド、さん？」

実はちゃんとした挨拶をした事のなかった二人。妙なタイミングでの出会いはやはりぎこちなく、異界での自己紹介が始まった。

「初めまして。一応ベルクスの友だと思えます、ルイスです。いつも彼がお世話になってます」

お辞儀もばつちりだ。

「こちらこそ初めまして！ベルクスのおそらく師をやってます、ザイドです。いつも彼がご迷惑をかけてます」

こちらも頭をさげる。自己紹介の中心にベルクスがいるのはあまり気にしない方向のようだ。

「ところで、それは何ですか？」

挨拶も早々に、ルイスは見たこともない乗り物を指差した。ザイドが直立で乗っているそれは随分と簡素で地面から少し浮いていた。Uの字型の、船でいう舵のようなものがついていて、それを支えているのはちょうど一人分のスペースしかない薄い鉄から伸びている細い棒だ。

「ああこれ？移動に結構役立つんだよ。あんまり早さは出ないけど
もしかして、錬金術で作ったんですか？」

これぐらいなら、とザイドは軽く笑ったが、ルイスにはわかっていなかった。以前ベルクスが戦車を作ったとき、まったく動かないことを指摘したのだが、どうやらそれはあまりに複雑でそれこそ超がつくトッピクラスでないと作り出せないというのだ。機械的なものを作り出すのと、一般的な錬金術での攻撃をくり出すのとは大分違うらしい。

「取りあえず乗る？早くみんなと合流してここから出たいし」

そう言うと一人分のスペースしかなかった“床”がグググッと広がりあっという間にもう一人入れるようになった。

「す、すごいですね」

「そうでもないよー。燃費悪くてさ、ドラ エの毒みたいに少しずつ体力消費しちゃうんだよ」

はははあゝ、などのん気に笑っているザイド。しかしルイスはドクエなるものを知らなかった。

「え！？マジで知らないの？？それは人生損してるって！！」

その後、宙に浮く乗り物で移動しながら、ドラク というものがどれほど素晴らしいものなのか延々と語られたのだった。

背中に乗って

「ああーチクショー！！！！！」

そんな叫びとともに、ベルクスは周りのものを破壊しまくっていた。肩で息をしているのを見ると、相当暴れて随分と体力を消耗したようだ。

「はあ、はあ……クソ……な・ん・で、誰もいねーんだよ！？意味ワカンねえし！！クソつたれツツ！！もう死ね！！！」

また一つ、大きな柱が壊された。そしてその端正な顔立ちからはおよそ想像もできないような暴言を吐きまくる。

「……これだからルイスのヤローはムカつくんだ」

あらかた周りのものを破壊しまくってから、そこにはいない友人に今置かれている状況の責任を擦り付ける。そうでもないと気がおさまらないらしいが、よくよく記憶を手繰っていくと、こうなってしまうたのはあの宙に浮いていた男だという事に気づいた。標的は変わった。

「あのバカみたいな男で新作錬金術の殺傷力を試す……」

そう定めると、彼は得意の錬金術で何やら高台を作り、さらに望遠鏡までこしらえた。

「まずは現状把握！迷子を探さねーと」

そんな事を言っている自分も迷子の一人であるとは露も思わないのだが、この方法はすぐさま効果を発揮した。

「お！あれアーキルじゃねーかよ！それに、エルランもいるな」

少し遠いので、ベルクスはまた新たな錬金術を繰り出す。それは高台から彼らの方へと伸び、空中回廊となった。

「うっし！あ、向こうも気づいたな。体力が切れないうちにとっと行かねーと！」

その頃地上のアーキルとエルランは素直に感心していた。

「すっごーい！さすがザイドさんのお弟子さん！！」

「錬金術にあんな使い方があるとはな」

しかし二人の場所にたどり着くには少し時間がかかりそうなので、エルランは召喚獣のテテを呼び出した。

「いい案だな。ところで、定員は？」

「三人はギリギリセーフだよ！」

にっこり笑ってアーキルの手をとってあげた。人を殺すことを罪と思わないエルランだが、基本的には優しい子のようにだ。といってもアーキルが知っているのはザイドを慕うかわいらし子でしかなく、とても人殺しのイメージなどは持っていない。

「ベールクスー！！」
「うおお！？」

二人を乗せたドラゴンが突然飛び上がったので、ベルクスは危うく空中回廊から足を踏み外すところだった。

「あつぶねーな！何してやがんだよ！？」

「えー何で私が怒られるのー！？」

ぎゃーぎゃーと言い合いをしながらも、三人仲良くテテの背中に乗り込む。定員ギリギリだけあって、肩がぶつかると今は贅沢など言っていない。

「エルラン、とにかくこの召喚獣に方向を示してくれ」

アーキルは二人のケンカを止めるでもなく話を進めようとする。

「テテだよ！名前でちゃんと呼んでー」

「わかった、とにかくそうだな……こっちの方にも行ってみるか」

本当に適当な方角を指差し、なんとか出発した。

「あーあ、シュワルガ大丈夫かなあ」

と、エルランが心配すれば

「テメエよか強えんだろぅがアホ」

とベルクスが返す。もしここにシュワルガが居たなら即リンチだろう。

「……シユワルガに言ってるよ」
「なっ！おま、卑怯だぞ！！」

慌てるベルクス。エルランはパイと顔を背けた。そこにようやくア
ーキルが参入。

「随分と仲がいいんだな、二人は」

というのも、やはり彼も“狂気の実験”として名が知られているシ
ユワルガに興味があるのだ。

「え？シユワルガと？？」

「つたりめーだろ。どう間違えて他のヤツになんだよ」

相変わらず悪態をつくベルクスだが、エルランはもう彼との言い合
いは飽きたらしい。

「ああ。恋人同士なのか？」

「そっだよー！何か恥ずかしいな」

「キモッ」

バゴツ、という鈍い音が聞こえたがやはりアーキルは無視した。

「召喚術師として相当強いらしいな」

「うん！シユワルガが負けたところなんて見たことない！」

楽しそうに彼の話をするエルランはとてもかわいらしい。

「オセがすっごく強いんだよ！えっとねえ、三つぐらいの悪魔の部

下団体がいて、そういうの持ってるのってリヤオの中でも少ないんだって！」

「リヤオ？」

「うん、すっごく強い召喚獣の事！」

シュワルガの自慢話に花が咲くと、なんともちょうどいいタイミングで噂の悪魔部下が空をバサバサと飛んでいるのを発見。向こうも気づき、その途端ものすごい勢いで近づいてきた。

「エルラン殿！ようやく見つけました！」

「団長の一人だー！会えてよかった！」

「はい、ところでお話している暇はありません！シュワルガ様ももう大変なことに……とにかく私のあとについて来てください！」

あまりに慌てている悪魔団長に、アーキルとベルクスはまさか万が一のことが、と心配したがエルランはまったくそんな様子ではなかった。その理由はほんの数分後に知ることとなる。

「ねえ、まだなの？」

そう言っただ量のモンスターの死骸に腰を下ろしているのはシュワルガだった。口元は笑っているが、血まみれな彼の笑顔には背筋が凍る。凍らせているのは、もう一人の悪魔団長。

「は、はい！今部下を総動員で探させています……！」

「見つからなきゃ意味はないんだよ？」

「シュ、シュワルツッ!!?」

彼の持っていた細長い剣が団長の片足を突き刺す。さらに突き刺さしたまま、右に左にと回し始めた。

「シュワルガ、様、もう少……し、お待ち……」

「いったいその言葉、さっきから何回言うわけ?」

叫び声をあげたい団長だが、うるさいと言われて倍返しがかかる事を知っているから、ひたすら耐えていた。しかし、さすがの状況に団長の上司ともいうべきオセが間に入ってくれた。

「シュワルガ、いい加減落ち着け」

機嫌の悪い彼のために、わざわざモンスター達をここにおびき寄せ、さらに部下への虐待を阻止しなければならぬオセはなかなか苦勞性かもしれない。

「落ち着け?面白い事いうね、オセは。エルランがどこでどうしてるかまったく分からないのに、一体どうやって落ち着けていうわけ??」

今に始まったことではなく、毎度のことながらいい迷惑だ、とオセは首を横に振った。今彼が持っている剣など厄介で仕方がない。保持者の体を支配し、超がつくほどの剣術師にしてくれる呪いの類のもので、これを使う時は決まってるまわりが血の海となる。

これ以上どうやって彼をなだめ様かとオセが悩み空を見上げると、一つの影を発見。シュワルガもそれに気づき、持っていた剣を手放した。

「シュワルガー！」
「エルラン!？」

彼女を捕らえる時のシュワルガーはいつだって機敏だ。そして、全てを予想していたエルランはとにかく彼を落ち着かせようとテテから飛び降り、彼の腕のなかにおさまる。

「エルラン、大丈夫？怪我してない??変なことされてない???」
いつもの口調などどこかへいつているシュワルガー。

「大く丈夫!アーキルさんとベルクスもいたし、シュワルガと違ってモンスターとも出会わなかったし……」

エルランは彼の後ろに山積みになっているモンスターを若干かわいそうに思った。そして剣で刺されているもう一人の団長を発見し、一瞬悲しい目をした。彼女にはその理由が分かったからかもしれない。

「本当に??大丈夫?むしろあの二人に変な……」
「ストップ!落ち着けての、いい大人が」

シュワルガのあまりの取り乱しように、地上へと降りてきたベルクスは困惑した。まあ“大変な事”がこんなことでよかったとは思っ。それより、周りの事など眼中にないシュワルガは、またエルランを強く抱きしめた。顔には少しばかり、いつものユルさが戻りつつある。

「よかった、よかった……よかった……」
「ってかアイツ、マジで大丈夫か?」

「それだけ大事なのだろう」

平然としているアーキルとは違い、ベルクスは完全に引いてしまっていた。無理もない。これだけ執着心の強い人間を見たことなどないし、モンスターの死骸だらけで本人も血まみれのこんな状況など、ここで何が起こっていたか想像するのも拒まれる。

「……………“狂気的笑み”、ね」

ようやくその名の意味を理解したが、あまり歓迎されることではないのかもしれない。

「ねえ、もう大丈夫だから！ね？落ち着こうね」

エルランが明るい声をかけ、頭をポンポンと叩いたり、背中をさする。しばらくはこのままか、とアーキルは考え、先ほど教えてもらって気になっていた召喚獣に話しかけ始めた。

「……………オセというリヤオは君か？」

悪魔などとはまったくレベルの違うオーラを放つこの豹。これほどの威圧感を持つ召喚獣とは久々にあう。

「……………」

アーキルの問いかけに、オセはさも興味などなさそうに無視し、シユワルガの方へと近づいて姿を消した。そして他のものも続くように消えていった。

シユワルガは相変わらずで、ベルクスがちょっとここから離れようとアーキルを誘った。

エルランにも一応伝え、二人は死骸と血のない場所へと移った。

「っはああー！気持ち悪かったああ」

錬金術の疲れもあつてか、ベルクスは階段のような場所で体を横にした。

「血生ぐせえってんだよ……」

片腕で目を覆うが、まだ頭からあの光景が離れていない。

「戦場ではよくある。あれぐらいで根をあげていてはザイドの弟子は務まらないぞ」

アーキルの言葉にベルクスはせつかく休めた体をまた起こした。

「それ、どういう意味だよ？」

「そのままだ。ザイドは色んな所へ出向くだろう？」

そう問われ、ベルクスは今までの旅を振り返ってみた。

意味も分からず極寒の雪山を登ったり、小さな村のくだらない伝説に踊らされてジャングルの奥地へ入ったり、底などあるのかと思うほどの谷を三日以上かけて下ったり。戦場はまだないにしても、危うい場面に出会わされた事などあげていけばキリがない。

「……俺、アイツの弟子やめようかな……」

このままでは命の危険がある。大好きな錬金術を教えてもらえる事はたしかにありがたいが、死んでしまつては元も子もない。

「それはザイドが悲しむ。ようやく念願の弟子にめぐり会えたのだから」

「言い方がキモイ。つつーか、あんだけの腕がありゃー弟子なんていくらでも寄ってくるだろ？」

彼の教えを請いたい錬金術師がどれだけいるか、ベルクスは分かっている。

「才能があるだけじゃダメなんだ。ザイドには、ある種美学のようなものがあるからな」

何言ってやがる、とは言わなかった。むしろ、アーキルの言葉に今までうやむやだったものが晴れたような気さえした。

錬金術にはルールがある。それは力をつけたただけ自分で作り出すことが可能で、例え似たような術を見ていても、術者が違えばその質はずっと変わってくる。どれだけ複雑で、高度なルールを作り出せるか、それが錬金術師のレベルを表しているのだ。もちろん、そのルールを見つけ、感じる事が出来る人間は限られている。

「そうだ……そっいや師匠の術、いつも綺麗だ、って感じてたんだっけ……って寒っっ！！！」

自分で言っておいて悪寒に震えるベルクス。

「なんだったか、以前雑誌にザイドのニックネームがつけられてたっけ……」

「ニッ、通り名ってことか？」

「ああ。この前言ってたような気がするが………忘れた」

「中途半端！！すっげ中途半端だろーが！！！！」

消化不良に苦しむベルクス。アーキルは飄々としている。

「そうだ、ペンネームなら覚えている。書店でよく見かけるからな」
「ペンネーム???なにアイツ、少女漫画でも描いてるのか??」

ププツ、と笑うベルクス。一応錬金の師としてはザイドを慕っている、はずだ。

「いや、それが案外普通に錬金の本を書いているらしい。手に取ったことがないからはずきりとは言えないが」

随分な言い方をされているザイド。今頃くしゃみをしている事は間違いないだろう。

「で、何て名前?」

「ライオンだったと思う」

「……ラ……はい!？」

驚きのベルクスはもう一度確認した。

「あの、ラ、ライオン?マジで??本当に?!」

「ああ。最近はやボっているみたいだな」

それを聞き、美青年の顔に輝きが広がる。

「うっそ、マジかよー!!?やっべ、ずっと失礼な事言ってた!どーしよー?!」

「むしろどうした?」

先ほどは目を輝かせていたのに、いきなり両手で頭を抱えて叫ぶ起

伏の激しさにアーキルは首をかしげた。

「俺マジで！マジでファンなんだよ！！ライアンは俺の目標！！」
「呼び捨てなところがひっかかるが、まあいい事だな。目標があるのは」

「イリユーマの店主はさ、『いつも完璧であれば芸術の域だと思ってる』っていうぐらい、あ、もちろん俺もこれには同感なわけで、ホントすごいんだ！！まあ魔術師のアンタには分かんないかもしれないけど、とにかくライアンは……」

熱を持ってしゃべるベルクスだが、アーキルがそれに興味をもたず、聞き流している事実はこの時重要ではなかった。

ベルクスとおかんの会話

〈ライアンへの敬愛が生まれた瞬間〉

「ええかベルクス、このライアンっちゅー男は世界一やで」
「世界一!?!」

「せや。スーパーマンやアーサー王にも負けへん!」

「すっげー!!!!ライアンすげー!!!!」

「さらにすごい事があんねん……」

「おらにーっ」

「聞いて驚くなや……なんとライアン、タコの踊り食いが出来んねん……！」

「すっげー……！」

二人で

ザイドさんがとてもすごい錬金術師だという事は十分わかった。あのベルクスが弟子になるぐらいだ。本物に決まっている。

それでも、そうとは頭でわかっていても、やはり信じられない事が今日の前で起きている。

「……あの」

「ん？」

声をかけ、飄々とした顔をこちらに向ける錬金術師。彼ごしに見えるのは横たわっているモンスター達だった。

「お、お強いですね」

「え？マジでー?!もしかして俺今すごい?いやあ久々に褒められたかも!」

大きく照れるザイドだが、何のかわいげもルイスは感じられなかった。

「疲れは、大丈夫ですか？」

「あー、ちよつとダルいけどこれぐらいなら全然大丈夫!ほら、先急ぐ」

ものの数秒、短すぎる戦闘だった。しかもさつきからこんな事ばかりで、さすがのザイドもあきがきているようだ。

「ここは一つ、親睦を深めるために会話に花を咲かせようじゃないか」

などと、ビュンビュン飛ばしている乗り物の上でいつてくるぐらいで、

「は、はあ」

「よし、では第一問！」

「問題？」

「現在恋人はいますか!？」

なんていきなりの質問をぶつけてきた。

「こっ……ザイドさんはどうなんですか?!」

「ええ!?!何言ってるか聞こえないぞー!?!」

風に飛ばされ聞き取りづらいことこの上ないに決まっている。

「だから、ザイドさんは?!」

「俺?!俺は女に興味はない!」

「ええ!?!」

「俺には鍊金だけだ!」

キキキッ!?!いきなりの急ブレーキにルイスは乗り物から振り落とされそうになった。

「ど、どうしたんですか急に??」

「疲れた、今日はこの辺にしておこう」

そういうとさっさと乗り物を消してしまった。そしてついさっき、『全然大丈夫!』といていた男は平たいところに体を横たえた。

突然の事に啞然とするルイス。今は正直、一刻も早くみんなと合流

したほうがいい。こんなよくわからない異界に飛ばされたのだ、とても体を休めて寝れる気分でもない。

しかし、すでに寝転んでいるザイドは大きなあくびをしていた。

「ザイドさぁん……」

「ルイス君も休んだほうがいいぞー。ってか結局彼女いるの？」

話が戻ってしまった。

自分よりは確実に上の人にたいし、ルイスは何も言えなかった。

「彼女というか、好きな人は……」

ザイドの近くに腰掛けた。一応周りには警戒を持ち、いつでも術がはなてるようにしておく。

「第二問！」

「次!？」

まさかの突っ込み質問なしという展開にツッコミを入れたくなるルイス。しかしここは耐え時だ。

「魔術はいつから？」

「えっと……もうずっと前からです。子どもの時から」

「子どもの頃、一番イヤだったこと、許せなかったことは？」

「……親の勝手な期待、勝手に決める道」

「今現在、許せないことは？」

「ううん……」

ルイスは悩んだ。今、許せないこと。しかしパツとは出てこない。

「今のルイス君は幸せなんだ」

ザイドが顔だけおこしてルイスをみる。

「俺は物心ついた時から錬金をしてた。両親が錬金術師だったし」

「そうなんですか」

「子どもの頃はとにかく楽しかった。毎日が新しい発見。両親が教えてくれた、つてもあるけど、自分でも色々つくってた」

ザイドが片手をちよつと動かせば、そこから小さな光が無数に輝き始めた。

「……“転変の賢”」

「？」

もう片方の手を振りかざすと、光は虹色に光り、四方へ飛んでいった。

「七賢者の一人、錬金術師の事だ」

ルイスは身を乗り出した。自分が求めていることの一つだ。

「『万物全て、移り変わり、刻々と変化する。それを知る者、錬金の者よ。汝に世界を与えん』」

ザイドの言葉に首をかしげ、ルイスは記憶をたぐった。しかしそんな言葉はどの書物にもなかったし、人から聞いたこともない。

「それは……」

いっただいなんの言葉ですか、と聞こうと思ったが、彼はもう眠ってしまった。よくもまあこんな状況でスヤスヤと、とあきれたが、どうしようもないので今は休むしかない。

「世界を、与えん……か」

一昔前の自分であつたらすぐさま食いついていたかもしれない。だが、力をつければつけるほど、知識を得れば得るほど、今まで見えなかったものが見えてきてしまう。それゆえに、恐れが顔を出す。もしかしたら、とルイスはザイドを見た。彼もまた、恐れを抱いているんじゃないだろうか。力の先、知識の先はきつと自分たちの想像を超える世界があるかもしれない。それを目の当たりにした時はたして……。

「っおかしくなるかな」

乾いた笑い。うなだれて目をつぶる。

周りには風もなく音もない。今のルイスの気持ちと似ている。

とても静かで、揺るがない。

彼は思った。その静かで揺るがない心に。

欲しい。

世界を、求めた。

走る

「そんなに怒るなってー」

「……」

「っていつか、だいたいの卵はこうなるしー!」

「……」

「心配しなくたって平気でしょ」

ヤイゴの森に、実質トップにたっているアルティラという少し謎のある男に異界に飛ばされ、みなバラバラになっていた。そんな中、今回のミッションの主演、背の高い男フアージルはけだるそうに歩いていた。一緒にいるのは召喚術師のクラヴィスただ一人。

「……おかしい。俺のサポートは八人もいたはず。それがなぜか無口な青年一人」

「……」

三步後ろを歩くクラヴィス。そして別に彼に話しかけるでもない背の高い男。

「俺、正直アルティラみたいに強くないし、もしかしたらこのまま敵にやられて死ぬかも」

「……」

「あ、でも俺が死んだらみんなが来た意味なくなっちゃうか。って事は俺、何が何でも死んじゃいけない？」

ようやく後ろを振り向き、お供と顔を合わせる。

「俺の名前、知ってるよな？」

そう聞くと、口には出さず静かにうなづくクラヴィス。

「よし。で、お前は俺をちゃんと守ってくれるわけ？」

先ほど召喚獣をだし、方々へ散らせた彼に問えば、再び静かにうなづいた。

「そっか。じゃあまあよろしく」

そしてまた歩き出す。

なんとも不思議なことに、しばらく歩いていてもまったく敵に出くわさない。しかしそれより気になるのは、クラヴィスの召喚獣からの便りが一つもないことだ。

ファージルは歩くのをやめた。そしてクラヴィスに言った。

「好きにしる」

「？」

クラヴィスはようやくうなづく以外の動作をした。

「心配事があるんだろ？」

「……」

「俺の感ではあの老婆の気がするが……」

こちらに来てすぐ、クラヴィスが周りを見渡し急いで召喚獣を出したのを見て、彼は察したようだ。

「誰にでも優先順位つてのがある。お前にとって、俺のお守りは圏外だ」

そうだと、と目線を合わせてやる。普通の人なら気づかないかもしれないが、彼が戸惑っている様子がファージルには手に取るようにわかる。

「俺は……」

ぶんぶん。クラヴィスは首を横にふつた。どうやらお守りをとるらしい。彼の優先順位が見えなくなった。

「……まあ座れ」

適当に腰を下ろす。素直に従うクラヴィス。表情は変わらず。まだ若いこの青年に、感情という人間の特性が激しく欠如していることがファージルは気にかかった。

「名前は？」

「？」

「お前の名前だよ」

「……クラヴィス」

ようやく彼の声が聞けた。ファージルの想像よりも少し幼い。

「クラヴィス……」

彼はどの質問をしようか迷った。一番効率的で建設的な質問は何か。

「……クラヴィス、それ、どうした？」

ファージルは包帯の巻かれた彼の右目を指差した。なんとなく想像はつくが、それでもこの質問からのスタートを選んだ。クラヴィスは予想通り、何も答えない。目をそらし、無表情のお面をつける。

「大切なものつてのは、ちゃんと大事にしないといけないと思わないか？……お前がその右目を失ったときのように……」

ファージルの言葉に思わず振り返るクラヴィス。ついさつき会って名前ぐらいしか知らないのに、一体何をいうんだ。そういう彼の心を、ファージルはお面の上から見通す。

「一つ言っておく。お前が俺を知る必要はない。ただ、俺の言葉と対峙するんだ」

「……」

「お前は何のためにここにきた？」

「……」

警戒するクラヴィス。そうだろう、誰でも想定外の事がおきたらそうなる。だからファージルはゆっくりと、ゆるやかな声ではなした。

「伝説の召喚獣か？」

うなずく。

「だがお前には興味のないこと……あの老婆がかかわっているのか。ガイド達は国から、お前らもか？」

たじろぎながらも首を縦にふる。

「国からの脅し……興味はないが……」

ブツブツと考えをめぐらせ色々なシミュレーションをする。

老婆に促された？背後には国の思惑……まあ何にせよ、今この青年が選択しているものは間違っている。

「老婆の名は？」

「ラリア」

「大事だな？」

反応なし。ファージルは肯定ととる。

「よし、クラヴィス。いいか」

「……」

「お前がここで俺を完璧にまもったところで、ラリアがどこかで死んでいる可能性……有り」

「……」

「お前がここで俺を見捨ててラリアのところへ走り、そのせいで俺が死にお前も任務失敗で結局ラリアを失う可能性、これも有りだな？」

推測で言ってみた。どうやら当たりのようで、クラヴィスがだんだん不快になっていく。

「お前が」
「うるさい」

眉間にしわを寄せ苛立ちを隠さない。そんな彼の変化を、ファージルは快く受け入れる。

「そつだ、それが正しい」

何を言っているのか、クラヴィスの苛立ちに困惑が混じる。

「感情をだせ。お前は生身の人間なんだ。その狭い頭の中で全てをおさめようとするな」

男の言っている意味がまったくわからない。感情をだす？人間だからなんだっていう？

久しぶりに感じる怒り。自然と拳に力が入る。

わかっているんだ。ラリアのための、伝説の召喚獣。そのための、ファージルのサポート。頭では全部、わかっているのだ。なのになぜ、

「クラヴィス、お前は囚われの身か？」

わけのわからないことを言う。

「もうお前は自分の一部を犠牲にした……お前は、奴隷でもなければしもべでもないんだ……」

犠牲……奴隷でもなければ……。

その言葉に遠い昔の記憶がよみがえった。

小さい頃。

子ども心に、自分が邪魔であることはわかっていた。理由はわからない。だが、邪魔なのだ。

それでも時々、優しくしてもらった。寒い日に、暖かいスープをくれた。父親は「寒いだろう」と気遣ってくれた。忙しそうなお兄の代わりに、山を2つ越えて買物にいった。「ありがとう」と言ってくれた。

ただそれだけだったが、自分には十分だった。

ある日、町がモンスターに襲われた。家族が危ない。自分なんかよりずっと大事な人たちが。

「よう、坊主」

突然現れたソイツはビフロンスと名乗った。

「右目をよこせ」

右目？

「家族を助けてやる」

本当に？

「死ぬほど痛いかな」

クツクツクツ。

ソイツは怪しく笑った。

俺にとつて、痛みなどどうでもよかった。

自分の体だつて、どうでもよかった。こんなもの、ただの入れ物なんだ。

俺は悪魔と、契約した。

「…………犠牲じゃない」

クラヴィスが口を開く。

「別にいらなかった」

「自分の目が？」

「奴隷でもなんでもいい。関係ない…………」

「大有りだ。お前は世界でたったの一人」

「どうでもいい！」

初めての大声。自分の声に驚いた。ファージルと目が合い、そらし

た。

「何なんだ、あんた」

「お前に自由を望む」

「？」

そらしていた目をまた合わせる。

「お前の幸福を望む」

「そんなっつ」

そんな事、許されるはずがない。何をいってるんだ。

「……」

「許す」

「……」

「お前の自由と、幸福を」

「……頭、おかしい？」

本当に、何を言ってるんだ。この男はバカなんだ。そう、クラヴィスは思った。

「……ッッ」

しかしなぜか、涙が頬をつたっていた。

「なん、なんだっ、」

声がつまる。

「お、まえっつ」

先ほどとは違う理由で拳に力が入る。
許す。許した。許された？
この自分が？

こんな、悪魔と共にいるヤツが？

ポンっ。

「？」

ファージルの手がクラヴィスの頭にのり、ガシャガシャと乱暴になる。

「????？」

「行け」

「は？」

「ラリアのとこだ。俺の心配はするな、絶対大丈夫」

大きな手が背中をおす。

行く？本当に？ ラリアに会えても彼が無事でなければ意味がない。

伝説の召喚獣を、ラリアが国と交わした約束を。彼と一緒にいなければいけないんだ。だけど今、心配なのは。今一番、会いたいの……。

「ラリアと一緒に石版のところでおおう。おそらくラスボスいるからなあ。さすがにそれは俺一人では心細い」

へらっ、と笑っている。何なんだ、この安堵感は。クラヴィスは一歩、彼から遠ざかる。

「強そうな婆さんだったけどもう年だからな、ちゃんと守れよ」

また一歩。

「ついでに他のメンツもよろしく」

行く？

「行つて来い」

バツ!!

ファージルの言葉で、クラヴィスは走り出した。全速力。そして新たに召喚獣をよび、空へと飛び立った。

「人間つてのは、いいなあ」

「余計なことを」

ファージルがクラヴィスの去っていった空を見上げていると、後ろから寒気のする声がした。

「使い勝手のいい術師だったのに、か？」

振り返ればやはり、ビフロンスがいた。

「キサマ等は本当に目障りだ。いつも余計なことをしてくれる」

「自由は命の成分の一つだ。ガタガタいうな」

鋭い目つきでビフロンスをみる。

「ふん、肉体ももてない生き物が」

そんな捨て台詞を残し、彼も去っていった。

「フエイサーン……」

「……」

「うう。神族つてのは気難しいなあ」

「あなたのセリフですか」

「あ、しゃべった」

敵

「そんなものですか……」

ルイスはザイドの言葉に落胆した。“賢者”について質問しても、

「そのうちわかるものだよ」

と言われてはそれ以上何も聞きようがない。一応食い下がったが彼が寝る直前に言った事以外は、本当に何も知らないようでもあった。

「ま、そんなガツカリしてもしょうがない！」

「そうですね。きっと今の自分には知る資格がないんでしょうし……
…精進します」

ルイスの言葉に少し感心しながら例の乗り物を操るザイドは、前方に何やら発見した。近づいていくと派手な音がして煙もあがってきている。恐らく飛ばされたうちの誰かだろう、と二人は急いだ。しかし、着いた頃にはもう事が終わっていた。そして、

「すげえ」

「さすがです」

と二人の言葉が重なった。

「おや」

ラリアは息一つ乱さず二人をむかえた。

「……何でしょう」

「ん？」

「ラリアさんのこの強さは、一体何なんですか……？」

信じられない、といった表情のルイス。

「かつかつ、ほれあれじゃ、年の功」

笑いながらまるで何事もなかったかのように答えられた。ここで簡単に流されてはいけない、と口を開く。

「杖に何か仕掛けでも？」

例えば、ものすごく肉体への負担を軽減するとか。しかしラリアは首を横に振った。

「直魔ですか？」

「いんや」

じゃあ、とルイスが質問を続けようとしたが、

「わしの口から答えは出んよ」

今度は柔らかく笑った。

まあたしかに、そうホイホイと何でも教えてくれるわけがない……と自分を納得させたいがその辺はまだ子ども。

「お願いします。ヒントだけでも」

と本日二度目の食い下がり。

「それより早よ皆を探さんと。ソイツにはわしも乗れるのかい？」
結局何の情報ももらえず、三人は仲良く広く長い道を走りはじめた。
すると、ものの十分もせずにもう一人と合流した。

「ラリア！」

そんな大声が出せたのか、と驚くほど、クラウ”イスは彼女の名前を呼んだ。少し遠くてもわかる彼の顔の強ばりや不安。本当に心底心配したようだ。そしてそれは近づくにつれてとれていく。

「……よかった」

手を伸ばせば抱き締められる距離で、彼はいつものトーンを取り戻した。

一体何があったんだ、とラリアとルイスは目をパチクリさせた。何せあのクラウ”イスのこの状態。ラリアも初めての事で少し間があったが、顔をほころばせて思い切り抱きしめてやった。

「なんじゃい、心配してくれたのかい？嬉しいね。あたしゃ今スゴく嬉しいよ！」

背中を大袈裟なぐらい叩く。

「……痛い」

そんな二人のやり取りを、ルイスは

――親子ともまた違うけど、なんかいいな――

と静かに見ていた。

これedyouやく半分の四人が集まった。聞けば今までクラウド、イスはあのキーマンと一緒にいたらしいので、彼を先頭に皆再び動きだす。

ルイス達のグループとアーキル達のグループ。それぞれがファージルをがんばって探しているなか、とうの彼はすでにお自当ての石版の前にいたりする。どうやらこちらのモンスターは人間にしか反応しないらしい。

「名前……」

石版の前に彼は足を止めた。思いの外小さいそれに向かって彼は考える。たしか、自分の名前を彫るとか。名前を……。

「……書けない」

読み書きが出来なかったことをこれほど悔やむ時がくるとは。彼は肩を落としふて寝をしてやる、と体を横にしたのだった。

一方アーキル達は穏やかにこの異界をさ迷っていた。

「ああもうマジめんどクセエ」

「私も飽きちゃったよー」

「大丈夫？ 疲れた？ 休もうか？」

「……」

ブツブツと文句を垂れるベルクスに欠伸をするエルラン。そんな彼女を心配して優しく頭を撫でているシュワルガ。アーキルはすでに遠い目をしていた。

まったくアテのない道を行くというのは無駄に体力、気力を奪う。一度キチンと整理しよう。アーキルはそう思い適当な所に腰を下ろした。他の三人も何の反対もせず座り込む。

「また面倒なの出っかな」

「その時はその時だ」

そう答えてアーキルは頭を上げる。

一面見事なまでの曇り空。光の一つも差していない。風も吹かなければ生き物の気配もなし。

頭を戻して周りを見渡す。こちらもまるで面白みの欠けらもなく、ただ荒地が広がっているだけだった。

手詰まりもいいところだ。

段々苛立ちを覚えるアーキルだが、いかんいかん、と首を振る。

「つーか腹減ったなあ」

「ねえ」

ベルクスとエルランの可愛らしい腹の虫が鳴いている。

「えー。何コイツら、人間？」

腹の虫が機嫌よく鳴いていると、突然空から声がした。咄嗟に身構えた四人だったが、その声の主はいとも簡単にベルクスの目の前へ降り立った。

「ッッ!!?」

「うわ、やっぱ人間だ」

まるで害虫でも見つけたかのように眉間にシワを寄せた。

姿は人型だが両肘から角のように骨が出ていて、目玉が五つ。ベルクスの倍以上の長身が前かがみに四人を見やる。

「な、んだテメエ!？」

後ろに飛んだベルクスが声を上げる。

「あ?そりゃこっちのセリフだクソ共。一体何しに来た?」

眉を釣り上げ威圧的な態度で大きな口を開く。

今にも襲ってきそうな感じだが、どうやらその辺にいるただ強いだけのモンスターとは違うようだ。

アーキルは話をしてみようかと試みた。

「ファージルって男の連れだ。石版に名前を彫るサポートを……」

ドガッッ!!

アーキルが話し終える前にモンスターは攻撃を仕掛けてきた。

「ケッケッ。テメエらが何だろうと関係ねえ。なあ、殺してやるよ」

至極楽しそうな顔を見せるソイツは両手を合わせ、すぐさま大きく開く。するとそこに高密度な電気の塊が出てきた。

「なッッ、逃げろ!!」

アーキルの声に三人は一気に距離を取る。しかし、

「バカじゃねえの？」

そう言つて電気の塊をベルクスに向かって投げつけた。

「はっ……!!」

早い、と思うと同時に何とか壁を作るベルクスだが、それは簡単に壊され彼の体は勢いよく後方へと飛ばされた。

「がつつ、ゲホツツ」

身体中から、そして口からも血を吐く。

「ベルクス!!」

「そ、んな」

アーキルは杖を大きく振りかぶり、何か唱えて反撃する。モンスターはすかさずそれを避けるように体を引き、アーキルはその隙にベルクスの元へと走る。

エルランは一瞬の出来事にシュワルガの腕の中で震えていた。

「ケツケツ。弱えなあ……なあ、クソ共」

見下しながら笑う。下劣とはこの事だろう。このモンスターの態度にシュワルガは怒りを抑えずにはいられなかった。彼の背後にはいつの間にかオセが召喚されていた。

「……殺っちゃって」

シュワルガの殺意が笑みとなる。

「ああ？人間のペットが、この俺にかなうとも思ってるのか？」

呆れながらオセを見ると、片手を突き出しそこからいくつもの炎の玉を打ち出した。オセはそれを何事もないうように避け、敵の喉元を狙って攻めるがなかなか近付けない。

「ホラホラ、上手く逃げないとよお」

くいつ、と指を動かせば炎の玉はそれに従ってオセへと進路をかえる。

「くっ」

間一髪で避けたが態勢を崩してしまった。

「ケケツ、お座りだ」

そう言って片手を落せば、オセの体は地面に叩きつけられたように潰れた。

「なっ」

シュワルガばかりか、他の三人もその光景に目を疑った。これほどいとも簡単にやられるとは。そして何より先程からのヤツの攻撃だ。人が使っている術のようだが明らかに何かが違う。そもそもこんな

様々な、そして強力な力を持つモンスターなど聞いたことがない。

「お前は……何者だ」

アーキルは嫌な汗をかく。

「ああ？そつだなあ。メイドの土産に教えてやるか」

音もなく空中にその大きな体を浮かせる。

「おれあな、神族様だよお」

神族？

四人はそれぞれがそれぞれの表情を浮かべた。驚き、恐れ、焦り。しかし唯一共通した思いが一つ。

カナワない。

何がどうというワケではない。ただその単語を聞いただけで、彼らはまるで希望を失った。

「どうしたあ？ビビったのか？まあそつだろうなあ。ククツ、なんとつて神族様だからなあ！」

両手を挙げれば地面が揺れて割れていく。

エルランはテテを召喚しシュワルガと空に逃げたが、先程のオセと同じ攻撃をくらい再び地上へと戻されてしまった。

「痛つい……」

二人とも顔を歪めている。

「さて、そろそろ終わりにしてやるか」

もう面倒くさい、といった表情で四人を見下す。両手を左右に大きく広げ、その先から光を出す。

「こんの……クソツタレが！」

ベルクスは最後の抵抗とばかりに持てる力全てでヤツを封じようと動いた。そんな彼をサポートしようと、アーキルとオセは少しでも時間を稼ぐ。アーキルが立て続けに強力な術を放てば、オセが悪魔達とともに接近戦へと挑む。

「ふん、虫けらが」

彼らの連携プレイに体を地面に落としたが、まるでダメージを受けていない様子の神族を名乗るモンスター。反撃とばかりにまずはオセと肉弾戦を始めた。が、それはたった一発の拳に終わってしまった。

「ぐっ……」

「オセ！」

かなりのダメージを受け、すぐに立ち上がることが出来ない。

「さて、次は赤いの」

「終わりだ！」

モンスターが振り返るとベルクスは錬金術で強固な壁を作り出し、

あつという間に閉じ込めてしまった。

一瞬、沈黙が流れたがすぐさまアーキルが口を開いた。

「離れるぞ」

四人は無言のままその場を離れようとしたが、少し足を進めれば後ろから壁が崩れる音がした。エルランは急いで人を運べる召喚獣を呼び出し、振り返る事なく逃げた。

「あ、やっと来た」

体を起こして伸びをすれば、そんな彼にルイスのステキな毒がかけられた。

「お荷物、って言葉、知ってます？」

「え？」

「知らないんですか？なら教えて上げますよ。とても簡単に言えば、あなたのような方をそう呼ぶんです」

いつもなら笑って毒づくルイスだが、今日はお疲れのようでまったくの無表情だ。そしてお荷物呼ばわりされたファージルは頭にクエスチオンマークを浮かべる。

「ルイスよ、お荷物というより役たたずじゃないかのお」

なぜかラリアが便乗。魔術師とは失礼な輩らしい。そうファージルの脳内にインプットされた。

「とうか、もしかしてそれが例の石版ですか？」

ルイスがファージルの後ろにちょこんとある石の板を指差せば、ファージルは首を縦に振った。

「じゃああとは名前を書くだけ!？」

ザイドの顔が明るくなる。

「そうなんだ。ただなんていうか、俺字が書けなくて」

ピキッ、という音がルイスから聞こえたのは空耳ではないだろう。クラヴィスは彼にキレられた時の事を思い出し身震いした。

「はは、ずいぶん面白い事をぬかすんですね、ファージルさんは」

彼の目が笑っていないのは言うまでもない。

「いいですよ。僕が手とり足とり教えて差し上げますから。ただそうですね、まずはあなたのその頭の中がどうなっているのか知る必要がありますかね」

「え、な?!」

ルイスの右手がファージルの頭を掴む。どうやらカチ割りたいらしい。しかしもちろんそれはザイドに止められ、ついでながらリアにも制された。そして彼の舌打ちが耳に入ったのはファージルだけであった。

「なんだ、案外簡単だな」

無事石版に名前を彫り、皆安堵の表情を浮かべる。これでやっと帰れる。バカみたいに強いモンスター達から解放される、と思った矢先、そう遠くない場所から爆音、そして僅かながら人の声が聞こえた。

「ベルクス……?!」

一番に走りだしたのはルイスだった。

神族

「ケツケツケツ。つまんねー生き物だなあ」
「！」

ルイス達が急いで辿り着いたその場所には少しばかり傷を負ったモンスターが一体、愉快そうに地面に転がっている四人を足蹴にしているところだった。

「なんという……」

ラリアは足を止め、杖を前に突きだし術を唱えはじめた。

「っブローズ！」

地面も切り裂くほどの風がモンスターめがけて吹いていき、見事命中したら標的は派手に吹っ飛んだ。

そしてそれに続いてルイスが術を放つと、モンスターは痙攣しながら地面に膝を落とす。

ルイスは真っ先にベルクスの元へと走った。

「ベルクス！」

体を起こして揺さ振るが全く反応がない。しかし息はある。回復術をかけようか、とも考えたがそれはすぐに消えた。モンスターが立ち上がったのだ。

「っのクソ野郎共が」

「やめろ」

モンスターが右手に光を纏った時、ファージルの声がモンスターの耳に入った。

「なあんだ、まだ生まれてもないガキじゃねえかよお」

右手の光は消えたが、代わりに激しい殺気を放つ。ファージル以外、みな体を震わせた。

「随分と下僕を従えて、大層なご身分だなあ」

「もう帰るところだ。退いてもらおう」

空気が緊張している。二人とも瞬きせず睨み合い、ルイス達は寒気さえ覚えた。

一体ヤツは何者なのか。聞きたくとも口が動かない。

「俺はよお、なーんにも落ち度がないのにこんな姿でこんな墓場みたいなトコに閉じ込められた」

「だから？」

「だからよお、今まさに神族として生まれようとしてるテムエ見るとよお」

ククツ、と喉をならす。

「ここに引きずり墮ろしたくて堪んねえんだよ」

五つの目がギロリとファージルを捕らえ、風を切る早さで殴りかかった。ファージルはなんとかそれを避けたが間髪入れず次が襲い掛かる。くっ、と両腕で防いだがその体は何メートルも飛ばされた。

「はっはー！まあ仲良くやろうぜ、兄弟」

ニタツ、と笑うその顔に灼熱玉が飛んできた。

「ぐげッッ！」

ルイスは肩を上下に揺らし、また何か唱えはじめる。

そんな彼にはつとしたラリアとザイドは攻撃態勢に入った。

ラリアは激しい稲妻を立て続けに放ち、それで出来た粉塵でザイドは鋭い刃を作り出し串刺しにした。

そして止めとばかりにルイスの超巨大光玉がモンスターに命中した。

「や、つたか……？」

ザイドの額には汗が滲んでいる。

「無理だ」

振り返り、そう答えたファージルを見れば、明らかに両腕の骨がやられていた。

「……大丈夫ですか？」

「ああ。それよりも早くここを出よう。石版の所までみんなを……」

一連の戦いをただ見ているしか出来なかったクラヴィスがようやく召喚獣、ビフロンズを出し意識のない四人を担がせた。

たったあれだけの戦いだっただが、ルイス達もすでに体力を相当消耗してしまっていたので一緒に担いでもらい、石版の元へと急ぐ。

「一体、あやつは何者なんじゃ？」

一番に口を開いたのはラリアだった。

「……俺の落第バージョン」

彼の目がにごる。

落第、つまり試練に失敗したらああなる。

ルイスは呼吸を整えながら頭の中を整理しようとしたが、ベルクス
の事が気になってしまい上手くまとまらないでいた。

程なくして再び石版の前へと戻ってきた。これから何が始まるのか
と皆静かにファージルを見つめる。

「……あとは扉を開く言葉を言うだけ。もし俺が失敗しても人間は
向こうに帰れるから心配するな」

先ほどまで濁っていた瞳に力強い光を宿し、彼は言った。そして心
に呟く。

生まれてみせる……。神族として。

口を開けば人の知らない言葉。そして瞬間、石版が巨大な扉となり、
それは開け放されていた。

「成功、ですか？」

ルイスが聞けば、

「まだわからない」

とファージル。

「とにかくコレを通りゃいいんじゃない？ぐずぐずしとらんでさつさとゆくぞ」

臆する事なく、ラリアは女の子エルランを肩に、そしてそれに続くようにクラヴィスが背の高い男、シュワルガを背に真つ暗な扉の向こうへと消えていった。残ったルイスはベルクスを、ザイドがアークルを運ぼうとしたその時。

「ついッッ！！」

ザイドの肩に地面から伸びた槍のようなものが刺さる。

「なっ」

振り向けば不適に笑う巨体。

「あ、はあはー……馬鹿が、逃がさねえよお」

ぐっ、とザイドは手で肩を押さえ顔をしかめる。体が熱い。呼吸が乱れ、意識が飛びそうになり地面に崩れた。

「ザイドさん！」

ルイスが叫んだ。担いだベルクスを扉の向こうへと投げ出し、彼のもとへ駆け寄ろうとした。が、強い重力が体にかかり地面に叩きつけられた。なんとか立とうともがくが、体はいう事をきいてくれなかった。

「け、ケケ……みっともねえ姿だなあ。人間なんて、本当に……下

らねえ生き物だ」

最後の方は弱々しく、どこか寂しげに吐き捨てる。

「なぜだ」

「？」

両腕をやられたファージルがゆらりとザイドを庇うように立つ。

「なぜ、神族として生まれる資格を持っていたお前が、そんな事を……」

命を嘲笑うような、生きようとする魂を侮蔑するような事を言う。ファージルは睨んだが、鼻で笑われた。

「体はもれえ、心は弱え。頭は悪いし……救いようがねえじゃねーかよお」

「……」
「そりゃ俺も初めは希望つてのを持つてたさ。けどな、本当にどうしようもねえんだよ、人間つてのは」

扉をくぐり見せ付けられたのは、これまで人が犯し続けた罪。そしてこれからも続くであろう汚れた未来。あんなものを見せられ、どうして人と共に生きるのか。

「……それでも」

モンスターと化した仲間に、ファージルは言った。

「彼らもまた、我々の愛すべき命だ」

プツン、とそこでルイスの意識が途切れた。

「なら……扉、くぐれよ」

口じゃどうとも言える。モンスターはファージルを笑う。

「……くぐりたいのは山々だが、彼らも、とはいかないんだろう？」

ククツ、とモンスターは喉を鳴らす。

「ああ、ぶち殺してやるよ」

「ツツ！」

一気に距離を縮め、思い切り腹に拳が入れられる。ファージルはまたしても体を飛ばされた。

モンスターは吹き飛ばしたファージルには目もくれず、人間であるルイス達の方へと足を向ける。

「ツやめろ！」

モンスターの耳にその声は届かず、ルイスを目下に据えた。

殺サナケレバ……人間ヲ。

モンスターは使命でもあるかのように、その手を高くあげ爪をたてた。あとは振り下ろすだけ。

「死ネ」

無機質な声とともに鋭い爪がルイスの体へと落とされる。

キーン！

「何だあ?!」

突如、鉄の壁がルイスを包んだ。まさか、と思い顔を動かせば、そこには肩から出た血で体を染めるザイドが立っていた。

「ツツんのクソが!」

「な、めんな」

ザイドは自らの血を練金術で何百という銃弾へと変えた。モンスターが怯んだ少しの隙に、地面を連続練金してうまい事ルイスとアークルを扉の向こうへと誘う。しかしまたしてもザイドの体に地面から伸びた槍が突き刺さる。

「がっつ」

「テメエらの命に価値なんざねえんだよ!」

その言葉にザイドはキツとモンスターを睨む。

「ふざけるな!」

そして赤い髪の子を見る。

ボロボロの体に虫の息。皆を守るために最後まで戦ったのだろう。そついう男だ。抜けたところはあるが、信頼できて……失いたくない。ザイドは今一度、体に力をこめる。

「……ファージルさん、二人をお願いします」

いけない！

ファージルは思ったがこの状況ではまずあの二人を何とかしなければならぬ。全力で扉の元へと駆けた。

「はっは、お仲間優先かあ？馬鹿な奴だ。どうせ裏切りの生き物なのによう」

「だからさ、なめるなって言ってるんだろ」

「おめえは何にも知らねーんだ。人間って生き物を」

人間を。

たしかに、わからない事は多い。しかし、とザイドの頭にあの言葉が浮かんだ。

「……“万物全て、移り変わり、刻々と変化する”」

「？」

ザイドは目を瞑り、優しく微笑む。その間にファージルは扉の元へとたどり着き、折れた腕の痛みを耐えながら二人を扉の向こうへと押し入れる。

「……俺は、賢者には遠く及ばない。けど、お前の知らない事を知った」

「なにっ？」

目を開き、両手を広げるザイド。その顔は穏やかで、モンスターはなぜか焦りを覚えた。

「つまり、人間なめんなって事だ」

「はっ！くたばれ！」

ザイドは両手を前に振り巨大な爆発を、モンスターは地面を槍の山へと変えた。

激しく、大きく太い音が廃墟の世界に響いた。

「ザイド！」

ルイスとアーキルを何とか扉の向こうに押し入れたファージルが叫ぶが、それは虚しく消えた。砂煙に立つ影は、人の形ではないぼうぎりつ、と嚙んだ口から血が流れる。

「見てみるよ」

モンスターの目は幾本もの槍に突き刺されたザイドを映していた。

「馬鹿みてえだなあ……俺は死んでないぜ？」

「お、前はツツ」

本当にコレが自分と同じくして生を受けた者だったのか？ファージルは悔しさに、そしてザイドの無惨な姿に体を震わせ、一筋だけ、涙を流した。

「さあ、行ってこいよ……ここでテメエを待つてるぜ」

ファージルの体は半分以上扉の中に入っていた。モンスターは耳障りな嘲笑と罵声を放ち、その声は扉の閉じる重厚な音にかき消されていた。

ここは……扉の、中？体が軽い。どこかに流されてるみたいだ。

僕はどうしたんだろう？ ザイドさんのところに行こうとして、それで……。

『死んだよ』

！

誰だ？！

『君の友人の大事な師匠、落第モノにやられて死んだよ』

なっ！？ そんなワケない、彼はすごく強くて、

『でも死んだ』

嘘だ！

『賢卵の君に特別、選択の権利を与えよう』

選択？

『君の、大事な友人の大事な師匠が死んだ』

うるさい！

『その師匠、生き返らせてあげようか？』

え？

『さあ、どうする？一応言っておくけど、彼が死んだっていうのは事実だよ』

生き、返らせる？

『そう』

何で

『僕は君の答えを聞きたいんだよ』

そんなの、全部嘘だ！適当な事ばかり言うな！

『わかったよ。じゃあそういう事にすればいい。だけど答えだけは聞かせて』

ふざけた質問に答える気はない！

『まったく強情な……質問を変えよう。君の大事な人が死んだとして、もし生き返らせる事が出来るとしたら、君は何を選択する？』

下らない事聞くな！

『早く、時間がない』

生き返らせるなんて……。

『なんて？』

いくら、大事な人でも……死は受け入れないといけない。

『どうして？せつかくの権利を、捨てる？』

そんな権利、もともとありはしない。あるのはその力だけ。

『力を使っちゃいけないの?』

違う。力は……

『うん?』

力は、使い方を……間違っちゃいけないんだ。

ルイスのその言葉でカツ、と世界がまた変わる。目を開くと太陽の光が差し込む綺麗な森の中で、体を起こした先に大きな湖があった。

「やあ、起きた?」

湖の傍で釣りをしていたのは金色に輝くアルティラだった。

「みんな、なは?」

立ち上がり彼の方へ歩くと違和感に気付く。自分の体を見れば、傷はキレイさっぱりなくなっていた。

「ベルクス以外は帰ったよ。ザイドって人は……残念だ」

ルイスは目を見開いた。まさか本当に……あの時の誰かもわからない声は嘘じゃなかったんだ。

「た、すけ」

「？」

「助け、られたのに」

自分の選択は正しかったのだろうか？ベルクスの、大事な人だったのに。

アルティラまであと数メートルのところまで歩みを止めて俯く。すると、ガサガザッと茂みから誰かが出てきた。

「べー！」

「何、言ってるんだ？」

なんと悪いタイミング。アルティラは無視を決め込んだ。

「ベルクス、違うんだツツ」

「は？何が？俺、まだ何も言ってるけど」

しかしベルクスの顔は怒りを表していた。

「つーか、助けられたって、どういう意味だ？」

ゆっくりとルイスに近づく。

「お前、見殺しにでも」

「違うー！」

ルイスの声にまったく反応せず、二人の距離はあと数歩。

「扉の中で、聞かれたんだ、生き返らせるかって」

「で？」

「僕は……」

グツ、とベルクスはルイスの胸ぐらを掴み、右手を強く握る。

「僕は、頼まなかった」

ドガツ！

ルイスの顔に拳が入り、尻餅をついた。

「ベル！」

ルイスの声もきかず、ベルクスは馬乗りになってまた殴る。

「ふざっけんな！」

「ベルクス、やめっ」

口と鼻から血を出すルイスなど気にもとめず、思い切り殴り、彼の目から水滴が落ちた。

「なんで、なんでだよ！」

「ゲホツ。ベル、クス」

「なんで助けなかった!？」

パシツ、ゴツ！

ルイスはベルクスの拳を掴み、殴り返した。ベルクスの体が地面に転がる。

「て、めえ」

「死んだんだろ?!」

絞りだすような声。

「助けるも何もない！死んだ人間は生き返らない！」

ルイスもまた、泣いていた。

「それがルールなんだよ！！」

「うるせえ！」

体を起こし、ルイスを睨む。

「もうテメエなんざダチでも何でもねえ。とつとどつかで野たれ死んじまえ」「ッ！」

立ち上がり、ルイスを見る目にはまるで感情がなかった。

「行っちゃったね」

「……」

ベルクスが森を去り、ルイスはアルティラの隣でボーッと湖を見ていた。ヤイゴの森を忙しなく映し出す湖に、見知った顔を見つける。オコジヨを肩に乗せたガーバだ。

もし彼もベルクスと同じ立場になったら、僕から離れていくだろうか。

あまり働いていない頭でふとそんな事を思う。

「ルイス君。あまりここに長居されてもちよつと困るよ」

「……すいません」

「一つ、昔話をしてあげるから、それ聞いたら出てってね」

「？」

昔々、全ての種族が生命のトップに立とうと戦争を始めました。それは百年以上続き、大地は荒廃し、全ての種族が生存を危惧するほど酷い戦いでした。それでもなお、終わりをみせない戦いに七人の人間が立ち上がりました。彼らは皆人間を代表するもの達でした。彼らがいなくなれば人間という種族を潰せる。他の種族は我先にとその首をねらいましたが、なんとその首自ら各主要種族のもとへと出向いたのです。そして口々にこう言いました。

『私の命で止まるものがあるのなら、喜んで差し上げます』

その言葉にハツとした種族の長達は、涙とともにその首を切り、今度は戦争を終わらせようと立ち上がったのです。また、神族のもとへ出向いた人間はこんな会話をしていました。

『もつとも高貴なあなた方に、どうか願いたい』

『なんぞ』

『我々人間がまた、大きく許されるべきでない罪を犯した時、どうかお止め頂きたい』

『こたびの件、人間だけの罪にあらず』

『それでも我々は、あなた方に采配を望みます』

深く下げたその頭は、二度と上がらなかった。

神族の長は落ちた頭にそつと口付けをし、そして契りかわした。

『愛すべき子よ。汝の願い、しかと聞き届けたり』

それから程なくして戦争は終わり、それと同時に神族は姿を消したのだった。

「さ、帰る時間だ」

「……な、んで」

今そんな話を。たしかに神族の事が知りたくてここに来た。まだ知りたい事がたくさんある。だが、今なにをすべきなのか、考えるべきなのかわからない。もう少しここにいたい。そして、言って欲しい言葉がある。

「もうここで学ぶ事はないよ。また、新しい旅に出るんだ」

「でも」

すぐるルイスにアルティラは態度を変えはしなかった。

「これから君はうんと苦しむ。さっきのような事とか……失望と絶望を味わい、何度も奈落の底にたたき落とされる。だけど諦めちゃいけない」

「……はい」

なぜだか素直にその言葉が耳に入ってきた。

「神族は君達の事を“愛すべき”というけど、俺たちはこういうんだ」

「？」

「“愛しい子よ”、と」

ピカッ

眩しい光に襲われたと思ったら、ガヤガヤとうるさい場所に移っていた。目を開けばそこは見慣れた街のルーパーで、

「あれ？ルイス？」

と振り返れば、買い物袋を手にしたウィルが立っていた。

終**

「おいしい」

「そりゃどうもー」

ニコツと笑うウィルはオムライスを頬張るルイスにお酒も出してあげた。

「ガーバから聞いたよ。なんかスゴイ事になったんだって？」

グラスを拭きながら聞いたが、答えは返ってこなかった。代わりに質問が飛んできた。

「もしさ、ウィルの大事な人が死んで、僕には生き返らせる力があつて、でもその力を使わなかったら……ウィルは僕を恨む？」

ルイスの黒い瞳が揺れる。ウィルはうん、と少し考えてから「わかんない」と答えた。

そこへ変人こと“笑う門”の店長が、

「フライデー！」

などとハイテンションでやってきた。

「店長、今日は月曜ですよ」

「ぬはっ！そっかマイドクター！」

「性別勝手に変えないで下さい」

あははー、と笑いあう情景はルイスの心を和ませる。

「おお、そこにオワスはマイサン？」

「いえ、ルイスです」

一応訂正したがルイスは店長からアツイ抱擁を受けた。ちなみにヒゲがすり付けられ、イラツとしたルイスは店長に軽く電流を流したのだった。

しばらく三人で談笑しているとカランと店のドアがなった。

「あ、最弱の召喚術師だあ」

ウィルの出迎えの言葉にコメカミをピクつかせながらガーバは満面の笑みでルイスに駆け寄った。

「ル〜イ〜ツ」

「キモい」

さらっとした笑顔で釘をさし、ルイスは今日二度目の抱擁を阻止した。

ガーバも加わり賑やかになるといつの間にか店長は消え、それでも話は絶えなかった。ヤイゴの森であった事を話し始めたルイス。聞き入る二人。お酒もいい感じに入り、ウィルはちよつと前にルイスが神妙な面持ちで質問した事を引っ張り出した。それでも三人は、

「ルイス！俺はお前が好きだー！」

「あはは〜ガーバかなりキモいよ〜ルイスが可哀想……お前の顔並みに！」

「言えてる！」

と笑いあう。

今のルイスにとってこの上なく心地好い時間だった。

目が覚めると頭痛と吐き気に襲われた。

「飲み過ぎた……」

「大丈夫ですか？」

優しい声がルイスにかかる。

「フエイ……なんか、久しぶり」

フツ、と笑う声。後ろからはハクセンの声も聞こえ、自然と顔がほころぶ。

「へえ、あの綺麗な女の人が」

朝食兼昼食のフレンチトーストを食べながらルイスはフエイに“その後”の話を聞いていた。

伝説の召喚獣を求めていたハンディーラとビビハのもとに、イーラという美人が“伝説”として出向き、無益な事はやめなさい、と二国をおさめたらしい。ルイスにとっては割とどうでもいい話だった。食事を終え、荷造りをして宿を出た。向かった先は笑う門。店に入るとウィルが開店前の掃除をしていた。

「お客さん、準備中の看板見なかったの？」

「ごめん、目が悪くて」

笑って答えるルイスの背にウィルは目を移す。

「昨日の今日で早くない？」

「また来るから……潰さないでいてよね」

了解。ウィルは笑顔のあとまた掃除を始め、短い挨拶が終わる。店を出ようとしたルイスが、あっ、と思い出す。

「ガーバにもついでによろしく」

「覚えてたらね」

潮風が懐かしい。ルイスは甲板で伸びをした。海を真っ直ぐ見つめ、その先には……

「家に入れてもらえるかな」

生れ故郷、オーヴァルガン。

閑話

ザイドさんが死んだ。

俺を、エルランを救ってくれた、俺達の唯一の人が……。

「シュワルグ？」

エメラルド色が光るかわいらしい召喚術師は、窓の外をポケットと見ている彼の名前を呼んだ。しかし返事はない。ちょんちょん、と肩を突くが、それでも反応がなかった。

ヤイゴの森を出て早一カ月。ずっとこの調子。ちなみに、

「エルラン？」

とキョロキョロ辺りを探して、見つけたら手を引いて、ギュツと抱き締める。しばらくすると解放されて、また彼は窓の外を見る。きっかり一時間に一度の確認作業。

「はあ」

日増しにため息の回数が増えるエルラン。幸せ逃がすかつ、と思いきり吸い込んだらむせてしまい苦しむ。でも彼は振り返らない。

「……」

いい加減この状況に飽きがきていたエルラン。だから、彼の前にい

き、チュツ、と軽いキスをした。

「…………エルラン？」

目をパチクリさせる彼の顔は面白かった。

「大丈夫だよ」

昔にも言った。

「シュワルガは大丈夫！」

そう、昔にも…………。

「俺はエルランみたいに強くない…………もう、疲れたよ」

まだ私達が子供だった頃。

「疲れた？」

そう言って死んでいった子をどれぐらいみただろう。

「うん」

力なく頷く。細身の彼は今すぐにでもきえてしまいそうで。

「じゃあ…………」

私は、

「ご飯食べようか!」
とりあえず食事をすすめた。

戦争の傷跡が見えなくなったこの街に最近人が増えてきた。私達は街を守った小さな英雄としてちょっとした有名人で、レストランでおかわりをサービスしてくれた。

「お腹……空いてた?」

予想外にガツガツ食事をするシュワルガに聞けば、首を縦に振る。

「エルランはさ」

もぐもぐしながら俯く彼。

「強いよね」

「そんな事ないよ?」

何をどう感じて強いというのか、エルランには不思議だった。

「泣かないし」

「人前でね」

「気遣うし」

「ただのおせっかい」

「いつも、笑って……」

泣きだしてしまった彼は袖で涙を拭く。自分より大きくて、年上で、目を赤くして頼りない顔で見つめられて。

「大丈夫、だよ？」

だから私は、笑った。彼の隣に腰掛けて、頭を撫でた。そしたら私の首に顔を埋めて、喉をならしながらまた泣いた。

ツーツ、とシュワルガは涙を流した。そして、いつかと同じように愛しい人の首元に顔を埋め、強く抱き締める。

「エルランっ」

「何？」

「死なっないでツツ」

つかえながら必死に願う。

「一緒にっ……いつ」

「うん」

一人にしないで。

彼は消え入りそうな声で伝え、エルランはそんな彼を抱き締め返した。

ルイス様が無事に帰ってこられ、ただただホッとした。

「フエイ？」

私を呼ぶ声に応えれば、彼は少し間を置いて「なんでもない」と。故郷への船の上、何度目になるか。痺れを切らしたのは私ではなく、ハクセン様だった。

「何を出し惜しみしている」

「いや、そういうワケじゃ」

小さなベッドの上でソワソワしだすルイス様。けれどハクセン様は逃がさない。

「さつさと言わぬか」

「別にたいした事じゃ」

「ほう」

少しばかり挑発するような声音。目を細めてそらさない。うっ、と言葉をつまらせるルイス様が子どもにみえ、

「思うところがあるのなら、遠慮せずおっしゃって下さい」

と優しく声をかける。

眉間にしわをよせ口をへの子にしてしばらく。ようやくルイス様の口が開いた。

「その……僕は、さ」

ルイス様に似合わない、自信のなさそうな瞳が動く。

「正しかったの、かな？」

泣きだしそうだと感じたのは私だけだろうか。ハクセン様が何の事かと問えば、ルイス様はヤイゴであった、ザイド様の事を話した。話し終え、小さな部屋に小さな沈黙。怯えているのがわかった。彼の黒い瞳はたった一つの言葉を求めていた。しかし私には、その言葉を言っていないのか、また、それが真実なのかわからなかった。

「ルイス」

びくつ、とするルイス様。どんな答えが出るのか、私も少し震える。

「おぬしは、真に正しきをした」

ハクセン様はそれだけ言うと部屋を出て行ってしまった。残されたルイス様は、

「よ、かったツツ」

泣いた。肩を上下に揺らし、目を擦り。

こんな時ほど、肉体がない自分を悔しく思う事はない。彼を抱き締め、震える体を撫でる事ができたなら。涙を拭い、ほほ笑みを向けることができたなら。

「ルイス様」

私にあるのは声だけ。

「私は」

だから、

「いついつまでも」

伝えます。

「あなた様とともにおります」

真っ直ぐに。その御心に届くように。

テムイへ

師匠が死んだ。これから一人で錬金をやっていく。クソむかつくる
イスの野郎とは縁を切った。よろしく。ベルクス

「……短っ」

電話でいいじゃん、などと開封後の開口一番、テムイは懐かしの友
からの手紙にそんな感想をこぼす。

「誰から？」

テムイの正面に机を置く同僚のハイアが、研究資料片手に尋ねてき
た。

「ベルクス」

「へえ」

さして興味はないようだ。ルイスとでも言えば少しは食い付いたの
だろうか？

「なんかケンカしたみたいだ」

「ふうん」

こちらを見向きもしない赤毛の彼女の態度が気に入らず、テムイは
椅子の背もたれをギョッとならず。

「……ルイスとケンカしたみたい」

「え？今ルイスって言った？」

ようやく顔を上げたがやはりテムイは気に入らず、

「言っていない」

などとそっぽを向き、ついでに部屋をでようとしたが、

「“よろしく”、ってどういう意味？」

と手紙をヒラヒラさせて聞かれた。

「……俺は別れたけどお前は別れるなよ”って意味」

「何その以心伝心」

言って笑うハイアは学生の頃から変わらない笑顔を向け、テムイに
席に戻るよう促す。コーヒー入れてあげる、なんて事まで言われ、
テムイは渋々机へと向い、長い片思い相手のコーヒーを飲みながら
仕事に勤しむのだった。

お家

標準より大きく、品のいい家の前で意気込む青年が一人。

「一発までは許す」

どうやら殴られる覚悟があるらしい。

「よし！行……」

「ルイス君！？」

意を決しての第一歩は女性の声に挫かれた。振り返ると、なぜか目を潤ませている何となく見覚えのある顔。

「え、と……」

誰だったか思い出そうとするが、生憎彼の脳の大半を占める女性と
言えば“マナ”という某国の姫で。

「アカデミーの時……」

女性がそつと言う。なるほど、記憶にないのはしょうがない。学生
の時はとにかく外へ出たくてしょうがなかったのだ。などと考えて
いると、いつの間にかギャラリーが増え、

「ルイスさん！」

「きゃー！戻られたんですか？！」

「ルイス様〜！」

実家の前に人だかりが出来てしまった。大衆の力とは恐ろしいもので、成人したルイスの体は軽々と人の波によって町の中へと引きずり込まれたのだった。

オーヴァルガンのトップ校というと、ルイスの通っていた術を扱う者を育てる国立アカデミー、政治家を育てるオーヴァルガン大学、そして軍の人材を育てる国防校がある。ルイスの弟で、今年十五になるゼンはそんなトップ校、国防校のラウンジでまったりしていた。

「平和だ」

ジューズ片手に窓を覗けば緑豊かな中庭。生徒の笑い声と、それに寄り添うような小鳥のさえずり。

「ジジくさい事言ってるじゃねーよ」

ゼンの隣にいた友人のケインが海事法から目を離さずにそう言えば、ハハッと笑う。

「平和が一番」

「知ってるか？俺達になろうとしてる職は“金食い虫”と評判なんだ」

ここウン十年、内乱もなければ戦争なんてものとも無縁のオーヴァルガンは、それでもやはり軍人を育てている。

「でも最近モンスターさんが活発なんだろう？」

陸はもちろんの事、海にまで顔を出す。おかげで漁獲量やら物流が芳しくない。

「っていつか何で突然そんな話？」

たしか平和を噛み締めていたような。ゼンが問えば、彼は本を閉じて体を机に預ける。

「平和の裏には犠牲があるだろ」

なるほど、彼はどうやら一般人希望らしい。自分も平和に浸かりたいと。しかしゼンに言わせてみれば些細な事だった。ので、無視の方向で決めた。ゼンが応えなくてもブツブツ言っているケイン。とそこに、他の友人が小走りで寄ってきた。

「ゼン！」

何事かと次の言葉を待てば、ゼンは目を丸くしてもものすごい速さでラウンジをあとにしたのだった。

さて、とルイスは今の状況打破策を考える。実家からあまり離れていないカフェ。老若男女関係なしによってくる人。しかも不思議な事に、

「この町の誇りだな！」

「本当よねえ。お姫様の先生なんて」

イリユーマにいた時の事がだだ漏れなのだ。たしかテレビでイルハウ大会が流れていたのは知っている。そこまではいい、そこまでは

「このタイスが噂の古代獣!？」

「姫様との仲は？あ！料理がお上手なんですよ？」

これはどう考えてもアウトだろう。アウトでないワケがない。まさかテムイかベルクスがふれ回った？いや、彼らにそんな趣向はないではなぜ？

「そうだわ、あの剣師さんはお元気ですか？」

一人の女性が声をあげ、“あの剣師さん”がものすごい速さでルイスを囲む。

「すごくステキな方だったわね！」

「祭りの手伝いしてくれていい奴だったしなあ」

「しかもちよつとミステリアスな感じ……」

「そこがまたいいのよねー！」

さようなら、サレオス……。

ルイスは懐かしの旅仲間と別れを告げた。パツと浮かんだ別れ方は、海に沈めるといふ古典的なもので。

「……すいません、僕用事があるのでこの辺で」

えー、という声を振り切り、ルイスは怒りをぶつけられる場所を探しに実家と逆の方へと走った。

が、走る事による疲れが彼の怒りを増長させる。ハクセンは付いてきていない、というか目立つ事は極力避けねば、と子どもの頃の記憶を引つ張りだし狭い路地へと姿を消した。

ルイスが走っている頃、その弟のゼンもまた走っていた。

『お兄さんが帰ってきてるって!』

伝えてくれた友人には何か海の幸を送ろう。そんな事を考えながら走っていたら、家にほど近いカフェに人だかりを見つめる。あれかと近寄ってみたが一足遅かったようだ。

「お、ゼン坊。ルイスなら向こうに走ってったぞ」

「ありがと!」

魚屋のおっちゃんが指差した方へと足を向けたゼン。だが、

「あー!ゼンくうん!」

人当たりのいい彼は人気者であった。しかし今はそんな人当たりの良さを披露している場合ではない。また今度、と片手を上げその場を去った。

「路地か」

面倒だがゼンは考えるより先に体が動く。この辺は子ども頃兄とよく遊んだ場所。

「懐かしいっ」

鬼ごっこかくれんぼか。ゼンはルイスを追っているこの状況に笑みをこぼしたのだった。

カモメの鳴き声に塩の匂い、そして男達の威勢のいい声がルイスを誘う。路地を抜けるのは簡単だった。だがここ、港に出たのは想定外。ひよこんと顔を出せば、そこに見えるのはあまり知らない顔だった。

「観光客かい？」

不精髭を生やした中年の男が話し掛けてきた。

「え、と。まあそんな感じですよ」

知らぬ顔が多いのも無理はない。家庭の事情でこういった所には嫌悪感を抱いていたのだ。

「今ちようど漁に出る船があるが、乗るかい？」

少しためらったが、小さな声でフェイが勧めてきたので首を縦に振った。

「酔っ……」

漁船に乗るのが初めてだったルイスは素晴らしき洗礼を受けていた。グラングラン揺れる船。いつそ破壊してしまおうか？そんな事を思いながら、必死に口を押さえる。

「大丈夫か？出したほうがスッキリするぜ？」

「いえ、お気遣いありがとうございます」

素直に頷けばいいものを、小さなプライドがせつかくの救済を拒む。まあ人間誰しもある事だろう。

ある程度沖に出れば揺れは収まり、なんとか吐き気は落ち着いた。

「……すごいですね」

網を手繰り寄せて姿を見せるのは大量の魚、魚、魚。

「こんだけ獲れりゃあ気持ちいいってもんだ！」

満面の笑みで答える男にルイスの顔も綻ぶ。

「俺達漁師がこうやって仕事出来るのも、ダランさんって人のおかげなんだ」

邪魔にならない程度に手伝ってみていたルイスに、男は嬉しそうに話しだした。

「輸入ものが安く手に入ったり、肉ばかり食べるようになって魚の需要が減った事があってよ。漁港が次々消えてったんだ。海一本

の奴は次の職探すのは難しいし、現役の奴だってギリギリの生活だった」

網を全部船にあげ、売れそうにない魚は海へ、その他は船の中にしまつていく。

「そんな時さ、ダランさんが漁業おこししたのは」

「漁業おこし？」

額の汗を拭きながらルイスは聞いた。

「徹底的に無駄なコストを切って、同時に宣伝しまくったんだ。魚介類がどんだけ体にいいかとか、あと色んな店に足運んで使ってくれって頼み込んだり」

魚の仕分けも終わり、コーヒーは？と休憩を入れる。

「町の人達にももっと身近に感じてもらおうって、漁船に乗せるようにもなった」

今のお前さんみたいにな、と指を差される。

「いい経験が出来ました」

笑って答えれば、だろ？とまた嬉しそうに笑う。

「今じゃダランさんは海上連盟の役員になってな、滅多にこっちに顔出す事はないが、俺達はあるの人に本っ当に感謝してるんだ」

感謝と、そして誇りのようにダランについて語った男は腰を上げた。

「そろそろ帰るか！」

「はい」

ルイスの心はいつになく温かさでいっぱいになった。

漁港へと帰路、いくつかの漁船と合流し威勢のいい会話が飛ぶ。

「ん？」

そんな時、海上に一つの大きな影を見つけた。

「まさかっ！」

漁師達がみな視線を空へと上げる。

「くそっ、また出やがったな！」

空にいたのは大きく凶暴そうな鳥型のモンスターだった。

「坊主、船の中に隠れてな！」

ルイスにそう言うと、男はどこにしまっていたのかライフル銃を手にし、モンスター目がけて撃ち放った。他の漁師達も加勢しつつ、みな船の速度を上げる。

「ちっ、ちょこまか避けやがって」

モンスターは体の角度を変え、全ての銃弾を上手くかわす。そしてギィイイ！と鳴くと急降下して海にもぐり、

「やべえ！」

と他の船の漁師が慌てる。が、ものの数秒で船に垂らしていた大きな魚がモンスターに持っていかれてしまった。しかも器用に空中でそれを食べほす。

「くそっ」

「……船の速度、少し落としてもらえますか？」

ライフルを再び構える男にルイスは頼む。あれ位なら一発で済むだろうが、今の船の速度では当てるのは難しい。顔色を悪くしながらもモンスターをしつかり見やるルイス。が、うっ……と口に手を添える。

「危ねえから中に入ってな！」

船酔いの上に一般人のルイスを心配し、男は声をあげる。

「一応……うっ、こっ見え、て……魔術師っ」

ぶ、という音とともにルイスはあろう事か船に出してしまった。

「げっ！勘弁しろよ坊主！」

速度を少しだけ落とし、男はルイスに駆け寄った。

「大丈夫か?!」

「も、申し訳ありません。あとでちゃんと掃除します」

「んな事より中に」

「とてもスッキリしました。アレは任せてください」

口元を拭い晴れやかな顔でルイスは立ち上がった。

「任せるって、何い……」

ルイスの言葉を理解できないままの男を余所に、彼はブツブツと言
い始めた。本来それは術を唱えるものなのだろうが、

「ちょうどウツプンを晴らそうと思ってたし、海の上だし、アレを
サレオスだと思っておもいつきり……」

と怪しげに笑いながらルイスは両手に力を込める。

もちろんルイスの只ならぬ様子に男は慌てて立ち上がったが、

「エンブロウズ！」

と両手を前に突きだし、その先からいくつもの鋭い炎を広範囲に放
ったルイスに尻餅を突いてしまった。

「なんだあ?!」

「魔法!?!」

他の漁師達から驚きの声がかかる。

ギギヤアアア!とそれを避けきれなかったモンスターは、体に炎を
まとって海に落ちていった。

「いやあ、マジにすげーな!」

「ホント、まさか坊主が魔術師だったとはな!」

無事漁港に戻り、汚してしまった船の掃除をしてからルイス達は捕ってきたばかりの魚を堪能していた。

「坊主じゃありません」

「ああ？俺の大事な船にゲロったくせに何を言う！」

ダハハツ、と大きく笑う男達にルイスは何も言い返せず、少し拗ねながら焼魚を口にする。

「おいしい」

「だろ？捕れたてが一番なんだ！」

モンスターを撃退したルイスの噂はあつという間に広がり、港は男ばかりの小さな宴会のようになっていた。

「つつても杖もないのになんで魔法が使えんだ？」

「必要ないぐらい強いんです」

ここぞとばかりに名誉挽回をはかるルイスに男達はまた大きく笑う。

「なるほど！」

「頼もしい限りだなあ」

「でもそこは謙虚にいつとくところだぜ？」

「波には弱いしな！」

掘り返さないでください！とムキになるルイスは漁師達に随分気に入られたようだ。

「またいつでも来いよ！」

ひとしきり海の幸を堪能し、みな各々の仕事へと戻っていく。
ルイスもそろそろ家に行かねば、とお礼を言ってお手を振った。

「元気でな！坊主！」

「だから、坊主じゃありません！ルイスです！」

ブリッとした表情を残し、ルイスは港をあとにする。しかし彼の機嫌はすこぶる良かった。

一方、港の男達は彼の名前を聞いてポカン、としていた。

「ルイス、って言った？」

「言ったな」

「黒髪で魔術師……」

「んでもって名前がルイス」

男達の頭に一人の人間が浮かぶ。

「ダランさんの息子とはな」

不精髭の中年の男がやれやれ、といった顔で彼、ルイスの背を見送ったのだった。

「あー、楽しかった」

「お父様のお話も聞けましたしね」

フェイのセリフにルイスは難しい顔をする。

「ううん……まあ……」

「先入観はいけませんよ。ハクセン様も常日頃より仰っていました」
「わかつてるよ。僕だって昔のままじゃないんだから」

でもな、とまだ夕焼けも出ていない今。ルイスは気持ちの整理が必要と思い、くるっと方向を変えた。

「もう！どこにいるんだよー?!」

夕飯のおいしい匂いがする時間。ゼンはクタクタになって町中で叫んだ。

いく先々で一足違い。どうにもこうにも兄に会えず、出るのは溜め息だった。

「はあ……今日はもう帰ろう。お腹も空いたし」

グウ、と鳴るお腹を擦りながらトボトボと、重い足を引きずって家へと帰った。

「ただい……」

「一体お前は何を考えてるんだ！」

家のドアを開けた瞬間、父親の怒鳴り声が聞こえゼンは慌ててリビングに向かう。そこには、睨み合っている父と兄。少し離れて母親がオロオロしていた。

何年と音沙汰のなかった不良息子が突然帰ってきているこの状況。

ゼン、焦る。

「だから！」

微妙な沈黙を破りルイスが口を開く。何を言うのか、ゼンはゴクツと喉をならす。

「お腹空いたから夕飯食べたいって言ってるんだよ！」

……はい！？

「ノコノコ帰ってきて第一声がそれか！？」

まったくだ！

と思わずゼンもツツコミたかったが、後ろでとりあえず静かに首を縦に振るだけにした。

「昼間魚食べたから肉がいい！」

「このバカ息子が！お前に出す食事なんかない！」

「それは母さんが決める事だ！玉子焼きも作れないくせに偉そうに言うな！」

「なっ！？親に向かってなんて口の」

「せっかく帰ってきた息子に対してその態度はないと思うけど！」

いやいやいや、勝手に家飛び出して何を言うか兄ちゃん。ゼンは一気に脱力してしまった。

「母ちゃん、お腹空いたあ」

溜め息混じりにケンカしている二人の間をスタスタと歩いて椅子に

座り、ポチツとテレビをつける。

「ゼン！」

二人の声が重なる。しかし面倒なので無視。第一さつきまで町中走り回っていたので疲れているのだ。付き合ってられるか。

「元気そうだね！」

「いや、今スゴイ疲れてる」

「つていうか大きくなつたねえ。もしかして僕より高い？」

「母ちゃん、夕飯まだあ？」

「あ！ゼンゼン、これお土産っ」

「何？食べ物？」

立ち上がり、ゴソゴソしている兄の方へと近寄る。出されたお土産は食べ物もあれば、絵の描いてある不思議な本。靴も出てくれば奇妙なお面まで出てきた。

「……多くない？」

「ゼンの買ってたら母さんと父さんの買えなくなっからね」

ルイスにとっての優先順位第一位はかわいい弟なのだ。

「まあ今度送るから。母さん何がいい？！やっぱり食べ物？」

台所でせつせと夕食の準備をしている母に声をかけ、そのままルイスは台所へと消える。

「……バカ息子が」

「いいじゃん。兄ちゃん帰ってきて俺普通に嬉しいよ？」

「だけどなっ
」

父親の言葉を最後まで聞かず、ゼンもお土産の食べ物を手台所へ
と消えたのだった。

縁とは不思議なもので、二十一になったルイスは、十八になり今年アカデミーを卒業したアルドと一緒に船の上に行った。

「俺本つつつ当に嬉しいです！また尊敬するルイスさんに会えるなんて！夢みたいですよ！」

目を輝かせ、両拳に力を入れて体を震わせるのはそのアルド、アカデミーの時後輩だった男の子だ。

「あー俺もう感激でいつ死んでも悔いはない」

言いすぎだろう。正直、前よりはマシになったかもしれないがルイスは決して人様から尊敬されるような人間ではないと思う。

「ありがとう。僕もまたアルドに会えて嬉しいよ」

しかしあえて賛辞を否定しないのが彼の流儀らしい。そんな彼は、このかわいらしい短髪の男の子を割に覚えていた。クラス対抗戦の時、今と変わらず自分に尊敬の念を抱いてくれていた明るくていい子。弟と重なるかと以前フェイに聞かれたが、昨日夕方ぶりに会ったかわいい弟は結構冷静だった事を思い出し、少しだけシユン、としてしまった。もっと喜んでくれてもいいのに、などと子どもみたいな事を思っていたら「どうしました？」とアルドが心配してくれた。

「……アルドは本当にいい子だね」

「えー！？そ、そんな事ないですよ！」

照れて顔を赤くするアルドをルイスはそこらの女の子よりかわいいな、と一瞬思ってしまった、違っただろ！と早急にそれを頭から掃き出した。

「おい坊主、そろそろお前の言ってた所に着くぞ」

そう言つて操縦室から顔を出したのは、昨日お世話になつた漁師さんでアルドの父親のロマドだ。

「坊主じゃありません」

「そうだ父ちゃん！ルイスさんに失礼な事いうな！」

「へいへい」

困つたように笑うロマドは息子には弱いらしい。

三人が向かっているのは沖に出てしばらく行つた島だ。島と言っても浜はなく、断崖絶壁で人を寄せ付けない岩の塊のようなもの。なぜこんな所にわざわざ来たかと言つと……。

数時間前。

「ゼンから筆を取り上げるな！」

「少し黙れないのか？！だいたいお前には関係ない！」

鶏が鳴き、台所からトントントン、とリズムのいい音が聞こえる頃、成人している男同士のケンカの声。

「僕の弟だ！」

「勝手に家を出た奴が」

「人の話を聞かない父さんが悪い！」

父親の言葉を遮るルイス。

「父さんがちゃんと聞く耳持ってたら一言ぐらい残したよ」

まるで自分は何一つ悪くないような口振りはゼンやハクセンのため息を誘う。

「ハクセンも大変だね。あんな兄といつも一緒だなんて」

どうもすいません、と頭を下げる。

「む、しかしなかなか面白い男よ」

「へ？」

間の抜けた声でハクセンを見やる。そんなハクセンはホワイトタイガーのメスが出ているテレビに釘付けだ。

「もういい！出ていく！」

親子喧嘩も終盤で、ついにルイスは席を立った。振り返りもせず玄関へ行けば、ボタンっ、と派手な音が家に響く。

「あなた……」

「荷物はある。また帰ってくるさ」

第一ルイスの古代獣が一步も動かないのだ。心配する母親の顔は少しだけ緊張を解いた。

「ルイス様、私が口を挟むことではな」

「わかってるよ！全部僕が悪い！」

昨日今日とどれぐらい大きな声をだしているか。つい喧嘩腰になってしまう。なぜキチンと話せないのだろう。ルイスは近くの公園のベンチに崩れるように座り込んだ。

「……でも父さんも悪い」

ボソツと言ったところでフェイにはしっかり聞こえている。

「……よし、まずは冷静に」

「はい」

「なぜここに帰ってきたか」

「なぜですか？」

ヤイゴの森から出たら何の迷いもなく故郷を目指した。長年共にいるが、ルイスの考えている事にフェイは及ばない。かといって彼に及ぼすとはまったくもって願えない。

「ベルクスがさ、いなくなっただでしょ？」

「はい」

「それで思ったんだよね、大事なものは……ちゃんと大事に、大切にしないと、って」

フエイは首を傾げる。

大事にしていたと思う。もともと彼は優しいのだ。たしかに自己中心的なところはあるが、決して誰かの不幸を蜜にするような人間ではないし、それこそちゃんと彼なりに彼の周りの人達を大事にしてきたと思う。

「ああ……マナに会いたいなあ」

「飛びましたね」

話が。

フエイの言葉には耳を貸さず、ルイスは唯一召喚できる精霊、シルフを呼び出した。

「パパー！」

「違うー！」

ルイスの見事なチョップが可愛らしい男の子の頭に舞落ちる。羽をパタパタさせていたその子は両手で頭を抱えて、泣きながらルイスの足元でうずくまった。

「うう……パパなんか嫌いだ」

「僕もシルフみたいに学習能力のない子は嫌いだよ」

つい先ほど「大事にしなきゃ」と言っていたルイスは意地悪く笑う。

「ママにいつける！」

ルイスに必死に抵抗するシルフの姿はなかなかかわいらしい。しかし結局彼はルイスのお使いを頼まれるのだった。

シルフが空に消えてしばらく。ルイスは「よしッ」と立ち上がる。

「認めてもらおう」

「何をですか？」

魔術師としての自分を。親の期待には応えられなかった。けれどそれがいけない事なのか、といったら決してそうではないはず。どちらが間違っているとか正しいとか、そんな話はどうでもいいだろう。いい大人なのだから。

「最近モンスターが善良な市民に迷惑被害を起こしてるみたいだよ」
やってやりますか、といった顔でルイスは公園を後にした。

「はあ、こりゃスゲエ」

島の近くまできてロマドはため息まじりに溢す。正直、ここからすぐにも立ち去りたい。しかしルイスの顔を伺うとなぜかご機嫌のようだ。

「新作を試せる」

帰省の船の上、ルイスはヒマだったのでいくつか新しい魔法を考えていたのだ。

その中の一つ、雷系のものがいだろう。

「船をゆっくり近付けて下さい」

「これ以上はゴメンだ」

大事な息子が乗っているのだから、ロマドの拒否は至極当然だろう。しかし残念な事にその大事な息子はルイスに忠実である。

「父ちゃん！さっさとしてよ！ルイスさん、俺は何したらいいですか？」

杖を握り締めアルドはワクワクしながら指示を待つ。彼の中でルイスはもうヒーローを超えた存在になっていた。

「大技の上に新作だから発動までに時間がかかるんだ。三分……以内にやってみせるから、その間」

「ルイスさんを守ればいいんですね!？」

任せて下さいと言わんばかりの顔で答え、そんな彼の後ろで父親はまだ迷っていた。

ルイスの強さは昨日この目で見ています。しかし、だ。自分一人なら未だしも息子がいるのだ。なのにあのモンスター達の巣窟に近づくなど……。

なかなか進まない船に気付いたルイスはロマドを見やる。顔を見れば何を考えているか一目瞭然だった。

「ロマドさん」

「無理だ」

「父ちゃん!？」

アルドが怒った顔で父親のもとへ行こうとしたが、ルイスがそれを止める。

「なあ坊主、オメエの気持ちは嬉しい。俺達漁師や町の奴らのため

に一肌脱ごうってのは……だけどやっぱダメだ」

ロマドにしてみれば一緒に船に乗っているのはまだ子ども。ましてや自分と、あのダランさんの息子なのだ。ルイスはそんな彼の気持ちを察し、

「帰りましょうか」

と言った。

ロマドもアルドも一瞬止まり、

「ここまで来たのに！？父ちゃんがさっさとしないから！」

自分から戻る事を提案したロマドも、こんなあっさり受け入れるとは思わなかった。

「ただ、僕はここでお別れです」

ルイスの言葉に二人はハテナを浮かべる。

「では」

ニコツと笑うと彼は船の先へ行き片手をあげる。そして聞いたことのない術を唱え、腕を振り落とした。

「うわあっ」

「なんだコリヤ」

ルイスが腕を下ろしたまま直線に、氷の道が出来上がった。道はそのまま島まで続いている。

ヒョイ、とその道に降りたルイスは船を振り返ることなく真つすぐ進んだ。

「スツゲエエー!!」

「マジか」

目を輝かせるアルドに目をパチクリさせるロマド。魔術師というのはこんな事までやってのけるのか、とロマドは先程まで持っていた不安を小さく感じざるをえない。

これなら本当に……などと考えていたら、

「ルイスさん！俺っ！どこまでもついていきます!!」

と息子が船から降りたのに気付かなかった。

「まっ、戻れ！」

しかしロマドの声は届かない。

一方アルドはルイスに追い付き肩で息をしている。

「アルド!?ダメじゃな……」

「一生ついていきます!!」

目の輝きがハンパではない。いわゆるパねえ。ルイスはこの純粹無垢な少年を全力で守ろうと誓った……ような顔をしていた。

「援護は頼んだよ」

「はい!!」

目で頷き合つとアルドはルイスの前に立ち杖を構える。実戦経験は

少なくとも、彼には優秀な成績でアカデミーを卒業した自信がある。杖を握る手に力が入る。

「怖い？」

見上げれば数えきれない程のモンスター。普通なら足がすくむ。しかしルイスの問いにアルドはやはり目を輝かせて振り返り、

「ワクワクしますっ」

とだけ言った。

二人は同じ方向に向く。

ルイスは両手を胸の前に持つてきて目を瞑る。ブツブツ唱え始めると同時に彼のまわりに風が起き、パチパチツと火花の音となる。

「来たッ」

口元以外動かないルイスを背に、アルドは杖をかまえ頭上のモンスターをとらえる。モンスター達は甲高く鳴くと、二人目がけて一直線に落ちてきた。

杖をダンツと氷に突き刺し、アルドも何か唱え始める。モンスターとの距離があと数メートルというところ、

「……………つ 困め」

杖を中心に薄いバリアが現れ、ベチツ、ベチツ、とモンスターを寄せ付けない。

一呼吸入れてから杖を抜き、それを横にして再び唱える。その間バリアが弱まり、数体のモンスターが接近してきた。

ギギヤアアア！

「遅いつて」

横にしていた杖をそのまま横に切るように流す。すると、二人に襲い掛かってきたモンスター達は真つ二つに切れた。甲高い鳴き声は混乱も交ざるようにつるささを増す。

「ちょ、疲れた」

よく見るとアルドの額にはうつすら汗がにじんでいる。しかしモンスター達も巢を守るのに必死。先ほどの倍の数が落ちてくる。

「ふう……うん。いい修行」

さつ、と杖を頭上高く持ち上げ、その先端に光が灯る。

「ジュ・ライト！」

強い光はモンスター達の視覚を奪い、互いぶつかりあったり混乱したりと、次々に海に落ち、氷の地面に叩きつけられていった。

「アルド！」

また一呼吸入れようとしたら後ろから声が聞こえた。それはルイスではなく、

「銃ねえ」

ライフル片手に走ってくる父親のものだった。

「ハア、ハアつつお前は！」

「ケイジ！」

杖を差したバリアをはる。

「父ちゃん、あんまソレ役に立たないと思うけど」

「なっ！」

「まあ父ちゃんもルイスさんもオレが守るからいいけどね」

自信に満ちた笑顔を父親に送り、くるっ、と島を見る。

実力差がわかったのか、モンスター達は巣の方に戻り始めていた。

「ルイスさんが出るまでも……」

なかった。

というセリフは飲み込まれた。ブワツ、という重さを感じさせる音とともにそれは姿を現す。

「なんっー」

親子が見上げれば、太陽の光が遮られ、

グガアアアア！！

と、思わず両手で耳を塞ぐほどの鳴き声。

「でかさ」

「うん」

親玉登場。

ロマドが銃を撃ち、アルドが術を放つが痛くもかゆくもなさそうだ。

「ル、ルイスさん」

振り返ったが、どうやら彼はまだ唱え続けているようだった。

「坊主！たしか三分とかつ」

「何とかしなきゃ」

アルドは杖を握る手に力をいれ、アカデミーで教わった事を思い出す。

『そう、増幅させるのよ』

『先生ー、それなら単に高等術をつかえばいいんじゃないですかー？』

『時間とコストの削減。以上。やってみなさい』

そう言えばあの先生年の割にきれいだったな、なんて余計な事も思いついしながら、今度は増幅のレベルを思い出す。

「おい、ここにいたら危険だ！」

親玉が三人に標準を定め、空高く飛んでいく。おそろく繰り出してくるのはごく単純なもの。体当たりだろう。

「アルッ」

「任せて」

ふう。焦っている父親をよそに深く息を吐く。

増幅魔法は三段階。ジィ・ヴィ・リィ。

ケイジは元々封印術。下手にレベルを上げて防御としての形を崩してはいけない。

「第二……」

アカデミーで習ったのは第一のジィのみ。しかしあの親玉相手ではそれは意味をなさない。

アルドは杖をガッ！と先程よりも強く突き刺し、目を閉じた。

「ツクそ」

父親であるロマドは、息子が静かに術を唱えているところをただ見守るしかなかった。

始まり

「さすが」

満足気な笑顔がアルドに向けられた。

両手に軽く火傷を負っていて、立つ事が出来ずに地面に転がっている彼は、それでもルイスに誉められた事のほうが嬉しくて笑っていた。

「増幅はたしか学校では第一しか教えないよね。術に潰されずによく頑張ったね」

はい、という返事は弱く、アルドはそのまま意識を手放した。

駆け寄ったロマドはボロボロの息子を強く抱き締め、

「バカ息子が」

と安堵した表情を浮かべるのであった。

「それは、本当ですか？」

デマに決まっている、と言いたげな顔をしているのはルイスの父、ダラン。

いつも通り事務作業を黙々とこなしていたところ、

「さすが君の息子。表彰もんだな！」

と背中を叩かれた。

ケンカ中の息子の話など微塵も耳に入れたくはないが、どうにも避けられないほどの大事になっていた。

「被害は激減だろうな」

「漁師の話じゃ、そのモンスター相当な大きさだったみたいだな」「カギツメだけ漁港にあるみたいよ！」

ダランは周りの言葉にハツとし、急いで漁港に向かった。

息を切らせてやっとの思いで着くと、すでに人だかりが出来ていた。

「すいませんが、魔術師のルイスはどこに？」

隣にいた男性に聞いたが、どうやらここにはもういないようだった。

「……家か？」

ダランは直感に従い、また走りだす。そしてその直感は当たりだった。玄関を勢い良く開け名前を呼べば、ソファアでぐっすり眠っている息子がいた。

「あなた聞いた？ルイスつたら」

「ああ。それよりも怪我は？」

「え？別にどこも。ただすごく疲れてたみたいですよ」

ダランは気が抜けたようにその場にしゃがみ込んだ。

「まったく。バカ息子が……」

立ち上がり、落ちかけていたブランケットを直しながら息子の寝顔を見る。

幼かった面影はなく、そこに眠るのは一人の男だった。思えば、小さい頃からこの息子には手を焼かされた。

「あなたに似たんですね」

「俺に？」

「こうと決めたら遣り遂げるところ」

「こいつは自分勝手なだけだ」

「ふふつ。どつちも引かないからよく言い争いになりましたね」

「今でもそうだな」

「親子ですもの。そう簡単に変わりませんよ」

リュックに詰められているなかの殆どがお菓子である事はさておき、鼻歌混じりにそれを背負うアルドは今まで生きてきた中で一番胸が高鳴っていた。

「ちゃんと連絡はよこせよ」

「わーかったよ」

「ほら、これも持っていきなさい」

「はいはい」

アルドが玄関を出ると、近所の人が見送りに来てくれていた。

「頑張れよー!」

「体に気を付けて」
「お土産よろしく！」

しばしの別れを惜しむ声を背に、アルドははやる気持ちを押しさえられず走りだした。

『ルイスさんについていく！』

一週間程前に宣言し、ついに今日、生まれ育った故郷を旅立つ。どこまで付いていけるかなど考えられないが、一歩でも近づきたい。アルドの中でルイスはただの憧れではなく、目標となったのだ。

「あ、いた！お待たせしました……って、あの……」

待ち合わせ場所に着くと、そこには不機嫌オーラをバシバシ放つルイスがいた。しかしアルドを見つけるとそれはスツと消えた。

「やあ、本当に着ちやっただね」

「んな！？やっぱり、迷惑でしたか？」

シヨボくれて聞いたが、ルイスは優しく笑った。

「弟が一人増えたみたいで嬉しいよ」

「えー。俺はルイスさんの弟子になるんです！」

「この前も言ったけど、師匠、なんて呼んだら口きかないからね」
「わかってますよお」

そんな会話を済ませ、ルイスは地図を取り出した。
すでに行き先は決まっていた。

「魔術大国ですか？」

たしか記憶によればルイスはすでに行っている。

「会いたい人がいるんだ」

それを聞きピンときた。

「姫様ですね！」

「まあ……それともう一人……」

ふと、ルイスに影のある笑みがこぼれた。

「最後になるかもしれないけどね」

ボソツと呟いたルイスのセリフが聞き取れなかったアルドは首を傾げたが、同じセリフは聞けず、二人と一頭は歩きだしたのだった。

「なんだか静かね」

わりと広いその家に、三人は夕食を囲んでいた。

「煩いのがいなくなったからな」

「父ちゃん素直じゃないなあ」

そういうゼンの顔はほころび、

「ご馳走さま！」

食器を片付けタタツ、と二階の自室へと向かった。

「ずいぶん嬉しかったのね」

「ふん、絵など腹の足しにならん」

そんな事を言いながらも、昔のようなトゲトゲしさはまったく感じられなかった。

「久々だなあ」

目を輝かせて白いキャンパスに向き合えば、自然と筆をとっていた。色も形も思いのまま。

無心になって筆を動かしていたら、十二時を過ぎていた。

さすがに眠気を覚え、キャンパスの前で毛布一つ掛けただけで眠ってしまった。

兄には夢があった。

俺にも夢があった。

兄は夢のために出ていった。

俺は夢のためにとどまった。

『ゼン、約束するよ』

『なあに？』

『僕、強くなる』

『うん』

『ゼンの夢を守れるぐらい、強くなるから』

『うん』

『だから……』

諦めないで。

目を覚ますと、ゼンの頬にはすすすらと涙の跡があった。

「……夢」

まだ幼かった兄ちゃんと俺。

あの時俺は親に言われた通りにするしかない悔しさから泣いていた。

兄ちゃんは？

一緒に泣いたのは、なぜだったんだろう。

「兄ちゃん……」

また遠くに行ってしまったたった一人の兄。

幼いときに約束した通り、強くなって帰ってきた。そして、夢も守ってくれた。

昨日キャンパスに描いたものはあまりにまとまりがなかった。

腰をあげ、新しいキャンパスを出す。

真っ白なキャンパス。

俺のキャンパス。

「ゼン、朝ごはん出来たわよー」

下から母ちゃんの呼ぶ声。

「はぁーい」

学校が終わるまでのお預け。それでも気持ちは下がることを知らない。

「っありがとう」

俺のたった一人の兄ちゃん。

「そうだわあなた、サレオスさんにお礼の電話をしないと」

「ああ、そうだな。彼には世話になったしな」

「ルイスがイリユーマを出たっていう時なんて、私達以上に心配してくれていたわね」

「お詫びにわざわざオーヴァルガンまで来てくれるとは………まったく、ルイスも一緒にいたなら少しは見習うという事を」

「あなた」

「………」

「………」

「仕事に行ってくる」

「いってらっしゃい」

「先生、お兄様の容体は……」

聞いたところで、快い返事は返されなかった。

医師師は深く頭を下げ、退室し、マナは閉められた扉を見つめた。

「マナ……」

ベッドで横になっていた体が起き上がろうとしたが、それは制された。

「何も心配はありません。私、魔術は全然ですが事務仕事は性にあってるみたいです」

フワリと笑ってみせ、席を立つ。

「すまない」

「今はご自分の体の事だけ考えて下さいね」

廊下にて歩き始めれば、すぐ後ろに兵が二人いた。

中庭を抜けて大きな建物に入り、マナの目付きはかわる。

会うものは皆脇にそれ膝を折る。

煌びやかではないこの建物は、イリユーマ国の行政機関。ここにマナが通うようになってからすでに半年。そろそろ“国王補佐”という立場ではいられなくなると、日に日に目付きが悪くなるのを実感していた。

「では、一週間後に戴冠式を行うという事でよろしいですね」

イリユーマのトップに立つ者達が円卓を囲む会議はすぐに終わった。マナは特に発言するでもなく、溜まっている仕事を片付けるため執務室へと向かう。

大きな机に山積みの書類。しかしため息を吐くわけでもなく、椅子に座りペンを握る。

ようやく終わったと背を伸ばして窓を見るともう夜だった。窓に近づき空を見上げる。

『夜空をみるのは好きだね』

ルイスさん……。

連絡がとれなくなって心配していたら、例の精霊がやってきた。シルフの話では戦いの中で水晶が壊れてしまったらしい。

ルイスさん……。

今、どこにいるのですか？

ケガ等していませんか？

私の事、忘れないでいてくれますか？

私の方は、とても環境が変わってしまいました。

正直、ついていけないところもあります。

ですが、周りも時間も、止まることは許してはくれません。

ルイスさん。

私は、

女王になります。

陰り

わかっていたのかもしれない。君と僕の人生が、仲良く隣同士を歩くことはない。

それでも望んでいるんだ、今でも。

君が、幸せに生きていつて欲しいと。

「ルイスさんツツ、ここ、モンスター多くないですか?!」

「そういう所だから」

「ええ!?!」

杖を一振り、モンスターに毒を浴びせ、本日四度目の敵を撃退した。まだ太陽は真上にきていない。

「なるほど、修行ですね!ただ旅をしてたら勿体ないですからね!」

両手で持つ杖に体重をかけながら目を輝かせる。さすがルイスさん、なんて効率的に物事を考えているんだ。自分の判断は実に正しかった。などといったものようにルイスを崇拜し、自分をも褒めながら旅が続く。

イリユーマへはあと三日もあれば着く。たまに馬車が通り「乗っていくか?」と誘われるが、すべて断ってきた。師匠などになるつもりはないルイスだが、アルドを一人前にしてやりたい、という気持ちはあるのだ。

「アルドは補助の方が得意みたいだね」

唐突に口を開くルイスにアルドは顔をあげる。

「そうなんですか？」

あまり考えた事がない話に首を傾げる。

「うん。僕は直接攻撃ばかり使うから、アルドの戦い方を見ると
なんだか目新しいんだ」

何！？と慌てて背筋をのばす。

「俺！変えますっつ」

「そ、そんな必要ないよ」

今度はルイスが慌てた。

「それぞれの特性があるんだから、無理に変えるとかえって遠回り
だよ？」

つい昨夜、「俺、めちゃくちゃスゴくて、強い魔術師になります！」
と言っていたアルド。最短ルートでいくならやはり得意分野を強化
すべきだろう。

「そうですか……ルイスさんと違うスタイルで……」

女王の戴冠式を終えたイリユーマはまだ熱気が冷めないうでいた。街に人は溢れ、口々に新女王のすばらしさを語る。

「あの美しさときたら」

「まだ若いのに才女と聞く」

「五十年ぶりの女王だわ」

等々。とにかく、女王マナは国民に歓迎されていた。そんなマナは王宮で何度目かのため息をついていた。

「スダン、いくら勧められようと私、結婚はいたしません」

もはや目も合わさず、マナは席を立った。

「陛下！」

残されたスダンは肩を落とす。

マナの教育係りから王族補佐官、いわば秘書のようなものになっている彼は、いきなりの壁に四苦八苦していた。

より安定を、という周りの期待とは裏腹に、女王マナに身を固める意志が皆無なのだ。なぜそこまで拒否するのか、スダンは頭を悩ます。

「まさか……」

ふと思い出された一人の少年。数年前、まだマナが姫だった頃に魔術を教えたあの黒髪の魔術師。

しかし、頭を左右に振りその考えは早くも捨てた。

もう子どもではないのだ。例え恋愛感情があるにせよ、それを持ち

出す程今のマナは幼くない。
女王としての自覚は、周囲が思っているよりもキチンとお持ちだ。
そこまで考え、スダンは他に溜まっている仕事を片付けに部屋を出るのだった。

今下手に結婚なんてできるわけ無いじゃない！

マナは憤慨していた。

一国の長の結婚は平治は良いとして、不安要素のある場合には命を張らなければならぬ。勿論、マナには国のために全てを捧げる覚悟はあるが、今はどうしても死ぬわけにいかなかった。

「眉間に皺がよっていますよ」

ハツとして顔を上げると王族補佐官長のカガリが立っていた。両手に大量の書類を持って……。マナの眉間の皺は消えて代わりに眉じりが下がる。

「感情をそのまま表に出すのは頂けませんな」

書類をマナの前に置き、空いた手で立派なヒゲを撫でる。

スダンの伯父にあたる彼はほっそりとした体つきで、いかにも文官という雰囲気纏っている。しかし魔術の腕もかなりあるとか。

「毎日毎日結婚しろと言われたら、誰だって気が滅入るわ」

「誰だってそうだとしても、あなたはそうではいけませんな」

どんなに周りを見渡してもマナの味方はいないようだ。それを実感

し、またため息をついた。

「ため息などもつての他ですな」

カチン、という音が聞こえた気がした。

「そ・う・で・す・な」

カガリの真似をしながら、マナはペンをとって仕事に励むのであった。

「伯父上」

長い廊下を歩いていると、後ろから声がかかった。振り返れば甥っ子が疲労を隠さない顔でこちらに近づく。

「どうした」

「私には手に負えません」

ただの泣き言か、とカガリは止めていた足を動かそうとしたが、残念ながら甥っ子に阻まれた。

「見捨てないでくださいっ」

軽くため息をつき、仕方なくカガリは人のいない部屋を探した。入った部屋は鎧が飾ってあり、簡素なテーブルとイスがあるだけだった。

「まず、廊下では話をするな」
「はい？」

スダンが何を考えているのか直ぐにわからなかった。伯父が何を言っているのか直ぐにわからなかった。

「困り事の話など、もつての他だな」
「あつ！す、すみませんでした」

政敵、というのはどの国にもいるものだ。平穩に見えるイリユーマにも、暗い部分はある。しかしスダンの認識では、今は特に危険視するほどの人物はいなく、不安要素も見当たらない。なので伯父の言葉に首を傾げた。

「まったく……お前の頭は平和ボケか」
「すみません」

しゅん、と肩を落とす。

「……ローリアに動きがある」

えつ、とスダンは顔を上げて息を飲んだ。
ローリアと言えば、数年前に戦争を仕掛けてきた軍事国家。今は無期限での停戦中。双方痛みだけが残った戦いだった。そのローリアが、一体何の目的で今動いているのか。

「あとは自分で探れ。もう子どもではないだろう」

カガリは部屋を出て、スダン一人残された。その後のスダンの行動は早かった。

ローリアと近隣諸国への諜報員の派遣、国内の警備強化、そして改めて、新女王の身辺調査。勿論これら全てスダン一人で出来るわけがない。協力者として、最も信頼できる人物に相談しながら、情報を集めた。

夜も深くなった頃、スダンはその相手の部屋をノックした。返事を待つてから部屋に入り、その人物に一礼する。

「スダンさん、あなたの方が年上なんですからそんな畏まらないで下さい」

困ったように笑うのは、イリユーマが世界に誇る魔術師団のトップ、ダルキスだった。

「いえいえ、ダルキスさんの方がお立場は上ですので」

スダンはすすめられたイスに腰掛けた。

ダルキスはとても穏やかな人物だ。甘いものが好きで、趣味はお菓子作り。

今夜もコーヒーにプラス、お菓子が出された。

「早速ですが、女王陛下の事でハッキリした事があります」

スダンは口にしたコーヒーカップを戻しダルキスと目を合わせた。

「陛下は若く、女であり、さらに魔術があまり使えない事から、反対派が生まれています」

頷き、先を促す。

「残念ながら、私のもとにも反対派がいます」

スダンが重く息を吐いた。

自分の信頼できる人物の部下は、信頼できないらしい。

「他に大雑把に言いますと、内大臣、下大臣、赤大臣、アリスベル家、サザナス家、といった感じですよ」

それを聞き、先程重く出された息はまた飲み込まれた。

「それじゃあまるで……」

まるで、国が真っ二つにされているではないか！

思わずイスから立ち上がったスダンは顔に焦りを滲ませる。

「どういう事ですか！？なぜそんな事態にッッ」

国の権力の半分が、現女王を認めていないなど、内乱はすぐ目の前ではないか。

「私もこの結果には驚いています。しかし、これが現実。早急な対処をしなければ、手遅れになります」

力なくイスに座り落ち頭を抱えた。もとは伯父の一言が始まり。蓋を開けてみればとても二人では手に負えない事態だった。

コンコンッ。

突然のノック音にスダンは体をビクつかせ、ダルキスは微笑んだ。

「大丈夫ですよ、強力な助っ人です。どうぞ」

ダルキスの言葉でドアが開いた。

「オ、オーヤ様!？」

スタンは驚いて思わず一步下がってしまった。

部屋に入ってきたのは、腰が曲がり小さな杖をついているイリユーマの元軍師、オーヤであった。

「ほっほっ、楽しみな夜じゃな」

スタンとダルキスは立ち上がり、右手を胸の前に頭を下げた。その光景に目を細めて、

「ほう、わしもまだまだ捨てたものではないのう」

オーヤは九十を越える老体を少しばかり重そうに歩き、機嫌よくイスに座った。

「このような所まで足を運んで頂き、ありがとうございます」

ダルキスは再度頭をさげ、スタンも慌てて続いた。

オーヤはもう引退し、王都から少し離れたところで隠居生活をしているとスタンは聞いていた。

「それにしても、ここの守りは頼りないのう。ここまで簡単に入ってきてくれるとは」

事もなげに言い放つ。という事は、オーヤは許可なく王宮に入り、中にいる兵達に気付かれず今この部屋にいる。

ダルキスは苦笑いで申し訳ありません、と兵達の、また自分の指導力のなさを謝罪した。

「まあよい。して、今味方はどれほどか」

「全てにおいて半分です」

ダルキスが集めた情報によれば、軍、政治家、貴族の全てにおいて半分ずつ、反対派が隠れている。

それを聞き、オーヤは首をひねった。

「はて、なぜそこまでの事態になったのじゃ。わしの記憶が正しければ、ほんの五年前までは正常だったはずじゃが」

五年前と言えば、国王はデューマで、ローリアとの戦争があった年。その時までは確かに、例え反対派がいたとしても引つ繰り返される心配などない状況だった。

「あの、どうやらローリアが我が国で動き回っているようなのです」

スタンが小さな、それでも十分信頼できるネットワークから得た情報。

どうやら貴族や豪商達はローリアと取引をしている。イリユーマの情報や魔術たる技術を流す代わりに、麻薬、奴隷などを買っている。

「ふむ。アンネリーか……」

オーヤは眉間に皺を寄せた。

ローリアの国首、アンネリー閣下。五年前の戦争時にその座につき、

停戦後には隣国を吸収、もしくは属国として国力を上げてきた。その独裁ぶりはなかなかの評判だ。もちろん、悪い意味で。

「陛下はどこまで知っておるのじゃ？」

「まだ何も伝えてはいません。ただ、周りから強く望まれている結婚を頑なに拒否しています」

それを聞き、オーヤは満足気に頷く。

「素質は十分じゃのう。恐らく本能的に危険を察知しているか、それとなく耳にした事に的確に対応……いや待て、側近は誰じゃったか？」

「特別な側近はいませんが……あえて上げればカガリさんでしょうか」

スダン伯父の名前を出し、ダルキスに顔を向ける。彼もその考えのようで首を縦に振った。

するとオーヤは一段と大きく体をゆすりながら笑った。

「ほっほっほっ。なるほど、では一先ず陛下の身は安全じゃな」

上機嫌にお菓子を口にするオーヤにスダンは心中首を傾げた。伯父はそれほどすごいのだろうか、と。今まで一緒に仕事をした事はほとんどないし、正直マナに付いているならどこかに嫁ぐまで、と気楽にしていた部分があった。だから情報面でこれだけの遅れを取ったのだ。

「して、今後の事じゃが、陛下の事は置いておき、ローリアの動向に細心の注意を払うべきよのう」

「はい。反対派にはどう対処すればよろしいでしょうか？」

ダルキスの問いにオーヤは即答した。

「自身を固めよ」

その言葉にダルキスは苦い顔でこぶしを握り直したのだった。

翌日、ダルキスは部下の一人を部屋に呼んだ。中隊長の女である。気の強そうな彼女は生真面目でもあった。

「何か御用でしょうか？」

ダルキスはとりあえず彼女に座るよう促し、今朝焼いたパイを振る舞った。

「どう？」

「はい、とてもおいしいです」

そう言いつつも、あたり減らないパイにダルキスは少しばかり悲しげな表情を見せる。

「ほ、本当においしいです！嘘ではありません」

慌てて食べるスピードを上げるが、飲み込むのに必死な顔は笑いを誘う。

「無理しなくていいよ……君が甘いのが苦手なことは知っているから」

え、とおどろいた顔で見られたので、ごめんね、と軽く謝った。

「誰にでも得手不手があるからね」

「申し訳ありません」

「それは、女王陛下だって同じだよ」

女王という単語に女は反応し、表情を隠した。

「私の言いたい事は、わかるね」

口元は笑っているが、鋭い視線が女に汗を流させる。

「君はとても真面目で、魔術大国であるイリユーマに生まれた事を誇りに思ってる。それは素晴らしい事だけど、周りに期待ばかりを持ってはいけない」

「そのような事は……」

「私達は守り、支える立場の人間。間違っても、偏見を持って勝手に失望しない事」

「……」

女は俯いたまま部屋を出た。

ダルキスはイスに座り直し、視線を下げる。話をしなければならぬ相手がまだいるのだ。小隊長二人はともかく、大隊長はそう簡単にはいかないだろう。考えると眩暈がしそうなので、仕方なくいつもの仕事に取り掛かるダルキスだった。

助太刀

オーヤは所謂生きる伝説だ。

現役の時にたてた武勲は史上最多とも言われ、今でもその名声は衰える事を知らない。

そのためだろうか、今その伝説の人は命の危機にさらされている。

「このわしの命を狙うとはのう。根性だけは認めてやろう」

黒づくめの人間が九人。オーヤの朝の日課、乾布摩擦の最中に囲まれた。最も、すでに時計の針はお昼を回っている。

「どれ、若いもんの相手は久しぶりじゃのう」

いつものように、ほっほっと笑いながら足元の杖を取ろうとしたが、その体は宙に浮き杖は炎によって焼かれた。

いたた、と地面に打った背中をさすって上体を起こす。

「全く、暗殺に礼儀は必要なし、じゃな」

「気を付ける、杖がなくても魔法は使える」

男が言うなり、黒づくめは殺気を放って一気に襲い掛かってきた。

武術に長けた者が三人。剣術師が二人。魔術師が三人。そしてリーダー。

「こんな老いぼれに、光栄なことじゃ」

オーヤはまだ余裕を見せている。

接近戦の五人がそれぞれ急所を狙い飛び込んできた。しかしその全

てをかわし、距離をとる。術を唱えようとしたが、黒ずくめの魔術師達が許さない。攻撃魔法を立て続けにかわすのは容易ではなく、片足から血を流した。しかしオーヤは怯まず、

「ジユ・ライト！」

と強い光で一瞬の隙を作る。その間に素早く次の術を唱え、近くにいた黒ずくめ二人を麻痺させる。

「これが九十過ぎのじいさんなの？」

魔術師の一人は女のようにだ。

「あの麻痺、簡単に解けないです」

「ふん、子童が。甘く見ると痛い目みるぞい」

オーヤは右手を突き出し、そこから無数の水の矢を放った。

「何これ!？」

女の魔術師に当たり、水は彼女を覆うと重みを付けて地面に転がった。

「あと六人……さすがにキツイのう」

言ってる間に剣術師に間合いを取られ、片腕からも血を流してしまった。さらに後頭部から強い打撃を食らい、最後に鋭い風に体中から血が出た。

「ふむ、歳は取りたくないのう」

と言いながら、両手を地面に付けると一気に二メートル以上盛り上がり黒ずくめ一人を埋もれさせた。

「これ、行くツツ」

黒ずくめの魔術師は厚い土を貫く氷の槍を放ち、それはオーヤの肩も貫通してしまった。

ぐっ、と膝を折るオーヤ。杖も無しに術を連発したからか、息もあがっている。

「歳は取りたくないものだな、生きる伝説よ」

リーダーの男が少し離れた所から細い剣を振り落とした。

やばいつ、と思った時にはもう遅く、前からくる地面も削る斬撃にオーヤは死を覚悟した。

ザジジジツッ！！

「何?!」

「ご老人一人相手に、ずいぶんですね」

「ルイスさん！俺がこいつらぶっ飛ばします！」

オーヤの前に青年が二人、守るように立ち現われた。そして白いタイスが一頭、オーヤに寄り添う。

「アルド、思いつきりぶっ飛ばして構わないから」

「なんだガキがあ！」

動ける黒ずくめ達が二人に襲い掛かる。

「ジイ・ケイジッツ」

増幅第一のバリアは全ての攻撃を防いだ。しかしそれはすぐに解除されてしまった。

「えっ?!」

黒ずくめの剣がすかさずアルドの首を狙う。術を唱える時間がない事を悟り、アルドは両手と杖で首をガードした。

「が、はっっ」

目を瞑っていたアルドは恐る恐る瞼を開く。そこには地面から伸びた土に腕を刺されている黒ずくめ。アルドの顔は喜色に染まる。

「さすがルイスさん！ありがとうございます！なんて的確で早い攻撃！すごいです！」

スイッチが入ってしまった。アルドの口から出る賛辞の言葉はとどまる事を知らず、目の輝きもまた然り。そんなアルドに困ったように笑いながらも、ルイスはボンボコ強力な術を放っていく。こちらもとどまる事を知らない。

「バカなっ、これだけの術を杖も無しにッッ」

防戦一方になった黒ずくめ達は仕方無しに、

「一旦引くぞツッ」

というリーダーの声に、負傷した仲間を抱えて姿を消した。

「うつつうつつ……」

「……アルド、ご老人の回復をするよ」

ここまでの旅でルイスはほとんど魔術を使わなかった。なのでアルドは今まさに起こったルイスの華麗なる魔術に感動し、限界を越えて涙を流した。大げさ以外のなにものでもない。

「大丈夫ですか？」

「ふむ、すまんのう」

いえいえ、とルイスは老人に回復術をかけ、アルドもそれに続く。しかし二人は医師師ではないので、簡単な傷しか治せない。

「わしの家はすぐそこじゃ。すまんが杖を拾ってもらえるかのう」

ルイスは老人をハクセンに乗せて寄り添い、アルドが焦げた杖を拾う。

「うわっ、これもう」

ただの炭の棒と化していた。

老人の家は割に大きかった。すぐ傍に綺麗な水が流れていて、小さな畑もある。

中に入ると綺麗に整理整頓されていて、とても男の老人一人が住んでいるように思えなかった。ルイスは老人をハクセンから降りして少し大きめのベッドに寝かせた。

部屋を見渡し応急箱らしきものを手にとって「お借りしますね」と消毒して包帯をまく。

「ハクセン、悪いんだけどユフィールさんと呼んできて貰えますか？」

ハクセンは頷き、家を出た。

「知り合いのお医者さんです。今日中には来て頂けると思います」

ニコツと笑うルイスは簡単に自己紹介をした。続いてアルドも。

「わしはオーヤ。これでも昔、国に仕えとつたんじゃ」

「へえ、スゲエ！」

アルドは話を聞いたそうに身を乗り出したが、ルイスに制された。

「話は後で」

オーヤの体を気にしたルイスだったが、当の本人はよいよい、と笑った。

「話しているほうが痛みが紛れるじゃろ」

「っていつかじいさん、何だってあんな目に遭ってたんだけ？」

アルドの敬語はルイス限定で発動するらしい。しかしオーヤが気にしていないようなので、ルイスは注意しなかった。

「そりゃあわしが有名人じゃからじゃのう」

「へえ、そうは見えないね」

「アルド」

「よいよい。もうこの通り老いばれじゃ……それにしても、おぬし
ら頼もしいのう。特にルイス、といったか」

じつ、と黒い瞳を見る。

「いえ、まだまだ修行の身です」

謙虚に答えるルイスの隣でまたアルドが若干ウザくなつたが、あえて無視。

「はあ、さすがルイスさん。その強さを誇示せずにひた向」

「しかし人語を理解するタイスを従えておる」

「ああ……彼は古代獣で、話すことも耐魔能力も持っています。もう長く生きてるようで、僕なんかよりよっぽどすごいですよ」

親を誇りにしているかのような言い方に、オーヤは感心した。

「俺は幸せです。ルイスさんのようなカッコいい人と旅ができて、しかも」

「はて、もしかするとおぬし、陛下に魔術を教えとつたと噂のルイスか」

「陛下？」

マナという姫に魔術は教えていたが、国王に教えた覚えはない。なので疑問符で返した。

「きっと世界中どこを探したってルイスさんみたいな人はいません！だってそうじゃないですか！こんな完璧で素晴ら」

「女王陛下じゃよ」

「女王？たしか僕の記憶ではイリユーマの王はデューマ国王だったかと」

「それはまた、随分と古い情報じゃのう。デューマ元国王はすでに故人。前国王はガイラじゃったが、病が悪化したのでつい先日、妹君のマナが女王の座についたのじゃよ」

えっ、とルイスは息を止めた。

「俺はどこまでも付いていきます！いいですよね、ルイスさん?!」

満面の笑みでルイスを見れば、彼はピタリと止まっていた。

女王？マナが？一体いつの間にそんな話に……それじゃあ簡単にはあえないじゃないか！

「あの、ルイスさん？……うわっっ!」

顔を覗き込もうとしたが、突然立ち上がられ、危うくイスから落ちるところだった。

「オーヤさん、申し訳ありませんが僕は急用が来ました。アルド、オーヤさんをよろしく頼むよ」

それだけ言うと、ルイスは疾風の如く家を出たのだった。

「も、申し訳ありますッ」

パアアン

銃弾は頭を貫通した。

リーダーを撃たれた黒ずくめ達は、身を強ばらせた。

「……二度としくじるな」

その言葉だけを残し、軍服の大柄な男は馬に乗って去っていった。薄暗い森に残された黒ずくめ達は目深に被っていたフードを取り、皆一様に胸を撫で下ろした。

「冗談じゃねーよ。つーかコレ、どうする?」

先程撃たれて横たわっているリーダーを指差す。

燃やしちゃうわ、と一言魔術師が言ってあつという間に炭の山が出来た。

「で、これからどうするのよ?私もうメンドー」

「前金もらってるんだしい、トンスラこくとかあ?」

女二人の無気力が他の仲間にも移り、皆へなへなと木に寄り掛かって腰を下ろす。

「ギザルさん、どーするんすか?」

八人の視線が集まる先に、この一団の本当のリーダーがいた。

獣人。

卓越した運動神経に、大地をも割ってしまうと噂される力を持つ種

族。

争いを好み野蛮な連中と、人からはあまり好かれてはいない。しかしこの場にいるほとんどは人間。一見あり得ない光景だが、彼らの絆はその辺の家族より強い。

獣人ギザルの容姿といえば、手足に鉄も切り裂く爪を持ち、口元からは鋭い牙。

尖った耳に、肌の色は黒に近い赤。

「……ローリアはしつこい連中ばかりだ。簡単に逃がしてはくれないだろう」

「ですよー」

ハア、と肩を落とす。

「あたしい、お腹空いたあ」

目尻が下がっている剣術師の女は手をお腹に添えて提案した。

「腹ごしらえでもするか」

ちようどいい大きさの街が近くにある。ローリアと契約してから立て続けに仕事をしたのだから、たまには息抜きもしいとな。

ギザルはフードをかぶり直し、他の仲間はやったー！、と立ち上がってガッツポーズ。

「何食べようかしら」

「やっぱいい、お肉う」

「ミアはそればっかりだな」

「僕は温かなスープが飲みたいです」

「俺はもうふかふかのベッドで寝たい……」

「ピタ、砂糖、いい」

「アタシはお酒が飲みたいわあ」

ギザルの前を仲良くお喋りしながら歩く仲間。男に女、オカマに水棲人に樹人。そして獣人の俺。

こいつらと“ゴウ”を名乗ってもう二年か。

最初の一年は苦労しかなかったな、と口元が緩む。

「ギザル、笑う」

水棲人のピタが見上げてきた。

「あらーん、どうしたの、ギザルちゃん？」

「なに、昔を思い出してただけだ」

「思い出し笑いってえ、エロい人があ、するんですよあ？」

ミアアがいうとみんなが笑った。俺も笑う。勘弁しろ、と言いながら。

金は足りるのだろうか。ギザルは財布担当のサザビリに心配気な視線を送るが、当人は顔を赤くして一升瓶片手に踊っていた。

「僕にも一口ぐらい飲ませて下さい！」

「あらあら、お子様はダメよー。ね？ギザルちゃん」

「ああ、もう一年待つんだ」

止められて顔を膨らますハラスは俺達の中で一番若い。樹人、という寿命二百年を誇る種族で、それゆえ人間から狙われやすい。見た目はほとんど人間だ。

「ぐがぁー。ん……ぐがぁー」

「ラーシャン、寝る、顔、書く」

「ちよっとピタ、それペンキ?! やめなさい!」

カリーナが水棲人のピタの手から慌てて筆を取り上げる。

水棲人は人間が分類するには魚類だ。耳の裏か足を見れば判別がつく。奴らがいうには、食べると極上だそうだ。

どっちが野蛮な種族だ。

何度も見てきた。奴らの蛮行なら。今回の事だっけどうだ? 魔術大国をものにしたという欲望のためだけに、戦争を起こす。その起爆剤として、俺達のような使い捨ての利く集団を雇う。

「それにしてもお、ローリアってえ、自国民にも容赦なしなんだねえ」

「あのリーダー、剣の腕はたしかだったのにな」

ミアとジェイがほねつき肉を口に頬張りながら昼間殺されたローリア人の話をしだした。

「っていうか、ねえ! 何なのよあの魔術師?!」

昼間の事を思い出し、カリーナがいきなり怒りはじめた。

「スタミナがあるだけだろ?」

「違う、黒、強い」

ジエイをじっ、と見つめるピタ。

「あたしい、結構タイプう」

「止めときなさいよツツ、あれは性格悪いタイプよ。絶対！」

魔術師同士、ピタとカリーナにはわかるところがあるらしい。

「あの黒髪について調べる必要があるそうだな」

俺がいうと、みんな頷いた。

「ありがとう、ハクセン」

こんな所に家があるなんて知らなかったわ。

ユフィールがドアをノックすると、知らない顔が出てきた。

「あ、あの。私はユフィール。ルイス君に呼ばれてケガ人を治療しに来たの」

「……」

右手に握る杖が引っ込み、中に入るよう促された。
少し気まずい。

「ルイスの弟分だ」

ハクセンがぎこちない二人を見かねて口を開いた。

「アルドよ、挨拶はどうした」

「……アルドだ、よろしく」

「私はユフィール。よろしくね」

ニコツと笑うとアルドの頬がうつすら赤くなった。それを目ざとく見つけたハクセンは、

「人妻だぞ」

と笑った。

奥に案内されたユフィールはベッドに横たわるオーヤを見て一瞬止まってしまった。思ったより酷かった。

「こりやまた、べっぴんさんが来てくれたのう。ほっほっ」

「ユフィールと申します」

普通なら笑っていられないだろうケガだ。ユフィールは直ぐに注射器を出した。

「麻酔を打ちますね。こう見えて私、外科医なんです、安心して任せてください」

優しく微笑むと、オーヤの体から力が抜けていくのがわかった。

応急措置はしてあるわ。さすがルイス君ね。

カバンに入っていた医療道具をテーブルに出し、アルドを見る。

「少し、手伝ってもらってもいいかしら？」
「え？あ、はいッッ」

慌ててユフィールに駆け寄り、アルドは色んな意味で心臓をバクバクさせながらなんとか助手の役割を果たした。窓の外はもう真っ暗だった。

「ふう、どうもありがとう」
「い、いえ！」

年上の、しかもものすごい美人なんぞに免疫のないアルドはどうしてもソワソワしてしまう。そして心の中でひっそり思うのは、こんな美人女医と知り合いなルイスへの果てしない尊敬と拍手だった。

「ふむ、いい腕じゃのう」

上体を起こし、早速体を動かすオーヤにユフィールは慌てて安静を促すが、聞き入れてはもらえなかった。

「またいつ狙われるかわからんからのう」
「げ、やっぱあいつらまた来るのか?!」

アルドは立て掛けていた杖を手にとりキョロキョロ見渡しはじめた。

「そんな直ぐには来んよ。しかしまあ、警戒はしとかんどのう」

ユフィールがハクセンに聞いたのは、単にケガ人がいるから来てほしい、ということだったので詳しいことは何一つわからない。しかしどうやら命を狙われているらしい。だから、

「あの、よかつたら私の家に来ますか？」

という言葉が自然と出た。

「じいさんの家とは比べられないな」

「ほっほっほっ。立派な家じゃのう」

ユフィールの言葉に甘える事にしたオレ達は夜も遅くにお邪魔した。

「ユフィールー！？帰ってきた？！ああ、よかつたツツ俺、捨てられたのかとツツ」

玄関を開けるなり、物凄い勢いでイケメンが涙と鼻水をこさえて出迎えてくれた。

「ちゃんと置き手紙したじゃない、見てないの？」

呆れたように抱き付いてきた男の頭を撫でるユフィールさん。なんて羨ましい。

「人妻だと言っただろう」

ハクセンが笑いながら言った気がしたので、キツと睨んだが、勿論効果はない。

「あれ？つてかハクセン？！」

「うむ、久しいな」

「つて事はルイス……そ、そんな！」

男はハクセンに乗ってるじいさんを見て顔を青くした。

「お、お前……ほんの数年でこんな皺くちやに?! ああ! やっぱり着いていけばよかつたんだ! ごめんな……ごめんルイ」
「ちよつと待てえええ!」

オレは持っていた杖で思わず殴ってしまった。

「サレオス!」

ユフィールさんの声にハツとした。

「ご、ごめん! 勢い余って」

やってしまった! ルイスさんの(おそらく)友人さんに、オレはなんて事を!

「いてて……って、坊や誰?」

「アルド君よ。ルイス君の弟分らしいわ」

「へえ、本物の弟にちよつと似てるな……じゃなくてルイスだ! ルイスが皺く」

「違ああうー!」

おもいつきり叫んだ。そりゃそうだろう?!

「なあんであんな素敵なルイスさんがこんななよなよじいさんになるんだよ?! あり得ない!」

年を取るにしたって、もつと素晴らしく年を取るにきまつてるじゃ

ないか！

「あ、そ、そうだな」

オレの怒りにサレオスとかいう男は謝った。

「なるほど〜そういう訳ね！いやあ、勘違いして悪かった」

全然悪びれる様子もなく優雅にコーヒーをすすめるこの男。オレの中で要注意人物と決まった。

「まったく、サレオスは一人で騒がしいんだから」

「本当に」

「うぐつ。なんかその冷たい感じ、ルイスに似てる気がする」

冷たくて当たり前だ。あんたはすでにマークした。

「ルイスさんは冷たくない。いつだって優しいし、強くて頭もよくてカッコいい」

「ふふつ、そうよね。私も同感だわ」

ユフィールさんが手を口元にそえて笑った。かわいい。

「それにしても大変でしたね。多分、イリユーマの伝説の人と間違われたんだわ」

「伝説？」

「サレオスは知らないわよね。ちょっと前、イリユーマには“オーヤ”っていう天才軍師がいたのよ。彼にかかればどんな戦いも負け

無し。おまけに魔術師としても、武人としても強かったのよ」

へえなるほど。同じ名前だから狙われたってわけね。哀れじいさん。幸薄いんだね。

「ほっほっ。懐かしいのう。しかもべっぴんさんに知ってもらえるところは、長生きはするもんじゃ」

はい？という感じで三人の視線がベッドの上のじいさんに向いた。ボケたのかな？いくらなんでもこんな腰が曲がり曲がったじいさんがそんな……あ、でもたしか王宮で働いてたと言ってたような

「あの……も、もしかして」

ふるふる震える手で指を差すユフィールさん。

「ふむ、いかにも。先の話に出たオーヤじゃ。ほっほっほっ」

「ご、ご無礼を失礼いたしました！」

素早く立って最敬礼をするユフィールさんに、オレ達もつい真似をした。

「はて、無礼を働かれた覚えはないが……まあよいか」

ルイスさん！なんかオレ達凄い人助けちゃったみたいですよー！

「では改めて」

よっごらしょ、とベッドで上体を起こす。

「昔、宮仕えをしとったオーヤと申す。わけあって命を狙われておるので、かくまって頂きたい。よいかのう?」

「も、もちろんです!ね、サレオス?」

「ああ。大丈夫!悪い奴らにじいさんの首はやらねえよ!」

「ちよつ、失礼よ!」

「ほつほつ。頼もしいのう。しかし守って貰おうとまでは思つたらん。わしは強いからのう」

見た目はもう片足あの世につつこんでるけどね。つとそつ言えば…。

「杖がないじゃん、じいさん」

テーブルの上に置いてあつた炭の棒を手取る。一応“芯”は残つてるみたいだけど、さすがにもう使い物にならないね。

「どれ、貸してみい」

ほとんどの魔術師は魔力の備わっている杖を持つ。杖無しでもやれない事はないが、長くは持たない。つまり、だ。杖も無しに魔術を連発するなんてのは格が違うんだ。つまり!オレのルイスさんはマジで凄いな!

「大丈夫かコイツ?なんかオーラがおかしいぞ」

「今、自分が世界一幸運の星の元に生まれたことを感謝してる」

「おいユフィール、この坊や駄目っぽいなぞ」

「え?何?」

オーヤを見ていたユフィールには聞こえていなかった。

「ふむ。アルドよ、使いを頼めるか？」

ひとしきり炭棒を見ると呼ばれた。

「まだ“芯”が残つとるから直せる」

「えっ?!これが?」

「なんじゃ知らんのか?“芯”さえ無事なら、本物の職人は直せる。わしの古い友人がそれじゃ」

「へえ。初めて聞いた」

学校ではそんな事教えられなかった。さすが、魔術大国は違う。

「ちょうど街の反対側じゃが、馬車を使えば昼過ぎには着くじゃろ」
「う」

「おお!馬車いいね」「ここまで来るのがほとんど歩きだったから、もうさすがに乗ってもいい気がする。」

「手紙を用意しておく。今日はもうゆっくり休むとよい」
「うん、そうさしてもらおう」

ふあ、とつい欠伸が出た。

「ほっほっ。今日は本当に助かった。礼をいうぞ」

「それならルイスさんにどうぞ。オレは何もしてないし」
「てかルイスはどうすんだ?」

突然出ていってしまったルイスさん。うう、オレも付いていきたかったのに。なんだろう。すぐく落ち込んできた。だってなんか、いわゆるほら、役立たずじゃん。

「何暗くなつてんだよ？」

サレオスが肩をポン、と叩く。

「とにかくゆっくり休めよ！長旅、ご苦労さん」

ニカツ、と笑うサレオスに少しホツとた。もしかするとそんなに嫌なヤツじゃないかもしれない。

ゴウ

貴族の一人が暗殺された。

俺達が失敗しているなか、周りは着実に仕事をこなしている。

「っていうかあ、あたし達ヤバくない？」

「何がですか？」

パーマのかかっている髪を指にからめているミアに、ハラスは小首を傾げた。

「だつてえ、失敗ってるしい」

黒髪の魔術師を搜索中、美味しそうな焼き鳥を見付けてギザルにねだったミア。

「でもあの時やられなかったんですし、大丈夫じゃないですか？まあ次はないと思いますけど」

焼き鳥の行列に並んだのはギザル一人。

「っていうかあ、どう考えてもターゲットと初対面っぽかったしい、黒髪を調べるのってムダっぽくない？」

ようやく焼き鳥をゲットしたギザルはそそくさと二人の待つ屋上へと戻ってきた。

「わあ！ギザルさんありがとうございませすー！」

「美味しい」

ミアはお礼も言わずに焼き鳥を頬張った。

「くら、くらくら」

「ん〜？」

「人に頼んでおいて礼もなしか？俺の正体バレたら大騒ぎなんだぞ？そんな中わざわざ買いに行っちゃったのに」

「だつてえ、並ぶの面倒〜」

ガバツ、と勢い良くフードを外し眉間にシワをよせるギザルの顔が怖い。

「怖い顔もお、素敵い？」

冷や汗をかきながらミアは何とか笑顔を作った。

「……一週間、肉抜き」

「ごめんなさいごめんなさい！長い行列を並んで買ってきてくれてえ、本っ当にありがとうです〜！」

「ミアさんカツコ悪いです」

ミアの慌てように、あははと笑うハラス。

焼き鳥を食べながら三人は話し込んだ。

「まあたしかにミアの意見も一理あるな」

「でしょ〜？でもでもお、もうあの場所にはターゲットいないと思っしい」

「それはジェイさん達からの連絡待ちですね」

「王宮に逃げ込まれてなきやいいが……多分一番確率が高いな」

「ですよ。まあその時は忍び込むまでですけど」

「タレも塩もおいしいってえ、どういふ事？あたしい、傭兵卒業したら焼き鳥屋さんになるう」

「念のため、黒髪の捜索は続けるか」

「って言ってもギザルさん、王都は広いです。医術師の僕には足が保ちません」

「鍛えるいい機会だな」

はあ、とため息が一つ。

ギザルとハラスは焼き鳥を食べ終えたが、ミアはまだ両手に持っていた。

「……仕方ない、あまり会いたくはないがアイツの所に行くか」

アイツ？と首を傾げるハラス。

「情報屋だ」

「そんなの知ってるなら早く言っってくださいよー」

怒った顔をされ、ギザルは苦笑いで返した。

「で、どこの誰ですか？」

「俺と同じ獣人なんだが……何というか、相性が悪くてな」

「そんなのどうでもいいですよ！そうと決れば、早くその人に会いに行きましょうー！」

スつくと立ち上がり、串を掻き集めて早々と階段を降りていった。

「ああもうう……もつと食べたかったのにい」

「ふっざけんなテメエ！脳ミソ叩き潰すぞ！」

「やあね〜。これだから野蛮人は嫌いよ。あなたこそ脳ミソあるわけ？ないわよねえ。嗅覚のない獣人に、脳があるなんて思えないわ」

下水路を通って着いた場所は、数人の獣人が広々とした空間でひっそり暮らしている所だった。

「ハラスう、ギザルがあ、怖いねえ」

「はい。あれがきつと鬼の顔っていうんじゃないですか」

情報屋だという獣人は女だった。座ってはいるが、おそらくギザルより背が高い。

「人並みにはあるだろうが！」

「あなた人だったの！驚き〜」

ケラケラ笑う彼女の名前はリーネイ。獣人は嗅覚を人間の三十倍まで、自在に操れるらしい。

「ギザルってえ、味音痴だけとお、お鼻も音痴なんだねえ」

「そのようですね。僕らギザルさん以外の獣人の方知らないですからね」

人間との共存は現状ありえない。生きていて会うのは宝くじの当選と同じぐらいの確率だと思う。

「とにかく！黒髪で杖を持たない魔術師の情報をよこせ！」

ドンツ、とお金の入った袋を机に叩きつけた。

「……………」

「なんだよっ、足りないとも言つのか？」

眉間のシワが一層濃くなる。対するリーネイはフウ、とタバコを深く吐き、

「それがモノを頼む態度なのかしら」

フフン、と笑う。

「すごいねえ。あたしならあ、あんなギザル前に泣いちゃっ」

「同感です」

「人間のくせに俺達が怖くないのか？」

後ろから声をかけられ二人は振り返った。

「初めましてえ。ミアアでえす」

「ハラスです」

ペコリと頭を下げたのはハラスだけだった。

「名前なんか聞いちゃいねえよ」

「ギザルさんの友人ですか？」

ギザル程背の高くない男は黒豹を思わせる姿だ。

「アイツの事は噂でしか知らねえ……………人間とつるんでる、変り者っ

てな」

ミアに鋭い視線を向け、彼女の身を震わせた。

「睨み顔はあ、怖いよお」

ぎこちない笑顔で答える。

「ふん。人間臭くてしょうがねえ。とつとと失せろ」

「ギザルさんが情報をもらったら、すぐ出ていきますよ」

ミアの前にそれとなく出て彼女を背に隠す。

「お前は……樹人だろ？人間庇うなんてな。バカな種族ってのは本当なんだな」

笑いながら言われ、ハラスの顔に怒気が広がる。

「……こんな所で隠れるように住んでるなんて、あなた方は臆病者なんですな」

「なっ！」

「ギザルさんの株が下がらないか心配です。あなたと違って、強い人ですから」

獣人はその生まれ持った能力の高さからか、強さへのプライドが高い。それを知っていてわざと言ってやった。

「このツツ、草野郎が！」

胸ぐらを捕まれて拳が一つ、当たった。

「がつつ」

「ハラス！」

壁に吹き飛ばされ顎が外れた。歯も何本か抜けている。ハラスに駆け寄ったミアは今にも泣きだしそうな顔をした。

「ちょっと撫でただけで吹き飛びやがって」

大げさではなく、獣人にとってなんてことのない打撃。しかしそれは常人にとって凶器ではない。

ハラスは飛びそうな意識をなんとかなぎ止め、即座に治癒をおこなった。淡い光がハラスを包む。

「はっ。ウゼエな」

鼻で笑う男をミアがキッと睨む。

「なんだよ、今度はお前が飛ぶか？」

「止める」

男の肩にギザルの手が置かれた。チツ、と男は舌打ちをし、「悪かったな」と手をヒラヒラさせて姿を消した。

「大丈夫か？」

二人の傍へ行き膝を折る。

ミアは目を潤ませているが顔には怒りを見せ、回復を終えたハラスはポキポキと肩を鳴らした。

「すまない」

一悶着はあるだろうと予想していたゆえ、リーネイとの口論に熱くなつてしまつた事を詫びた。

「ギザルさんは一ミリも悪くないですよ」

「そうだよお。あたしがあ、外で待つてれば良かったんだよお。そしたらあ、ハラスが殴られたりしなかつたのにい」

シユン、と視線を落とすミアの頭をギザルが撫で、ハラスは笑顔を向けた。

「あんなの、サザビリさんの回し蹴りに比べたら何でもありませんよ」

「我慢してくれてありがとうな」

二人の優しさにミアは涙を飲み込み、笑顔を作つた。

「まったく、人騒がせね」

一連の流れを見ていたリーネイが席を立ち、奥の部屋へと招く。慌て後を追う三人。そしてやはり、リーネイはギザルよりも頭一個分大きかつた。

中は資料室になつていて、少しばかり埃臭かつた。

「えつと…魔術師、魔術師はつと」

ドンドン奥に入っていくリーネイに着いていくと、魔術師コーナーなる区画にたどり着いた。

「この辺ね」

足を止めて左から右へと顔を動かす。

「すごいですね」

「あたしい、こんな所初めて」

「人間の情報屋とはちよつと違うからな」

リーネイの邪魔にならないように三人は少し離れた所で待った。

「リーネイはあ、人間嫌いじゃないのお？」

ギザルを見上げて聞いてみた。

「アイツは好きでもなければ嫌いでもないな」

獣人にも色々いるようだ。ギザルの答えにミアはホツとした。

「あつたあつた」

ファイルを一つ手に取り読み上げていく。

「黒髪で杖無の魔術師、ルイス。現在二十一歳。五年前にマナ姫に魔術を教え、戦争に参加。イルハウ大会で準優勝。その後イリユーマから姿を消す」

読み終わるとファイルを元に戻し、「これだけよ」と腕を組んだ。

「年齢と大会準優勝の実力からしてそいつに違いないな」

「たしかに杖を持っていないという点からそうかもしれないですが………実力は随分上がってると思いますよ」

魔術師でもあるハラスは難しい顔をした。

「っていうかあ、王族との接点がメンド〜」
「そうですね」

三人はリーネイにお礼を言って地上に戻った。一先ずジェイ達と合流するという事でその場から離れる。

「ルイス……か」
「何か言いましたか？」

ハラスが振り返ったが、ギザルは「いや」と答えた。

情けない……。俺は、美人に弱いんだ。
アルドは自分の腑甲斐なさを、床掃除をしながら噛み締めていた。

「しつかりやってよね」
「……はい」

オーヤのお使いで来た魔具屋は古ぼけた外観に、中は台風でも通ったのかと思うほど散らかっている所だった。

「ねえ、これあっちの棚にしまつて」
「何これ？」

金髪美人はアルドの一つ上で、細く綺麗な手に砂の入った大きな瓶

を持っていた。

「あなたには関係ないでしょ」

顔も見ずに答えられ、ムスツとしながらも言われた通りの場所に置いた。

杖を直すには三日程かかるらしい。オーヤと同じぐらいしわくちやなお婆さんが奥に引きこもって二日目。

アルドがそのお婆さんの美人な弟子にパシられて二日目。あと一日の辛抱、と文句を言わず頑張っている。

対する金髪美人ことサンリは、

「新しく出来たオープンカフェにでも行こうかしら」

と麗しい顔を窓に向けていた。

「ねえ」

「はい？」

「……あなたも行く？」

これでも人並みにお付き合いなるものはしたことがある。ただ、美人とは付き合った事もなければ、お茶なんぞした事もなかった。

お洒落なオープンカフェの前は人通りも多く、たまにこちらを振り向く男がちらほら。

「……」

「……」

美人って何を話すんだ？とアルドはカフェに着いてから、というか着く前から無言を通していた。

第一、自分なんかを誘って何が楽しいんだろ？サンリならいくらでもお茶の相手がいると思うけど。等と考えているうちに、カップの中は空になっていた。

「ところで」

「？」

「あんた、名前は？」

……なるほど。オレは彼女の中でただの掃除機程度だったんだ。

「アルド」

少し無愛想に答える。美人は礼を欠く生き物。オレの中で決定した。

「ふーん。私はサンリ」

知ってるから！初日にお婆さんに紹介されたから！

「ばあばの孫じゃないわよ」

弟子ですよね！聞いたから！初日に！

「甘いものって、罪よね」

何の話ー？！あ、頼んでたショートケーキがきた。うわあ、スゴい目が輝いてる……っって一口多くない？！ほぼ半分口に入ったよ！

なんて、心中穏やかじゃないオレの後ろから話し声が聞こえた。

「なあ、後ろの席の女、例のヤツじゃねえ?」

「何だよ?」

「ほら、一家惨殺事件で唯一の生き残りの」

「え、マジ?ちよつ……店出ようぜ」

ガタガタツ、と急ぎ足で店を出る男達を見ると、目が合ってしまった。

なんだよ、感じ悪いな。

視線を前に戻すと、ケーキは綺麗になくなっていった。

「私、地獄耳なのよね」

「……」

何ー?!今それ言う??気を遣って無視しようと思ってたのに!なんなんだこの美人!

「私、貧乏大家族の娘で、私以外の家族……二十一人みんな殺されて」

なんだそれえー!?つーかどんだけ大家族だよ!そしてなんであなただけ生き残ってるの?!ルイスさん、オレどうすればいいんですかああ!?

「……あなたは恐がらないのね。ばあば以外で初めて」

引いてますから!おもいつきり引いてますよー!!オレって感情顔に出ないタイプだっけ?いやいや、この期に及んで美人を前にカツコつきたいとか?

「ねえ、なんか言ったら」

訝しげな顔を向けられた。なんか言えっただって、そもそもこの美人ちよっと変わってるっぽいし、えらそうだし、美人だけど関わらないほうがいいかな？あー、でもすごい整った綺麗な顔がこっち見てるよ。まつげ長いなあ。肌綺麗ななあ。長い髪も、手も足も、全部……。

「……綺麗ななあ」

……。

……。

オレ今何言ったあー？！

「は？」

ですよね！は？って感じだよね！でもしょうがないじゃん！美人はどんな顔したって美人だし、じっと見つめられたらつい言っちゃうでしょ？！

「いい度胸してるわね」

睨まれてるしツ。あーもうなんか面倒くさい。店戻ろうかな？いいよね？

「私が犯人、って言ったら？」

「……興味ない」

ルイスさん今頃どこで何してるんだろ。そう言えば、イリユーマには目的があつて来たみたいだけど。あ、すげえ。アレおかまじゃん？初めて見たあ。さすが都会。色んな人がいるんだなあ。あれ？おかまなんかこつち見てる。つてか目が合つちやつたよ。美人の後のおかまはキツいなあ。つてか近付いてきてるし。おお、迫力ある。うーん……ええっと……。

「サザビリ、すごい」

「ま、アタシの魅力の為せる技よね」

もう使われていない倉庫に四人はいた。

「う……んッ」

サンリはまだぼんやりする頭をなんとか起こす。体が動かない事を確認すると、声のするほうへ視線をむけた。

「あら、坊やより早く起きちゃったの？巻き込んだじゃってゴメンなさいね。ま、運が悪かったって諦めて頂戴」

やたらゴツいおかまがからかうようにいつてきた。

「一体なんなわけ？」

ロープで縛られている体を起こし睨んだが、効果はゼロのようだ。

「坊やが起きてからよ」

アルド？この子ヤバイ事に関わってるの？と未だに横たわる彼を見る。

短髪の、どちらかというとりりしい顔付きの男。普通なら引かれるような自分のバックグラウンドを「興味ない」と一蹴した、初めての男。

「……起きなさいよ」

ゲシッ、ととりあえず蹴起こしてみる。すると唸りながら目を覚ました。

「いつて……ってここは？」

「倉庫」

小さな男が答え、身を起こす。

「……なんで縛られてるの」

「私、巻き込まれたみたいなんだけど」

今度はアルドを睨んだが、これまた効果はゼロだった。

「あんたら何？」

「名乗る必要はないわねえ。それより、黒髪はどこ誰なのかしら？」

おかまの言葉に、アルドは身を強ばらせた。

「困るのよねー、仕事の邪魔されるのわ」
「オーヤ、どこ?」

近付いてくるケバくゴツい顔。太い腕がアルドの首へ伸びる。

「うっ」

見た目を裏切らない力が、首を絞める。

「言わなきゃ、死んじゃうわよー?」

「ぐッッ」

苦しい。目が霞む……。

「ちょっと!その手を離しなさいよ!」

サンリはおかまに近づこうともがくが、平手を食らい倒れてしまった。

「サ、ンリ……」

「ほぐら、彼女が可哀相じゃない?早く吐いちゃいなさいよ」

片頬を赤くしながらも、サンリはまた起き上がりおかまに近づく。

「や、め」

「あら、そんなに彼氏が大事なの?でも残念ね」

「弱い。サザビリ、ピタ、強い」

小さな男が杖を構えて術を唱えれば、サンリは水の壁に囲まれた。

「なっ?!」

「殺しちゃダメよ」

「ピタ、わかる」

向き直ったおかまはアルドを蹴飛ばし髪を掴んで持ち上げた。

「あの黒髪は何者? オーヤはどこに隠れてるのかしら?」

殺気がアルドを包む。しかしそれでも、口は閉ざしたままに、睨み返した。

「往生際が悪いわね。ピタ、少し遊んであげなさい」
「わかる」

グググツ、とサンリを囲んでいた水が縮まっていき、彼女を包んでしまった。

息の出来ないサンリの顔に恐怖が滲む。

「お、前らツツ」

「さあ、答えなさい」

杖さえあれば、こんな奴らツツ。

そんな不毛な考えがめぐる中、ルイスさんなら状況に関係なく強いよなあ、とあらためて胸がときめいた。最低である。

「何ニヤけてるわけー? おかしくなっちゃったのかしら」

首を傾げて持ち上げていたアルドをコンクリートに叩きつけ、真上から腹に足を落とした。

「ぐッッ」

「まったく面倒くさいわねえ」

はあ、とため息を吐きピタに目配せすると、サンリを包んでいた水が消えていった。

「ゲホッ！はっ、はッッ」

「お金にならない殺しはやらない主義なのよねー」

頭をボリボリ掻きながら古いソファアに腰を下ろした。

「とりあえず、ギザルちゃん待ちね」

「ピタ、ひま」

小さな男は不満そうな顔をサザビリに向け、指はアルドを差した。

「遊ぶ、いい？」

「逃がしちゃダメよ」

小一時間ぐらいたったかどうか。体を縛っていたロープはなくなり、代わりに水の牢に入れられた。サンリは暇を持て余していた。

「っこのチビ！ちょこまか逃げるな！」

「ピタ、チビ。アルド、ザコ」

ニヤッ、と笑うピタの安い挑発に乗ってしまうアルドを、サンリはがっかりと見ていた。

昼間は、無口でクールで器のデカイ男だと思ったのに。そんなサンリの隣にはポテチ片手に二人のケンカ（もつともピタとかいう水棲人は遊び感覚のようだが）を楽しむデカイおかまが、楽しそうに笑っている。

「なかなかやるじゃない、坊や。おもちゃの杖で」

「おかまは黙ってる！」

「ピタ、アルド、遊ぶ」

ぶん、と杖を振ると鋭い氷柱がアルドの頭上からいくつも落ちてきた。

「げっ」

術を唱える時間がなかったので、逃げ回るアルド。それを追うピタ。一瞬の隙に反撃し立場を逆転させるも、所詮おもちゃの杖。追い込むことも出来ずにまた逃げに回る。そんな遊びのようだ。

「ねえ」

初めは危ない人オーラを出していた彼らだが、どうやら本当に殺す気はないらしい。

「あんた達、殺し屋じゃないの？」

「違うわよー。そんなシヨボくないわ」

ポテチをすすめられたが、サンリは首を横に振った。

「そう……」

「あら、なんでガツカリしてるのー？アタシ達が殺し屋の方がよか

ったの？」

「……そうね」

虚ろな目は冷たいコンクリートを映した。

「変わった子ね」

「このっ、お前なんか本物の杖があればッ」

アルドは壁を背に言い訳を始めていた。

「ウソ。アルド、弱い。ピタ、強い」

「まあそんな差はないでしょうけど、ピタの方が強いでしょうね」
「私もそう思うわ」

なぜかサンリまで乗っかってきた。ので、

「お前はどっちの味方だ！」

とつい言ってしまった。

「素直ない子じゃない！ほら、デラックス板チョコあげるわ」
「……ありがとう」

餌付けされてんじゃねー！

という叫びはなんとか耐えた。

とその時、ガタン、とドアの開く音が聞こえた。

「よーやく帰ってきたわね」

サザビリは立ち上がり、アルドから杖を取り上げるとピタに言って

サンリと同じく水の牢に閉じ込めた。
カツカツという足音が三人分。現れた奴の一人だけ、フードを被っていた。

「何々々？すごくう、可愛い子がいる」

剣を携えた女はサンリを見つけて近づくと、上機嫌に自己紹介を始めた。

「あたしい、ミアア。あなたはあ、妖精さん？」

「い、いや……サンリ。人間よ」

可愛いー、と今にも抱き付きそうな勢いだ。

「遅かったじゃない」

「ジエイさん達と会ってたんです」

魔術師が一人。

フードの奴はまだ顔を見せないでいた。

「ギザル、ピタ、遊ぶ。いい？」

ピタはフードの奴に近づき服を引っ張ったが、頭を撫でられただけで制された。

「そいつは……」

「街でたまたま見つけたから持ってきたわー。名前はアルド。彼女はサンリ。デート中だったけど、こっちも時間が……ね？」

サザビリの説明を聞いて、フードが外された。

思わず、息を呑んだ。

獣人。

教科書でしか習わなかった生き物が、目の前に現われたのだ。

「あーあ、固まっていますよ」

「そのようだな」

カツカツと近付いてくるギザルとかいう獣人に、逃げ場は無いとわかっていても狭い牢で無意識に後退りしてしまう。サンリにいたっては真っ青になって体を震わせていた。

「……」

「……」

視線を合わせるように屈まれれば、今だけはこの水の牢に感謝した。一定の距離は保てる。

「ルイス。イルハウ大会で準優勝し、女王マナに魔術を教えていた」
「っ！」

ばれている。まさか、命を狙うつもりなのか？でも、さっきまでの感じでは脅しはしてもそこまではしないようだったが。

「あら、もしかしてこの子いらなかった？」

「いや、ピタの遊び相手になってくれたんだろ？」

アルドから離れ、ソファーにどっしり、大きな体を埋める。サザビリは筋肉隆々でゴツイが、ギザルは線はそれほど太くなく、力とス

ピードを兼ね備えている感じだ。

「ルイス、強い。アルド、弱い。ピタ、アルド、遊ぶ」
「随分気に入られたな」

ククツ、と笑うがこっちはいい迷惑だ。

「ねえ、私達を殺さないなら、どうするの？」

サンリがギザルとは目を合わせずに聞く。

「まあ人質だな。おかしな真似しなければ、無傷で返すさ」

「あたしい、サンリ欲しい」

「ピタ、アルド、欲しい」

キヤイキヤイとギザルにねだるこの二人を喜んで置くべきか、一先ず酷い事は起らないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1700a/>

届くものの夢

2011年6月23日09時36分発行